

令和 4 年度
高等教育推進センター
活動報告書（資料集）

目次

1	「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」認定 記者発表資料	1
2	「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」(リテラシーレベル) 申請書	4
3	「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」(応用基礎レベル) 申請書	20
4	目標設定周知ポスター	40
5	第8回ヨコハマ FD フォーラム 記者発表資料	41
6	第8回ヨコハマ FD フォーラム チラシ	43
7	横浜市立大学 FD・SD に関する基本方針	45
8	令和4年度 FD 関連講演会等実績	46
9	横浜市立大学教学 IR に関する基本方針	48
10	令和4年度教学 IR 実施報告書(国際総合科学群)	49
11	令和4年度教学 IR 実施報告書(医学群)	160
12	令和4年度横浜市立大学と横浜市立高校の高大連携活動報告書	166

文部科学記者会
横浜市政記者会 同時発表

2022 年 8 月 31 日
教 育 推 進 課

文部科学省「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」 リテラシーレベルに認定・応用基礎レベルプラスに選定 ～応用基礎レベルプラスは公立大学で唯一の選定～

横浜市立大学は、文理問わず全学部の学生を対象とした「ADEPT プログラム (AI Data Science Education Program for Tomorrow)」が、令和 4 年 8 月 24 日付で文部科学省から「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度 (リテラシーレベル) *¹」に認定されました。また、データサイエンス学部の学生を対象とした「データサイエンス人材育成プログラム」が、同日に「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度 (応用基礎レベル) *² プラス」に選定されました。

「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度 (応用基礎レベル) プラス」は、「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度 (応用基礎レベル)」に認定されたプログラムのうち、先導的で独自の工夫・特色を有するプログラムに与えられるものです。今回が第 1 回目で、本学を含めて全国で 9 大学 (国立 6、公立 1、私立 2) のみが選定されました。

本学は、2018 年には首都圏初のデータサイエンス学部*³を、2020 年には博士後期課程を含むデータサイエンス研究科を設置した大学として、データサイエンス学部のみならず、人文社会科学系や理学系、医学系を含めた全学部でデータをもとに事象を適切に分析・説明できる素養と技能「データ思考」をもった人材の育成に取り組んでいます。

文部科学省ホームページ (認定・選定結果)：

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/suuri_datascience_ai/1413155_00011.htm

【ADEPT (アデプト) プログラムの特色】

全学部 (国際教養学部・国際商学部・理学部・データサイエンス学部・医学部) の学生を対象とした「ADEPT プログラム」は、修得した知識・技能を基に、人間中心とした適切な判断ができ、自らの意志でデータや AI 技術を有効かつ、安全に活用することができる素養を身に付けることを目的としています。

データを読み、説明し、扱う事ができる基礎的能力を身に付け、学修した数理・データサイエンス・AI に関する知識・技能を基に適切な活用方法等を体系的に修得できるプログラムとなっています。ADEPT プログラム科目のうち、必修科目 2 科目、選択必修科目 1 科目以上を履修することで修了となります。



MDASH
Literacy
Approved Program for Mathematics,
Data science and AI Smart Higher Education

数理・データサイエンス・AI
教育プログラム 認定制度
リテラシーレベル

(認定の有効期限：令和9年3月31日)

[ADEPT プログラム | YCU 横浜市立大学 \(yokohama-cu.ac.jp\)](https://yokohama-cu.ac.jp/)

【データサイエンス人材育成プログラムの特色】

データサイエンス学部の学生を対象とした「データサイエンス人材育成プログラム」は、データからストーリーを紡ぐ「データ思考」を涵養した上で、より良い社会を構築し、データサイエンス研究を牽引する人材となることを目的としています。

数学、統計学、情報学といったデータサイエンスの基礎となる科目と、データサイエンスが展開される社会との連携を意識した科目で構成されています。1年次前期から基礎的な科目だけでなく、企業や官公庁等の現場の第一線で活躍するゲスト講師による「データサイエンスセミナー」を通じて、データサイエンスが社会において果たす役割を学びます。3年次には、企業や官公庁と連携したPBLを通じて、これまで学んだ内容の社会での活用を実践的に学んでいきます。

データサイエンス人材育成プログラム科目のうち、必修科目 19 科目、選択必修科目 1 科目以上を履修することで修了となります。



MDASH
Advanced Literacy
Approved Program for Mathematics,
Data science and AI Smart Higher Education,
designated by the Gov of Japan

数理・データサイエンス・AI
教育プログラム 認定制度
応用基礎レベル プラス

(認定の有効期限：令和9年3月31日)

[データサイエンス人材育成プログラム | YCU 横浜市立大学 \(yokohama-cu.ac.jp\)](https://yokohama-cu.ac.jp/)

用語説明・参考

*1 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）

この認定制度は、学生の数理・データサイエンス・AI への関心を高め、かつ、数理・データサイエンス・AI を適切に理解し、それを活用する基礎的な能力を育成することを目的として、数理・データサイエンス・AI に関する知識及び技術について体系的な教育を行うものを文部科学大臣が認定及び選定して奨励するものです。

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/suuri_datascience_ai/00002.htm

*2 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度（応用基礎レベル）

この認定制度は、大学（大学院を除き、短期大学を含む。）及び高等専門学校の正規の課程であって、数理・データサイエンス・AI を活用して課題を解決するための実践的な能力を育成することを目的として、数理・データサイエンス・AI に関する知識及び技術について体系的な教育を行うものを文部科学大臣が認定及び選定して奨励するものです。

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/suuri_datascience_ai/00002_00003.htm

*3 横浜市立大学データサイエンス学部

2018 年 4 月に首都圏初のデータサイエンス学部として設置され、社会の動きに先鞭をつけた学部として、データサイエンスの教育と研究及び社会実装に精力的に取り組んでいます。

<https://www.yokohama-cu.ac.jp/academics/ds/feature.html>

**SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS** 横浜市立大学は、
様々な取り組みを
通じて SDGs の達
成を目指します。



数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル) 申請様式

① 学校名	横浜市立大学		
② 大学等の設置者	公立大学法人横浜市立大学	③ 設置形態	公立大学
④ 所在地	神奈川県横浜市金沢区瀬戸22-2		
⑤ 申請するプログラム名称	ADEPTプログラム		
⑥ プログラムの開設年度	令和3	年度	⑦ 応用基礎レベルの申請の有無
			有
⑧ 教員数	(常勤)	778	人
	(非常勤)	891	人
⑨ プログラムの授業を教えている教員数		40	人
⑩ 全学部・学科の入学定員	900	人	
⑪ 全学部・学科の学生数(学年別)	総数	4,252	人
1年次	950	人	2年次
			983
3年次	995	人	4年次
			1,149
5年次	101	人	6年次
			74
⑫ プログラムの運営責任者			
(責任者名)	中條 祐介	(役職名)	高等教育推進センター長
⑬ プログラムを改善・進化させるための体制(委員会・組織等)			
	高等教育推進センター		
(責任者名)	中條 祐介	(役職名)	高等教育推進センター長
⑭ プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)			
	ADEPTプログラム管理部会		
(責任者名)	山崎 眞見	(役職名)	ADEPTプログラム管理部会長
⑮ 申請する認定プログラム	認定教育プログラム		

連絡先

所属部署名	学務・教務部 教育推進課 学術企画担当	担当者名	星野 高宏
E-mail	acapan@yokohama-cu.ac.jp	電話番号	045-787-8944

プログラムを構成する授業科目について

①具体的な修了要件

②教育プログラムの修了要件

学部・学科によって、修了要件は相違しない

「領域横断型 ADEPTプログラム」は、事前に参加申請を行い、プログラムを構成する「必修科目(下記1・2)」、「選択科目(下記3～12)」から1単位以上取得した場合に、プログラム修了とする。

(1)必修科目: 1. 情報コミュニケーション入門/情報リメディアル、2. 総合講義(データサイエンス入門)

(2)選択科目: 3. 総合講義(企業家に学ぶ)、4. プログラミング基礎、5. データ分析基礎、6. ビジネス統計Ⅰ、7. ビジネス統計Ⅱ、8. 基礎物理学実験、9. 課題探究科目(データサイエンス・リテラシー1)、10. 課題探究科目(データサイエンス・リテラシー2)、11. 社会調査法入門、12. 情報倫理

③現在進行中の社会変化(第4次産業革命、Society 5.0、データ駆動型社会等)に深く寄与しているものであり、それが自らの生活と密接に結びついている」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必修	開講状況	1-1	1-6	授業科目	単位数	必修	開講状況	1-1	1-6
情報コミュニケーション入門/情報リメディアル	1/0	○	全学開講	○		情報倫理	2		全学開講	○	○
総合講義(データサイエンス入門)	2	○	全学開講	○	○						
総合講義(企業家に学ぶ)	2		全学開講	○	○						
プログラミング基礎	1		全学開講	○	○						
ビジネス統計Ⅰ	2		全学開講	○							
課題探究科目(データサイエンス・リテラシー1)	2		全学開講	○							
社会調査法入門	2		全学開講	○							

④「社会で活用されているデータ」や「データの活用領域」は非常に広範囲であって、日常生活や社会の課題を解決する有用なツールになり得るもの」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必修	開講状況	1-2	1-3	授業科目	単位数	必修	開講状況	1-2	1-3
情報コミュニケーション入門/情報リメディアル	1/0	○	全学開講	○							
総合講義(データサイエンス入門)	2	○	全学開講	○	○						
プログラミング基礎	1		全学開講		○						
データ分析基礎	1		全学開講	○							
課題探究科目(データサイエンス・リテラシー1)	2		全学開講	○	○						
社会調査法入門	2		全学開講	○	○						
情報倫理	2		全学開講	○	○						

⑤「様々なデータ利活用の現場におけるデータ利活用事例が示され、様々な適用領域（流通、製造、金融、サービス、インフラ、公共、ヘルスケア等）の知見と組み合わせることで価値を創出するもの」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必修	開講状況	1-4	1-5	授業科目	単位数	必修	開講状況	1-4	1-5
情報コミュニケーション入門/情報リメディアル	1/0	○	全学開講	○		課題探究科目(データサイエンス・リテラシー1)	2		全学開講	○	○
総合講義(データサイエンス入門)	2	○	全学開講	○	○	課題探究科目(データサイエンス・リテラシー2)	2		全学開講	○	
総合講義(企業家に学ぶ)	2		全学開講		○	社会調査法入門	2		全学開講	○	○
プログラミング基礎	1		全学開講	○							
データ分析基礎	1		全学開講	○							
ビジネス統計Ⅰ	2		全学開講	○							
ビジネス統計Ⅱ	2		全学開講	○							

⑥「活用に当たっての様々な留意事項(ELSI、個人情報、データ倫理、AI社会原則等)を考慮し、情報セキュリティや情報漏洩等、データを守る上での留意事項への理解をする」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必修	開講状況	3-1	3-2	授業科目	単位数	必修	開講状況	3-1	3-2
情報コミュニケーション入門/情報リメディアル	1/0	○	全学開講	○	○						
総合講義(データサイエンス入門)	2	○	全学開講	○	○						
プログラミング基礎	1		全学開講	○							
データ分析基礎	1		全学開講	○							
課題探究科目(データサイエンス・リテラシー1)	2		全学開講	○							
社会調査法入門	2		全学開講	○	○						
情報倫理	2		全学開講	○	○						

⑦「実データ・実課題(学術データ等を含む)を用いた演習など、社会での実例を題材として、「データを読む、説明する、扱う」といった数理・データサイエンス・AIの基本的な活用法に関するもの」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必修	開講状況	2-1	2-2	2-3	授業科目	単位数	必修	開講状況	2-1	2-2	2-3
情報コミュニケーション入門/情報リメディアル	1/0	○	全学開講	○	○	○	課題探究科目(データサイエンス・リテラシー1)	2		全学開講	○	○	
総合講義(データサイエンス入門)	2	○	全学開講	○	○	○	課題探究科目(データサイエンス・リテラシー2)	2		全学開講	○	○	○
プログラミング基礎	1		全学開講			○	社会調査法入門	2		全学開講	○	○	○
データ分析基礎	1		全学開講	○	○	○							
ビジネス統計Ⅰ	2		全学開講	○		○							
ビジネス統計Ⅱ	2		全学開講			○							
基礎物理学実験	1		全学開講	○	○	○							

⑧選択「4. オプション」の内容を含む授業科目

授業科目	選択項目	授業科目	選択項目

⑨プログラムを構成する授業の内容

授業に含まれている内容・要素		講義内容
(1) 現在進行中の社会変化(第4次産業革命、Society 5.0、データ駆動型社会等)に深く寄与しているものであり、それが自らの生活と密接に結びついている	1-1	・コンピュータと社会「情報コミュニケーション入門」(1回目) ・ビッグデータ, データを起点としたものの見方、データを起点としたものの見方、人間の知的活動を起点としたものの見方、AI、データ量の増加、計算機の処理性能の向上、AIの非連続的進化、人間の知的活動とAIの関係性、計算機の処理速度の向上、「総合講義(データサイエンス入門)」(1~3, 5~14回目)
	1-6	・AI最新技術の活用例(深層生成モデル、敵対的生成ネットワーク、強化学習、転移学習、分析データ蓄積・処理の技術進化Google誕生によるビッグデータ時代の到来「総合講義(データサイエンス入門)」(5, 12回目) ・新しいテクノロジーの社会実装(データやAI活用によるビジネスを含む)「総合講義(企業家に学ぶ)」(2~14回)
(2) 「社会で活用されているデータ」や「データの活用領域」は非常に広範囲であって、日常生活や社会の課題を解決する有用なツールになり得るもの	1-2	・データ作成、情報化社会のあゆみと法制度と情報倫理、調査データ、実験データ「情報倫理」(2, 14, 15回目) ・社会調査の種類、社会で活用されているデータ(政策・制度づくり、計画策定、社会福祉サービス利用の判断支援など) 1次データ、2次データ、データのメタ化、構造データ、非構造化データ(文章、画像、音声・音楽など)、データの作成、データのオープン化(オープンデータ)「社会調査法入門」(2回目)
	1-3	・研究開発、仮説検証、原因究明、計画策定、調達、製造、物流、販売、マーケティング、サービス、判断支援、活動代替、新規生成、「総合講義(データサイエンス入門)」(1~14回目) ・統計的仮説検定の考え方「課題探究科目(データサイエンス・リテラシー1)」(13回目) ・現代社会におけるプログラミング事情、シミュレーションの方法「プログラミング基礎」(2, 13回目)

プログラムの履修者数等の実績について

①プログラム開設年度

令和3

年度

②履修者・修了者の実績

学部・学科名称	入学 定員	収容 定員	令和3年度		令和2年度		令和元年度		平成30年度		平成29年度		平成28年度		履修者数 合計	履修率
			履修者数	修了者数	履修者数	修了者数	履修者数	修了者数	履修者数	修了者数	履修者数	修了者数	履修者数	修了者数		
国際教養学部	270	1080	23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23	2%
国際商学部	260	1040	24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24	2%
理学部	120	480	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	3%
データサイエンス学部	60	240	28	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	28	12%
医学部	190	940	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	1%
合 計	900	3780	95	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	95	3%

教育の質・履修者数を向上させるための体制・計画について

① プログラムを改善・進化させるための体制を定める規則名称

高等教育推進センター

② 体制の目的

高等教育に関する全学的な戦略及び方針策定を行い、実施、推進するため、高等教育推進センターを設置(令和4年度)。データ思考にかかる教育推進に関する事項を含め、全学的な方針及び戦略の策定を所掌する。
(なお、令和3年度までは「データサイエンス推進センター」にてデータ思考に係る教育の方針決定を所掌していたが、高等教育推進センターの設置に伴い発展的に解消、移行された)

③ 具体的な構成員

高等教育推進センター長 中條祐介(副学長)
高等教育推進副センター長 本多尚(共通教養長)、船越健悟(医学部教授)、小林謙一(学務・教務部長)
教育開発部門長(データ思考教育に関する開発を含む) 中條祐介(副学長)

※なお、具体的なプログラムの構築・改善に際しては、「数理・データサイエンス・AI教育プログラム(リテラシーレベル)」のプログラム担当教員により構成されるワーキング「ADEPTプログラムWG」を定期的に開催し協議している。

<構成員>

ADEPTプログラム ワーキング長 山崎 眞見(データサイエンス学部長)

※併せて、全学共通の学部横断プログラムのため、全学部長が参加する「共通教養会議(年4-5回実施)」でも方針の共有および意見交換が行われている。

<構成員>

共通教養長:本多尚、全学部長、共通教養教育の学科代表者等

④ 履修者数・履修率の向上に向けた計画

令和3年度実績	3%	令和4年度予定	12%	令和5年度予定	23%
令和6年度予定	36%	令和7年度予定	51%	収容定員(名)	3,780

具体的な計画

履修率向上によって目標履修者数を達成するため、令和3年度より、プログラム対象科目(必修科目)について、各学部の時間割を調整し、全学部生が履修可能な時間へ配置した。以後の取り組みにより、5年目以降には全学部生の半数以上が履修できる体制を構築する。

令和4年度以降は、履修率の向上に向けて、以下のような取組を重ねる。

(1) 時間割配置の変更および工夫

(2) 学生周知の徹底:新学期オリエンテーション等での周知

(3) 履修指導

(4) 学部単位での履修ロードマップ、履修モデルの作成

(5) 全学部の年度計画化:令和4年度から「データ思考」を全学部・研究科の共通課題に位置づけ、各学部は、本プログラムを含めた年度目標を立てて自己点検評価を行う。

⑤ 学部・学科に関係なく希望する学生全員が受講可能となるような必要な体制・取組等

(1)科目配置:2科目のプログラム必修科目のうち「情報コミュニケーション入門/情報リメディアル」は、正課カリキュラムでも卒業要件となる科目のため、学部生全員が履修する。また、もう一方のプログラム必修科目「総合講義(データサイエンス入門)」は、全学部生が履修できる曜日・時限に開講するよう時間割調整を行う。(令和4年度は他科目と重複しない6時限目に開講する)併せて、希望者全員が履修できるようにオンライン開講とする。プログラム選択科目を履修可能にするため、学部専門科目の時間割配置を変更する。

(2)オリエンテーション、説明会:在校生および新入生に本プログラムの説明・紹介を行い、プログラム登録を行うため、新入生および在校生全員が参加する学期始めの「(学部別)オリエンテーション」でプログラム説明を行うとともに、全学共通の「領域横断型プログラム説明会」でも説明対象プログラムとする。対象科目やゼミ単位でも周知を行う。

(3)履修指導:令和4年度から稼働したLMSを活用し、学生指導や学修サポート等を行い、学生のプログラム履修を促進する。

⑥ できる限り多くの学生が履修できるような具体的な周知方法・取組

(1)オリエンテーション、説明会:在校生および新入生に本プログラムの説明・紹介を行い、プログラム登録を行うため、新入生および在校生全員が参加する学期始めの「(学部別)オリエンテーション」でプログラム説明を行うとともに、全学共通の「領域横断型プログラム説明会」でも説明対象プログラムとする。

(2)学部共通履修ガイドへのプログラム掲載(領域横断型プログラム)

(3)YCU-Portal(履修登録・シラバス)やYCU-Board(ポータル、LMS機能)等の学生利用システムへの情報掲載

(4)大学Webサイトへの情報掲載および学生利用システムへつながるリンク掲載

(5)学部単位での履修ロードマップ、履修モデルの作成および周知:各学部毎にデータサイエンス能力獲得のための可視化を図る。

(6)ゼミにおける周知:1年次の教養ゼミ・基礎ゼミ、2年次以降の各学部ゼミ単位でも周知。

⑦ できる限り多くの学生が履修・修得できるようなサポート体制

・YCU-Board(ポータル、LMS機能)、およびOffice365のTeamsなどを用いて、ICTを活用した学修支援を行う。特に、令和4年度以降は学生用LMS(YCU-Board)を全学で導入して、学習進捗の管理を行うことが可能となったため、学生のプログラム参加のモチベーション向上が期待される。

⑧ 授業時間内外で学習指導、質問を受け付ける具体的な仕組み

・本プログラム全般に関しては、担当事務局が学生からの質問や相談を受け付ける。
また、プログラム(科目)担当教員は、授業時間以外にも、学生から質問や相談をメール、LMSやTeamsのチャット機能などを用いて受け付けることが可能である。

・各講義内またはシラバスにおいて科目担当教員のオフィスアワー(実施場所や連絡方法)を学生へ周知し、学生からの質問等を受け付ける。

自己点検・評価について

① 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	ADEPTプログラム管理部会の履修指導、修了要件の確認を経て、教育推進課において、プログラムの履修・取得状況の分析を実施し、全学部長が構成員となっている「共通教養会議」で確認の上、課題についての意見交換を行う。 国際教養学部:23人(全学部生の2%) 国際商学部:24人(全学部生の2%) 理学部:13人(全学部生の3%) データサイエンス学部:28人(全学部生の12%) 医学部:7人(全学部生の1%)
学修成果	ADEPTプログラムへの参加申請フォームにおいて、学生から履修予定の科目とプログラムへの参加理由を表記の上申請を受け付けることで、学生側には本プログラム履修の目的意識を付ける。また、修了申請フォームにおいては、修得した科目と学修後に得た技術や意識変化について提出させることで、学修成果の振り返りができるような運営を行う。 大学側では、学生の参加申請・修了申請の際に提出された記載内容を分析し、プログラムの改善に活用する。 また、全科目において「授業評価アンケート」を実施し、学生の理解度及び学修成果を把握する。各学部のFD・SD推進委員会にて分析結果を共有するとともに、各学部でも分析し、各科目の改善に活用するほか、その後のFD活動の課題として活用する。

学生アンケート等を通じた 学生の内容の理解度	ADEPTプログラムの修了申請において学生からのフィードバックの内容を基にプログラム参加前後での数理・データサイエンス・AIの基礎的素養に関する理解度を比較する。 全科目において実施している「授業評価アンケート」のうち「学習到達目標の達成」等の項目を分析することにより、学生の理解度及び学修成果を把握することができる。
学生アンケート等を通じた 後輩等他の学生への推奨度	ADEPTプログラムへの参加、及び修了申請フォームにおける好事例や、学期毎に実施される授業評価アンケートの結果を抜粋し、受講生の声を後輩や未受講の学生に提示することで、プログラム参加を促す取組を進める。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	令和3年度は、目標履修者数を達成するために、プログラム対象科目（必修科目）について、各学部の時間割を調整し、全学部生が履修可能な時間へ配置した。 令和4年度はプログラム必修科目の一つを、プログラム外の学部科目と重複しないよう6時限目に移動する。併せて、令和4年度から稼働したLMSを活用し、学生指導や学修サポート等を行い、学生のプログラム履修を促進する。 （間接的には、令和4年度から「データ思考」を全学部・研究科の取り組み課題として位置づけ、年度目標を立て、自己点検評価を行うこととなった） また、前述のADEPTプログラムへの参加・修了申請フォームにおける好事例等の周知により、学生の参加意欲向上を促す。

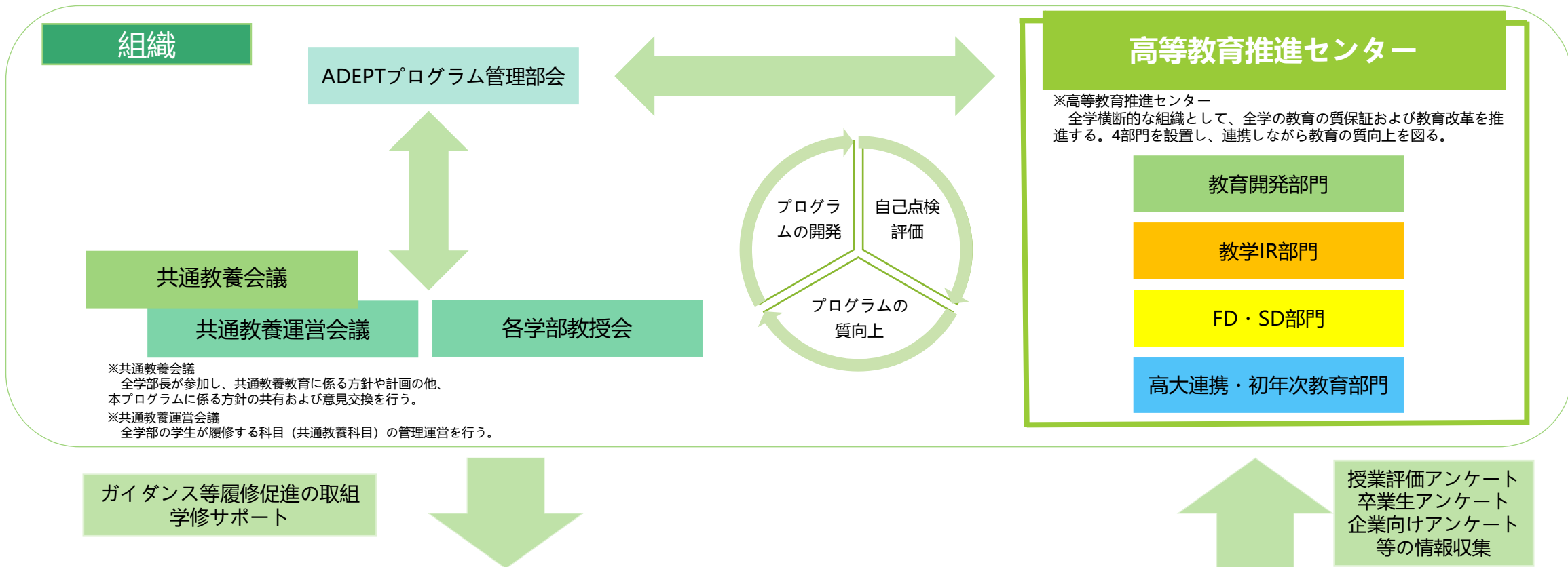
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本学では、卒後3年目の学生に、「卒業生アンケート」を実施しているため、今後本プログラムを修了した学生の進路や勤務先等における活用度状況等の把握が可能である。 また、本プログラムの修了者の進路についてはデータ収集を進め、協力が得られる場合には、修了者や勤務先にヒアリング等を行い、本プログラムについて外部的に評価をするしくみを構築していく。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	プログラム担当教員は、共同研究関係企業や包括連携協定を結ぶ企業等から広く意見を募り、その意見を収集することでプログラム改善に活用する。 今後は、大学が主催する「合同企業説明会参加企業(例年200社前後)」に対してアンケートを実施し、本学の教育プログラムの内容や、企業が本学に求める教育の意見収集を行うことも検討する。

数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	全学部生の必修科目では、データを起点としたものの見方、データ量の増加とビックデータ、計算機の処理性能の向上、AIの進化、人間の知的活動とAIの関係性など、情報の進化を学びながら、リテラシーレベルに相応の内容で構成している。ADEPTプログラムの修了申請フォームの内容や学期毎の授業評価アンケートにより、内容を検証するとともに、学生の興味関心を惹きつけるテーマや事例について改善を行っている。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	ADEPTプログラムの修了申請フォームの内容全科目の授業評価アンケートの結果について、教学IR検討ワーキング、FD・SD委員会および各学部担当教員が分析し、次学期以降の教育改善に役立てている。併せて各学部でのFDに活用する。 令和4年度は、FD・SD委員会を通じて学生との意見交換を開催することを計画しており、「学生の立場に立った分かりやすい授業」の実施を目指す。

②自己点検・評価体制における意見等を公表しているアドレス

https://www.yokohama-cu.ac.jp/univ/activity/people_development/index.html#title7

横浜市立大学 数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル） 取組概要



教育プログラム

【対象学生】全学部学生
国際教養学部
国際商学部
理学部
データサイエンス学部
医学部

ADEPTプログラム（AI Data Science Education Program for Tomorrow）

【学修目標】

- ①社会で起きている変化、データ・AI利活用の最新動向を身につける
- ②社会で活用されているデータ、データ・AIの活用領域を身につける
- ③データ・AI利活用のための技術を身につける・データ・AI利活用の現場を学ぶ
- ④データ・AI利活用における留意事項、データを守る上での留意事項を身につける
- ⑤データを読む、データを説明する、データを扱う能力を身につける

【プログラム修了要件】

- ①必修科目2科目（3単位）
 - ②選択必修科目1科目以上（1単位以上）
- ※修了申請後、修了証が発行されます。



数理・データサイエンス・AI 教育認定プログラム（リテラシーレベル）の取り組み

横浜市立大学 ADEPTプログラム

(AI Data Science Education Program for Tomorrow)

【創設の背景・目的】

現代における情報化社会において、数理・データサイエンス・AI を日常の生活、仕事等の場で使いこなすことができる基礎的素養を身に付けることが重要となっています。

横浜市立大学のADEPTプログラム（全学部共通）では、修得した知識・技能を基に、人間中心とした適切な判断ができ、自らの意志でデータやAI 技術を有効かつ、安全に活用することができる素養を身に付けることを目的としています。

【学修目標】

- ①社会で起きている変化、データ・AI 利活用の最新動向を身につける
- ②社会で活用されているデータ、データ・AI の活用領域を身につける
- ③データ・AI 利活用のための技術を身につける・データ・AI利活用の現場を学ぶ
- ④データ・AI 利活用における留意事項、データを守る上での留意事項を身につける
- ⑤データを読む、データを説明する、データを扱う能力を身につける

【対象者】

全学部学生（国際教養学部、国際商学部、理学部、データサイエンス学部、医学部） 18

【プログラム修了要件】

- ①必修科目 2 科目（3 単位）
- ②選択必修科目 1 科目以上（1 単位以上）

※申請前に履修済みの科目は追認。

※修了申請後、修了証が発行されます。

【ADEPTプログラム科目一覧】

区分	科目名	科目種別	受講可能年次	学修目標				
				①	②	③	④	⑤
必修	情報コミュニケーション入門/情報リメディアル	共通 教養 科目	1～4年次	○	○	○	○	○
	総合講義(データサイエンス入門)		1～4年次	○	○	○	○	○
選択 必修	総合講義(企業家に学ぶ)		1～4年次	○		○		
	プログラミング基礎		1～4年次	○	○	○	○	○
	データ分析基礎		1～4年次		○	○	○	○
	ビジネス統計Ⅰ		1～4年次	○		○		○
	ビジネス統計Ⅱ		1～4年次			○		○
	基礎物理学実験		1～4年次					○
	課題探究科目(データサイエンス・リテラシー1)		1～4年次	○	○	○	○	○
	課題探究科目(データサイエンス・リテラシー2)		1～4年次			○		○
	社会調査法入門		1～4年次	○	○	○	○	○
	情報倫理		1～4年次	○	○		○	

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(応用基礎レベル) 申請様式

① 学校名	横浜市立大学		
② 学部、学科等名	データサイエンス学部		
③ 申請単位	学部・学科単位のプログラム		
④ 大学等の設置者	公立大学法人横浜市立大学	⑤ 設置形態	公立大学
⑥ 所在地	神奈川県横浜市金沢区瀬戸22-2		
⑦ 申請するプログラム名称	データサイエンス人材育成プログラム		
⑧ プログラムの開設年度	令和3	年度	⑨ リテラシーレベルの認定の有無
			申請中
⑩ 教員数	(常勤)	15	人
	(非常勤)	116	人
⑪ プログラムの授業を教えている教員数		17	人
⑫ 全学部・学科の入学定員	900	人	
⑬ 全学部・学科の学生数(学年別)	総数	4,252	人
1年次	950	人	2年次
			983
3年次	995	人	4年次
			1,149
5年次	101	人	6年次
			74
⑭ プログラムの運営責任者			
(責任者名)	山崎 眞見	(役職名)	データサイエンス学部長
⑮ プログラムを改善・進化させるための体制(委員会・組織等)			
	データサイエンス学部教授会		
(責任者名)	山崎 眞見	(役職名)	データサイエンス学部長
⑯ プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)			
	高等教育推進センター		
(責任者名)	中條 祐介	(役職名)	高等教育推進センター長
⑰ 申請する認定プログラム	認定教育プログラムと認定教育プログラム+(プラス)		

連絡先

所属部署名	学務・教務部 教育推進課 学術企画担当	担当者名	星野 高宏
E-mail	acaplan@yokohama-cu.ac.jp	電話番号	045-787-8944

プログラムを構成する授業科目について

①具体的な修了要件

②申請単位

学部・学科単位のプログラム

「データサイエンス人材育成プログラム」は、事前に参加申請を行い、必修科目：応用基礎コア科目15科目30単位、選択項目4科目8単位、選択必修科目：1科目2単位（データサイエンス応用基礎のうち「最適化理論」「データマイニング」「多変量データ解析」「応用統計学I」から1科目選択）を修得することで、プログラム修了とする。
 選択項目の扱いは以下の通りである。
 数学発展科目5科目のうち、応用基礎コア科目と重複しない「線形代数学II」、「微積分学II」、「集合・位相」を必修科目とする。
 AI応用基礎、データエンジニアリング応用基礎は全て本プログラム必修科目である。
 データサイエンス応用基礎については、本プログラム必修科目重複科目を除き、DS学部必修科目「データ解析演習II」を必修とし、残る4科目のうち1科目を選択必修とする。

③応用基礎コア「Ⅰ. データ表現とアルゴリズム」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必修	開講状況	1-6	1-7	2-2	2-7	授業科目	単位数	必修	開講状況	1-6	1-7	2-2	2-7
線形代数学I	2	○	一部開講	○				プログラミング演習I	2	○	一部開講				○
微積分学I	2	○	一部開講	○											
統計の数理I	2	○	一部開講	○											
アルゴリズム論	2	○	一部開講		○	○									
非構造化データ	2	○	一部開講			○									
計算機数理	2	○	一部開講			○									

④応用基礎コア「Ⅱ. AI・データサイエンス基礎」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必修	開講状況	1-1	1-2	2-1	3-1	3-2	3-3	3-4	3-9	授業科目	単位数	必修	開講状況	1-1	1-2	2-1	3-1	3-2	3-3	3-4	3-9
総合講義（データサイエンス入門）	2	○	全学開講	○	○	○	○		○	○	○												
データ解析演習I	2	○	一部開講		○																		
データ可視化法	2	○	一部開講		○																		
ビッグデータ解析	2	○	一部開講			○																	
情報倫理	2	○	一部開講					○															
機械学習	2	○	一部開講						○	○													

⑤応用基礎コア「Ⅲ. AI・データサイエンス実践」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必修	開講状況	授業科目	単位数	必修	開講状況
プログラミング演習II	2	○	一部開講				
専門領域演習II	2	○	一部開講				

⑥選択項目・その他の内容を含む授業科目

授業科目	選択項目	授業科目	選択項目
線形代数学II(DS学部必修)	数学発展	最適化理論	データサイエンス応用基礎
微積分学II(DS学部必修)	数学発展	データマイニング	データサイエンス応用基礎

集合・位相(DS学部必修)	数学発展	計算機数理解	データサイエンス応用基礎
統計の数理I(DS学部必修)	数学発展	多変量データ解析	データサイエンス応用基礎
データ解析演習I(DS学部必修)	数学発展	応用統計学I	データサイエンス応用基礎
機械学習	AI応用基礎	プログラミング演習II	データエンジニアリング応用基礎
非構造化データ	AI応用基礎	総合講義(データサイエンス入門)(DS学部必修)	データエンジニアリング応用基礎
総合講義(データサイエンス入門)(DS学部必修)	AI応用基礎	情報倫理(DS学部必修)	データエンジニアリング応用基礎
データ解析演習II(DS学部必修)	データサイエンス応用基礎	ビッグデータ解析	データエンジニアリング応用基礎
データ可視化法	データサイエンス応用基礎	非構造化データ	データエンジニアリング応用基礎

⑦ プログラムを構成する授業の内容

授業に含まれている内容・要素		講義内容
(1) データサイエンスとして、統計学を始め様々なデータ処理に関する知識である「数学基礎(統計数理、線形代数、微分積分)」に加え、AIを実現するための手段として「アルゴリズム」、「データ表現」、「プログラミング基礎」の概念や知識の習得を目指す。	1-6	・順列、組合せ、集合、ベン図、条件付き確率「統計の数理I」(第6回) ・代表値(平均値、中央値、最頻値)、分散、標準偏差「統計の数理I」(第1回) ・相関係数、相関関係と因果関係「統計の数理I」(第3回) ・名義尺度、順序尺度、間隔尺度、比例尺度「統計の数理I」(第1回) ・確率分布、正規分布、独立同一分布「統計の数理I」(第8回) ・ベクトルと行列「線形代数学I」(第1回) ・ベクトルの演算、ベクトルの和とスカラー倍、内積「線形代数学I」(第2回) ・行列の演算、行列の和とスカラー倍、行列の積「線形代数学I」(第2回) ・逆行列「線形代数学I」(第9回) ・多項式関数、指数関数、対数関数「微積分学I」(第1回) ・関数の傾きと微分の関係、積分と面積の関係「微積分学I」(第2,7回) ・1変数関数の微分法、積分法「微積分学I」(第2,7回) オプション ・ベイズの定理「統計の数理I」(第6回) ・点推定と区間推定「データ解析演習 I」(第9回) ・帰無仮説と対立仮説、片側検定と両側検定、第1種の過誤、第2種の過誤、p値、有意水準「データ解析演習 I」(第5,6回) ・固有値と固有ベクトル「線形代数学II」(第9-14回) ・2変数関数の微分法、積分法「微積分学II」(第1,2,8回)
	1-7	・アルゴリズムの表現(フローチャート)「アルゴリズム論」(第1回) ・並び替え(ソート)、探索(サーチ)「アルゴリズム論」(第1回) ・ソートアルゴリズム、バブルソート、選択ソート、挿入ソート「アルゴリズム論」(第5,6回) ・探索アルゴリズム、リスト探索、木探索「アルゴリズム論」(第3回) オプション ・計算量(オーダー)「アルゴリズム論」(第8,9回)

	2-2	・コンピュータで扱うデータ(数値、文章、画像、音声、動画など)「非構造化データ」(第1回) ・構造化データ、非構造化データ「非構造化データ」(第2回) ・情報量の単位(ビット、バイト)、二進数、文字コード「計算機数理」(第2回) ・配列、木構造(ツリー)、グラフ「アルゴリズム論」(第3回) オプション ・画像の符号化、画素(ピクセル)、色の3要素(RGB)「非構造化データ」(第11回)
	2-7	・文字型、整数型、浮動小数点型「プログラミング演習I」(第4回) ・変数、代入、四則演算、論理演算「プログラミング演習I」(第2回) ・関数、引数、戻り値「プログラミング演習I」(第2回) ・順次、分岐、反復の構造を持つプログラムの作成「プログラミング演習I」(第3回)
(2) AIの歴史から多岐に渡る技術種類や応用分野、更には研究やビジネスの現場において実際にAIを活用する際の構築から運用までの一連の流れを知識として習得するAI基礎的なものに加え、「データサイエンス基礎」、「機械学習の基礎と展望」、及び「深層学習の基礎と展望」から構成される。	1-1	・データ駆動型社会、Society 5.0「総合講義(データサイエンス入門)」(第1-15回) ・データサイエンス活用事例(仮説検証、知識発見、原因究明、計画策定、判断支援、活動代替など)「総合講義(データサイエンス入門)」(第1-15回) ・データを活用した新しいビジネスモデル「総合講義(データサイエンス入門)」(第3,9,12回)
	1-2	オプション ・データ分析の進め方、仮説検証サイクル「データ解析演習I」(第2回) ・分析目的の設定「データ解析演習I」(第3回) ・様々なデータ分析手法(回帰、分類、クラスタリングなど)「データ解析演習I」(第11回) ・様々なデータ可視化手法(比較、構成、分布、変化など)「データ可視化法」(第4,5,6回) ・データの収集、加工、分割/統合「総合講義(データサイエンス入門)」(第10回) オプション ・分析目的に応じた適切な調査(標本調査、標本誤差)「総合講義(データサイエンス入門)」(第8,14回) ・サンプルサイズの設定「データ解析演習I」(第7回) ・ランダム化比較試験、実験計画法「総合講義(データサイエンス入門)」(第1回)
	2-1	・ICT(情報通信技術)の進展、ビッグデータ「ビッグデータ解析」(第1回) ・ビッグデータの収集と蓄積、クラウドサービス「総合講義(データサイエンス入門)」(第9回) ・ビッグデータ活用事例「総合講義(データサイエンス入門)」(第6,9回) ・人の行動ログデータ、機械の稼働ログデータ「総合講義(データサイエンス入門)」(第3回) ・ソーシャルメディアデータ「総合講義(データサイエンス入門)」(第4,6回)
	3-1	・AIの歴史、推論、探索、「総合講義(データサイエンス入門)」(第3,7回) ・トイプロブレム、エキスパートシステム「総合講義(データサイエンス入門)」(第7,9回) ・汎用AI/特化型AI(強いAI/弱いAI)「総合講義(データサイエンス入門)」(第6回) ・フレーム問題、シンボルグラウンディング問題「総合講義(データサイエンス入門)」(第3,6,7,9回) ・人間の知的活動とAI技術(学習、認識、予測・判断、知識・言語、身体・運動)「総合講義(データサイエンス入門)」(第2,6,7回) ・AI技術の活用領域の広がり(流通、製造、金融、インフラ、公共、ヘルスケアなど)「総合講義(データサイエンス入門)」(第1,12,14回)

	3-2	・AI倫理、AIの社会的受容性「情報倫理」(第13,14回) ・プライバシー保護、個人情報の取り扱い「情報倫理」(第4-8回) ・AIに関する原則/ガイドライン「情報倫理」(第4,5,6回) ・AIの公平性、AIの信頼性、AIの説明可能性「情報倫理」(第14回) オプション ・AIと知的財産権「情報倫理」(第4回)
	3-3	・実世界で進む機械学習の応用と発展(需要予測、異常検知、商品推薦など)「総合講義(データサイエンス入門)」(第3,6,9回) ・機械学習、教師あり学習、教師なし学習、強化学習「機械学習」(第5-10回) ・学習データと検証データ「機械学習」(第5-10回) ・ホールドアウト法、交差検証法「機械学習」(第5-10回) ・過学習、バイアス「機械学習」(第5-10回)
	3-4	・実世界で進む深層学習の応用と革新(画像認識、自然言語処理、音声生成など)「総合講義(データサイエンス入門)」(第6回) ・ニューラルネットワークの原理「機械学習」(第11-14回) ・ディープニューラルネットワーク(DNN)「機械学習」(第11-14回) ・学習用データと学習済みモデル「機械学習」(第4回)
	3-9	・AIの学習と推論、評価、再学習「総合講義(データサイエンス入門)」(第3,6回) ・AIの開発環境と実行環境「総合講義(データサイエンス入門)」(第6,9回) ・AIの社会実装、ビジネス/業務への組み込み「総合講義(データサイエンス入門)」(第2,3,6,7,9,12回) ・複数のAI技術を活用したシステム(スマートスピーカー、AIアシスタントなど)「総合講義(データサイエンス入門)」(第3,6回)
(3)本認定制度が育成目標として掲げる「データを人や社会にかかわる課題の解決に活用できる人材」に関する理解や認識の向上に資する実践の場を通じた学習体験を行う学修項目群。応用基礎コアのなかでも特に重要な学修項目群であり、「データエンジニアリング基礎」、及び「データ・AI活用 企画・実施・評価」から構成される。	I	プログラミング演習II プログラミング演習 I で学んだプログラミング言語Pythonを用いた基本的なプログラミング技術を前提に、実践的で規模の大きいプログラムを作成できる技能を身につけることを目的とする。具体的には、Pythonの特徴である様々なユーザーコミュニティが開発した膨大な数の機能モジュール群の利用方法を学び、それらを活用したGUIを有するアプリケーションの開発演習を行う。さらにWebブラウザベースのアプリケーションなど、ソフトウェアアーキテクチャが異なるプログラミングの仕方についても学び、実践的な技能を身につけることを目標とする。 項目は次の通り: 数値計算モジュール Numpy, データ解析モジュール Pandas, 可視化モジュール matplotlib他, 科学技術計算モジュール SciPy, スクレイピング: Web データ収集, 機械学習モジュール scikit-learn, データ収集プログラム開発演習, データ活用アプリケーション開発演習 モデルカリキュラムキーワードとの関係(各回で個別に扱うわけではないので、キーワードのみの表記とする) (1-6)代表値(平均値、中央値、最頻値)、分散、標準偏差・相関係数、相関関係と因果関係/ベクトルの演算、ベクトルの和とスカラー倍、内積/行列の演算、行列の和とスカラー倍、行列の積/多項式関数、指数関数、対数関数/1変数関数の微分法、積分法「プログラミング演習II」 (1-7)アルゴリズムの表現(フローチャート)・並び替え(ソート)、探索(サーチ)「プログラミング演習II」 (2-2)コンピュータで扱うデータ(数値、文章、画像、音声、動画など)/構造化データ、非構造化データ「プログラミング演習II」 (2-7)文字型、整数型、浮動小数点型/変数、代入、四則演算、論理演算/関数、引数、戻り値/順次、分岐、反復の構造を持つプログラムの作成「プログラミング演習II」

		専門領域演習II(PBL実習(注)を含む) これまでに学修した統計学・アルゴリズムに関する知識を具体的な分野(情報系、統計系、医学系、経済経営系)への繋がり理解を深めるため、各分野の教員に配属し、より実践的な演習をゼミ形式で行う。演習の一環として、協力企業の現場におけるPBL実習を実施する。このことにより高度な能力を身に付け、自ら直面する課題を解決することができるようになり、それらを表現する能力も養う。ここで扱う課題はすぐには解決できないことが多く、そのために問題を分割して考えることによって一つ一つ解決していくという能力も身に着ける。 課題(PBL実習を含む)への取組の状況や、プレゼンテーションなどにより総合的に評価を行う。 (注:PBL実習:演習の一環として、学生を2週間以上のインターンシップ形式で企業現場に派遣等しデータサイエンスの実践場面を体得させる。)
	II	モデルカリキュラムキーワードとの関係 (1-1)データ駆動型社会, Society 5.0, データサイエンス活用事例, (2-1)ビッグデータ活用事例, (1-2)データ分析の進め方, 仮説検証サイクル, (3-1)AIの歴史, 推論, 探索「専門領域演習II」(第1、2回) (3-2)AI倫理, AIの社会的受容性・プライバシー保護, 個人情報の取り扱い「専門領域演習II」(第3回) (3-3)実世界で進む機械学習の応用と発展, (3-4)実世界で進む深層学習の応用と革新, (3-9)AIの学習と推論, 評価「専門領域演習II」(第4、5回)

⑧プログラムの学修成果(学生等が身に付けられる能力等)

本プログラムは、Social Goodを牽引する、多様性のあるデータサイエンス(DS)人材の育成を目的としたものである。 学修成果として、本プログラム修了学生は、データ思考を涵養し、応用基礎からエキスパートへの橋渡しとなるDS人材としての素養を身につけることが期待される。 具体的には、「知識・理解」、「技能」、「態度・志向性」において次の事柄が該当する。 <知識・理解> ・現実の課題をデータとの関係性からとらえる能力、またはものごとの裏に潜む数理的な法則・関係を見抜く能力を獲得する。 ・基礎から応用にわたる医療、経済社会、情報等に関するDSにかかる課題を俯瞰し、これらの応用分野に適用できる課題発見・課題解決を有する。 <技能> ・各応用分野における課題を追究するための計画立案及び課題解決の手法を修得している。特に、統計学とアルゴリズムを基礎としたコンピュータサイエンス、データ解析に習熟し、適切な課題解決策を考案することができる。 ・豊かな表現力で、国内外の様々な分野の人々と円滑にコミュニケーションを図ることができる。 <態度・志向性> ・常に人間や社会に対する興味や関心を持ち続け、各分野の課題をデータから数理的・分析的に考える基礎的能力を持ち、また、様々な人々と協同して課題解決を図る態度・志向性を有し、社会に貢献することへの高い意識を有している。 ・総合的な知性と教養に基づいて国際社会、地域社会に貢献を図る旺盛なチャレンジ精神を持ち、より良い社会の実現に向け努力する姿勢を身につけている。

⑨プログラムの授業内容等を公表しているアドレス

<https://www.yokohama-cu.ac.jp/academics/ds/suuriouyoukiso.html>

プログラムの履修者数等の実績について

①プログラム開設年度

令和3

年度

②申請単位

学部・学科単位のプログラム

③履修者・修了者の実績

学部・学科名称	入学 定員	収容 定員	令和3年度		令和2年度		令和元年度		平成30年度		平成29年度		平成28年度		履修者数 合計	履修率
			履修者数	修了者数	履修者数	修了者数	履修者数	修了者数	履修者数	修了者数	履修者数	修了者数	履修者数	修了者数		
データサイエンス学部	60	240	28	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	28	12%
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
															0	#DIV/0!
合 計	60	240	28	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	28	12%

教育の質・履修者数を向上させるための体制・計画について

① プログラムを改善・進化させるための体制を定める規則名称

データサイエンス学部教授会規程

② 体制の目的

データからストーリーを紡ぐ「データ思考」を涵養した上で、より良い社会を構築するデータサイエンス(DS)人材を育成することを目的とし、その人材育成に必要な知識・理解・技能が身につくような教育カリキュラムを検討・整備する。また、DS研究を牽引する人材としての教育・指導も行う。

データ思考の涵養において、統計学や情報科学の技能のみに重点を置くことなく、DS人材としての姿勢を常に検討・更新することを心がける。人間や社会に対する興味や関心を持ち続け、各分野の課題をデータから数理的・分析的に考える基礎的能力を持ち、また、様々な人々と協同して課題解決を図る態度・志向性を有し、社会に貢献することへの高い意識を有するDS人材を輩出することは、本体制であるデータサイエンス学部教授会の主たる目的の重要な一つである。

③ 具体的な構成員

データサイエンス学部専任教員で組織する。

学部長 山崎 眞見教授

阿部 貴行准教授

上田 雅夫教授

大西 暁生教授

小野 陽子准教授

越仲 孝文教授

小屋 良祐教授

佐藤 彰洋教授

土屋 隆裕教授

富田 誠教授

藤田 慎也准教授

汪 金芳教授

④ 履修者数・履修率の向上に向けた計画

令和3年度実績	12%	令和4年度予定	40%	令和5年度予定	60%
令和6年度予定	80%	令和7年度予定	90%	収容定員(名)	240
具体的な計画					
<現状> R3年度実績は、MDASH-Literacyに相当するプログラムへの学部履修率である。本申請プログラム科目の多くは、DS学部必修講義により構成されており、現状の単位取得者数からの単純履修率算出であるならば、実質的には50%以上の履修率が確認される。プログラム履修を通じて、DS人材としての自らの方向性を学生自身が検討するよう指導している。 <令和4年度～令和7年度> 各年度において、本プログラムの説明会を開催し、履修の動機付け、プログラムの周知徹底を行うものとする。本プログラムは、データサイエンス学部のみの開講となることから、学部のディプロマポリシーと併せて指導を行い、「Social Goodを牽引する、多様性のあるDS人材育成」としてのミッションとビジョンをより明確に学生に周知徹底する。DS人材としての自覚を促し、データサイエンス学部で学ぶ学修内容がどのようにして社会とつながるのか、意識を促す指導をデータサイエンス学部教員が行うものとする。 また、令和4年度から稼働したLMSを活用し、学生指導や学修サポート等を行い、学生のプログラム履修を促進する。					

⑤ 学部・学科に関係なく希望する学生全員が受講可能となるような必要な体制・取組等

今回の申請は、応用基礎とエキスパートとのブリッジとなるデータサイエンス学部の教育プログラムに特化したものである。そのため、他学部・学科横断型の体制や取組は該当しない。

⑥ できる限り多くの学生が履修できるような具体的な周知方法・取組

学生のプログラム履修動機付け

本プログラムの科目の多くは、データサイエンス(DS)学部の必修科目である。多様な分野におけるDS人材として学生が卒業後社会で活躍の場を広げるには、本プログラムを元に、DS人材としての素養を発展させることが肝要であるため、学部科目履修点検を学生各自に促しつつ、専門演習を構成するPBL実習の意義を理解させることで、本プログラムの先にある発展的科目、DSを活用する研究領域への探究心を高める。

プログラムの周知方法

新年度のガイダンスなどで解説し、学生が本プログラムの趣旨を理解した上で参加申請するように努める。特に1年次前期は、線形代数学や微積分学、統計学といった応用基礎コア科目が配置される一方で、DSとの関連を認識できない学生も見られるため、DSとこれらの応用基礎コア科目のつながりを示し、学生にこれらの科目の意義とともに、本プログラムの意義を十分周知する。

⑦ できる限り多くの学生が履修・修得できるようなサポート体制

文部科学省補助金により「テーラーメイド型学修支援プラットフォーム YCU-Board」として導入したLMSにより次の効果が期待される。

1) 学修履歴やキャリア意識変化の可視化

学生は、各学期の初めに目標設定を行い(Plan)、適切な履修計画ができているかAIの評価を受ける。学期中には(Do)学修及び個別指導履歴をクラウド上で管理する。学期末には学修の可視化と修得度チェック(Check)を行う。これを踏まえ、AIの評価と教員のメンタリング(Action)を行う。このPDCAサイクル実施により、可視化された学びを確認、発展的な学習につながる。

2) with/afterコロナ時代を見据えた講義形態への適用

知識提供型/反転学習型VOD教材、質問/レポートの管理機能、教育素材の継続的改善を支えるストック機能により、教室定員数等の制約からの解放や双方向授業の充実につながる。

⑧ 授業時間内外で学習指導、質問を受け付ける具体的な仕組み

「YCU-Board」(LMS)の利活用

・LMSのPDCAサイクルの実施により、学期末には学修の可視化と修得度チェックを行う。学生の学修履歴が蓄積できることから、履歴の確認を通じて、単純な履修漏れや成績確認に留まらず、DS人材としてのキャリアについて、学生自身が自ら検討することが可能である。また、これらを踏まえたAIの評価と教員のメンタリングを通じて、学生がどの領域でDS人材として活躍することを期待するのか、あるいは、これまでにDS・AIが浸透しているとは言い難い新たな分野を開拓する希望があるのか、といったキャリア教育に対するLMSの利活用を検討している。

・オフィスアワーに限らず、LMSやOffice365のTeamsチャットなどを利用することで、学生から質問や相談を受け付けることが可能である。また、zoomなどを用いて、遠隔での質問対応についても既に取り組んでいる。

自己点検・評価について

① 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	本プログラムの前段階である数理・AI・データサイエンスリテラシーレベルプログラムの履修状況は、全学年で12%であった。 令和4年度においては、リテラシーレベルの履修率向上も鑑み、各学期に本プログラムの説明会を開催し、履修の動機付けとプログラムの周知徹底を行う。本プログラムは、DS学部のみでの開講のため、学部のディプロマポリシーと併せて指導を行い、「Social Goodを牽引する、多様性のあるDS人材育成」としてのミッションとビジョンをより明確に周知徹底する。具体的には、LMSでの履修登録などと連動し、履修者の学修状況、キャリアなどを解析し、その結果を学生に提示することで、履修率の向上を目指す。
学修成果	選択項目と応用基礎コアⅠ、Ⅱについては、講義科目で構成されることから、その学修成果は課題や最終試験によって一定の評価が可能である。また、各学期に実施する授業評価アンケートの結果から、授業内容などに関する学生の評価を授業改善に役立てることが可能である。 一方、「Ⅲ. AI・データサイエンス実践」は、座学に関する評点のみでは、学修状況が正しく把握できない。企業で2週間ほど、課題発見から解決までのDSサイクルをたどる「PBL実習」を踏まえた「専門領域演習Ⅱ」の評価は、教員のみならず、企業の視点での評価も加味される。 学修評価の妥当性評価を教授会において検討し、固定化することのないよう心がける。

学生アンケート等を通じた 学生の内容の理解度	授業評価アンケートの結果から授業内容などの理解度を確認することが可能である。調査内容は、①学生の主体的な学び(出席状況、自主学習時間など)、②シラバスと講義の関係(学生のシラバス確認とその理解、講義の進め方など)、③学生の知的好奇心(今後の学び、自らの学習意欲、カリキュラムマップをいかに理解しているかなど)の3つに分類される。 また、プログラムを修了した学生の振り返り内容を基にプログラム全体を通じた理解度を確認する。 これまで目立った学生の理解不足はないが、結果からDSの基礎となる講義科目を体系的に履修する意義を、より明確に意識づける必要性が見え、今後の教育改善への進展が期待される。
学生アンケート等を通じた 後輩等他の学生への推奨度	PBL実習終了後の学生レポートの結果を開示し、学生へのプログラム推奨を促す。これまでの座学講義で積み上げてきたDSへの実用的知識をどのように社会展開するのか、また、どのように課題を発見し、解決までのプロセスを辿るのかという事柄を、学生の実体験の声を通じて広く告知する。
全学的な履修者数、履修 率向上に向けた計画の達 成・進捗状況	本プログラムは、応用基礎に留まることなく、次のエキスパートレベルへの橋渡しとなる人材育成プログラムであることから、全学的な展開は検討していない。よってこの項目は該当しない。

学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本学では「卒業生アンケート」として、就職した学生の追跡調査を3年ごとに行なっている。その内容は、時点の就業状況にとどまらず、在学中の学修である「課題発見・解決能力」、「グローバルな視野」、「豊かな教養」、「確かな専門性」が就職後に与えている影響を測るものである。また、卒業年次には4年間を総括した学びや満足度に関する調査もある。今後、これらの調査結果と併せて、企業からの評価とともに本プログラムの修正・見直しなどに寄与する指標が作られるように善処する。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	PBL実習とDSセミナーの協力企業に対し、レポートやプレゼンテーション、実習中の作業状態などを報告してもらうことで、学生の学修状況を調査し、プログラムへの助言を得ている。また、学外でのコンペティションを実施している連携協定先企業などからも、学生の強み・弱みなど、座学講義では測定することが難しい問題解決力についてコメントを得ており、これらの声を元に、プログラムの見直しを図っている。

数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	1年次前期「DSセミナー」にて、企業から講師を招き、実社会におけるAI・DSがいかに活用されているのかを学ぶ。1年次後期には、「総合講義（データサイエンス入門）」にて、データサイエンス学部専任教員が自らの専門領域とAI・DSの導入、現在社会で起っていること、新しい技術などを講義し、学生の興味を喚起している。1年次はAI・DSの基礎的学問である数学や統計学、情報学の基礎を学ぶことが多いため、これら基礎科目とAI・DSの関係性を解説する講義として、配置されている。この内容を、学生の興味喚起につながるよう、連携する企業や地域と共に、学部専任教員が都度更新している。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	学生アンケートの結果から「わかりにくい」の意味を掘り下げるよう留意している。本質的な「講義レベルの難易度」による分かりにくさだけでなく、「用語の難解さ」による分かりにくさなどもアンケートから拾い上げることは可能である。また、今後、大学入学前の情報科目、統計科目の指導要領の変更（難易度が上がること）が予想されることから、令和7年度以降の情報科目の難易度については、早期から検討し、スムーズな変更となるように心がける。

②自己点検・評価体制における意見等を公表しているアドレス

<https://www.yokohama-cu.ac.jp/academics/ds/suuriouyoukiso.html#title8>

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(応用基礎 レベル)プラス 申請書

① 授業内容

・データサイエンスを学ぶ意義を問う学習内容

「Ⅱ. AI・データサイエンス基礎」科目「総合講義(データサイエンス入門)」において、数理・データサイエンス・AIが社会でどのように利用されているのかを事例を用いて解説する。また、AI・データサイエンスによる課題発見と課題解決、更には、価値創造への繋がりについて、多様な分野における社会事例から学ぶ。

AI・データサイエンスに関連する既存の大学講義科目のみならず、単位はないが、AI・データサイエンスを業務で扱う企業からの講演者を招いて行う「データサイエンスセミナー」を開講し、学生のモチベーション向上に資している。

・学生の習熟度や専門性を踏まえた学習内容

本申請プログラムの対象となる学生は、データサイエンス学部学生に限られる。データサイエンスを専門とする学生を対象としていることもあり、学生の習熟度の幅は、複数学部同時プログラムとは異なり、一定の習熟度が達成されるものと推察される。数学、統計学、アルゴリズム科目が関連する「数学発展」、「データサイエンス応用基礎」についての習熟について、現状では問題がみられないが、「データサイエンス応用基礎」、「データエンジニアリング応用基礎」といった、情報関連の一部応用科目では、その技術の差が見られる。単純に、担当教員のフォローだけで学生の学習支援をするのではなく、これらの科目の動機付けを行う講義を配置する。具体的には、社会でいかに「データサイエンス応用基礎」、「データエンジニアリング応用基礎」科目関連技術が用いられるのか、産業界と連携した寄附講座(本プログラムの科目には該当せず)を設置し、学生を支援している。

・キャリアデザインにつながる学習内容

本プログラムはデータサイエンス学部の基幹となる科目群と一致する。本プログラムに該当しない、多様な領域でのデータサイエンスと関連する科目の履修を通じて、学生個人のキャリアデザインの検討がなされることを期待する。その前段階として、本プログラムの選択科目である「AI応用基礎」、「データサイエンス応用基礎」、「データエンジニアリング応用基礎」および「数学発展」が数理・AI・データサイエンスの基盤となることの理解を深めるよう指導する。PBL実習は、各学生が自らのキャリアデザインを考える場としても有効である。

② 学生への学習支援

・学生の履修支援体制

本プログラム導入前から存在するカリキュラムツリーを本プログラム導入時に再度整理し、学生が、自主的にデータサイエンス人材の具備する素養を体系的に履修選択できるよう指導する。データサイエンスを専門とする学部であることもあり、ともすれば、組織は必要と思う科目を過分に並べ、履修の道を限定的に示してしまう傾向に陥りがちである。しかしながら、本プログラムの導入に伴い、学生が主体性を持ち、自らのカリキュラムマップのみならずキャリアデザインをも構築することを促す指導体制をとることにより、学びの先にある活動（社会活動もしくは研究活動）を意識した、データサイエンスを自分ごととした履修を支援する。

・LMSによる学習支援

LMSのPDCAサイクルの実施により、各学期末には学修の可視化と修得度チェックを行う。各学生の学修履歴が蓄積可能であることから、履歴の確認を通じて、単純な履修の取りこぼしや成績の確認に留まることなく、データサイエンス人材としてのキャリアについて、学生自身が自ら検討することが可能である。また、これらを踏まえたAIの評価と教員のメンタリングを通じて、各学生がどの領域でデータサイエンス人材として活躍することを期待するのか、あるいは、これまでにデータサイエンス・AIが浸透していると言い難い新たな分野を開拓する希望があるのか、といったキャリア教育に対するLMSの利活用を検討している。

・学外活動（インターンシップや各種コンペティション）への学生参加促進支援

AI・データサイエンス領域を学ぶ学生が刺激を得られる場として、インターンシップやデータコンペティションなどの学外活動への参加は重要である。これらの学外活動に関する情報を学生に共有し、参加を促す仕組みを作っている。特に、コンペティションへの参加は、グループで行うことが多いこともあり、学生間の協働体験にも繋がっている。これらの活動参加ののちに、3年でのPBL実習にて、企業等でのプロジェクト協働を体験することで、データサイエンス人材としての学生個人の強み・弱みなどが可視化される。

・多様性に対する学習支援

データサイエンスは文理融合の学問である。また、性別に限らず、多様性を包含する学問である。申請主体たるデータサイエンス学部は、高校までの文系出身比率2割、女子学生比率が4割であり、日本におけるデータサイエンスを学ぶ学部学科の傾向（男子学生比率・理系のみ）とは異なる。しかしながら、開講以降、文系・女子学生ということが、学修における有意な違いにはつながらないことが確認されている。これらの理由を精査し、性別などの些末的な多様性にとどまることなく、学生主体となる、多様な価値が邂逅する多様な学びの場を作り、支援するよう心がける次第である。

③ その他の取組(地域連携、産業界との連携、海外の大学等との連携等)

地域・産業界との連携

・講義への協力連携

データサイエンス学部では、開講当初より、データサイエンス教育の基礎となる数学、統計学、情報学といった大学における従来科目だけでなく、データサイエンスが展開される社会との連携を意識した科目を設置している。これら産業界からの支援を受けた科目が、大学での学びがいかに社会につながるかを学生が理解し、学生の更なる学びを後押しをするという意味で重要であることは、学生の過去の履修状況からも確認できる。

単位を有する科目

令和4年度現在は、2社(株式会社帝国データバンク、日本電気株式会社)から寄附講座が開講されている。

特講(寄附講座:帝国データバンクDE養成講座) 2年次後期

特講(寄附講座:ビジネス課題解決プロジェクト演習) 3年次前期

単位を有さない科目

データサイエンスセミナー 1年次前期

PBL演習(ただし、この科目は単位のある専門領域演習IIの一環として実施) 3年次前期(夏季)

その他、講義科目ではないが、一般社団法人データサイエンティスト協会との連携により、データサイエンス人材として働く人々の声を聞き、交流するセミナーを不定期で開催している。

・本プログラムの主体であるデータサイエンス学部との連携

講義やセミナーなどで連携している企業等を含め、本プログラムの申請主体であるデータサイエンス学部が包括連携協定を結ぶ企業・団体は次の通りである。これらの連携企業との協同だけでなく、学部教員が多種多様な企業と研究教育面で連携を行なっている。これらの連携を通じて、学生は、本プログラムにおける講義内容と実社会における業務や最新のニーズ・技術との関連などを、講義やセミナー、研究活動を通じて、学ぶことが可能である。

サントリーMONOZUKURIEキスパート株式会社/株式会社マイナビ/株式会社インテージホールディングス/横浜市/全日空商事株式会社/株式会社帝国データバンク/株式会社マクロミル/横浜市・日本電信電話株式会社/日産自動車株式会社/株式会社ブロードリーフ/エーザイ株式会社/Vpon JAPAN株式会社/日本電気株式会社/イオン株式会社/みなとみらい二十一熱供給株式会社/鎌倉市/株式会社浜銀総合研究所/株式会社primeNumber/株式会社データビークル(令和4年4月末日現在、協定締結日順)

海外大学との連携

これまでに、海外大学とはセミナーや学会発表などで交流を行なっている。令和4年度開催予定の交流は下記の通り:

- ・国立成功大学とのCOIL型交流を実施予定
- ・海外FW1件の実施による現地へ学生を派遣
- ・SUDP2022(Sustainable Urban Development Program)への学生参加
- ・IACSC(International Academic Consortium for Sustainable Cities)マレーシア大会、横浜大会への学生参加
- ・GCI主催のワークショップへの学生参加(9月ないしは 来年3月)
- ・国際学会への学生参加・海外大学との勉強会による研究交流
- ・コーネル大学とのオンラインセミナーを検討

プログラム名称：データサイエンス人材育成プログラム

プログラム概要：Social Goodを牽引する，多様性のあるデータサイエンス(DS)人材育成

応用基礎レベルの位置づけ

自らの専門分野への数理・データサイエンス・AIの応用基礎力を習得
→ 専門分野 x データサイエンス（以下，DS）による価値創造

DS学部が育成する数理・データサイエンス・AIの応用基礎力

→ DS x DEI(Diversity, Equity and Inclusion)による価値創造

DSがSocial Goodを牽引し，多様な領域において価値創造するためにDS人材が持つべき視座・技能を養成することを目的とする。

- ・「応用基礎」と「エキスパート」のブリッジとなる多様な人材を育成
- ・文理，性別といったvarietyではなく，多様な視座としてのdiversityをデータ思考として涵養する
- ・多様な問題に対して，実践的知識と達成能力をもって価値創造する人材を育成する

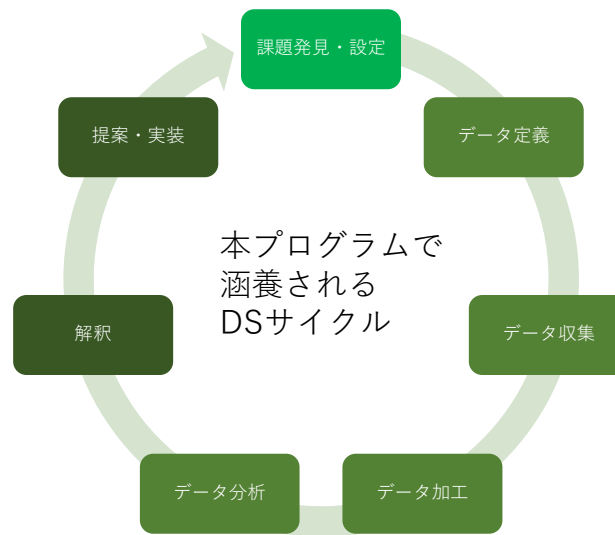
DSに必要とされる実用的な知識と問題解決能力を育成する学習の柱

- ・データサイエンスを学ぶ意義と多様な視座の涵養
- ・学生の習熟度や専門性
- ・キャリアデザインへの連携

学生主体の「自分ごととしてのDS」を支援する体制

学生がDSを「自分ごと」として捉え，問題解決にあたるために必要な支援体制を構築する。

- ・DS学部専任教員による学術・研究指導
- ・地域や産業界，海外大学←AI・DSの社会展開やその影響など，従来型講義からは得られない最新の知識と社会課題の問いかけ
- ・LMSによる学修履歴の可視化や4年間通じたキャリア支援←DSのどの分野を重点的に学び，社会において活躍する領域をどのように定めるか



DS人材が辿るDSサイクル全体を見すえた教育

DS学部との包括連携協定

サントリーMONOZUKURIエキスパート株式会社/株式会社マイナビ/株式会社インテージホールディングス/横浜市/全日空商事株式会社/株式会社帝国データバンク/株式会社マクロミル/横浜市・日本電信電話株式会社/日産自動車株式会社/株式会社ブロードリーフ/エーザイ株式会社/Vpon JAPAN株式会社/日本電気株式会社/イオン株式会社/みなとみらい二十一熱供給株式会社/鎌倉市/株式会社浜銀総合研究所/株式会社primeNumber/株式会社データビークル（令和4年4月末日現在，協定締結日順）

データから，未来をフォーサイトし，現実との比較（バックキャスト）により課題を発見、定式化する
→ **Social Good** に対する意識，倫理観の涵養

抽出された課題との関係において更に必要とされるデータを定義・収集・加工・分析する
→ **さまざまなツールを適切に使う「目利き」能力の涵養**

分析結果を踏まえ，新たな価値を創出し，社会実装（につながる提案を）する
→ **Social Good** に対する意識，倫理観の涵養

1年 DSセミナー
DS入門

2年 寄附講座

3年 寄附講座
PBL実習
専門領域演習II

4年 卒業研究

DS for Social Good
関連講義

参考文書 1：PBL実習学生案内文書
（令和3年1月8日　令和4年度4年次生が2年次に告知、3年次夏期に実施）

企業の事業活動において社員の業務を学生が体験するいわゆるインターンシップにおいて、特に業務の性格が課題解決型(* 1)である業務そのものやそれに関連する業務(* 2)の実習を通じてデータサイエンスの社会活用実態を学ぶ機会をPBL実習と呼ぶ。

*1) 課題解決型の業務とは、課題の置かれた状況に関するデータに基づいた客観的な認識や、課題解決アイデアの効果をデータを用いて検証する業務などを想定します。

*2) 関連する業務とは、課題の整理や、解決アイデア出しのブレインストーミングや、課題に関する情報収集など、データそのものを直接に利用した分析以外の、課題解決プロセスに関わる業務を想定します。

実施時期：夏季休暇期間(8月~9月)の中の1週間から3週間(企業毎に日程は異なる)

派遣対象学生：3年次

募集方法：
 各企業の実施計画案を提示した上で、第 1 から第 7 希望までのアンケートを実施。MS Formsを利用して回答を収集。募集は 3 年生全員にメールで連絡します。

募集時期：6月を予定

決定方法：
 派遣先の振り分けは、応募希望順位を考慮してDS学部教員のWGメンバーで議論し決定します。

PBL実習実施予定企業（各社の実習実施案は、6月の募集時点で開示します）
 注）現時点での候補企業リストです。
 令和2年度のように実施時期が近づくとコロナ等の状況により実施見送り企業も現れます。
 一方、今後も協力企業の開拓を続けるため、募集時には募集企業数の増減があり得ることを
 ご承知ください。

#	企業名	#	企業名
1	全日空商事	9	イオンリテール
2	Vpon Japan	10	日本電気(NEC)
3	シミック	11	マイナビ
4	日産自動車	12	インテリム
5	Rejoui	13	エナ・ストーン
6	アトラエ	14	エイチ・エス損保
7	サイバーエージェント	15	CACクロア
8	矢崎総業		

参考文書2:データサイエンスセミナー
社会におけるデータ利活用の実際(令和3年度開催学生告知)

回	開催日	ご講演いただく企業	Zoom URL(短縮)
1	4月14日	(株) マイナビ	https://bit.ly/2PdHZBS
2	4月21日	(株) エナ・ストーン	https://bit.ly/3fk5wMI
3	4月28日	(株) インテージホールディングス	https://bit.ly/3rxFtn2
4	5月12日	(株) 横浜銀行	https://bit.ly/2QCnJdx
5	5月19日	(株) 帝国データバンク	https://bit.ly/2QEdkxY
6	5月26日	(株) ジュピターテレコム (J:COM)	https://bit.ly/31qsIWf
7	6月2日	ソフトバンク (株)	https://bit.ly/2PAkkvm
8	6月9日	日産自動車 (株)	https://bit.ly/3frPVu3
9	6月16日	シミック (株)	https://bit.ly/3dloOym
10	6月23日	(株) サイバーエージェント	https://bit.ly/39olHo9
11	6月30日	(株) 電通デジタル	https://bit.ly/3cywr5k
12	7月7日	全日空商事 (株)	https://bit.ly/3rr86Cw
13	7月14日	エイチ・エス損害保険 (株)	https://bit.ly/3lZhDQd

場所：zoom によるリモート開催
時間：水曜 3 限（12:50～14:20）

単位0だが、今後の進路選択やデータサイエンス学部学生として社会から期待されている事項を知る上で非常に役に立つので、**必ず参加すること**

参考文献3:DS協会との連携セミナー

横浜市立大学データサイエンス学部のみなさまへ

DSS学生部
Deep Dive Session

企業ではたらく 若手DSが語るセミナー

Vol 1: エンタメ×マーケティング

企業の中でデータ解析や課題解決に取り組むデータサイエンティスト。

彼ら彼女らは日々どんなワーク&ライフを過ごしているのか？

エンタメやマーケティング領域で活躍する若手DSの、日々の実務の実態や仕事観、キャリアへの考え方など、気になることを掘り下げてセッションしましょう

開催日時

2022年11月10日 木
18時00分～19時30分

オンラインと質問受付

セミナー
2022年11月10日(木) 18:00～19:30
Zoom
ID: 987 654 3210
パスワード: 1234 5678

質問受付QRコード

企業参加メンバー

モデレーター 田嶋 優樹
株式会社電通
データマーケティングセンター
シニアプランナー

パネリスト 世良 拓也
日本電気株式会社・NEC
AI・アナリティクス事業部

パネリスト 杉山 聡
株式会社アトラエ
データサイエンティスト / Vtuber

2022年 電通入社 電通入社後、メディアプランニング業務、広告の効果測定、ロビー導人を担当。社内のマーケティングプロジェクトを立ち上げ、産学連携も推進。

製造・官公庁を中心に、テキスト分析、データ分析業務に関わる。一方で、楽器やアプリケーション生成のような新しい活用テーマにも挑戦する。

東京大学大学院にて博士「数理解科学」を取得の後、株式会社アトラエに入社。同社の「人目のデータサイエンティスト」として、組織改善プラットフォームの開発、データ分析機能開発を手がける。また、Vtuberエンゲイジメントの第一人者である慶應義塾大学の島津教授と「仕事と余暇の関係性」についての研究を進行中。

一般社団法人
データサイエンティスト協会

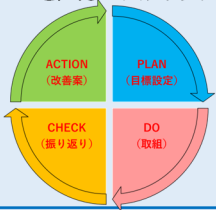
・当日は途中参加、途中退出OK
・録画はしません。写メ禁止

YCU-Board ポートフォリオ機能 目標設定について

大学生活を通じて理想の自分を実現するために！

～自発的に目標を設定し、主体的に目標の進捗や実行を管理し、成長を実現する～

ディプロマポリシーを満たすとともに理想の自分を実現するために、自身の目標を学期初めに入力し、学期末に振り返りを行ってください。以下では、目標設定をすること、振り返りをするものの意義をまとめています。漫然と目の前のことだけに追われていると、あっという間に4年間が経過してしまいます。自身が考える未来の理想像をイメージし、目標を掲げてその目標に向かって取組を進めることが重要です。なお、みなさんが書き込んだ内容については、個人を特定する形で利用されることも、公表されることもありませんので、安心してYCU-Boardの目標設定機能を大いに活用してください！

1	イメージしないことは実現しない 	皆さんは将来、どのような社会人になりたいですか。まずは理想の自分をイメージしてください。この時、できるだけ志を高く持って欲しいと思います。 次に、現在の自分と理想の自分のギャップを把握しましょう。そのギャップを、4年間かけて埋めていき、大学卒業時に理想の自分になってほしいと願っています。
2	成長過程を楽しむために	成長過程を楽しむためには、自ら考え、自ら行動する自発性が重要です。自ら行動して、自身の成長が実感できた時、また次の目標に向けて行動することができます。
3	バックカスティングで 	最初に将来の目標を描き、次にその目標を実現するための道筋を定めていく手法をバックカスティングと呼びます。皆さんの場合は、理想の自分像を定め、これを実現するために卒業までの各学期でなすべきことを計画することになります。1年次生であれば4年間計8学期が構想すべき期間となります。
4	PDCAを回してステップアップ 	PDCAとはPlan（計画）、Do（実行）、Check（振り返り・検証）、Action（改善案の検討）の頭文字です。学期初めの「目標設定」はPlanとなります。学期中の取り組みがDo、成績発表を受けての振り返りと検証がCheck、そして課題の解決や改善案の整理がActionとなります。このActionを踏まえ、新学期において一段階ステージを上げた「目標設定」を行うこととなります。
5	メンターや学内サポートの活用 	この取り組みは主体的であることが重要ですが、みなさんは経験も浅く、また視野や情報も限られている可能性もあります。経験不足や情報不足を補うために重要な役割を果たしてくれるのがメンターとなる担任教員です。そのほか、学内にはキャリア支援センターや健康管理センターなどみなさんの大学生活をサポートする体制が整っています。 理想の自分に近づくための効果的な取り組みなどのアドバイスをもらってください。履修することが望ましい科目の案内もあるかと思います。



卒業後の活躍



START

1年次

2年次

3年次

4年次

バックカスティング

学期ごとにPDCAを繰り返しながら成長
(1年次生であれば4年間計8学期)

未来の自分のありたい姿から今を見て、
何をやるのか、どうやって実現するのか、
考えてみましょう！

40



神奈川県政記者会
横浜市政記者会 同時発表

2022 年 11 月 8 日
横浜市立大学
神奈川大学
関東学院大学
横浜国立大学

横浜 4 大学「第 8 回ヨコハマ FD フォーラム」を開催 「新型コロナ禍の経験から、あらためて学生支援について考える —コロナ禍の学生生活と学修への影響—」 12 月 10 日(土) オンライン開催

横浜市内 4 大学（横浜市立大学・神奈川大学・関東学院大学・横浜国立大学）は、2022 年 12 月 10 日（土）にオンライン（Zoom）にて「ヨコハマ FD フォーラム」を開催します。この活動は、2017 年 2 月に 4 大学間で締結した「FD※活動の連携に関する包括協定」に基づいて実施しています。

新型コロナウイルス感染症の拡大による大学生への影響として、授業のオンライン化、経済的問題の他に、学生生活を中心とした「学生支援」と総称される領域での様々な問題が挙げられます。オンライン授業に対する学生の満足度が多くの大学で対面授業に劣らなかったことに比べ、学生支援に関わる問題ではキャンパスへの入構制限によって学生同士の交流ができなかったことや大学施設利用等の制限に関して、一部から不満の声が確認されました。特に大学への入学と新型コロナ禍が重なった現在の 3 年次生については、学修への影響も懸念されています。

今年度のフォーラムでは、「新型コロナ禍の経験から、あらためて学生支援について考える—コロナ禍の学生生活と学修への影響—」をテーマに、通学制大学における「大学の目的、大学生生活の意義、大学に求められる学生への支援とは何か」について、当事者である学生も交えて議論し、今後のあり方を検討します。

※FD（Faculty Development）

教職員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。（中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」答申（平成 17 年 1 月））。教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを FD 活動と呼ぶ。

【第 8 回ヨコハマ FD フォーラム概要】

日 時：2022 年 12 月 10 日（土）13:00～16:00（Zoom 開始：12：50～）

参加方法：オンライン（Zoom）

参 加 費：無料

対 象：大学教職員、大学教育にご関心のある一般の方、学生等

定 員：第 1 部：なし、第 2 部：200 名

申込方法：<https://forms.office.com/r/c7r4UXx2mz>

上記 URL よりお申込みください。

申込期限：2022 年 12 月 6 日（火）

※お申込みいただいた方に後日メールにて URL をお送りします。

内 容：【第 1 部】各大学からの報告（13:10～15:10）

教員と学生による実践報告—横浜 4 大学のコロナ禍の学生生活と学生支援—

【第 2 部】グループディスカッション（15:20～15:55）

共同主催：横浜市立大学・神奈川大学・関東学院大学・横浜国立大学

お問い合わせ先：横浜市立大学 教育推進課学術企画担当 acaplan@yokohama-cu.ac.jp



横浜市立大学は、
様々な取り組みを
通じてSDGsの達
成を目指します。



【共同主催】

横浜市立大学、神奈川大学、
関東学院大学、横浜国立大学

第8回ヨコハマFD フォーラム

「新型コロナ禍の経験から、あらためて学生支援について考える」
～コロナ禍の学生生活と学修への影響～

2022年12月10日(土)

13時～16時

オンライン開催 (Zoom)

会場：Zoom によるオンライン開催（主催校：横浜市立大学）

※申し込みした方に後日メールで URL を連絡します。

対象：大学教職員、大学教育にご関心のある一般の方、学生等

定員：第1部：定員なし。第2部：先着200名（オンライングループワークをするため）

参加締切：2022年12月6日(火)※お早めにお申込みください

参加費：無料

申込 URL：<https://forms.office.com/r/c7r4UXx2mz>

※第2部は定員になり次第締め切らせていただきます

◎お問い合わせ先

横浜市立大学教育推進課学術企画担当

✉acaplan@yokohama-cu.ac.jp



【申込 QR コード】

「新型コロナ禍の経験から、あらためて学生支援について考える」 ～コロナ禍の学生生活と学修への影響～

新型コロナウイルス感染症の拡大による大学生への影響として、授業のオンライン化、経済的問題の他に、キャンパスへの入構制限によって学生同士の交流ができなかったことや大学施設利用等の制限等の「学生支援」領域での問題が挙げられ、一部から不満の声も確認されています。特に大学への入学と新型コロナ禍が重なった現3年次生については、学修への影響も懸念されています。

このような背景を踏まえ、今年度のフォーラムでは、通学制大学における「大学の目的、大学生活の意義、大学に求められる学生への支援とは何か」について、当事者である学生も交えて議論し、今後のあり方を検討します。

【全体プログラム】

13:00～13:05 (5分)	接続の確認・注意事項等の事務連絡 【司会】菊池 芳明（横浜市立大学 学務准教授）
13:05～13:10 (5分)	開会あいさつ・フォーラムの流れおよび趣旨説明 中條 祐介（横浜市立大学高等教育推進センター長）
13:10～15:10 (120分)	【第1部】教職員と学生による実践報告-横浜4大学より- (各大学25分：敬称略) ＜横浜市立大学＞ ・柳本 薫（ボランティア支援室） 「新型コロナ禍におけるボランティア支援室の取組み」 ・加藤 すみれ（国際商学部3年・ボランティア支援室学生スタッフ） 浦田 莉里花（国際教養学部3年・ボランティア支援室学生スタッフ） 「新型コロナ禍におけるボランティア支援室学生スタッフVolunchの取組み」 ＜神奈川大学＞ ・東海林 竜也（理学部化学科 准教授） 「学習管理システムを活用した学生対応の模索」 ・菊地 湧也（理学研究科博士前期課程 2年） 「コロナ前後における学生生活の意識・行動の比較とそれらが与える影響～学習面に焦点を当てて～」 ＜関東学院大学＞ ・小林 弥生（カウンセリングセンター・臨床心理士） 「学生相談からみたコロナ禍の大学生活の変化と支援の実際」 ・大園 佑輝（経営学部4年） 「コロナ禍におけるサークル活動と授業形態等の変化」 ＜横浜国立大学＞ ・松本 真哉（高大接続・全学教育推進センター副センター長、 環境情報研究院教授） 「学修活動における本学のコロナ対策の影響」 ・杉山 陽平（理工学府 博士課程前期2年） 山田 亜実（経営学部4年） 「コロナ前後の学修活動を振り返る：学生の視点から」 【質疑応答（4大学分）】
15:10～15:20 (10分)	休 憩
15:20～15:55 (35分)	【第2部】情報及び意見交換会 参加者によるグループワーク（Zoomのブレイクアウトセッション 機能を活用：4～5名で1グループ）と全体共有
冒頭説明・グループワーク 15分 全体共有 20分	
15:55～16:00 (5分)	閉会あいさつ(神奈川大学)

横浜市立大学 FD・SD に関する基本方針

令和5年2月1日制定

横浜市立大学（以下、「本学」という）は、国際都市横浜と共に歩み、教育・研究・医療分野をリードする役割を果たすことをその使命とし、社会の発展に寄与する市民の誇りとなる大学を目指している。本学の基本方針にも掲げる「横浜から世界へ羽ばたく」人材育成を推進し、学修者本位の教育を実現するために、ファカルティ・ディベロップメント（以下、「FD」という。）・スタッフ・ディベロップメント（以下、「SD」という。）活動を実施する。本学におけるFD・SD活動は、本学教職員および指導補助者（以下、「教職員等」という。）に必要とされる知識・技能の習得や、能力・技能の向上、授業内容・方法の改善のための研修等を行い、組織的かつ体系的に教育の質の改善・向上を図るものとする。その活動の実施のための基本方針を次の通り定める。

1 実施方針

- (1) FD活動は、教職員等が教育方法・学修方法・カリキュラム全体を理解し、各学部及び研究科（以下、「各部局」という。）が定めた学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）で示した人材の育成に向けて、教職員等の能力・資質の向上を図り、体系的に実施する。
- (2) SD活動は、本学の教育研究活動等の適切かつ効率的な運営のため、教職員としての職務に必要な能力・資質の向上を図り、体系的に実施する。
- (3) 上記のほか、FD・SDの企画・実施にあたっては、各部局の要望、教学IR活動での分析結果から抽出された課題の改善、本学を取り巻く社会的な状況などを考慮しつつ実施するものとする。
- (4) アンケート等を用いてその内容・方法・効果等を自己点検・評価し、改善を図るものとする。
- (5) FD・SDの活動状況等については、適宜ウェブサイト等を通じて学内外へ広く発信する。

2 実施体制

- (1) 全学組織の高等教育推進センターFD・SD部門は国際総合科学群及び医学群のFD・SD活動状況等を取りまとめ、全学的にFD・SD活動を推進する。合わせて全学規模で行うFD・SDの企画・実施・検証を行う。
- (2) 国際総合科学群及び医学群の各FD・SDにかかる委員会において、FD・SDの企画・実施・検証を行う。

3 対象者

- (1) FD・SDの対象は、本学の教育にかかる教職員および指導補助者とする。
- (2) 附属病院や関連施設に所属する教職員に対しても必要に応じて、その職員の職務に必要な能力・資質の向上を図るために、FD・SD活動を実施する。

FD関連講演会等実績（令和4年度実績）

		令和4年度		
		①国際総合科学群FD・SD研修会 (国際教養学部主催)	②国際総合科学群FD・SD研修会	③第1回教養ゼミFD研修会
国際総合科学群	日 時	令和4年7月21日	令和4年7月28日	令和4年8月2日
	会 場	オンライン開催	オンライン開催	オンライン開催
	参加人数	67名	67名	72名
	講演テーマ	教育の「内部質保証」に向けて	令和3年度学部長・共通教養長賞受賞者講演	本年度の教養ゼミにおける研究倫理教育とその振り返り
	講演者	群馬大学学術研究院 二宮 祐 准教授	テリル ブレネン シニアインストラクター、 鈴木 凌 助教、大西 暁生 教授	本多 尚 共通教養長、平井 美佳 副共通教養長、 土屋 隆裕 教授
		④高等教育推進センター 高大連携・初年次教育部門	⑤国際総合科学群FD・SD研修会	⑥第1 回バリアフリー支援室FD・SD 研修会
	日 時	令和4年11月4日	令和4年11月16日	令和4年11月25日
	会 場	オンライン開催	オンライン開催	オンライン開催
	参加人数	59名	34名	47名
	講演テーマ	高等学校新学習指導要領の内容理解と大学教育への接続	新型コロナ禍におけるボランティア支援室と 学生スタッフVolunchの取り組み	合理的配慮と障害学生支援
	講演者	横浜市教育委員会 学校教育企画部 高校教育課 主任指導主事 小島 孝道 様	学生支援室スタッフ ボランティア支援室学生スタッフ	バリアフリー支援室 飯塚 明雄 コーディネーター
		⑦第8回ヨコハマFDフォーラム	⑧国際総合科学群FD・SD研修会	⑨高等教育推進センター教育開発部門FD・SD研修会
	日 時	令和4年12月10日	令和4年12月12日	令和4年12月16日
	会 場	オンライン開催	オンライン開催	オンライン開催
	参加人数	91名	22名	37名
	講演テーマ	新型コロナ禍の経験から、 あらためて学生支援について考える —コロナ禍の学生生活と学修への影響—	横浜市立大学におけるSDGsの取り組み① —学生団体TEHsの活動—	インストラクショナルデザイン（ID） に基づいた大学教育のデザイン —授業方法・学習目標・評価方法についての提案—
	講演者	横浜市立大学・神奈川大学・関東学院大学・横浜国立大 学 担当教職員及び学生	学生団体TEHs	熊本大学 鈴木克明教授

		⑩国際総合科学群FD・SD研修会	⑪国際総合科学群FD・SD研修会（DS学部主催）	⑫情報関連科目FD・SD研修会
	日 時	令和5年1月26日	令和5年2月16日	令和5年2月20日
	会 場	オンライン開催	オンライン開催	オンライン開催
	参加人数	29名	37名	40名
	講演テーマ	サバティカル終了後報告	八景キャンパス等研究倫理委員会の 手続きや審査のフローについて	2023年度情報関連科目リニューアルに伴う 講義内容と他の講義との関連性
	講演者	長畑 周史 准教授、吉田 栄一 教授	八景キャンパス等研究倫理委員会 事務局 (横浜市立大学 研究推進部 研究・産学連携推進課)	本多 尚 共通教養長、小野 陽子 情報教育委員会委員長
		⑬国際総合科学群FD・SD研修会（理学部主催）	⑭国際総合科学群FD・SD研修会	⑮国際総合科学群FD・SD研修会（国際商学部主催）
	日 時	令和5年2月21日	令和5年2月22日	令和5年3月8日
	会 場	オンライン開催	オンライン開催	オンライン開催
	参加人数	46名	38名	42名
	講演テーマ	研究思考（リサーチマインド）を育む研究室（ラボ） のマネジメントとは？ ー風通しのよいラボ運営に向けてー	安全保障輸出管理について ー留学生受入の際の留意点を中心にー	産学連携の推進
		木原生物学研究所 井藤 純 特任助教 本多 尚 共通教養長	横浜国立大学 山之内 雄二 輸出管理マネージャー (横浜国立大学研究推進機構研究支援室)	柴田 典子 准教授
		⑯第2回教養ゼミFD研修会	⑰国際総合科学群FD・SD研修会	
	日 時	令和5年3月14日	令和5年3月17日	
	会 場	オンライン開催	オンライン開催	
	参加人数	26名	25名	
	講演テーマ	来年度からの新しい教養ゼミに向けて	横浜市大におけるSDGsの取組状況(2) ー法人の取組状況と教育面での取組ー	
		本多 尚 共通教養長、土屋 隆裕 教授、平井 美佳 副共 通教養長、学術情報課担当者	企画財務課 徳永 洋一郎 係長 高等教育推進センター 菊池 芳明 学務准教授	
		①医学会FD	②医学会FD	③医学会/医学教育センターFD
	日 時	令和4年6月8日	令和4年7月19日	令和4年8月8日
医学科・看護学科	会 場	オンライン配信	対面開催/録画配信	対面開催/録画配信
	参加人数	36名	(対面開催) 3名/ (録画配信) 11名	(対面開催) 11名/ (録画配信) 12名
	テーマ	テンプル大学Cardiovascular Centerにおける研究と交 流	Clinical Clerkship and Medical Education at UCSD	アメリカにおける医学教育の最先端 ～医学研究者の育成～
	講演者	テンプル大学医学部 Cardiovascular Research Center 教授 江口 暁	カルフォルニア大学サンディエゴ校 (UCSD) 整形外科科学部門 臨床教授 Kenneth Vitale	テキサス大学オースティン校 名誉教授 Dee U Silverthorn
		④医学科・看護学科合同FD	⑤医学教育推進部門FD	⑥看護学科・看護学専攻FD
	日 時	令和4年8月8日	令和5年1月～令和5年2月	令和5年2月16日
	会 場	オンライン配信/録画配信	録画配信	オンライン配信
	参加人数	(オンライン配信) 34名/ (録画配信) 13名	60名	30名
	講演テーマ	多職種連携教育	①(2022年12月版) 医学科カリキュラムについて ②公的化を踏まえた共用試験の方向性について ③合理的配慮と障害学生支援	学内の研究者の先生から研究を学ぶ 「高齢者のケアの分断を調査 Yokohama Original Medical Data Baseを用いた 横浜市 75 歳以上住民の全数調査」
	講演者	千葉大学大学院看護学研究院附属専門職連携教育研究センター センター長・教授 酒井 郁子	①医学教育学 稲森正彦 ②共用試験実施評価機構 副理事長 齋藤宣彦 ③バリアフリー支援室 コーディネーター 飯塚明雄	データサイエンス研究科 ヘルスデータサイエンス専攻 金子 惇

横浜市立大学 教学IRに関する基本方針

令和5年2月1日制定

横浜市立大学（以下、「本学」という）は、国際都市横浜と共に歩み、教育・研究・医療分野をリードする役割を果たすことをその使命とし、社会の発展に寄与する市民の誇りとなる大学を目指している。本学の基本方針にも掲げる「横浜から世界へ羽ばたく」人材育成を推進し、学修者本位の教育を実現するために、教学IR（Institutional Research）活動を実施する。本学における教学IR活動は、入学者選抜、学生教育、学生支援及びキャリア支援等に関する諸データの収集、分析ならびに情報提供等を行い、組織的かつ体系的に教育の質の改善・向上を図るものとする。その活動の実施のための基本方針を次の通り定める。

1 実施方針

- （１）学内外のさまざまなデータの収集、分析ならびに情報提供等を行い、教育における戦略的な意思決定につなげる。
- （２）教学IR活動での分析結果から抽出された課題の解決のため、ファカルティ・ディベロップメント（FD）やスタッフ・ディベロップメント（SD）活動の実施等を通じて、教育の質改善につなげる。
- （３）教学IR活動での分析結果から抽出された強みを活かし、教育の質向上につなげる。
- （４）教学IR活動状況等については、ウェブサイト等を通じて学内外へ広く発信する。

2 実施体制

- （１）全学組織の高等教育推進センター教学IR部門は国際総合科学群及び医学群の教学IR活動状況等を取りまとめ、全学的な教学IR活動を推進する。
- （２）国際総合科学群及び医学群の各教学IR検討ワーキングは、各種データの分析・検討を行う。

3 データ取扱における留意事項

- （１）収集したデータは、個人情報保護に関する法律などの関係法令及び研究データ管理、個人情報保護、情報セキュリティなどの本学の関連規程に従い、適切に管理するものとする。
- （２）収集したデータは、その分析や可視化などにより教育・学習を支援するために用いることとし、これ以外の目的には利用しない。
- （３）データ収集・分析は、教学IR活動の目的に照らして体系的かつ効率的に実施する。
- （４）高等教育推進センター教学IR部門、国際総合科学群及び医学群の各教学IR検討ワーキングは、組織横断的なデータが必要な場合、データを所有する組織の協力のもと、データを収集する。
- （５）学生又は学内の他組織等から個人情報を得る際は、利用目的を定め、かつ明示し、その利用目的の達成に必要な範囲で、適切な方法により収集する。

令和4年度 国際総合科学群
教学 IR 実施報告書

目 次

第 1 章 令和 4 年度 教学 IR 取組概要

- 1. 令和 4 年度 教学 IR 検討ワーキング取組事項…………… 2
- 2. 令和 4 年度 教学 IR 検討ワーキング分析結果概要…………… 3

第 2 章 令和 4 年度 教学 IR 分析データ集

- 1. 入学から卒業までのアンケートをつないだ経時的な分析
 - (1) 令和 4 年度分析結果について…………… 6
 - (2) 各アンケートをつないだ分析…………… 7
- 2. 教学 IR 検討 WG における認証評価に向けた対応
 - (1) 令和 4 年度前期授業評価アンケートにおける
授業外学修時間の推移について …… 13
 - (2) 令和 4 年度前期科目における成績評価について…………… 35
 - (3) YCU 指標学修成果の AI 試行分析
(LMS ポートフォリオ機能の活用) …… 49
- 3. ALCS 学修行動比較調査の実施及び分析
 - (1) 2021 年度 ALCS 学修行動比較調査の
実施結果について…………… 62
 - (2) 全体結果梗概…………… 68
- 4. 全国学生調査
 - (1) 令和 3 年度全国学生調査実施結果について…………… 70
- 5. 教学 IR で挙げられた課題について…………… 107

令和4年度 国際総合科学群教学 IR 検討ワーキング取組事項

1 国際総合科学群教学 IR 検討ワーキング開催実績

- 第1回 令和4年6月17日
- 第2回 令和4年9月9日
- 第3回 令和4年11月28日
- 第4回 令和5年2月13日
- 第5回 令和5年3月20日

2 国際総合科学群教学 IR 検討ワーキングメンバー（敬称略）

ワーキング長	土屋 隆裕
ワーキング長補佐	中條 祐介
国際教養学部	鈴木 伸治、柿崎 一郎、山田 剛史
国際商学部	大澤 正俊、白石 小百合、吉永 崇
理学部	横山 崇、大関 泰裕、北 幸海
データサイエンス学部	山崎 眞見、土屋 隆裕
事務局	小林学務・教務部長、佐藤学術企画担当係長、植松学長室担当係長、 田中学術企画担当、佐々木学術企画担当

令和4年度 国際総合科学群教学IR検討ワーキング分析結果概要

1. 入学から卒業後までのアンケートをつないだ経時的な分析

<取組概要>

平成30年度から引き続き、「新入生アンケート（入学時実施）」、「カリキュラム評価アンケート（卒業時実施）」、「卒業生アンケート（卒後3年に実施）」の3つのアンケートを設定し、本学が特に重視する教育理念に関する共通の設問への回答結果について分析した。

分析結果については、各種会議にて報告を行うとともに、結果を各学部教授会で報告・共有し、各学部におけるカリキュラム改善検討を支援した。

また、各アンケートの回答率向上のために、回答者への結果の共有・周知を進めることが提案され、来年度以降対応を進める。

（分析内容）

各アンケートをつないだ経時分析

<分析結果>

分析結果について、入学時と卒業時の回答結果から、本学が掲げる教育理念について、入学時には期待値が高いものの、卒業時、卒後3年と徐々に下がっていく傾向が見られた。

なお、令和3年度のカリキュラム評価アンケートのみ、「グローバルな視野」の数値が高くなっており、該当学年の留学状況等、要因を確認した。

2. 教学IR検討WGにおける認証評価に向けた対応

<取組概要>

令和3年度の認証評価受審を想定し設定した3つの観点について、認証評価受審後も普遍的な課題として検討を進めた。教学IR検討WGにて解析した結果について各学部会議体にて報告を行うとともに、結果を各学部教授会で報告・共有し、各学部において各学部独自の課題が確認された。

（分析内容）

- (1) 令和3年度後期・令和4年度前期授業評価アンケートにおける授業外学修時間の推移
- (2) 令和3年度後期・令和4年度前期科目における成績評価
- (3) 学修成果の可視化検討

<分析結果>

- (1) 令和4年度授業評価アンケートの結果を過年度の結果と比較した結果、オンライン授業を開始した令和2年度には授業外学修時間が増加していたが、令和3年度、令和4年度の結果は横ばいであった。令和5年度は原則対面授業となる

ため、引き続き、授業外学修時間の分析を進める。

- (2) 令和3年度後期、令和4年度前期の成績評価結果を分析し、成績評価が適切に行われているか確認を行った。

各科目の成績登録者数によって平均値に差が見られるため、今後は成績登録者数を考慮し分析を進める。また、各学期の集計結果だけでなく、経年変化を集計し、俯瞰的に変化を確認できるようにする。

- (3) 令和4年度より導入した YCU-Board に実装したポートフォリオ機能の活用推進を進めた。

- ・ YCU 指標等の学修成果の AI 試行分析については、(1)留学経験と学修成果項目の相関分析、(2)入試区分と学修成果項目の相関分析を行った。現時点で大きな違いは見られなかったため、YCU-Board のデータを蓄積し、経年で集計を行う。
- ・ YCU-Board 目標設定機能の活用については、学生、教員への内容や意義の説明、周知を進め、目標・振り返りの登録が浸透するよう努めた。
- ・ YCU-Board ポートフォリオ機能の活用については、入力項目を確認し、所管課に入力を依頼した。

3. ALCS 学修行動比較調査の実施及び分析

<取組概要>

学生データの効率的な収集及び他大学との比較のため、令和元年度より教学比較 IR コモンズに入り会いし、令和4年度も1年次、3年次の学生に対しアンケート調査を実施した。令和4年度は令和3年度の調査結果について分析を実施し、各学部へ内容を報告・共有した。

(分析内容)

令和3年度横浜市立大学 ALCS 学修行動比較調査

<分析結果>

「よく学ぶ学生に刺激されて学修が促されたこと」に関する設問について「よくあった・かなりあった」とする回答、「短期・長期海外留学を希望する」という回答が他大学と比較して10%程度多いという結果が見られた。一方で、「図書館の蔵書内容」「設備の使用感」については、他大学よりも満足度が低い傾向が見られた。

4. 全国学生調査の実施及び分析

<取組概要>

全国学生調査は、文部科学省によって、令和元年度から令和4年度までの計3回、試行で実施されており、本学も協力している。令和4年度は令和3年度調査結果の分析及び令和4年度調査の周知を実施し、集計結果を各種会議体に報告・共有した。

(分析内容)

令和3年度全国学生調査

<分析結果>

- ・論理的な思考や、研究を進める上で必要とされるスキルを問う項目で全国平均を上回る傾向があった。（「項目 29 文献・資料を収集・分析する力」、「項目 30：論理的に文章を書く力」、「項目 31：人に分かりやすく話す力」）
- ・グローバル人材及びデータサイエンス人材の育成に関する項目では、全国平均と同等または上回る水準であった。特に「項目 32：外国語を使う力」では、全国平均 2.1 に対し、本学平均は 2.4 と良好な結果であった。データサイエンスに関わる「項目 33：統計などデータサイエンスの知識・技能」も、令和3年度は全国平均と全学平均は同水準であった。
- ・全国平均を下回った項目は「項目 7：予習・復習などの自主学習について授業やシラバスで指示があった」、「項目 10：課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却された」であった。

5. 分析結果の報告

解析結果について各種会議にて報告・共有し、各学部におけるカリキュラム改善を支援した。

<報告・共有した会議体>

- ・学長諮問会議（年 1 回）
- ・教学 IR 検討ワーキング（年 5 回）、高等教育推進センター教学 IR 部門会議（年 4 回）
- ・各学部教授会（年 3 回）
- ・ICT 推進委員会（年 2 回）

入学から卒業後までのアンケートをつないだ経時的な分析

令和4年度分析結果について

1 趣旨

平成30年度より、国際総合科学群教学IR検討ワーキングでは、国際総合科学群で特に重視する教育理念に関して、入学時、卒業時、卒後3年の学生を対象に実施するアンケートに共通設問を設定し、その回答結果を分析し、経時的な変化を確認しています。今年度の解析を実施しましたので報告いたします。

2 分析対象データ

- ・ 新入生アンケート
実施期間：令和4年4月
回答数：737名
- ・ カリキュラム評価アンケート
実施期間：令和3年12月～令和4年2月
回答数：729名
- ・ 卒業生アンケート
実施期間：令和3年8月～令和3年11月
回答数：188名

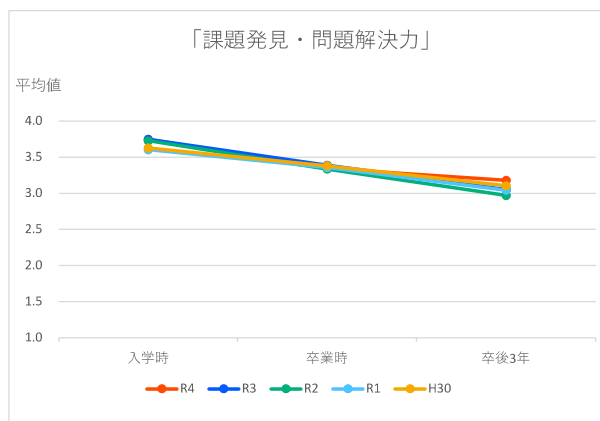
3 分析結果

次ページ参照

各アンケートをつないだ分析（国際総合科学群）

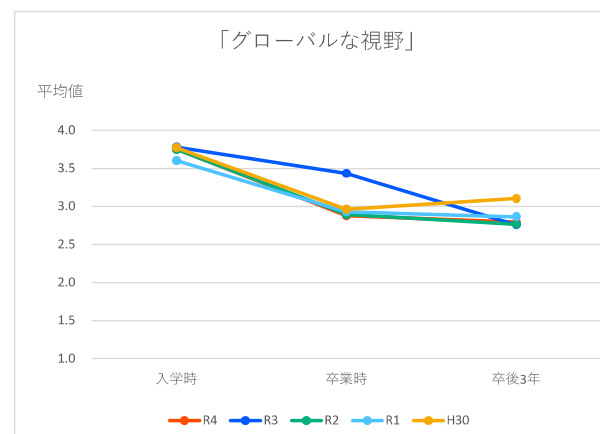
「課題発見・問題解決力」

	新入生		カリキュラム		卒業生	
	回答	割合 (%)	回答	割合 (%)	回答	割合 (%)
4	563	76.391	302	41.427	68	36.170
3	165	22.388	385	52.812	91	48.404
2	7	0.950	31	4.252	23	12.234
1	0	0.000	11	1.509	6	3.191
回答なし	2	0.271	0	0.000	0	0.000
総計	737		729		188	
平均	3.742		3.342		3.176	
R03年度平均	3.745		3.387		3.050	
R02年度平均	3.725		3.335		2.967	
R01年度平均	3.602		3.355		3.041	
H30年度平均	3.627		3.379		3.103	



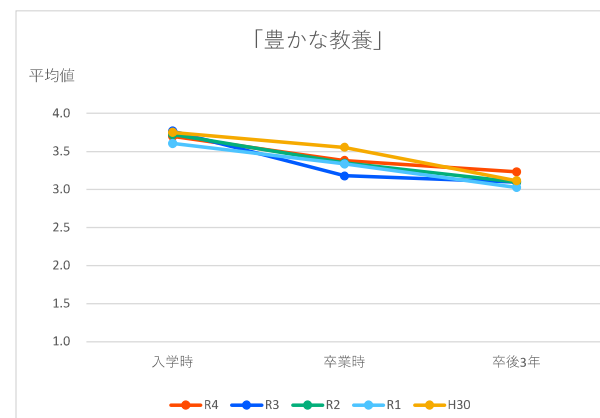
「グローバルな視野」

	新入生		カリキュラム		卒業生	
	回答	割合 (%)	回答	割合 (%)	回答	割合 (%)
4	587	79.647	194	26.612	48	25.532
3	130	17.639	298	40.878	70	37.234
2	17	2.307	190	26.063	53	28.191
1	0	0.000	47	6.447	17	9.043
回答なし	3	0.407	0	0.000	0	0.000
総計	737		729		188	
平均	3.751		2.877		2.793	
R03年度平均	3.780		3.436		2.76	
R02年度平均	3.75		2.896		2.767	
R01年度平均	3.602		2.93		2.865	
H30年度平均	3.774		2.963		3.103	



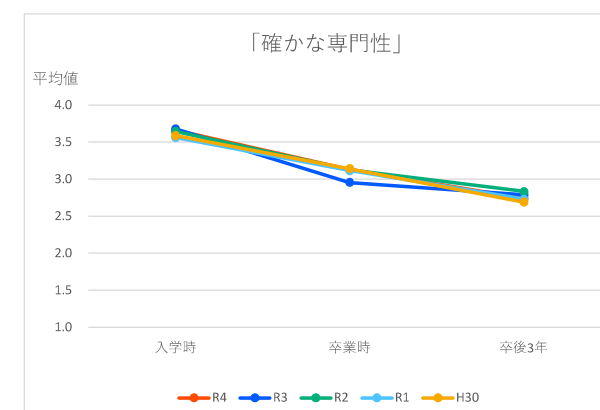
「豊かな教養」

	新入生		カリキュラム		卒業生	
	回答	割合 (%)	回答	割合 (%)	回答	割合 (%)
4	541	73.406	332	45.542	70	37.234
3	181	24.559	356	48.834	92	48.936
2	13	1.764	29	3.978	26	13.830
1	1	0.136	12	1.646	0	0.000
回答なし	1	0.136	0	0.000	0	0.000
総計	737		729		188	
平均	3.700		3.383		3.234	
R03年度平均	3.770		3.180		3.101	
R02年度平均	3.725		3.349		3.100	
R01年度平均	3.608		3.338		3.027	
H30年度平均	3.753		3.556		3.118	



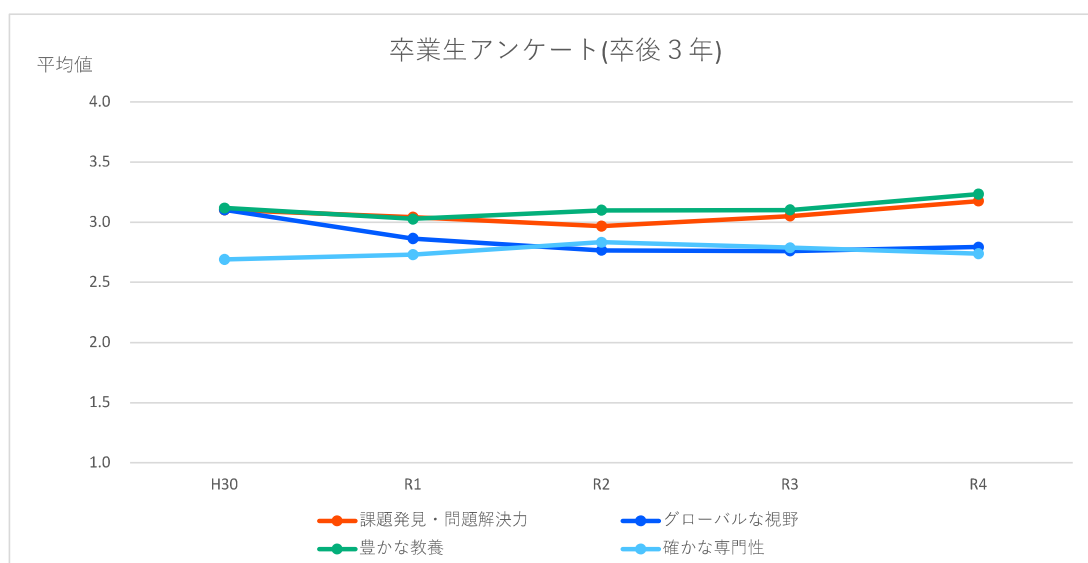
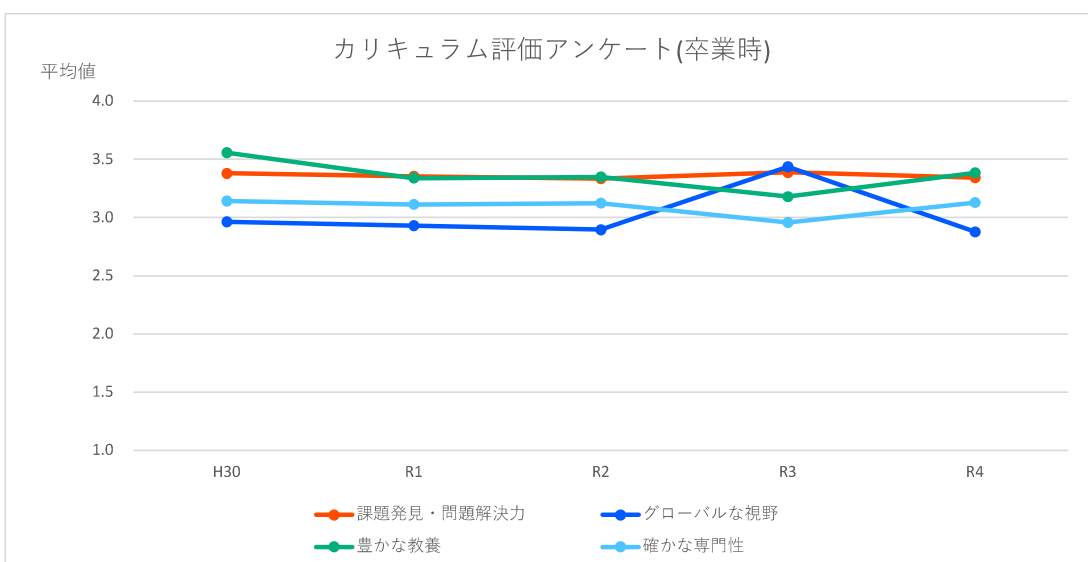
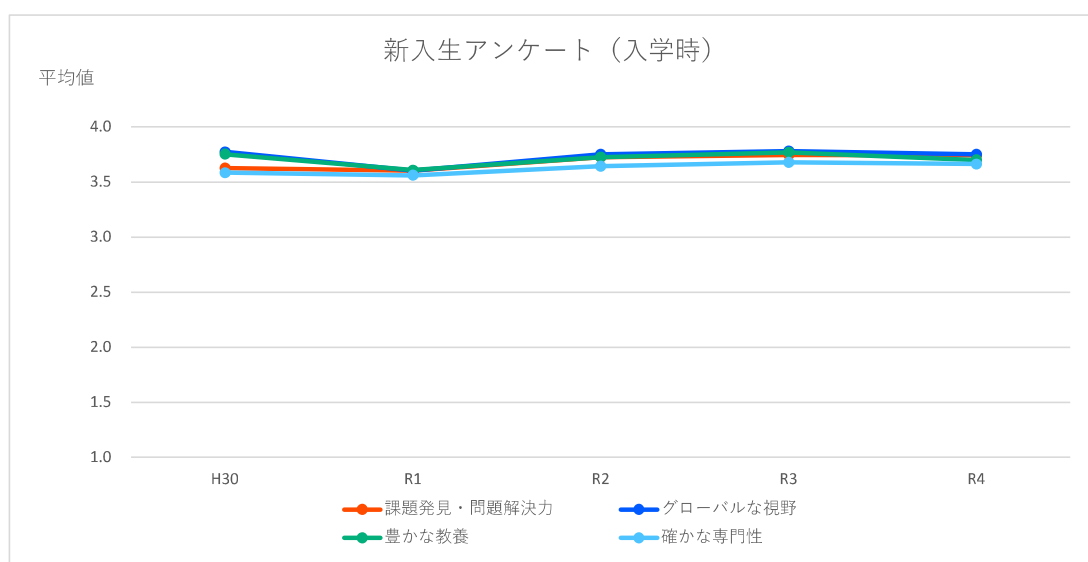
「確かな専門性」

	新入生		カリキュラム		卒業生	
	回答	割合 (%)	回答	割合 (%)	回答	割合 (%)
4	512	69.471	230	31.550	43	22.872
3	209	28.358	383	52.538	71	37.766
2	15	2.035	95	13.032	56	29.787
1	1	0.136	21	2.881	18	9.574
回答なし	0	0.000	0	0.000	0	0.000
総計	737		729		188	
平均	3.663		3.128		2.739	
R03年度平均	3.677		2.957		2.788	
R02年度平均	3.643		3.123		2.833	
R01年度平均	3.562		3.114		2.730	
H30年度平均	3.586		3.142		2.691	



- ・ 入学時、卒業時、卒後3年の各項目の平均値には、年度ごとの大きな差は見られない。

各アンケートをつないだ分析（国際総合科学群）

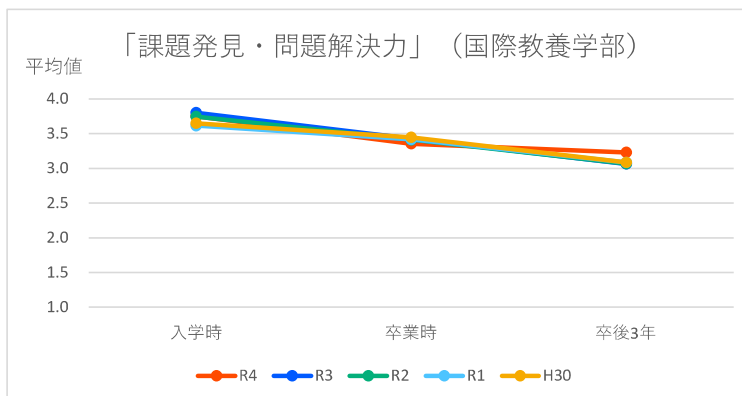


- ・入学時、卒業時、卒後3年の各項目の平均値には、年度ごとの大きな差は見られない。
- ・カリキュラム評価アンケートでは令和3年度のみ、「グローバルな視野」の数値が上がっているが、令和4年度は令和2年度以前の数値に近い結果となっている。

各アンケートをつないだ分析 (『課題発見・問題解決力』 学部別解析結果)

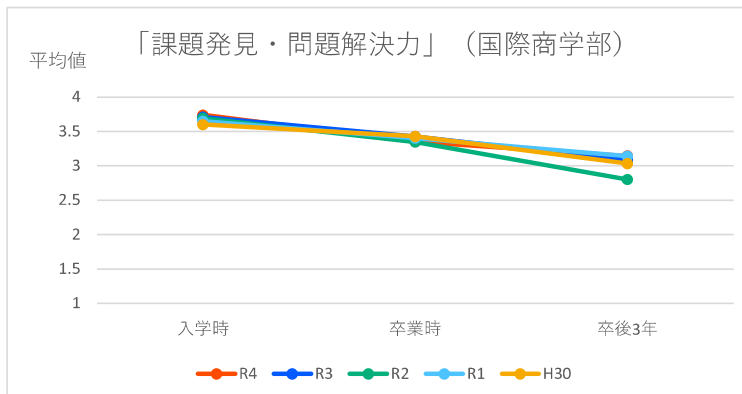
国際教養学部

	新入生	カリキュラム	卒業生
回答数	279	274	87
4	219	117	33
3	53	140	43
2	6	14	9
1	0	3	2
回答なし	1	0	0
平均	3.753	3.354	3.230
R03年度平均	3.803	3.427	3.064
R02年度平均	3.747	3.413	3.071
R01年度平均	3.618	3.414	3.086
H30年度平均	3.649	3.450	3.088



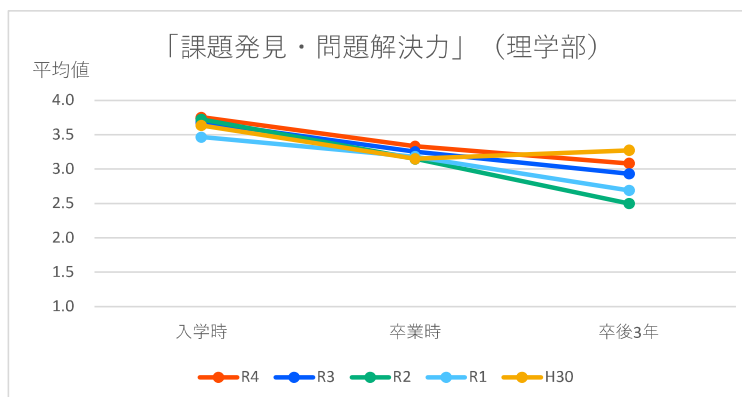
国際商学部

	新入生	カリキュラム	卒業生
回答数	277	268	77
4	208	115	27
3	68	139	36
2	0	8	12
1	0	6	2
回答なし	1	0	0
平均	3.740	3.354	3.143
R03年度平均	3.708	3.423	3.083
R02年度平均	3.693	3.349	2.800
R01年度平均	3.649	3.404	3.141
H30年度平均	3.601	3.429	3.032



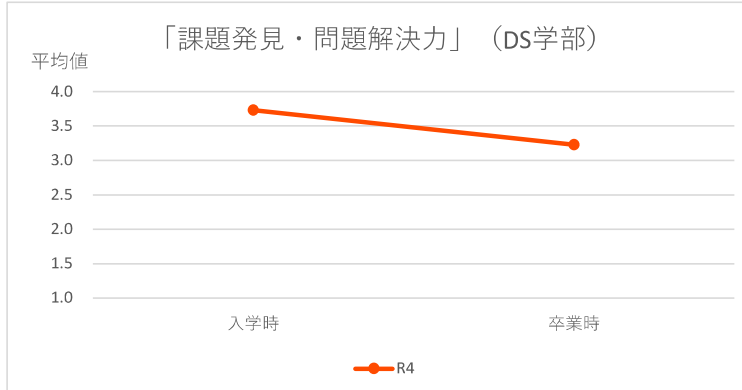
理学部

	新入生	カリキュラム	卒業生
回答数	121	139	24
4	92	53	8
3	28	80	12
2	1	5	2
1	0	1	2
回答なし	0	0	0
平均	3.752	3.331	3.083
R03年度平均	3.681	3.250	2.931
R02年度平均	3.724	3.150	2.500
R01年度平均	3.463	3.178	2.692
H30年度平均	3.634	3.150	3.273



データサイエンス学部

	新入生	カリキュラム	卒業生
回答数	60	48	回答
4	44	17	
3	16	26	
2	0	4	
1	0	1	
回答なし	0	0	
平均	3.733	3.229	
R03年度平均	3.762	-	
R02年度平均	3.762	-	
R01年度平均	3.621	-	
H30年度平均		-	



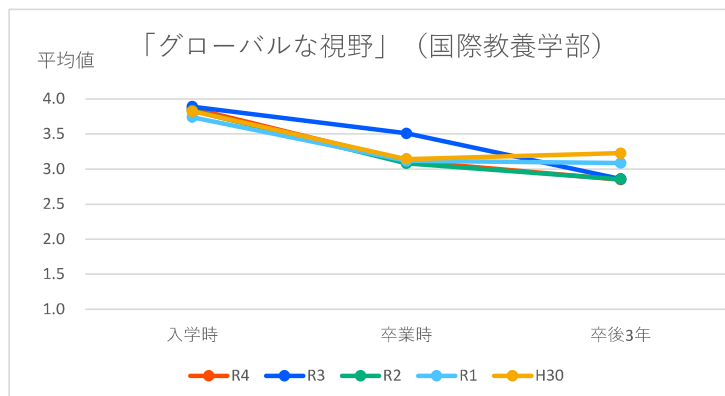
※H30年度開設のため、卒業時・卒後3年対象のアンケートは未実施あり

- ・国際教養学部・国際商学部の入学時、卒業時、卒後3年の各項目の平均値には、年度ごとの大きな差は見られない。
- ・理学部は卒後3年の数値が各年度でバラつきがあるが、回答数が少ないため、数値の変動が大きいことも考えられる。

各アンケートをつないだ分析 (『グローバルな視野』 学部別解析結果)

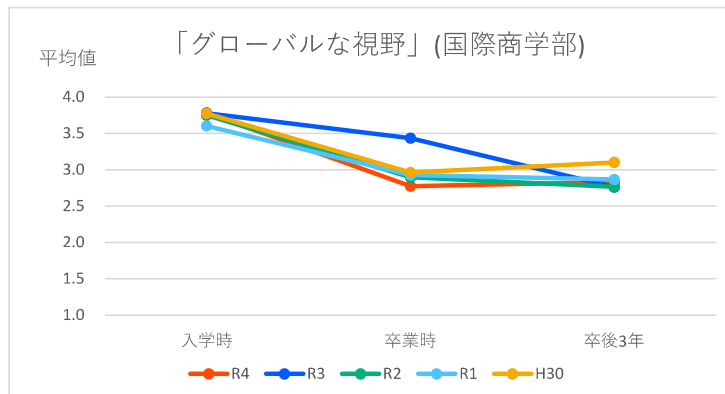
国際教養学部

	新入生	カリキュラム	卒業生
回答数	279	274	87
4	248	102	24
3	27	112	34
2	3	49	21
1	0	11	8
回答なし	1	0	0
平均	3.867	3.113	2.851
R03年度平均	3.891	3.512	2.859
R02年度平均	3.835	3.083	2.857
R01年度平均	3.744	3.117	3.086
H30年度平均	3.826	3.146	3.224



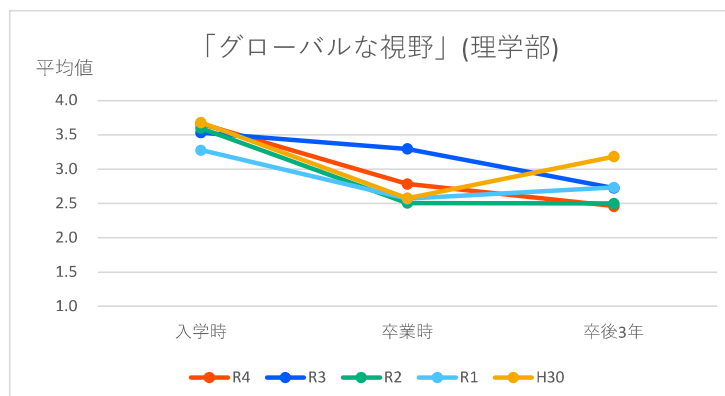
国際商学部

	新入生	カリキュラム	卒業生
回答数	277	268	77
4	224	53	20
3	48	119	27
2	4	78	27
1	0	18	3
回答なし	1	0	0
平均	3.783	2.772	2.831
R03年度平均	3.840	3.439	2.667
R02年度平均	3.804	2.906	2.600
R01年度平均	3.768	2.951	2.719
H30年度平均	3.766	2.985	2.968



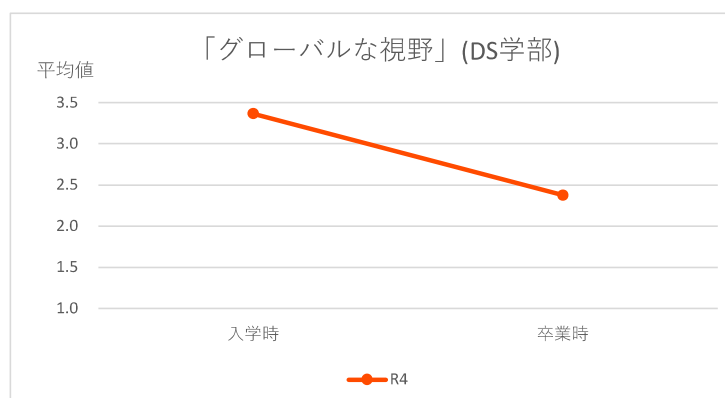
理学部

	新入生	カリキュラム	卒業生
回答数	121	139	24
4	84	31	4
3	33	55	9
2	4	45	5
1	0	8	6
回答なし	0	0	0
平均	3.661	2.784	2.458
R03年度平均	3.529	3.294	2.724
R02年度平均	3.598	2.504	2.500
R01年度平均	3.276	2.568	2.731
H30年度平均	3.679	2.575	3.182



データサイエンス学部

	新入生	カリキュラム	卒業生
回答数	60	48	回答
4	31	8	
3	22	12	
2	6	18	
1	0	10	
回答なし	1	0	
平均	3.367	2.375	
R03年度平均	3.500	-	
R02年度平均	3.444	-	
R01年度平均	3.483	-	
H30年度平均		-	



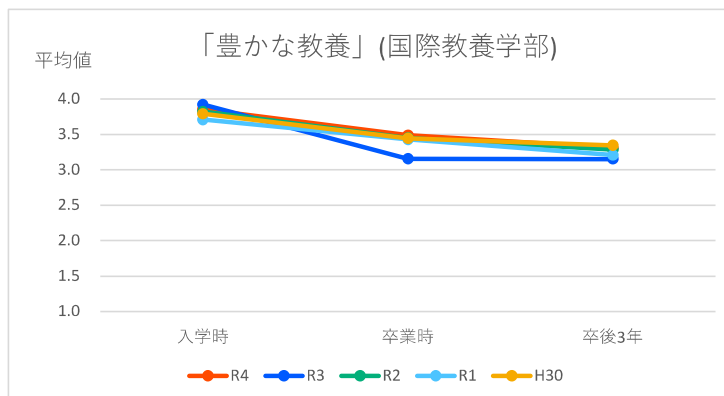
※H30年度開設のため、卒業時・卒後3年対象のアンケートは未実施あり

- ・3学部とも令和3年度カリキュラム評価アンケートでは令和3年度のみ、「グローバルな視野」の数値が上がっているが、令和4年度は令和2年度以前の数値に近い結果となっている。

各アンケートをつないだ分析 (『豊かな教養』 学部別解析結果)

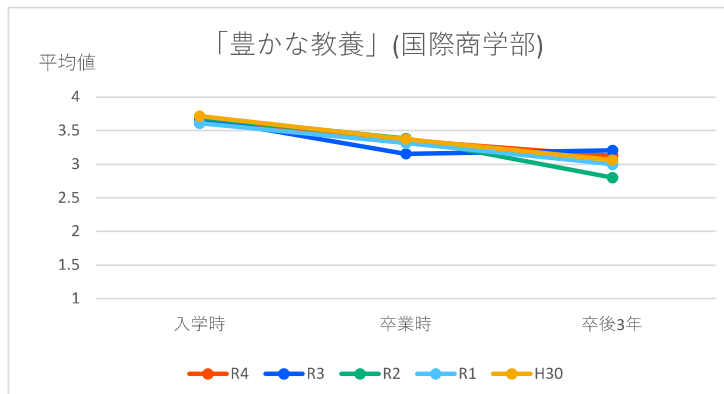
国際教養学部

	新入生	カリキュラム	卒業生
回答数	279	274	87
4	241	143	35
3	36	122	44
2	2	9	8
1	0	0	0
回答なし	0	0	0
平均	3.857	3.489	3.310
R03年度平均	3.923	3.159	3.154
R02年度平均	3.821	3.449	3.286
R01年度平均	3.71	3.430	3.207
H30年度平均	3.793	3.447	3.348



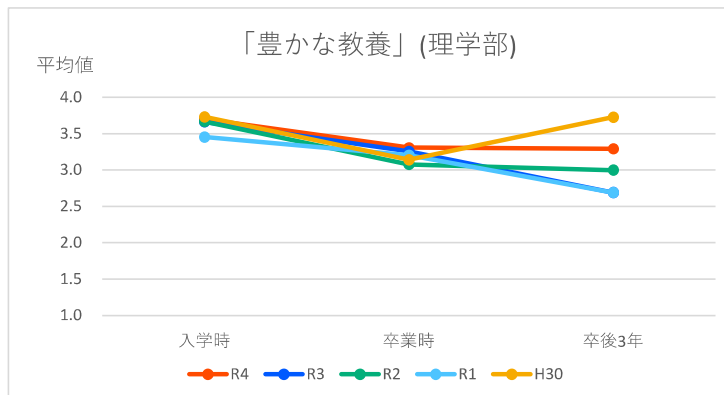
国際商学部

	新入生	カリキュラム	卒業生
回答数	277	268	77
4	179	116	24
3	92	138	39
2	5	7	14
1	1	7	0
回答なし	0	0	0
平均	3.621	3.354	3.13
R03年度平均	3.685	3.158	3.208
R02年度平均	3.693	3.384	2.800
R01年度平均	3.613	3.318	3.000
H30年度平均	3.718	3.377	3.065



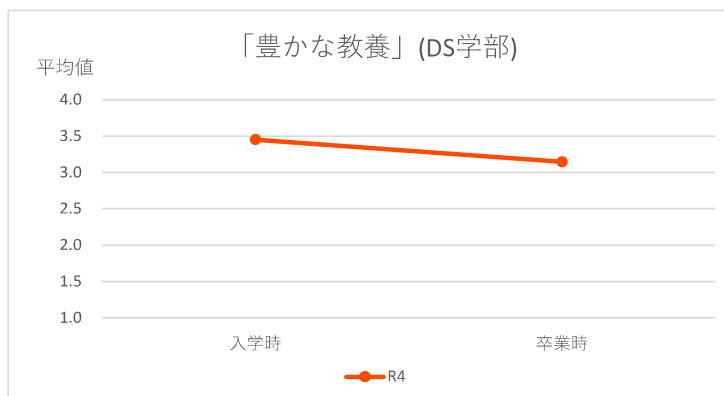
理学部

	新入生	カリキュラム	卒業生
回答数	121	139	24
4	88	59	11
3	30	68	9
2	3	8	4
1	0	4	0
回答なし	0	0	0
平均	3.702	3.309	3.292
R03年度平均	3.664	3.257	2.690
R02年度平均	3.669	3.079	3.000
R01年度平均	3.455	3.205	2.692
H30年度平均	3.731	3.142	3.727



データサイエンス学部

	新入生	カリキュラム	卒業生
回答数	60	48	
4	33	14	
3	23	28	
2	3	5	
1	0	1	
回答なし	1	0	
平均	3.450	3.146	
R03年度平均	3.540	-	
R02年度平均	3.540	-	
R01年度平均	3.431	-	
H30年度平均		-	



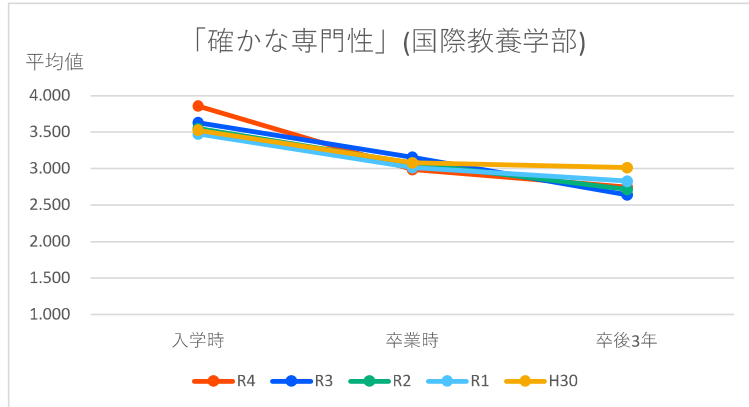
※H30年度開設のため、卒業時・卒後3年対象のアンケートは未実施あり

- ・国際教養学部・国際商学部の入学時、卒業時、卒後3年の各項目の平均値には、年度ごとの大きな差は見られない。
- ・理学部は卒後3年の数値が各年度でバラつきがあるが、回答数が少ないため、数値の変動が大きいことも考えられる。

各アンケートをつないだ分析 (『確かな専門性』 学部別解析結果)

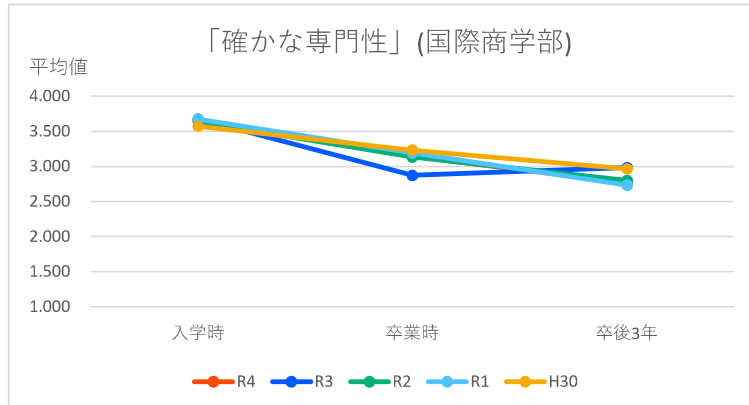
国際教養学部

	新入生	カリキュラム	卒業生
回答数	279	274	87
4	171	68	18
3	101	144	36
2	6	53	26
1	1	9	7
回答なし	0	0	0
平均	3.857	2.989	2.747
R03年度平均	3.630	3.154	2.641
R02年度平均	3.551	3.071	2.714
R01年度平均	3.474	3.016	2.828
H30年度平均	3.527	3.080	3.015



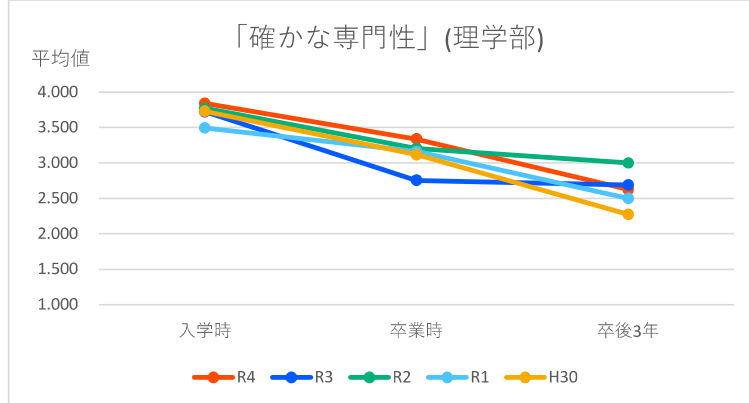
国際商学部

	新入生	カリキュラム	卒業生
回答数	277	268	77
4	190	83	19
3	79	149	28
2	8	28	23
1	0	8	7
回答なし	0	0	0
平均	3.657	3.146	2.766
R03年度平均	3.677	2.874	2.986
R02年度平均	3.637	3.133	2.800
R01年度平均	3.675	3.193	2.734
H30年度平均	3.575	3.234	2.968



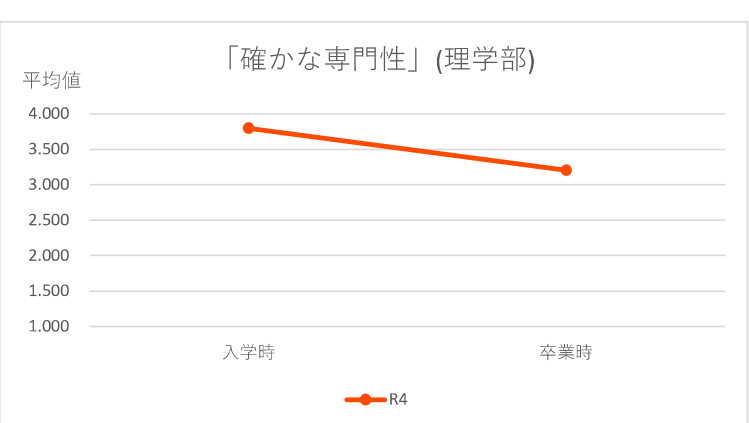
理学部

	新入生	カリキュラム	卒業生
回答数	121	139	24
4	103	62	6
3	17	65	7
2	1	9	7
1	0	3	4
回答なし	0	0	0
平均	3.843	3.338	2.625
R03年度平均	3.723	2.757	2.690
R02年度平均	3.772	3.205	3.000
R01年度平均	3.493	3.164	2.500
H30年度平均	3.731	3.118	2.273



データサイエンス学部

	新入生	カリキュラム	卒業生
回答数	60	48	
4	48	17	
3	12	25	
2	0	5	
1	0	1	
回答なし	0	0	
平均	3.800	3.208	
R03年度平均	3.806	-	
R02年度平均	3.825	-	
R01年度平均	3.638	-	
H30年度平均		-	



※H30年度開設のため、卒業時・卒後3年対象のアンケートは未実施あり

- 国際商学部・理学部において、令和3年度カリキュラム評価アンケートの数値が下がっているが、令和4年度の各項目の平均値は、令和2年度以前の数値に近い結果となっている。

令和4年度前期授業評価アンケートにおける授業外学修時間の推移について

1 趣旨

大学設置基準に基づき、本学の各学部の通則において、単位については下記のように規定されており、1科目(2単位)の授業の場合、90時間の学習時間が必要となり、授業時間が30時間であれば、授業外学修時間は60時間必要となります。

令和4年度前期授業の授業評価アンケートの結果をもとに、授業外学修時間を分析し、各学部の通則に沿って授業外学修時間が確保されているか確認を行います。

【各学部通則抜粋】

(単位)

第4条 授業科目の単位数は、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準によることを原則とする。

(1) 講義科目及び演習科目については、15時間の授業をもって1単位とする。

(2) 実験、実習、実技及び語学科目については、30時間の授業をもって1単位とする。

2 分析対象データ

平成30年度から令和4年度の授業評価アンケートデータ

(分析対象の設問)

問2：授業時間以外に学修を一週間にどのくらいしましたか。

選択肢：1. ほとんどしなかった 2. 1時間未満 3. 1時間以上2時間未満

4. 2時間以上3時間未満 5. 3時間以上4時間未満 6. 4時間以上

※選択肢6は令和2年度より追加

アンケート回答率（前期）

※令和元年度までは紙媒体、令和2年度からはWEBでアンケート実施

	H30	R元	R2	R3	R4
学部 講義全体 (DAT科目を除く)	74.2%	74.3%	35.7%	33.5%	28.8%
学部 演習全体	85.3%	84.5%	40.9%	47.8%	40.4%
データサイエンス学部系講義 (科目コード先頭3桁がDATの科目)	78.9%	78.8%	37.5%	25.1%	31.2%

アンケート実施科目数（前期）

※令和元年度までは紙媒体、令和2年度はWEBでアンケート実施

	H30	R元	R2	R3	R4
学部 講義全体 (DAT科目を除く)	283	270	308	247	224
学部 演習全体	368	379	324	444	259
データサイエンス学部系講義 (科目コード先頭3桁がDATの科目)	7	15	39	58	30

1. 授業外学修時間の推移

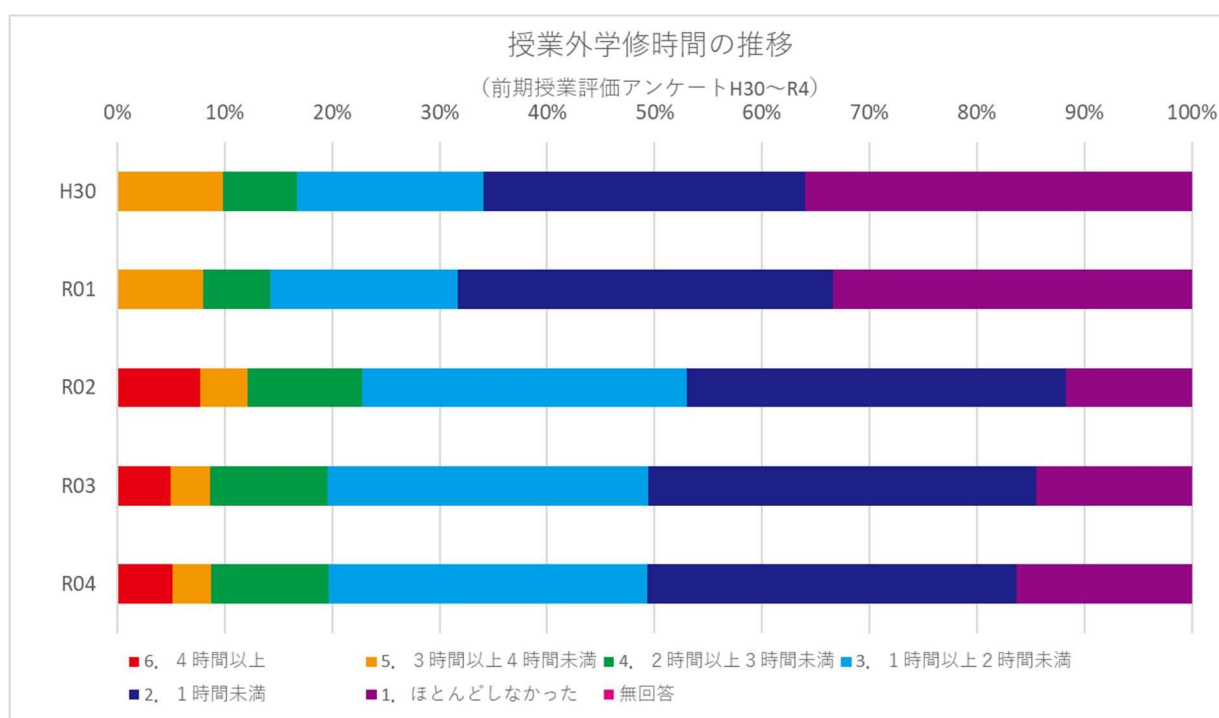
(1) 回答数比較

① 全体について

5年分の回答数について、それぞれの年度で占める割合を確認した。令和2年度に「3. 1時間以上2時間未満」より上位の回答割合が増加したものの、それ以降は減少傾向となり、令和3年度と令和4年度の回答割合は横ばいとなっている。

	6. 4時間以上	5. 3時間以上 4時間未満	4. 2時間以上 3時間未満	3. 1時間以上 2時間未満	2. 1時間未満	1. ほとんど なかった	計
H30		2021 件	1419 件	3558 件	6153 件	7388 件	20539 件
		9.84%	6.91%	17.32%	29.96%	35.97%	100.00%
R01		1572 件	1251 件	3446 件	6903 件	6613 件	19785 件
		7.95%	6.32%	17.42%	34.89%	33.42%	100.00%
R02	645 件	548 件	1409 件	3479 件	3657 件	1219 件	10957 件
	7.75%	4.34%	10.68%	30.26%	35.24%	11.74%	100.00%
R03	433 件	318 件	949 件	2588 件	3134 件	1256 件	8678 件
	4.99%	3.66%	10.94%	29.82%	36.11%	14.47%	100.00%
R04	406 件	291 件	868 件	2357 件	2736 件	1299 件	7957 件
	5.10%	3.66%	10.91%	29.62%	34.38%	16.33%	100.00%

※令和2年度について、選択肢6及び5の合算値は「1193 件 (10.89%)」、令和3年度は「751 件 (8.65%)」、令和4年度は「697 件 (8.76%)」



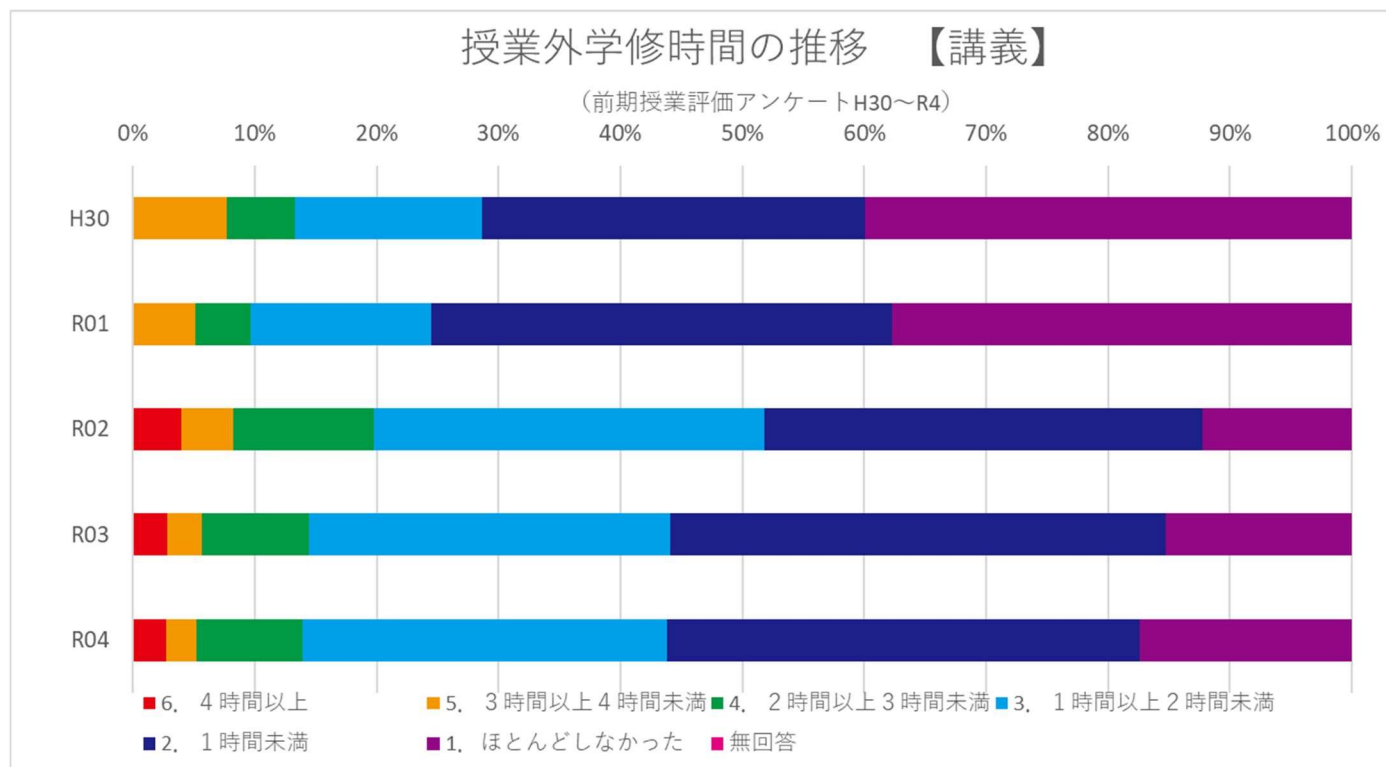
② 講義について

令和3年度と令和4年度の選択肢3～6の回答割合はほぼ横ばいとなっている。

	6. 4時間以上	5. 3時間以上 4時間未満	4. 2時間以上 3時間未満	3. 1時間以上 2時間未満	2. 1時間未満	1. ほとんどし なかった	計
H30 講義		1224 件	884 件	2431 件	4976 件	6326 件	15841 件
		7.73%	5.58%	15.35%	31.41%	39.93%	100.00%
R01 講義		775 件	696 件	2253 件	5754 件	5747 件	15225 件
		5.09%	4.57%	14.80%	37.79%	37.75%	100.00%
R02 講義	354 件	376 件	1017 件	2823 件	3168 件	1081 件	8819 件
	4.01%	4.26%	11.53%	32.01%	35.92%	12.26%	100.00%
R03 講義	183 件	187 件	572 件	1927 件	2643 件	993 件	6322 件
	2.81%	2.87%	8.79%	29.62%	40.63%	15.27%	100.00%
R04 講義	160 件	146 件	502 件	1739 件	2257 件	1012 件	5816 件
	2.75%	2.51%	8.63%	29.90%	38.81%	17.40%	100.00%

※選択肢6及び5の合算値

令和2年度：「730 件（8.28%）」、令和3年度：「370 件（5.85%）」、令和4年度「306 件（5.26%）」



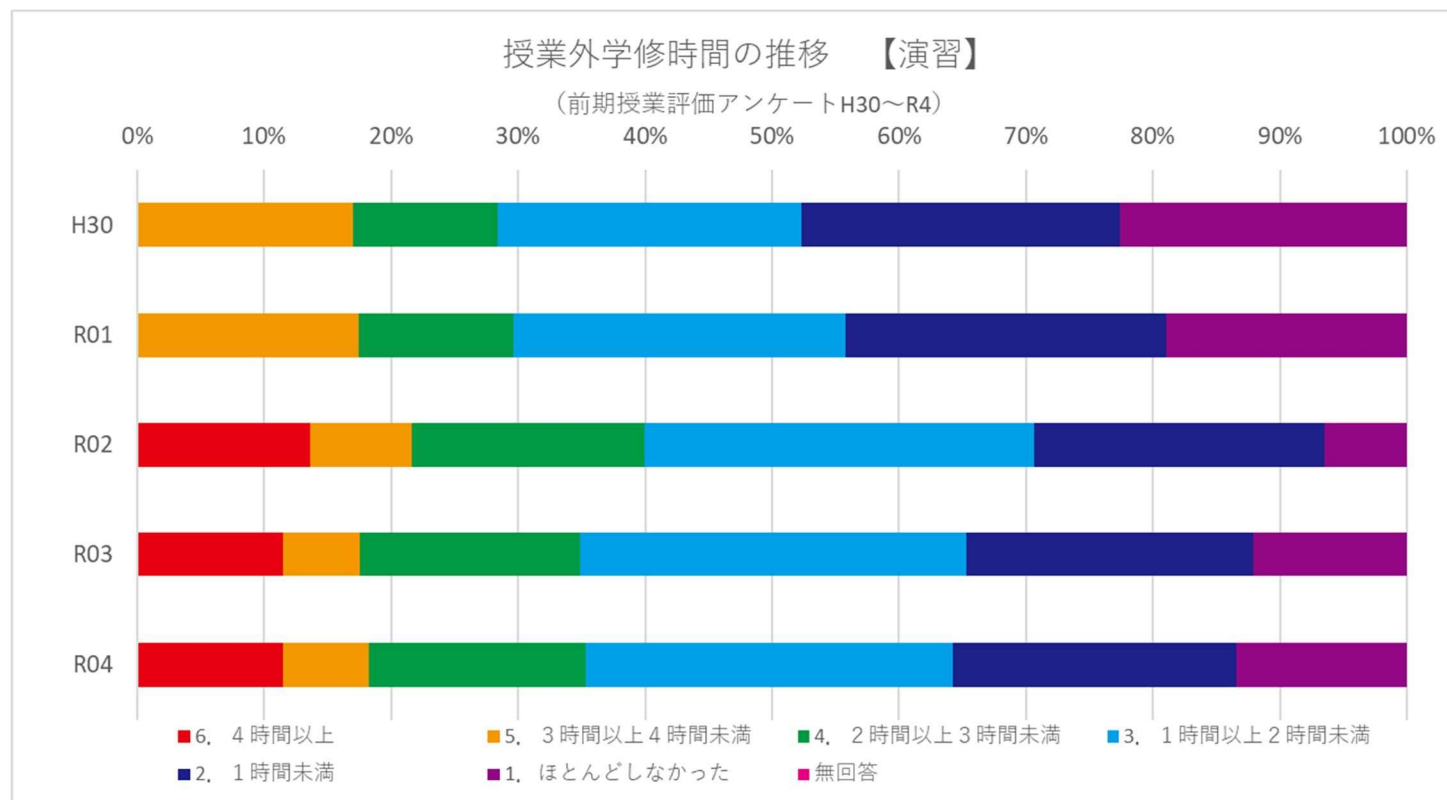
③ 演習について

令和3年度と比較して、令和4年度の選択肢3～6の回答割合は横ばいとなっている。

	6. 4時間以上	5. 3時間以上 4時間未満	4. 2時間以上 3時間未満	3. 1時間以上 2時間未満	2. 1時間未満	1. ほとんどし なかった	計
H30 演習		797 件	535 件	1127 件	1177 件	1062 件	4698 件
		16.96%	11.39%	23.99%	25.05%	22.61%	100.00%
R01 演習		797 件	555 件	1193 件	1149 件	866 件	4560 件
		17.48%	12.17%	26.16%	25.20%	18.99%	100.00%
R02 演習	291 件	172 件	392 件	656 件	489 件	138 件	2138 件
	13.61%	8.04%	18.33%	30.68%	22.87%	6.45%	100.00%
R03 演習	250 件	131 件	377 件	661 件	491 件	263 件	2173 件
	11.50%	6.03%	17.35%	30.42%	22.60%	12.10%	100.00%
R04 演習	246 件	145 件	366 件	618 件	479 件	287 件	2141 件
	11.49%	6.77%	17.09%	28.87%	22.37%	13.40%	100.00%

※選択肢6及び5の合算値

令和2年度：「463件（21.66%）」、令和3年度は「381件（17.53%）」、令和4年度「391件（18.26%）」



(2) 平均比較

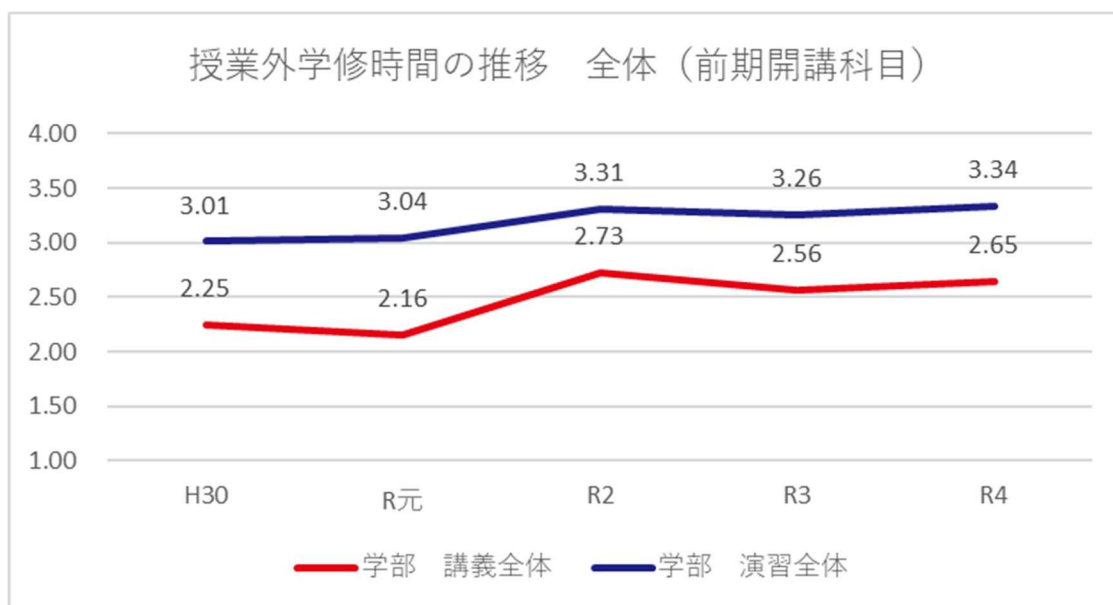
過去5年の回答の平均値を比較した。なお、令和2年度以降、「6. 4時間以上」は「5. 3時間以上4時間未満」とみなして算出している。

① 全体について

回答の平均値について分析した結果、対面授業を実施した令和元年度までと比較し、令和2年度には講義科目及び演習科目について授業外学修時間が増加したが、令和3年度には微減、令和4年度に微増している。

講義全体は平均値が2.0の範囲であるため、授業外学修時間は「2. 1時間未満」が平均、演習全体は平均値が3.0の範囲であるため、授業外学修時間は「3. 1時間以上2時間未満」が平均という結果になっている。

	H30	R元	R2	R3	R4
学部 講義全体	2.25	2.16	2.73	2.56	2.65
学部 演習全体	3.01	3.04	3.31	3.26	3.34

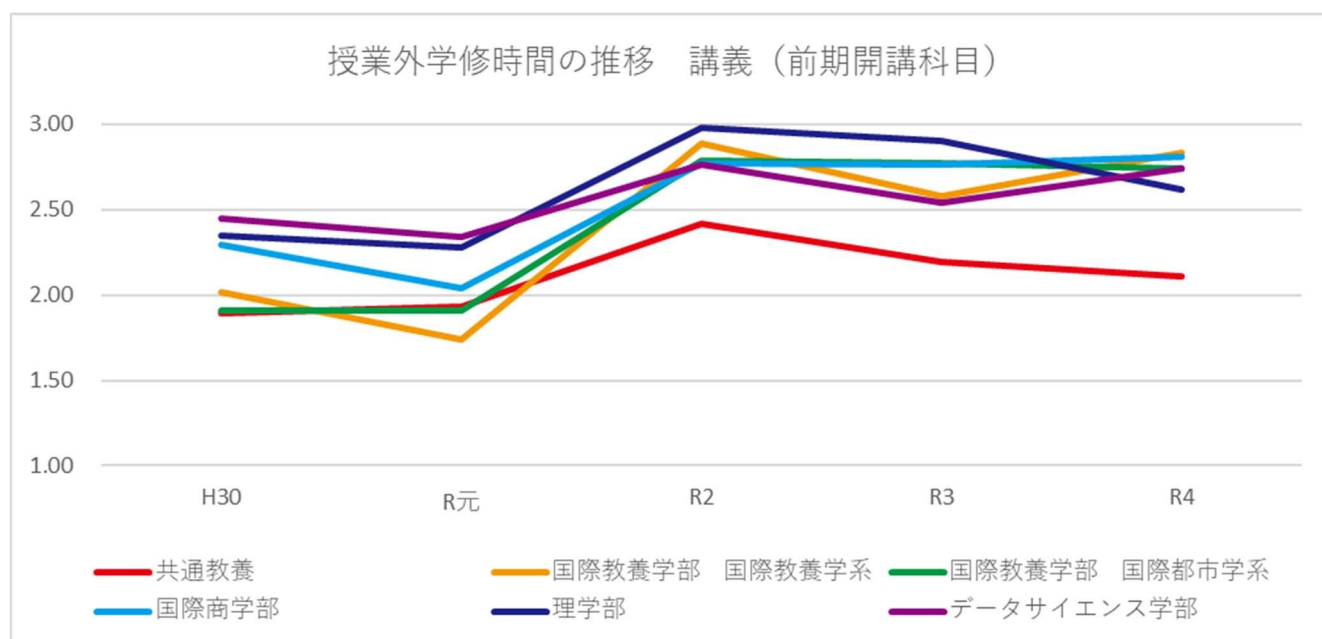


② 講義について

回答の平均値について分析した結果、令和3年度と比較し、令和4年度は全項目において減少傾向である。

全項目ともに平均値が2.0の範囲であるため、授業外学修時間は「2. 1時間未満」が平均という結果になっている。

	H30	R元	R2	R3	R4
共通教養	1.89	1.93	2.42	2.19	2.11
国際教養学部 国際教養学系	2.02	1.74	2.89	2.58	2.83
国際教養学部 国際都市学系	1.91	1.91	2.79	2.77	2.74
国際商学部	2.29	2.04	2.77	2.76	2.81
理学部	2.35	2.28	2.98	2.90	2.62
データサイエンス学部	2.45	2.34	2.76	2.54	2.74

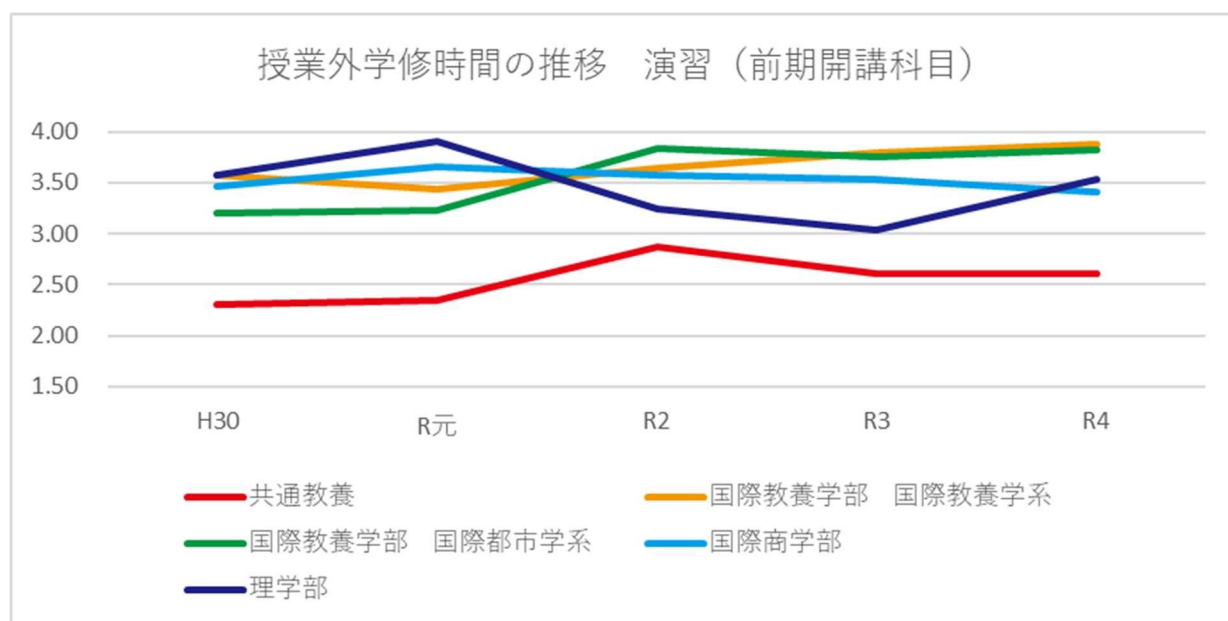


③ 演習について

回答の平均値について分析した結果、令和3年度と比較し、令和4年度は国際教養学部教養学系、都市学系、理学部において授業外学修時間が増加し、国際商学部において減少している。

共通教養においては、平均値が2.0の範囲であるため、授業外学修時間は「2. 1時間未満」、国際教養学部、国際商学部、理学部、データサイエンス学部においては、平均値が3.0の範囲であるため、授業外学修時間は「3. 1時間以上2時間未満」が平均という結果になっている。

	H30	R元	R2	R3	R4
共通教養	2.31	2.35	2.87	2.61	2.61
国際教養学部 国際教養学系	3.57	3.43	3.64	3.80	3.88
国際教養学部 国際都市学系	3.20	3.23	3.83	3.76	3.82
国際商学部	3.47	3.66	3.57	3.53	3.41
理学部	3.57	3.91	3.24	3.03	3.54



④ 科目グループごとの経年比較について

資料2：科目グループごとの経年比較表 参照

2. 今後の方針について

(1) オンライン授業による授業外学修時間の変化について

令和2年度よりオンライン授業を導入したことによって、ほとんどの科目で授業外学修時間がオンライン授業導入前と比較して増加したが、令和3年度は授業外学修時間が減少し、令和4年度もほぼ同傾向となっている、

講義科目・演習科目に分けて検証すると、講義科目では授業外学習時間が減少し、演習科目では微増していることがわかった。講義科目の授業外学修時間の減少については、大学の授業実施方針が原則対面授業となったことに伴い、成績評価方法をレポート方式から試験方式に戻したこと等が一因として考えられる。

(2) 学部通則に規定されている1単位あたりの学修時間について

大学設置基準に基づき、本学の各学部の通則で、単位は下記のように規定されている。

今回の結果により、現状では規程上十分な授業外学修時間が確保できているとは言えない状況であることから、授業外学修時間数を向上させる取組は継続すべきと考える。

(単位)

第4条 授業科目の単位数は、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準によることを原則とする。

(1) 講義科目及び演習科目については、15時間の授業をもって1単位とする。

(2) 実験、実習、実技及び語学科目については、30時間の授業をもって1単位とする。

(3) 今後の方針

オンライン授業の導入以降、対面授業のみであった令和元年度以前と比較して、授業外学修時間は増加しているものの、令和5年度からは原則対面で授業を実施するため、授業方法の変更による授業外学修時間数の変化については引き続き分析を行い、授業外学修時間を確保する方法の検討を進める。

また、データ分析元である授業評価アンケートの回答率が講義科目で28.8%、演習科目で40.4%と低い結果となっており、全学生の状況が反映されていない。授業評価アンケートの回答率を上げるため、質問内容の再検討、授業時間内で回答を依頼する等、対応を引き続き検討する。

授業評価アンケート設問

Q1. この授業にどの程度出席していましたか。

ほぼ 100%/80%以上/60%以上 80%未満/60%未満/ほとんど欠席

Q2. 授業時間以外に学修を一週間にどのくらいしましたか。

4 時間以上/3 時間以上 4 時間未満/2 時間以上 3 時間未満/1 時間以上 2 時間未満
/1 時間未満/ほとんどしなかった

<以下、Q3～Q17 の選択肢は共通>

- ① そう思う ② どちらかといえばそう思う ③ どちらともいえない
④ どちらかといえば思わない ⑤ そう思わない

Q3. この授業に積極的に参加していましたか。

Q4. 事前に Web シラバスを十分に確認しましたか。

Q5. 教科書や資料等は授業の理解に役立ちましたか。

Q6. 教員の声の大きさやスピードは適切でしたか。

Q7. シラバスにもとづいて授業の学習到達目標について説明がありましたか。

Q8. 教員は授業の秩序を維持していましたか。

Q9. 教員は熱意をもって授業の指導に当たっていましたか。

Q10. 授業は定刻通り開始されていましたか。

Q11. 学習到達目標は達成できましたか。

Q12. この授業で知的好奇心が刺激されましたか。

Q13. 今後の勉学に役立つと思いますか。

Q14. 総合的に見て満足できる授業でしたか。

Q15. 教員独自の質問①

Q16. 教員独自の質問②

Q17. 教員独自の質問③

Q18. (自由記述) 特に良かった点

Q19. (自由記述) 改善すべき点、提案

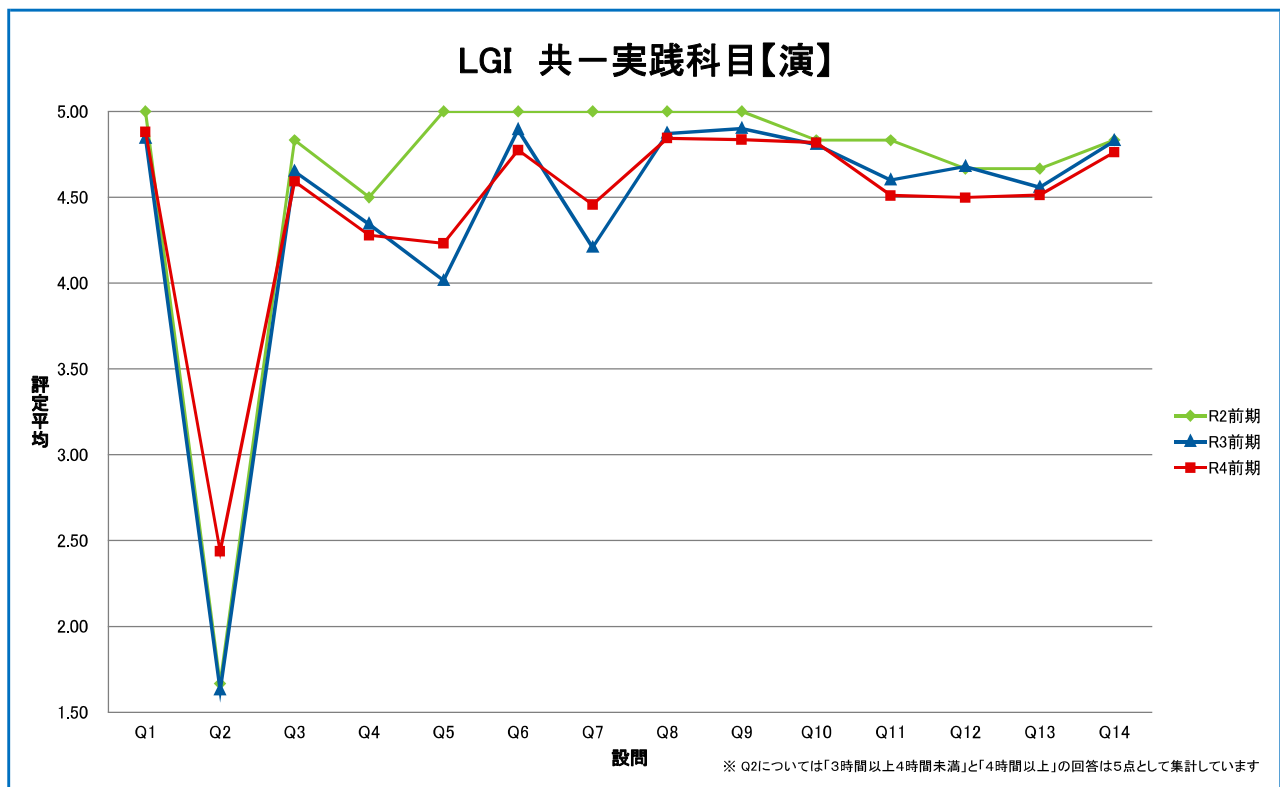
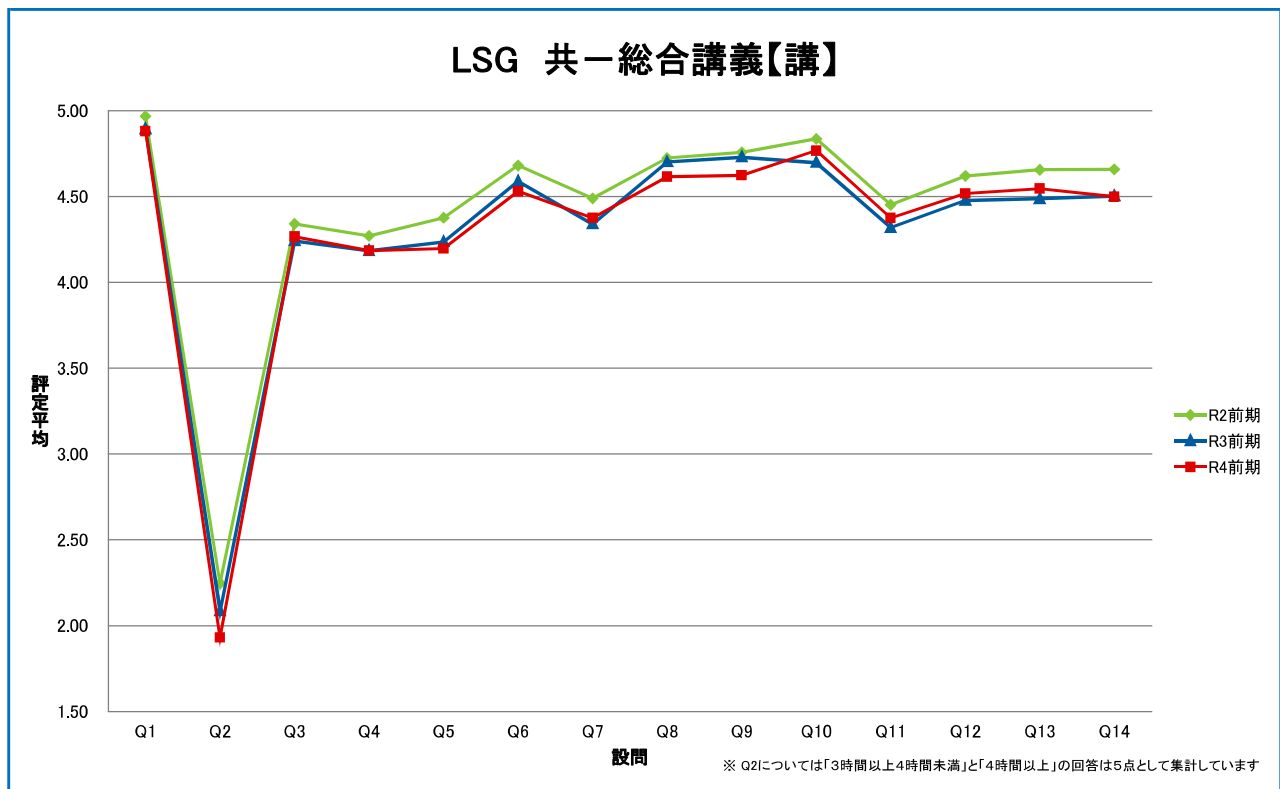
Q20. (自由記述) 大学について意見や要望

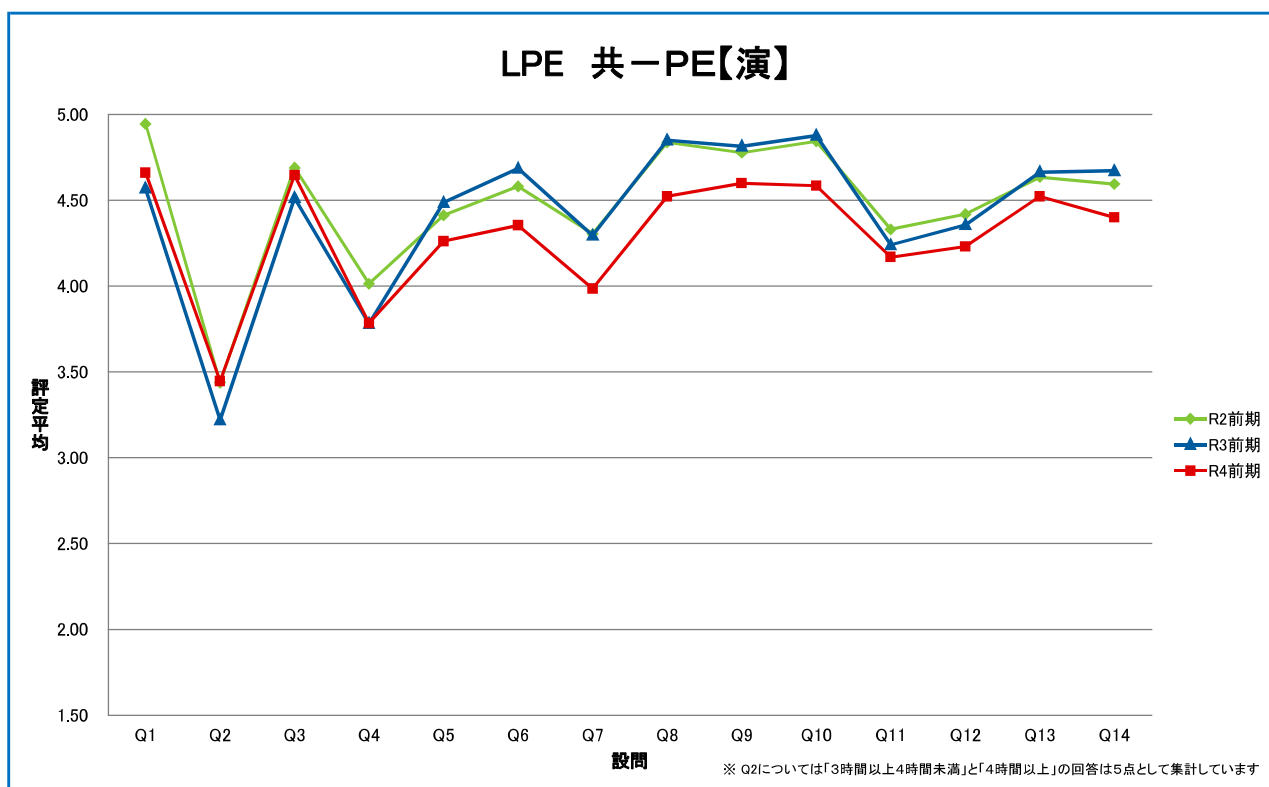
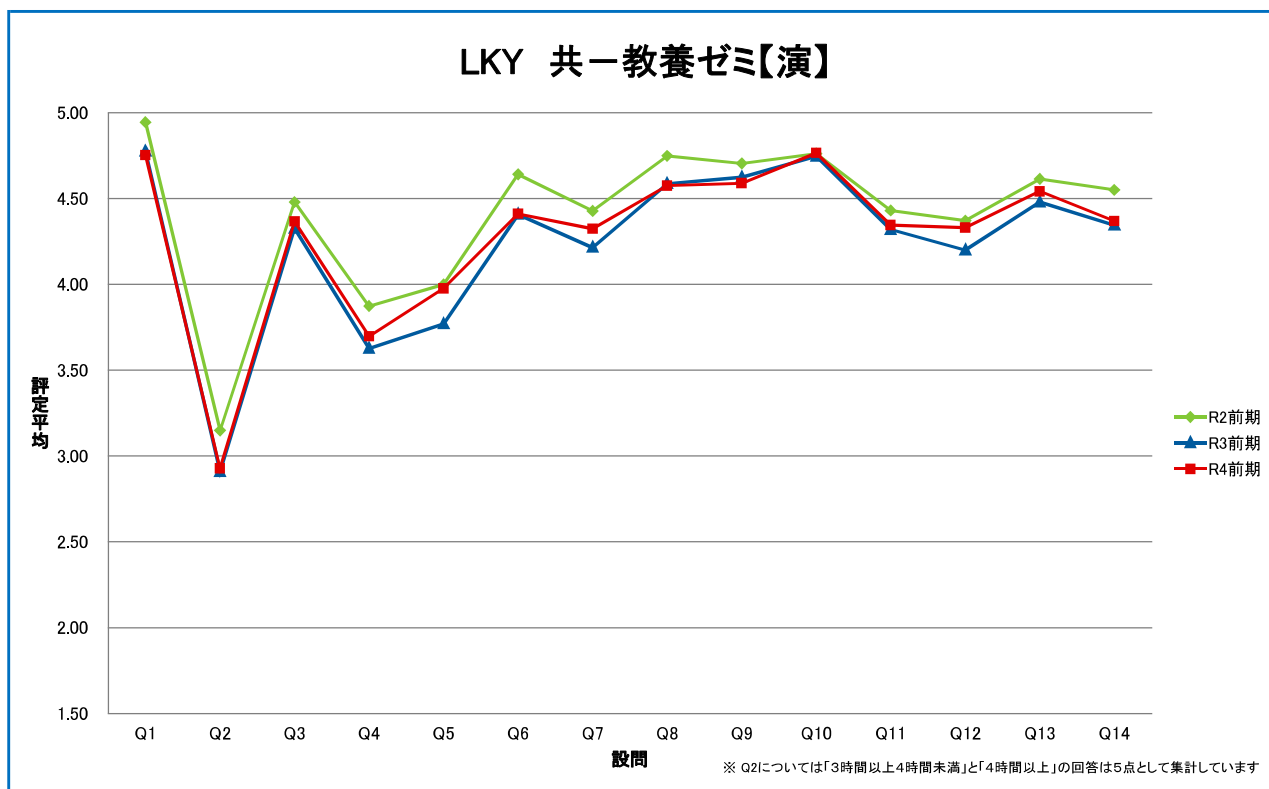
Q21. この授業をオンラインで受講して、良かった点がありましたか。(複数回答可)

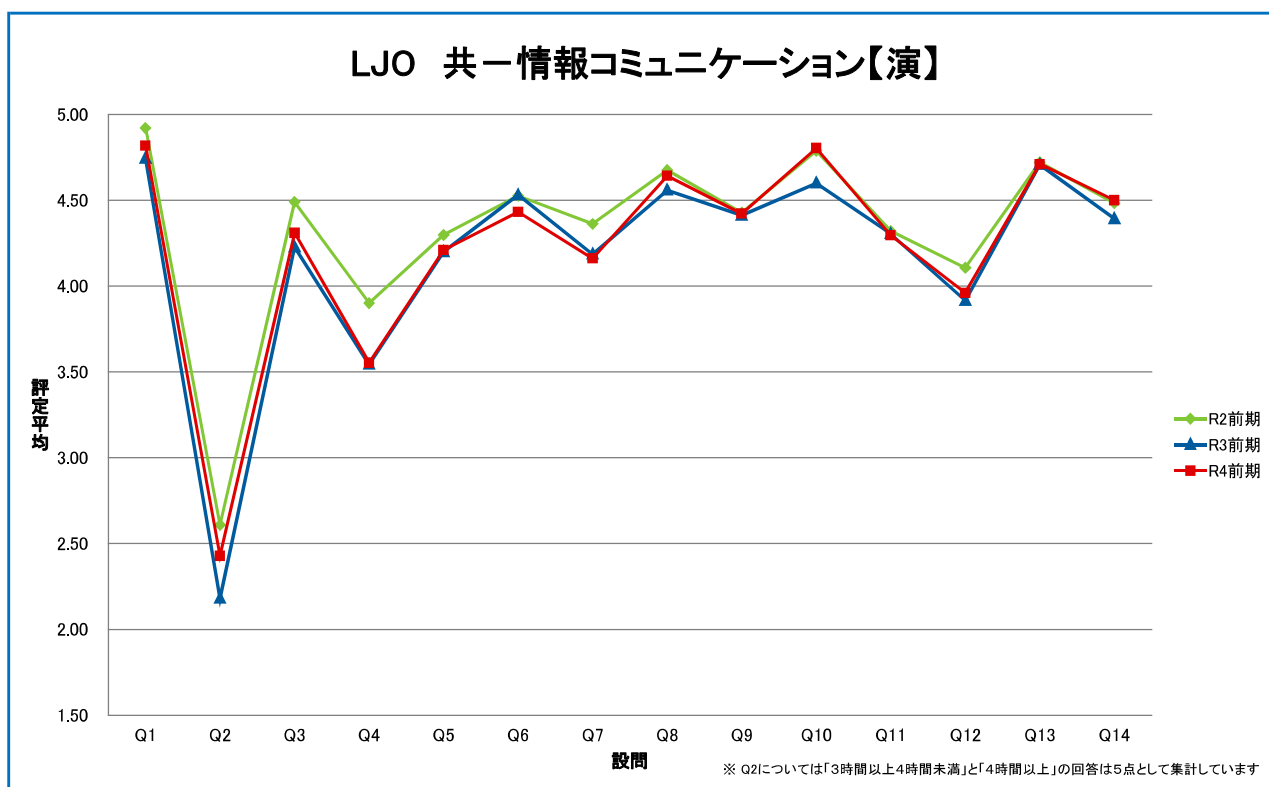
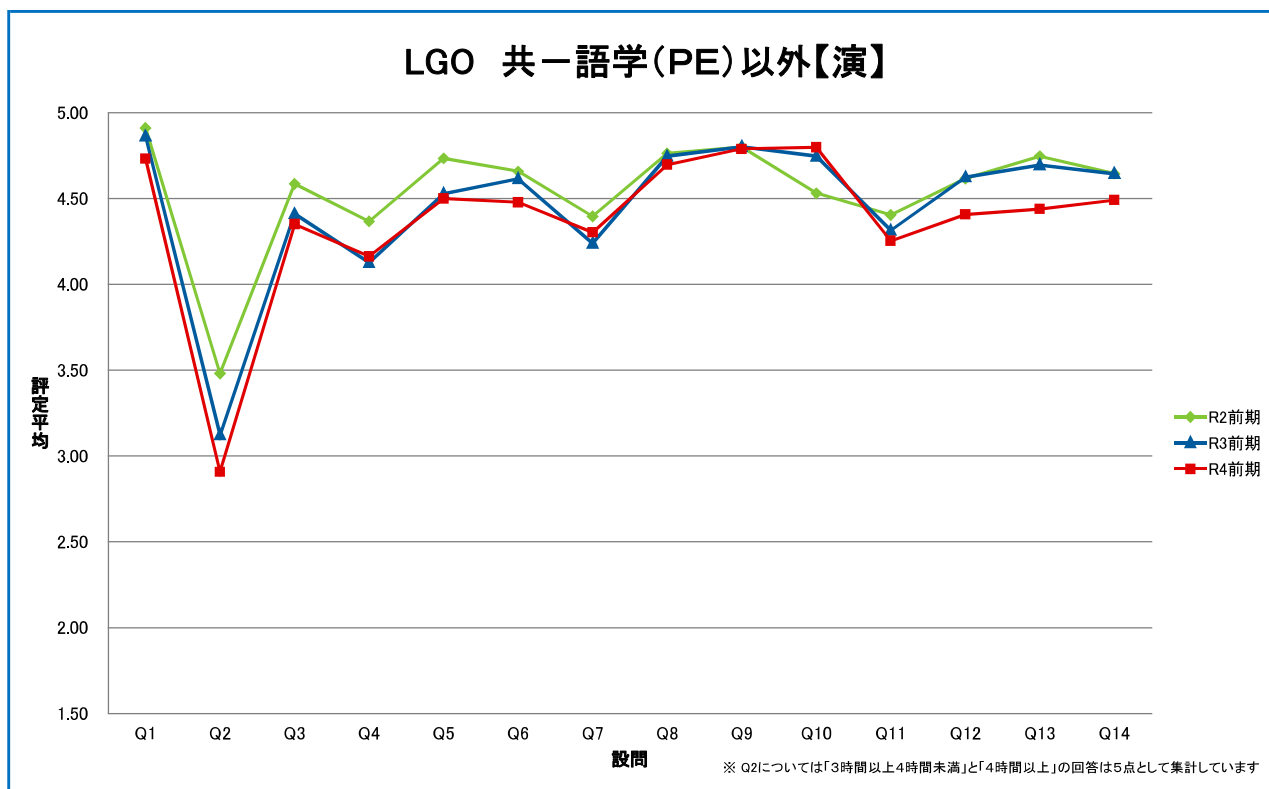
- ① 教員や受講者間のコミュニケーションがとりやすい
② 集中力が続きやすい
③ オンライン上の資料や動画により、効率的な予習復習ができた
④ 自分のペースで学修できる
⑤ その他 (自由記述欄に記載してください)

Q22 この授業をオンラインで受講して、不安な点がありましたか。(複数回答可)

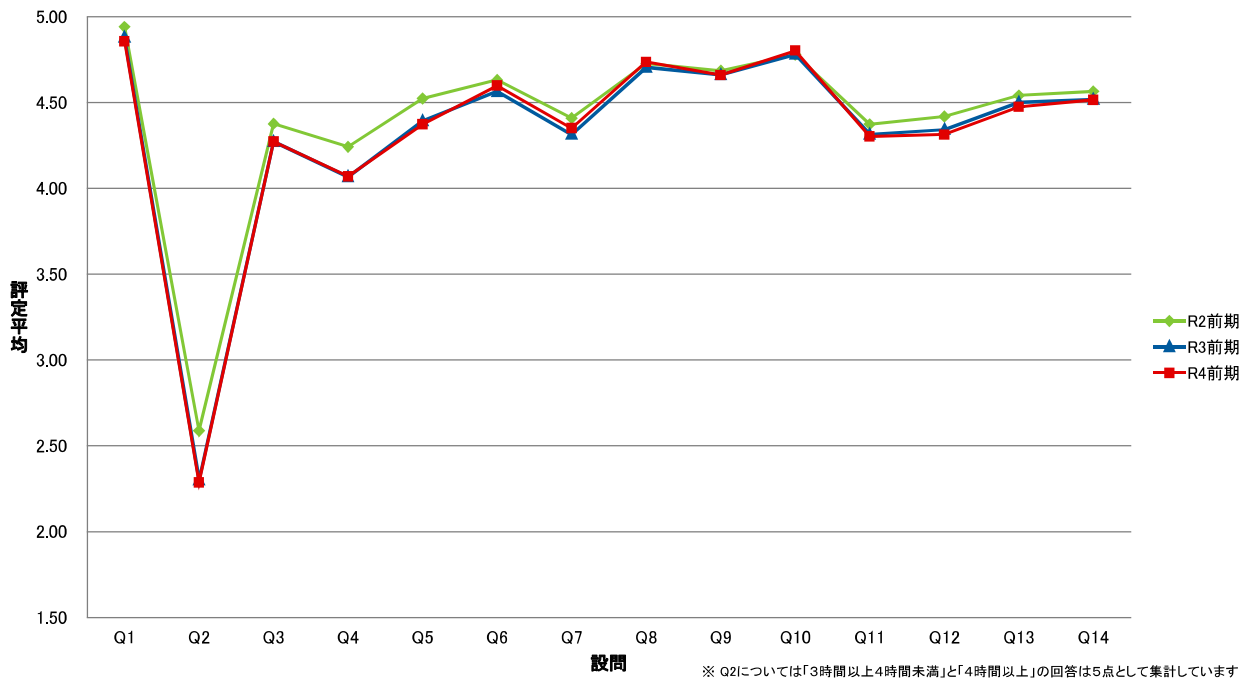
- ① 教員や受講者間のコミュニケーションがとりづらい
- ② 集中力が続かない
- ③ 講義に対する負担（課題等）が大きい
- ④ 学修のペースが掴みにくい
- ⑤ 通信環境等や設備面での不安
- ⑥ その他（自由記述欄に記載してください）



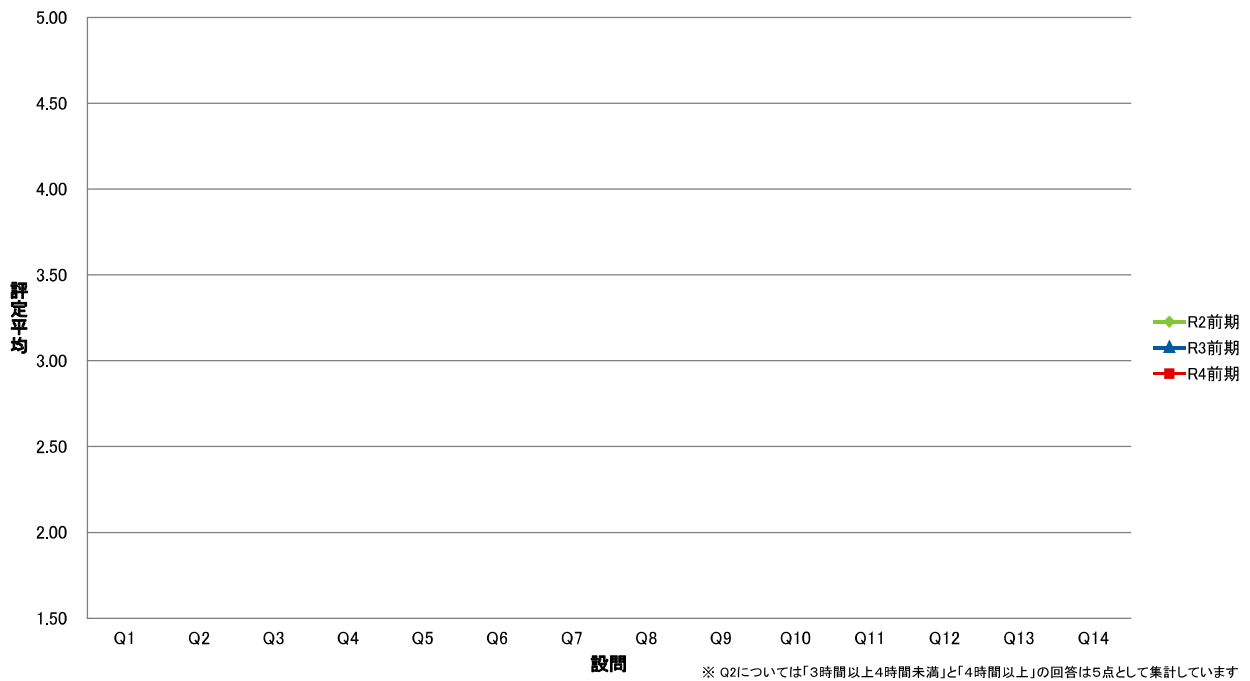




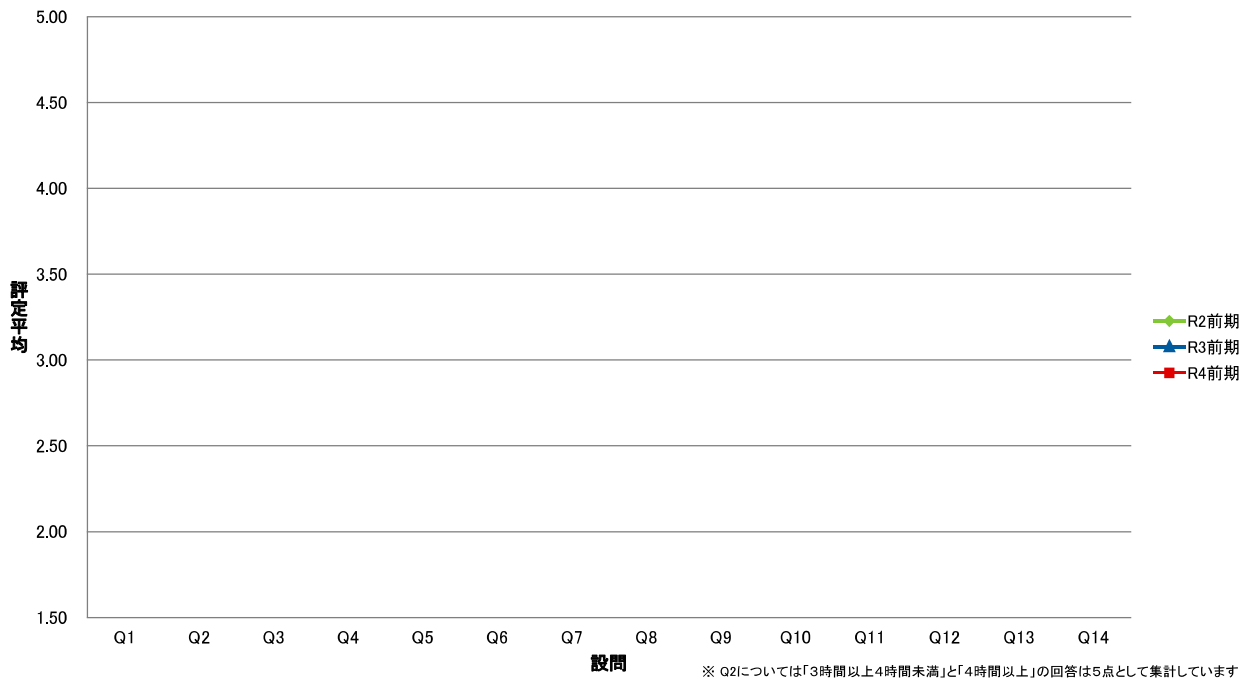
LTK 共一専門連携・多文化交流ゼミ【講】



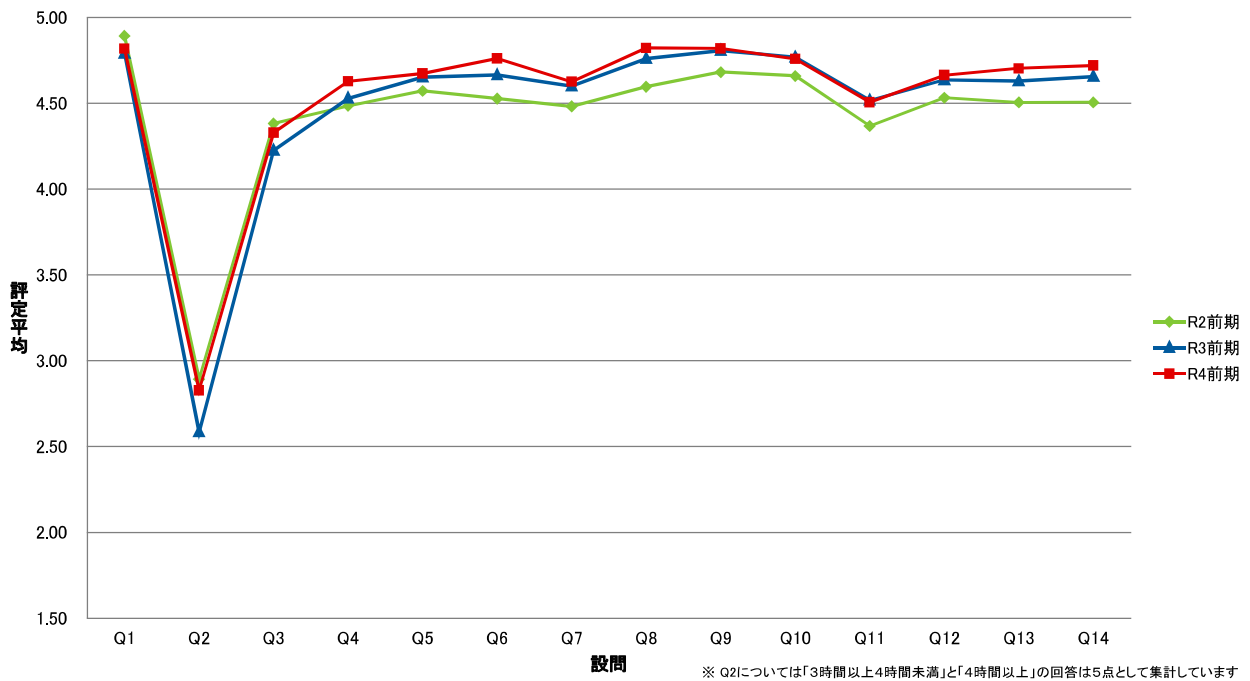
LTE 共一専門連携・多文化交流ゼミ【演】



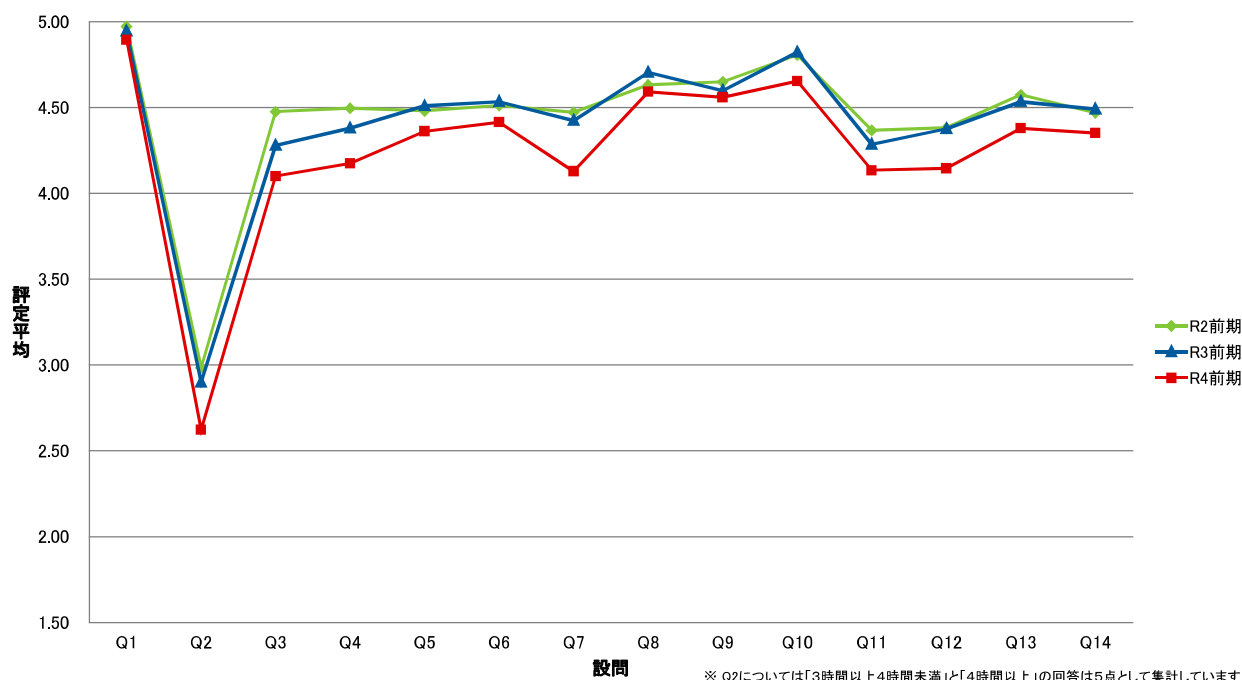
LKE 共一基礎ゼミ【演】



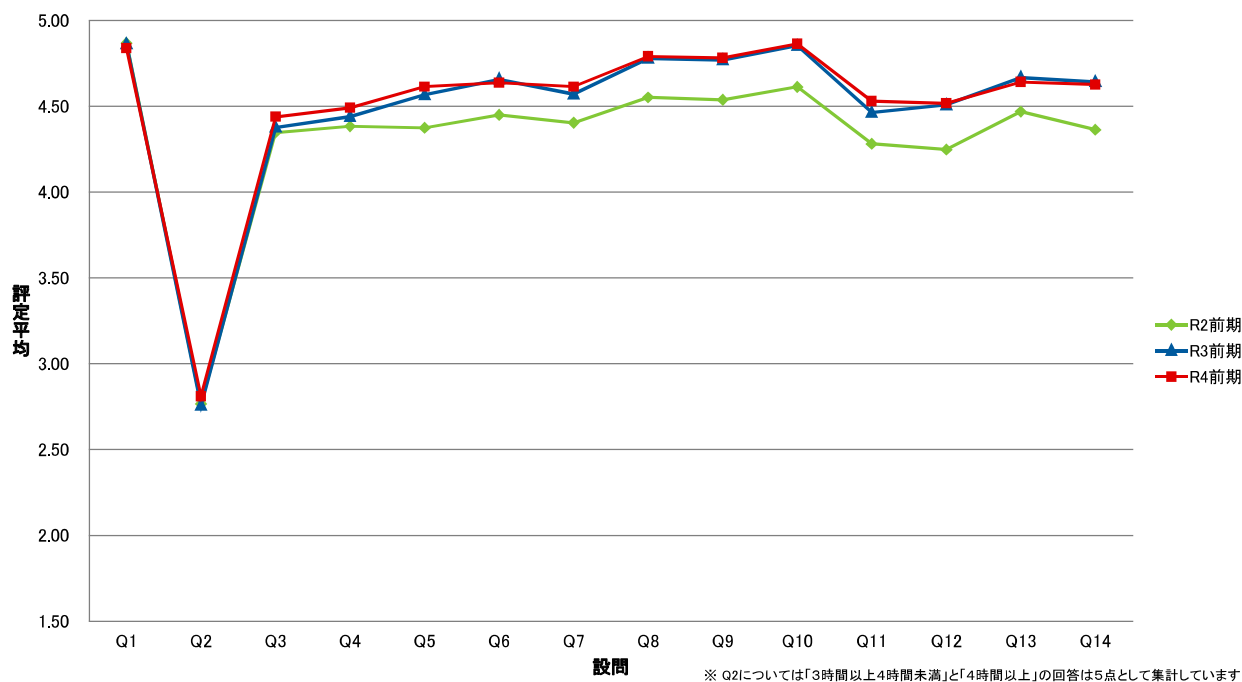
SCO 専一国際教養学系/国際教養学部【講】



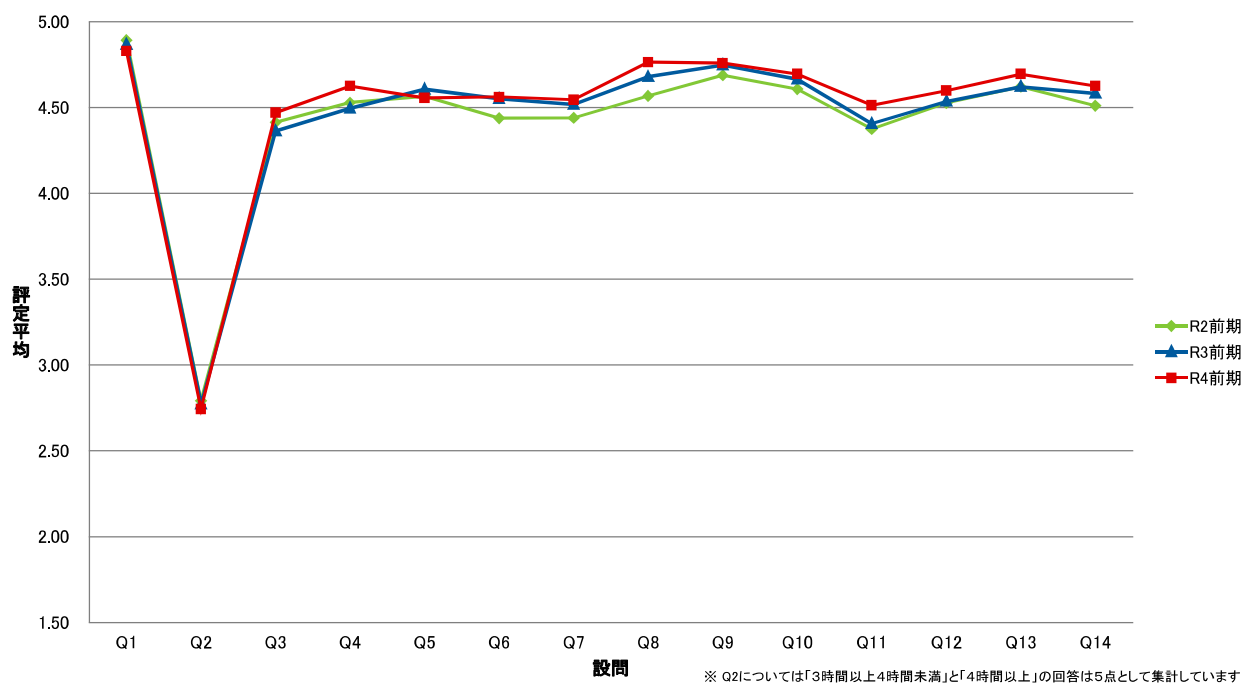
SRI 専一理学系/理学部【講】



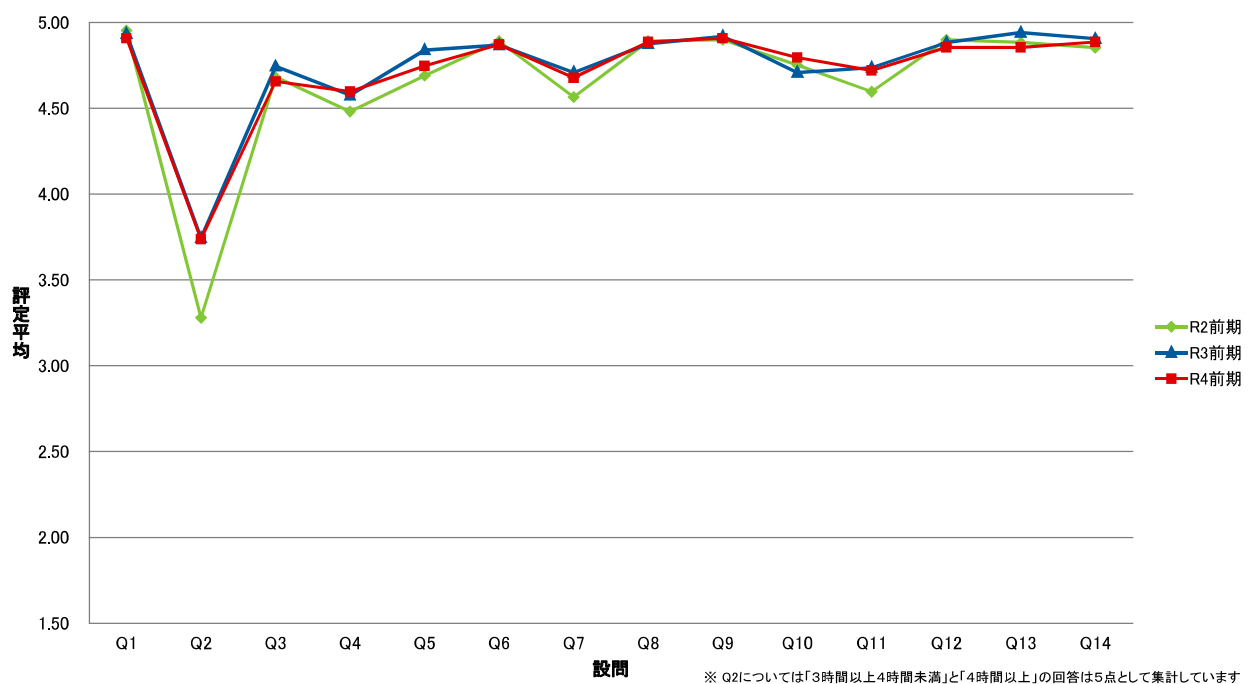
SKK 専一経営科学系/国際商学部【講】



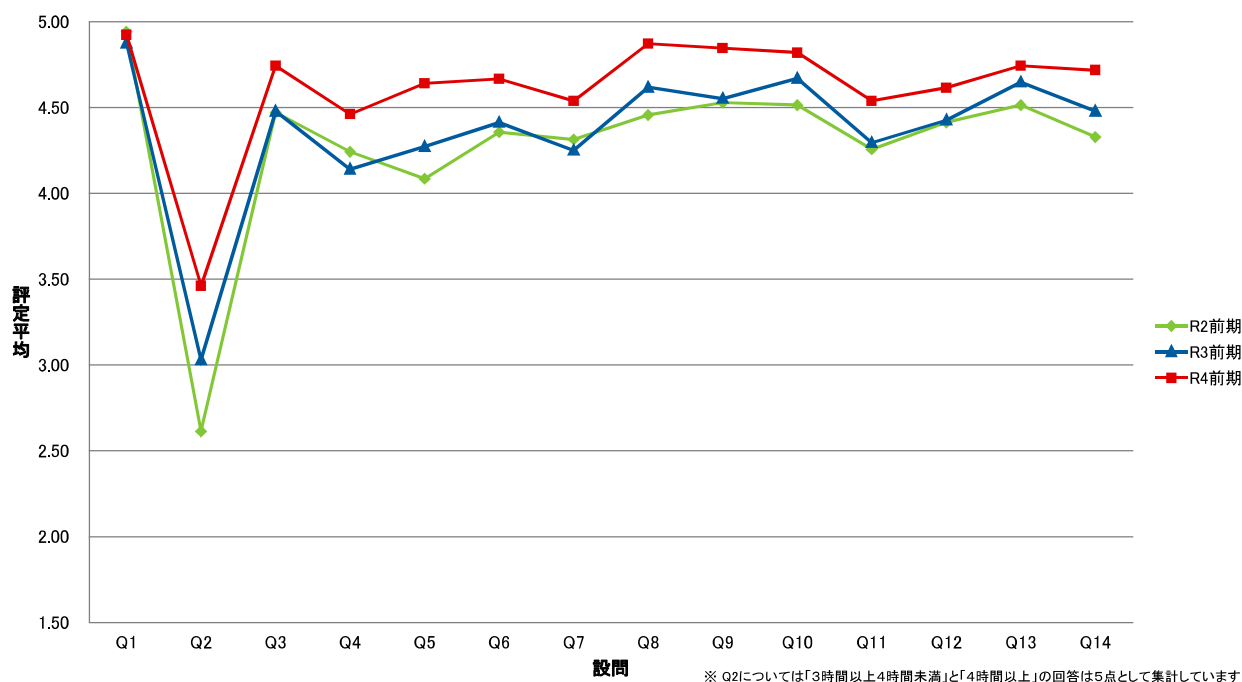
STO 専一国際都市学系/国際教養学部【講】



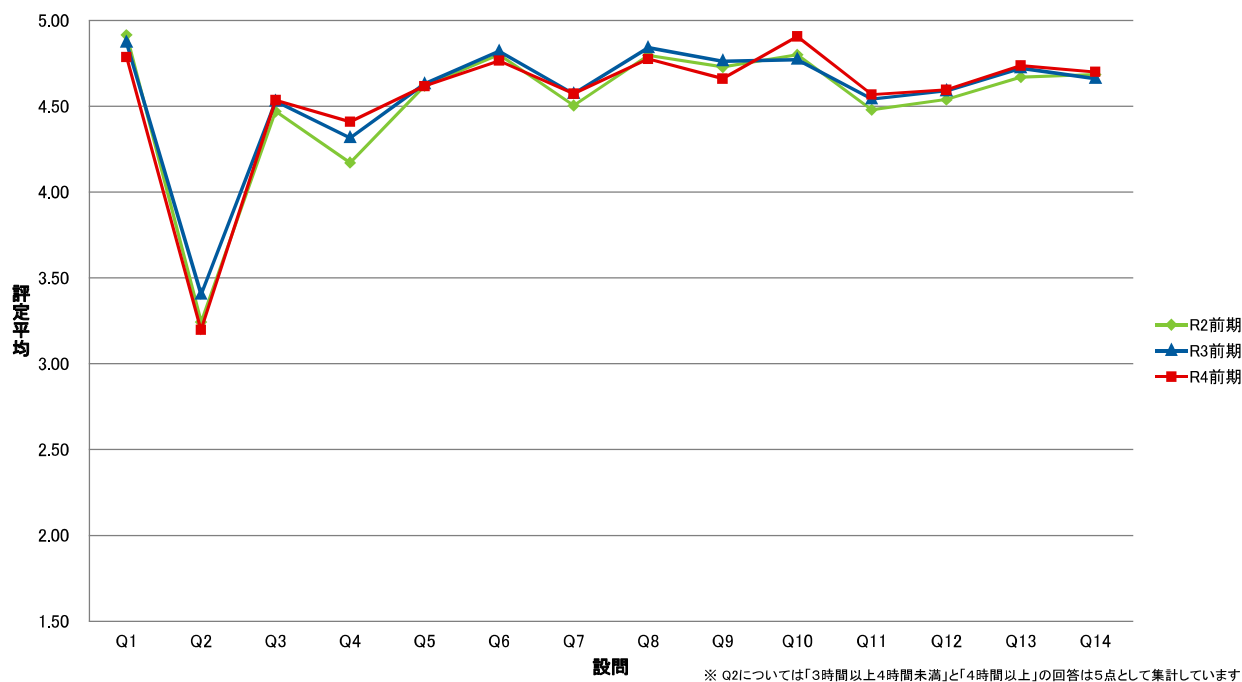
SCE 専一国際教養学系/国際教養学部【演】

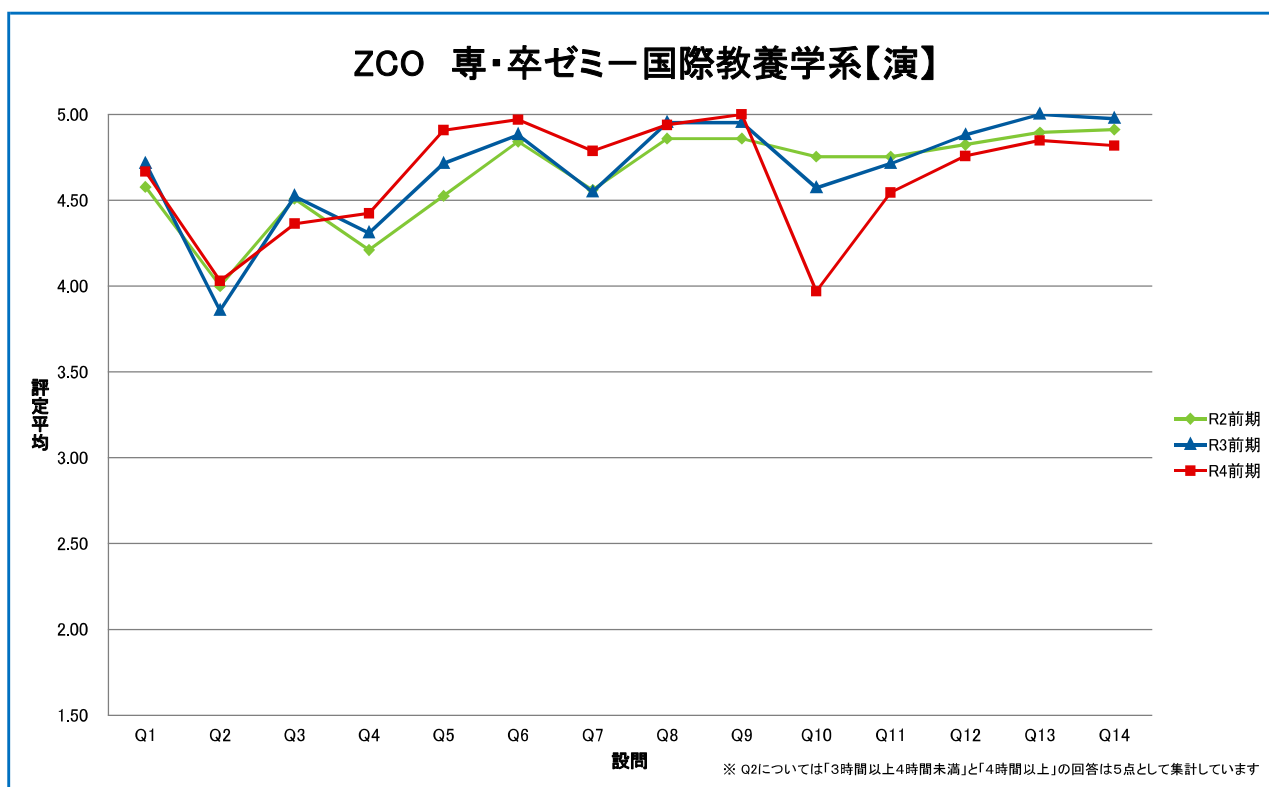
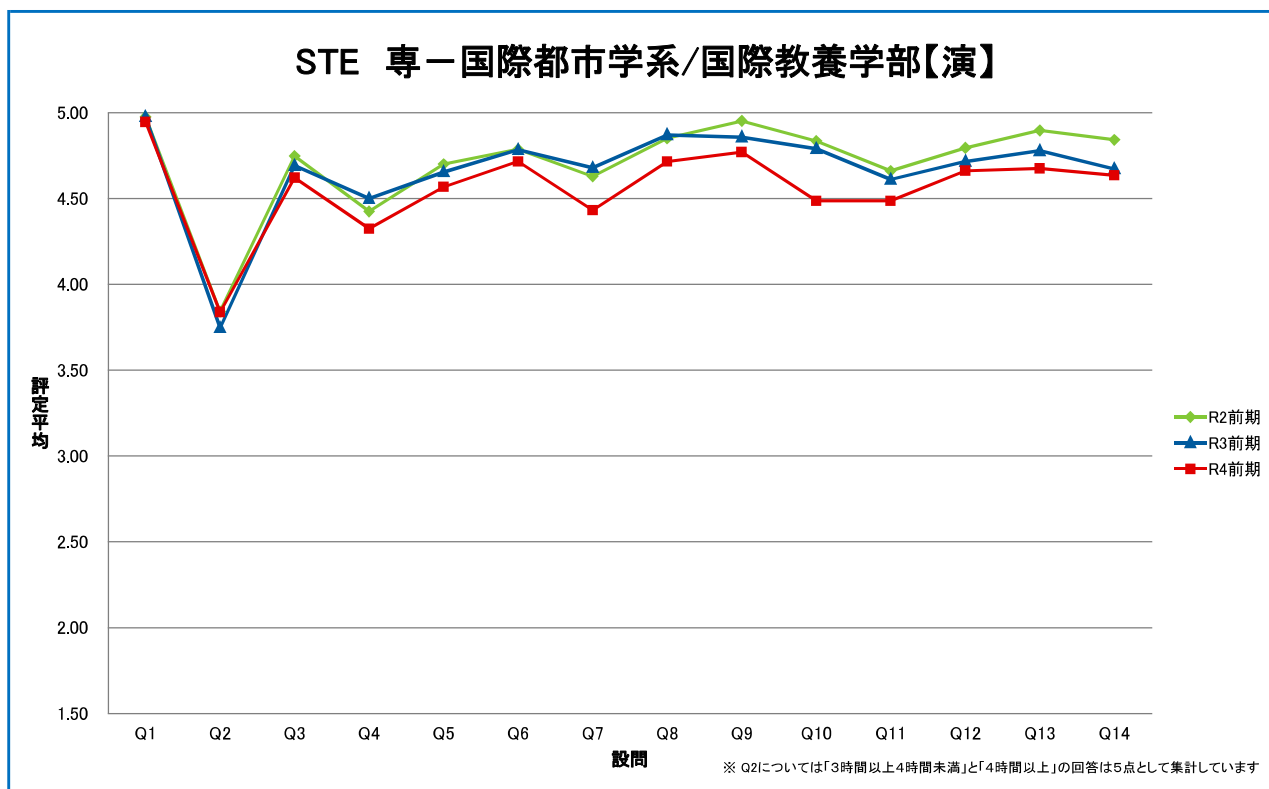


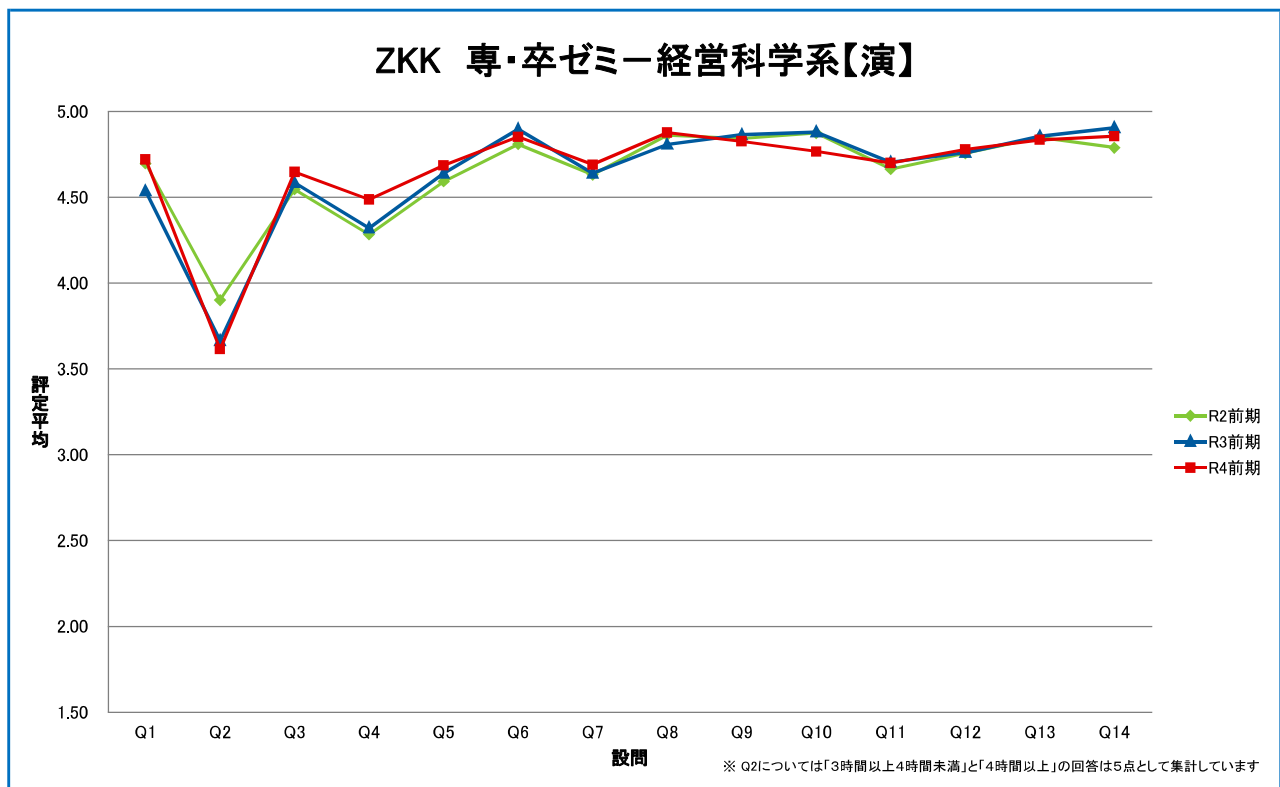
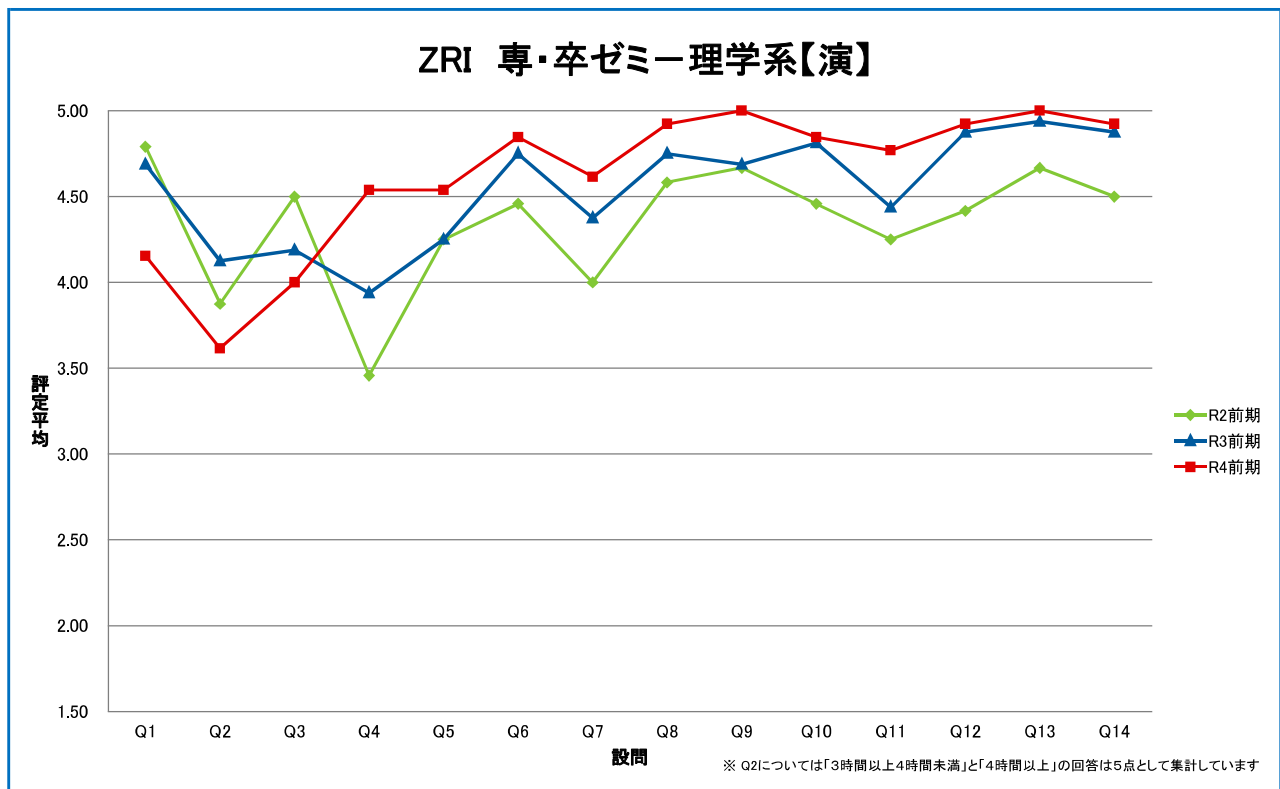
SRE 専一理学系/理学部【演】

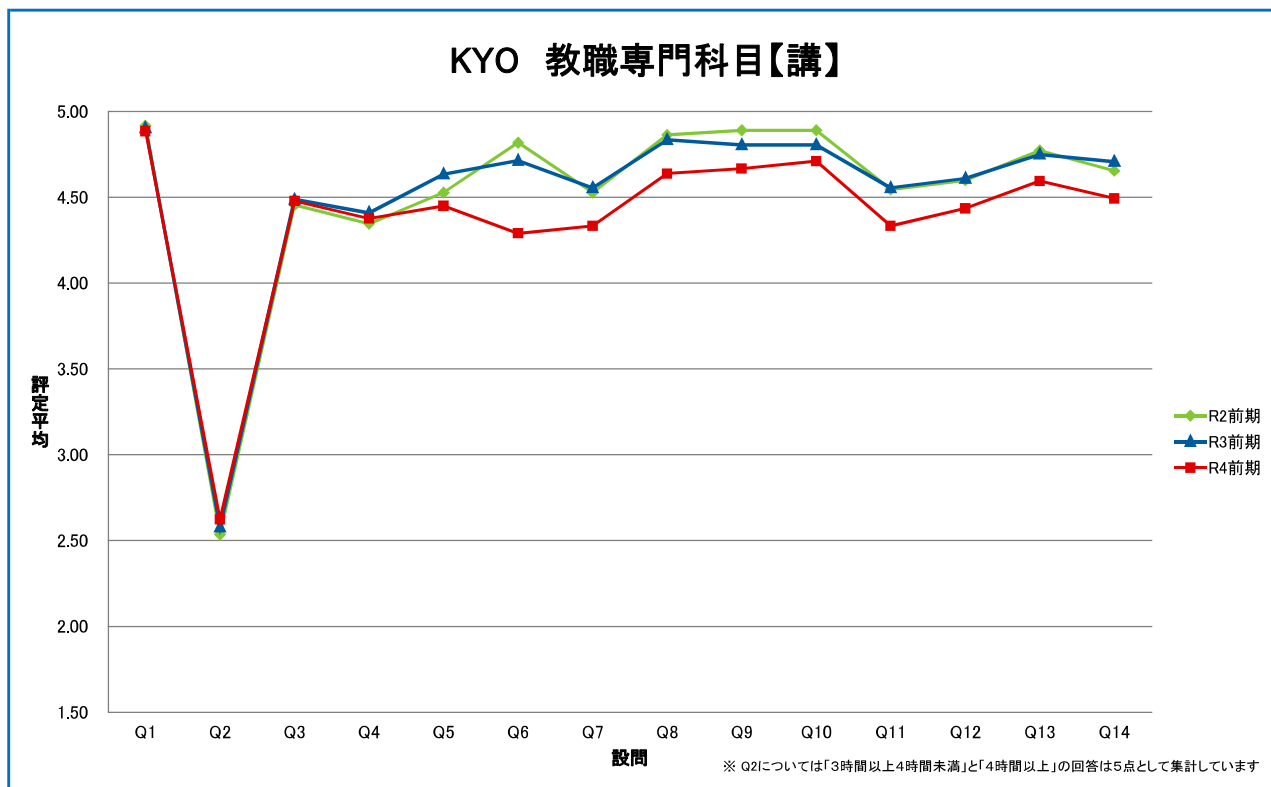
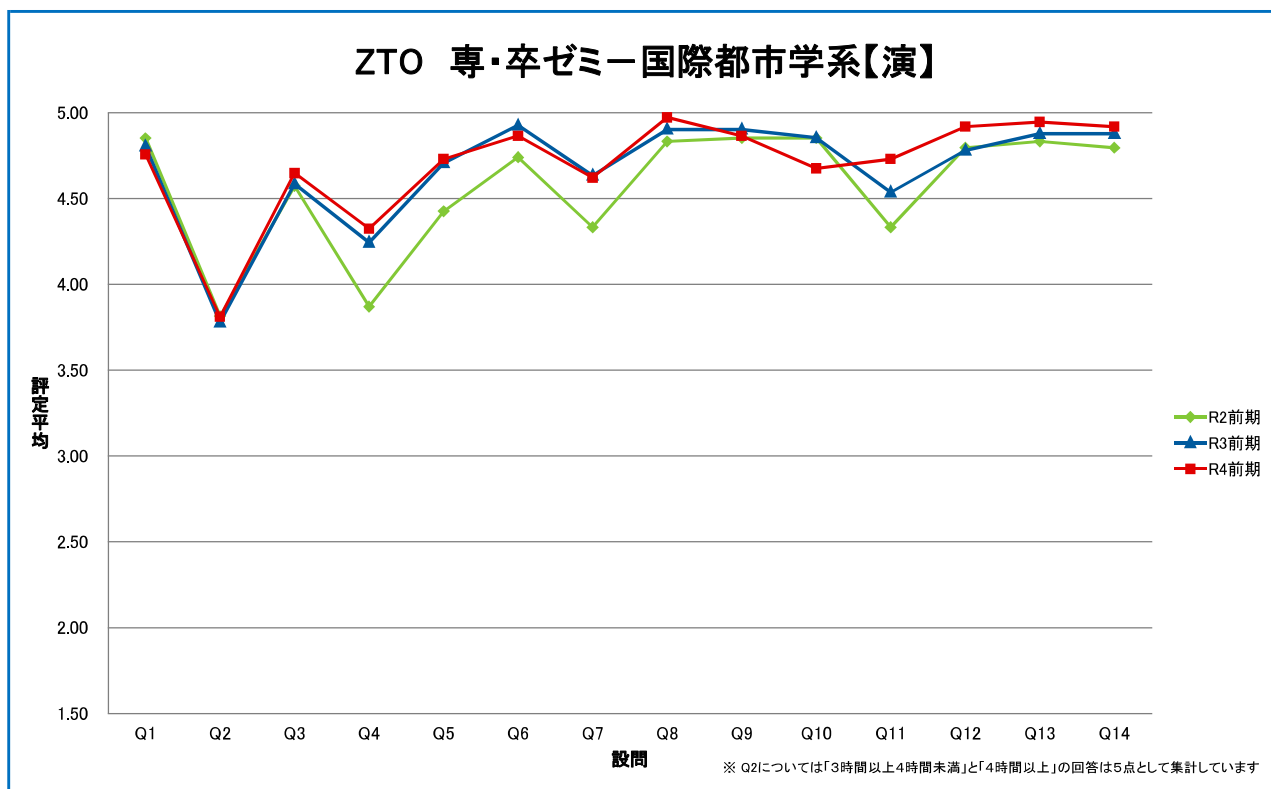


SKE 専一経営科学系/国際商学部【演】

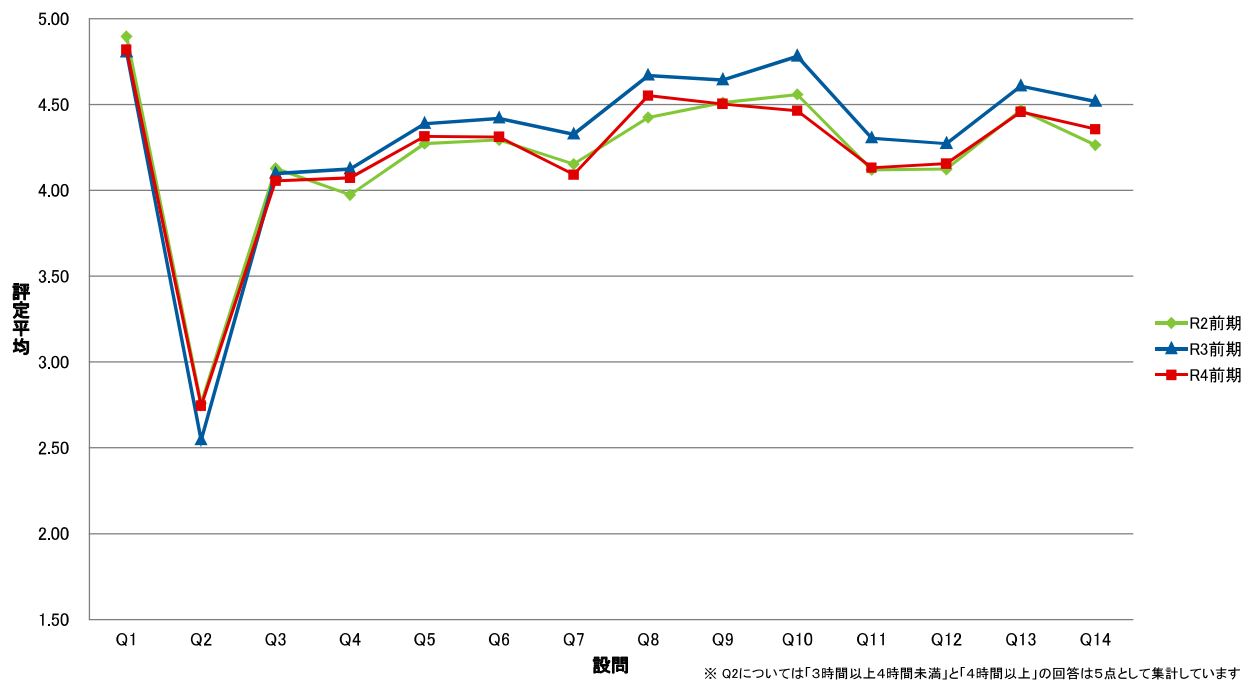








DAT 共ーデータサイエンス学部系【講】



令和4年度前期科目における成績評価について

1 趣旨

令和4年度前期科目の成績評価について分析を実施しましたので、報告いたします。

2 分析対象データ

令和4年度前期科目のうち、下記条件をすべて満たす科目を対象としました。

- ・ 学部で開講された科目
- ・ 成績登録のあった科目
- ・ 講義科目（演習、実験、実習、インターンシップ、留学等ではない科目）
- ・ 「留学生対象の日本語に関する科目」ではない科目
- ・ 教職科目ではない科目
- ・ 成績が「秀」、「優」、「良」、「可」、「不合格」で判定される科目

3 分析方法

- ・ 成績を下表の通り GP に変換し、GP の平均値を算出しました。

成績	GP（数値）
秀	4.0
優	3.0
良	2.0
可	1.0
不可	0.0

- ・ 科目の所属学部別、分野別（科目コード※1先頭3桁で分類）に GP の平均値と、「秀」、「優」、「良」、「可」、「不合格」の割合をグラフにしました。

※1 科目コード…科目の学問分野や難易度を示した授業科目に付される番号

4 ご確認いただきたいポイント

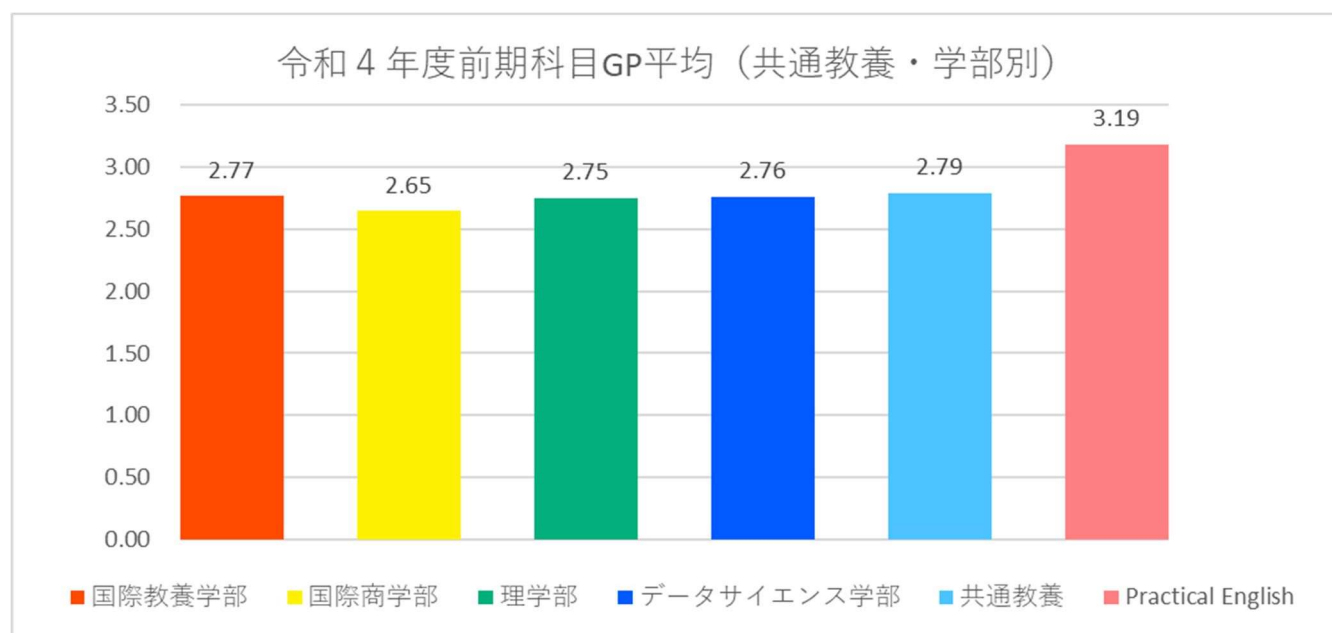
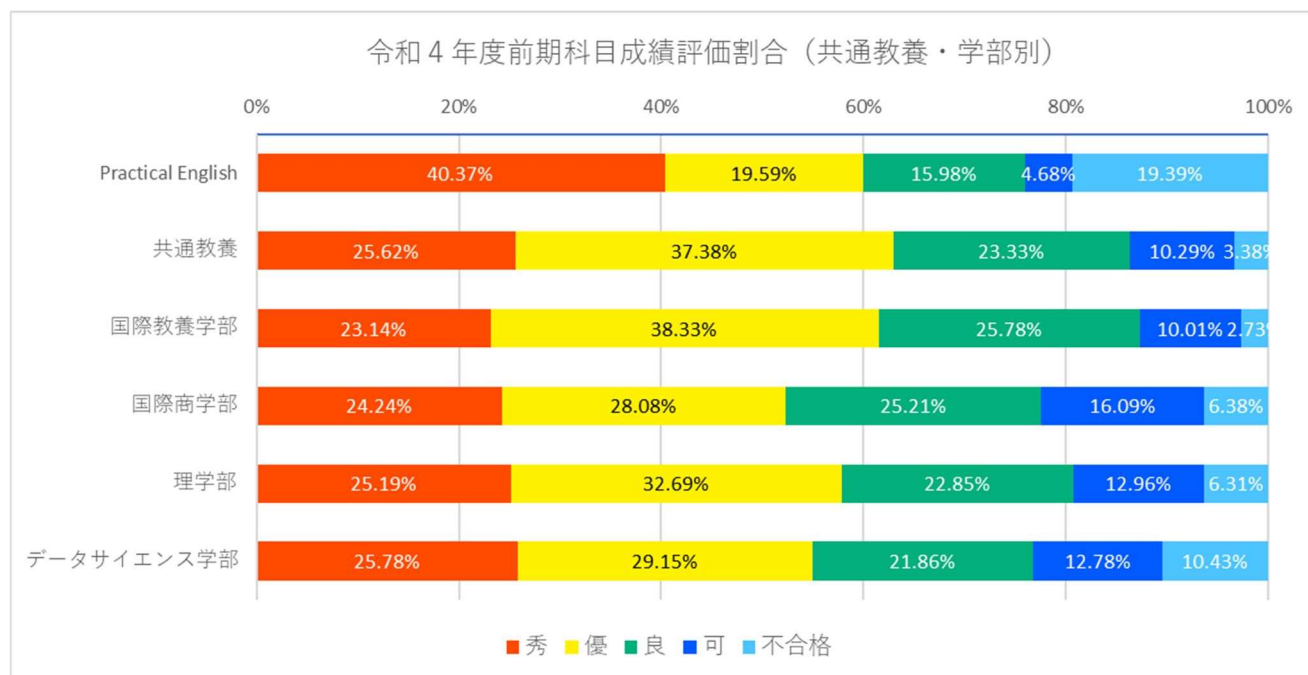
- ・ 現状の成績評価は「厳格かつ客観的に実施されている」といえるか。
（例）併行クラス間の成績等
- ・ 分野によって成績分布に差が見られるか。それは適正と判断できるものか。

5 分析結果

・ 全学部 ※()内は昨年度値

所属学部	科目数	GP 平均値	秀	優	良	可	不合格	成績登録者数
Practical English	36 (32)	3.19 (3.21)	40.37%	19.59%	15.98%	4.68%	19.39%	1206 (1187)
共通教養	167 (185)	2.79 (2.76)	25.62%	37.38%	23.33%	10.29%	3.38%	8776 (8882)
国際教養学部	145 (171)	2.77 (2.87)	23.14%	38.33%	25.78%	10.01%	2.73%	4565 (4700)
国際商学部	120 (125)	2.65 (2.61)	24.24%	28.08%	25.21%	16.09%	6.38%	4638 (4492)
理学部	60 (118)	2.75 (2.71)	25.19%	32.69%	22.85%	12.96%	6.31%	2198 (2493)
データサイエンス学部	29 (35)	2.76 (3.04)	25.78%	29.15%	21.86%	12.78%	10.43%	799 (1012)

・ 昨年度の GP 平均値と大幅な増減は見られなかった。

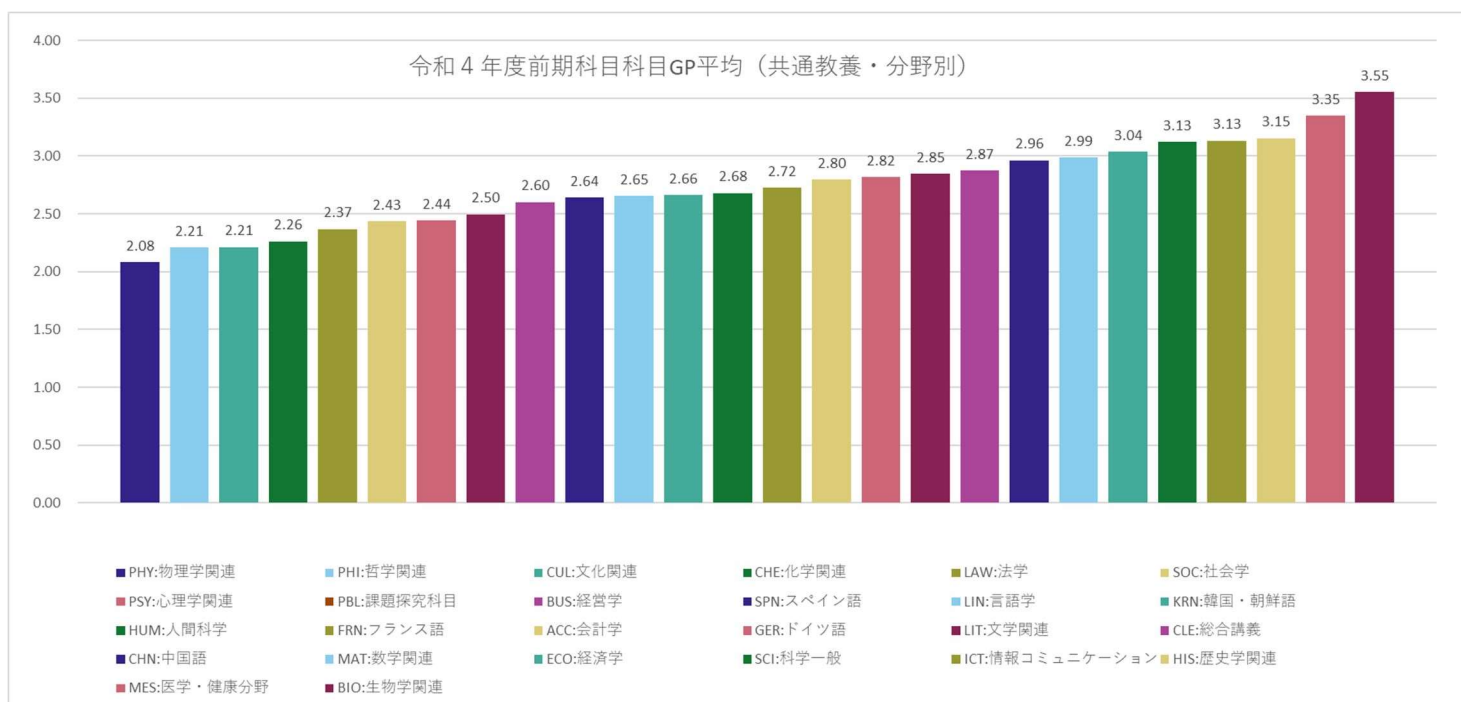
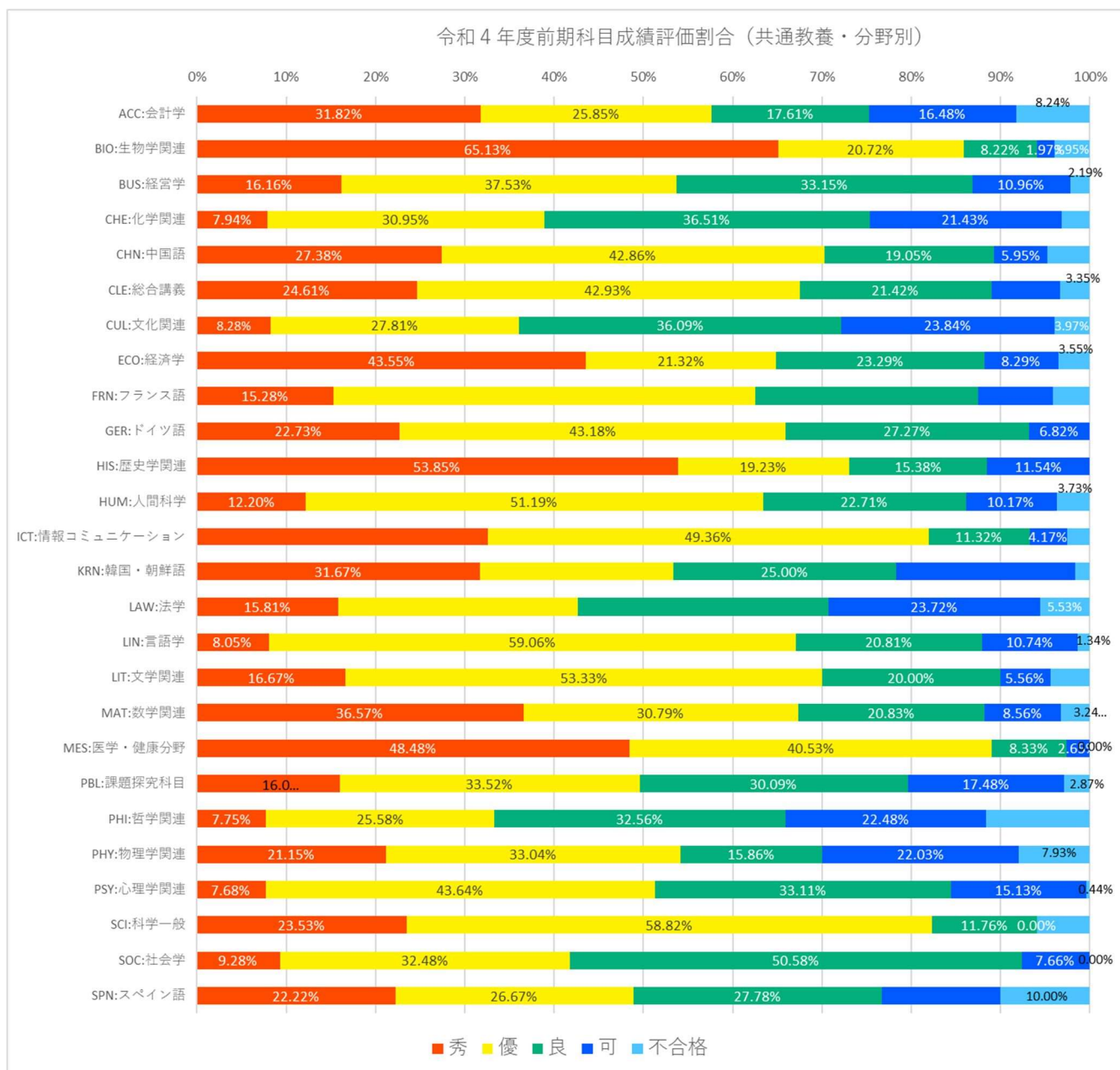


学部・分野別の平均値について

① 共通教養

所属学部	科目数	GP 平均値	秀	優	良	可	不合格	成績登録者数
共通教養	167 (185)	2.79 (2.87)	25.62%	37.38%	23.33%	10.29%	3.38%	8776 (8882)
ACC:会計学	8 (8)	2.80 (2.28)	31.82%	25.85%	17.61%	16.48%	8.24%	323 (314)
BIO:生物学関連	4 (4)	3.55 (1.88)	65.13%	20.72%	8.22%	1.97%	3.95%	292 (279)
BUS:経営学	6 (6)	2.60 (3.26)	16.16%	37.53%	33.15%	10.96%	2.19%	357 (359)
CHE:化学関連	1 (2)	2.26 (2.40)	7.94%	30.95%	36.51%	21.43%	3.17%	122 (124)
CHN:中国語	10 (10)	2.96 (2.88)	27.38%	42.86%	19.05%	5.95%	4.76%	80 (90)
CLE:総合講義	23 (21)	2.87 (2.78)	24.61%	42.93%	21.42%	7.69%	3.35%	2337 (2400)
CUL:文化関連	1 (1)	2.21 (2.40)	8.28%	27.81%	36.09%	23.84%	3.97%	290 (289)
ECO:経済学	13 (14)	3.04 (2.89)	43.55%	21.32%	23.29%	8.29%	3.55%	733 (707)
FRN:フランス語	5 (7)	2.72 (2.69)	15.28%	47.22%	25.00%	8.33%	4.17%	69 (69)
GER:ドイツ語	4 (5)	2.82 (3.27)	22.73%	43.18%	27.27%	6.82%	0.00%	44 (57)
HIS:歴史学関連	2 (2)	3.15 (2.20)	53.85%	19.23%	15.38%	11.54%	0.00%	26 (51)
HUM:人間科学	1 (1)	2.68 (2.87)	12.20%	51.19%	22.71%	10.17%	3.73%	284 (291)
ICT:情報コミュニケーション	24 (32)	3.13 (3.04)	32.59%	49.36%	11.32%	4.17%	2.56%	912 (923)
KRN:韓国・朝鮮語	6 (7)	2.66 (2.82)	31.67%	21.67%	25.00%	20.00%	1.67%	59 (44)
LAW:法学	6 (6)	2.37 (2.70)	15.81%	26.88%	28.06%	23.72%	5.53%	239 (267)
LIN:言語学	2 (2)	2.65 (2.46)	8.05%	59.06%	20.81%	10.74%	1.34%	147 (141)
LIT:文学関連	4 (4)	2.85 (2.53)	16.67%	53.33%	20.00%	5.56%	4.44%	86 (103)
MAT:数学関連	7 (10)	2.99 (2.99)	36.57%	30.79%	20.83%	8.56%	3.24%	418 (397)
MES:医学・健康分野	2 (2)	3.35 (2.48)	48.48%	40.53%	8.33%	2.65%	0.00%	264 (273)
PBL:課題探究科目	14 (15)	2.50 (2.75)	16.05%	33.52%	30.09%	17.48%	2.87%	339 (522)
PHI:哲学関連	1 (2)	2.21 (2.36)	7.75%	25.58%	32.56%	22.48%	11.63%	114 (134)
PHY:物理学関連	6 (6)	2.08 (2.05)	21.15%	33.04%	15.86%	22.03%	7.93%	259 (274)
PSY:心理学関連	6 (6)	2.44 (2.74)	7.68%	43.64%	33.11%	15.13%	0.44%	454 (336)
SCI:科学一般	1 (1)	3.13 (3.50)	23.53%	58.82%	11.76%	0.00%	5.88%	16 (6)
SOC:社会学	4 (4)	2.43 (2.73)	9.28%	32.48%	50.58%	7.66%	0.00%	431 (359)
SPN:スペイン語	6 (7)	2.64 (2.50)	22.22%	26.67%	27.78%	13.33%	10.00%	81 (73)

・「ACC:会計学」「BIO:生物学関連」「HIS:歴史学関連」「MES:医学・健康分野」において、GP 平均値が上昇し、「BUS:経営学」「SCI:科学一般」において低下している。



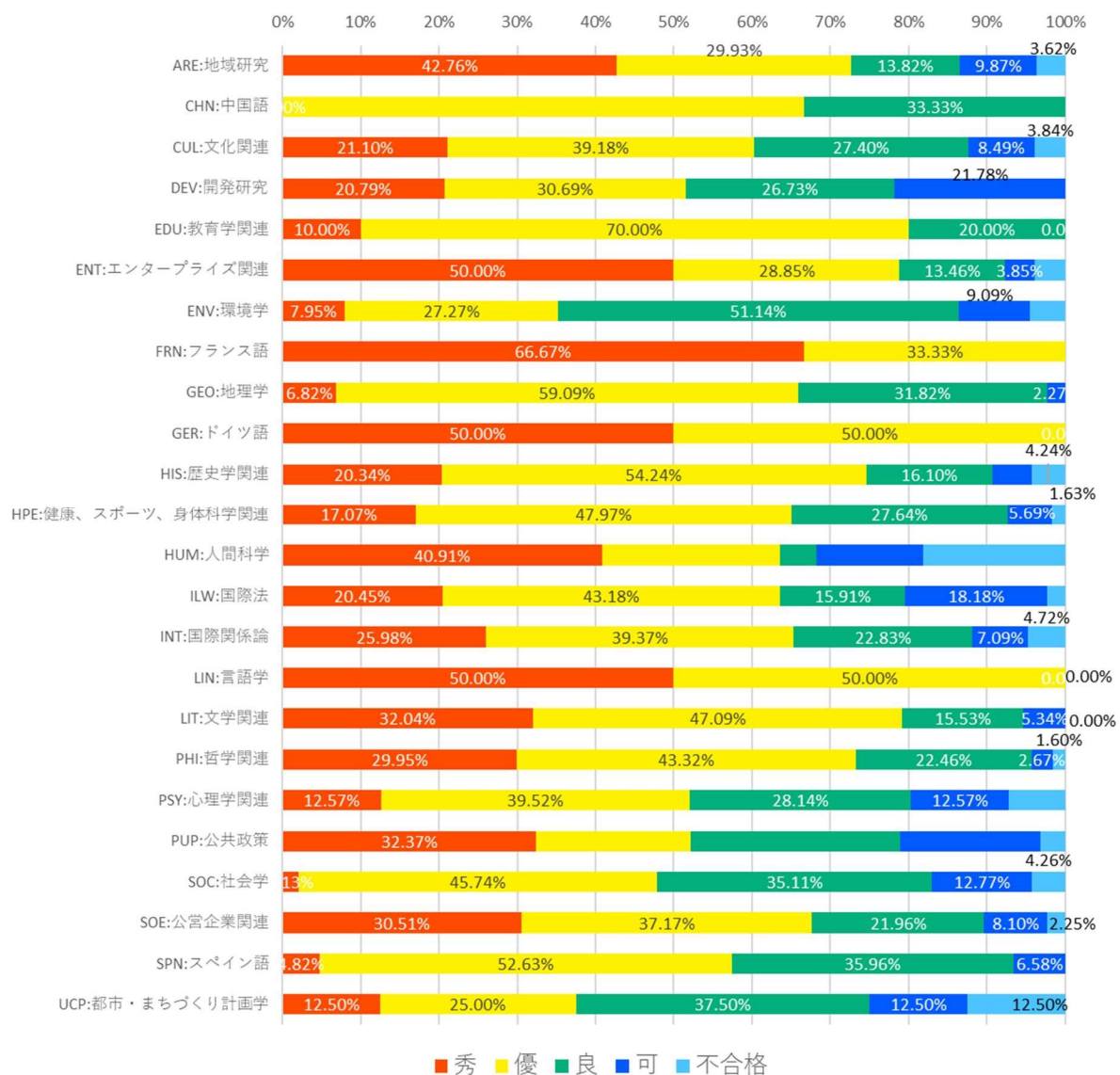
1. 分析結果

・国際教養学部 ※()内は昨年度値

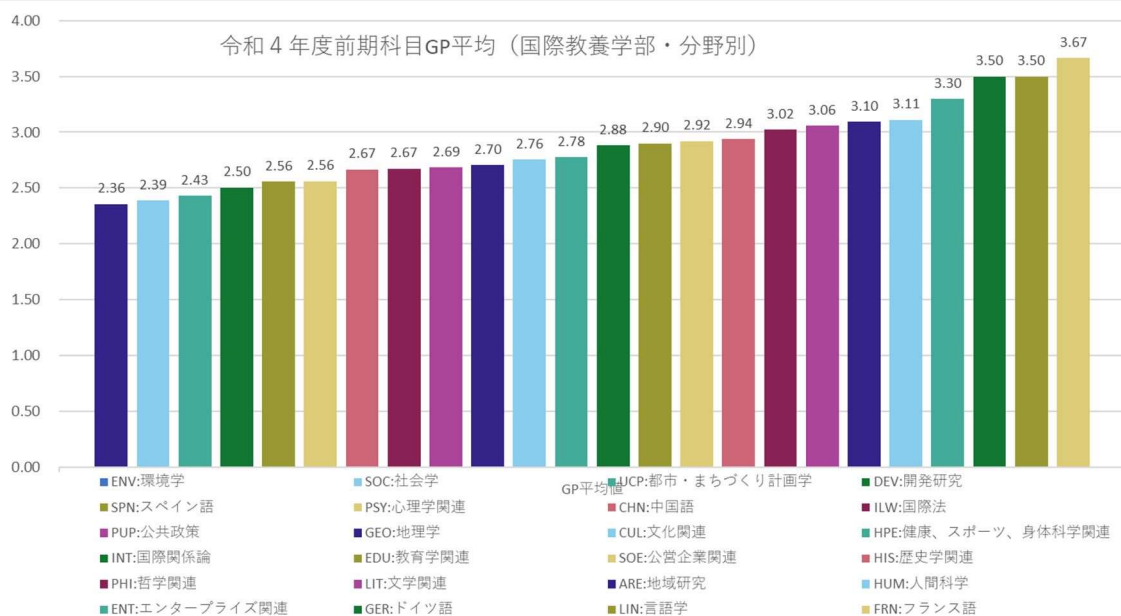
所属学部	科目数	GP 平均値	秀	優	良	可	不合格	成績登録者数
国際教養学部	145 (171)	2.77 (2.85)	23.14%	38.33%	25.78%	10.01%	2.73%	4565 (4700)
ARE:地域研究	7 (8)	3.10 (3.09)	42.76%	29.93%	13.82%	9.87%	3.62%	293 (258)
CHN:中国語	1 (1)	2.67 (2.00)	0.00%	66.67%	33.33%	0.00%	0.00%	3 (1)
CUL:文化関連	22 (23)	2.76 (2.76)	21.10%	39.18%	27.40%	8.49%	3.84%	351 (397)
DEV:開発研究	2 (1)	2.50 (2.63)	20.79%	30.69%	26.73%	21.78%	0.00%	101 (72)
EDU:教育学関連	1 (2)	2.90 (3.00)	10.00%	70.00%	20.00%	0.00%	0.00%	10 (10)
ENT:エンタープライズ関連	2 (2)	3.30 (3.67)	50.00%	28.85%	13.46%	3.85%	3.85%	50 (42)
ENV:環境学	3 (4)	2.36 (3.12)	7.95%	27.27%	51.14%	9.09%	4.55%	84 (82)
FRN:フランス語	1 (1)	3.67 (3.67)	66.67%	33.33%	0.00%	0.00%	0.00%	3 (3)
GEO:地理学	2 (5)	2.70 (2.40)	6.82%	59.09%	31.82%	2.27%	0.00%	44 (82)
GER:ドイツ語	1 (1)	3.50 (3.00)	50.00%	50.00%	0.00%	0.00%	0.00%	2 (5)
HIS:歴史学関連	8 (10)	2.94 (2.63)	20.34%	54.24%	16.10%	5.08%	4.24%	113 (178)
HPE:健康、スポーツ、身体科学関連	2 (2)	2.78 (2.77)	17.07%	47.97%	27.64%	5.69%	1.63%	121 (127)
HUM:人間科学	2 (3)	3.11 (1.53)	40.91%	22.73%	4.55%	13.64%	18.18%	18 (17)
ILW:国際法	4 (2)	2.67 (2.96)	20.45%	43.18%	15.91%	18.18%	2.27%	43 (32)
INT:国際関係論	9 (14)	2.88 (2.96)	25.98%	39.37%	22.83%	7.09%	4.72%	121 (114)
KRN:韓国・朝鮮語	1 (―)	3.50 (―)	50.00%	50.00%	0.00%	0.00%	0.00%	6 (―)
LIN:言語学	6 (8)	3.06 (3.09)	32.04%	47.09%	15.53%	5.34%	0.00%	206 (92)
LIT:文学関連	12 (14)	3.02 (3.25)	29.95%	43.32%	22.46%	2.67%	1.60%	184 (224)
PHI:哲学関連	6 (9)	2.56 (2.86)	12.57%	39.52%	28.14%	12.57%	7.19%	155 (132)
PSY:心理学関連	7 (8)	2.69 (2.66)	32.37%	19.73%	26.83%	17.96%	3.10%	437 (569)
PUP:公共政策	2 (3)	2.39 (2.44)	2.13%	45.74%	35.11%	12.77%	4.26%	90 (84)
SOC:社会学	22 (25)	2.92 (2.92)	30.51%	37.17%	21.96%	8.10%	2.25%	1086 (996)
SOE:公営企業関連	6 (7)	2.56 (3.06)	4.82%	52.63%	35.96%	6.58%	0.00%	228 (243)
SPN:スペイン語	1 (1)	2.43 (2.50)	12.50%	25.00%	37.50%	12.50%	12.50%	7 (12)
UCP:都市・まちづくり計画学	15 (17)	2.49 (2.86)	23.14%	38.33%	25.78%	10.01%	2.73%	809 (928)

・「CHN:中国語」「HUM:人間科学」において GP 平均値が上昇し、「ENV:環境学」「SOE:公営企業関連」において GP 平均値が低下している。

令和4年度前期科目成績評価割合（国際教養学部・分野別）



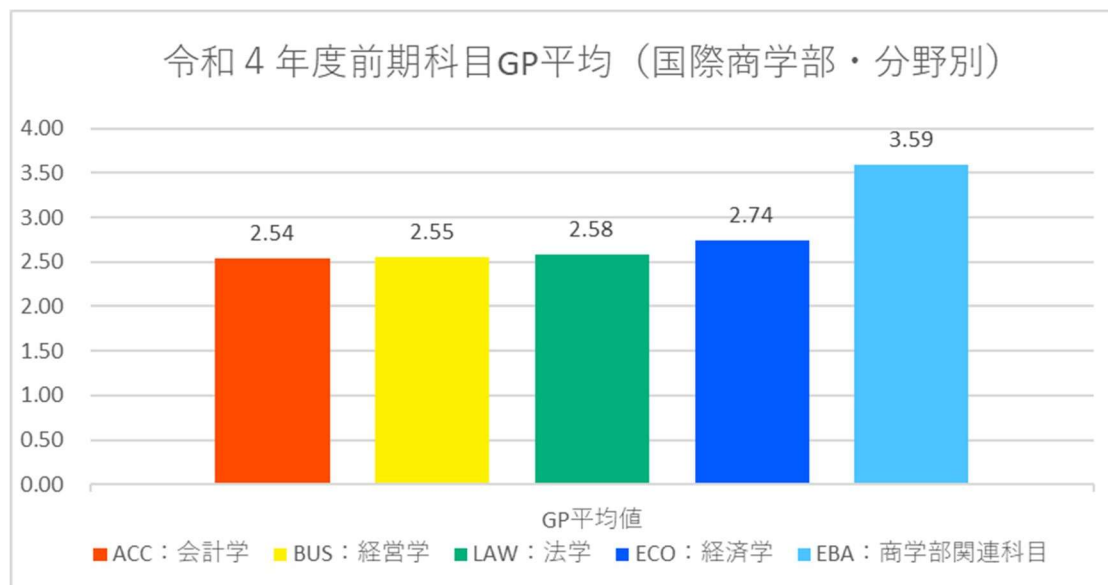
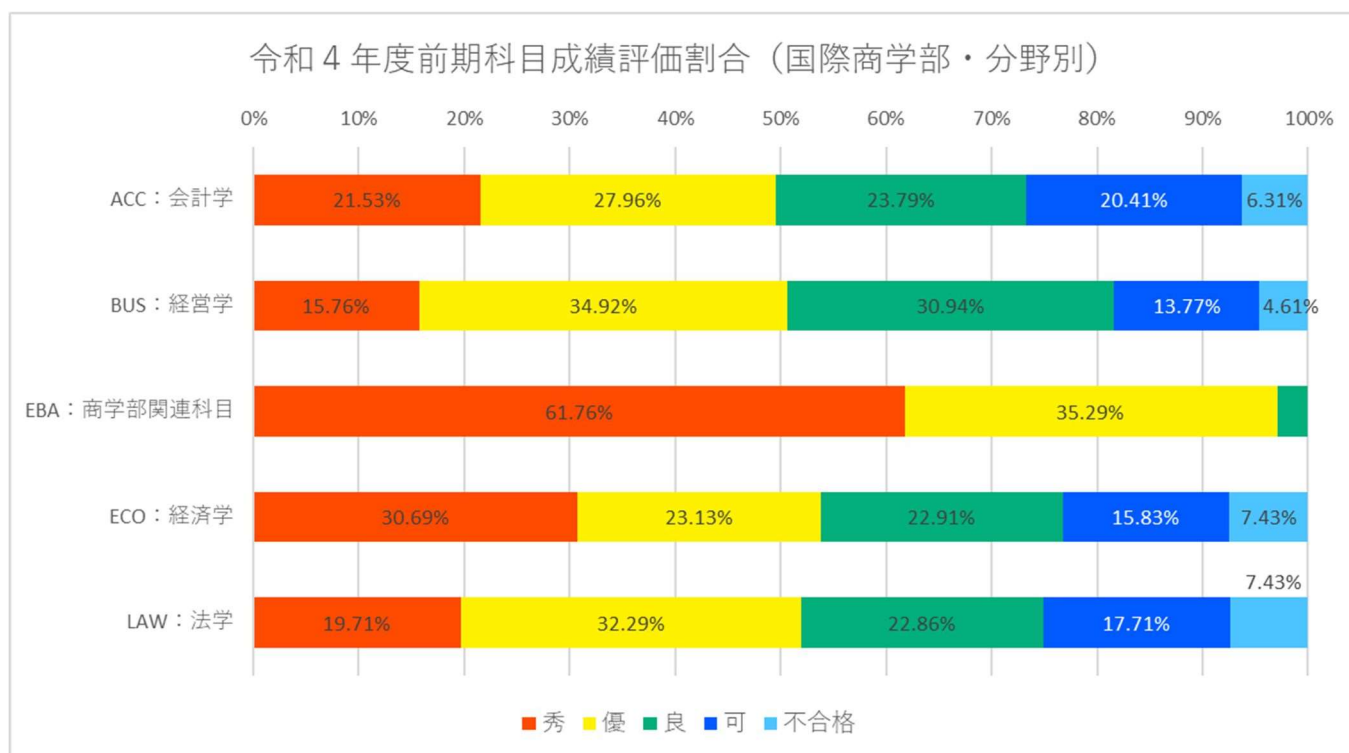
令和4年度前期科目GP平均（国際教養学部・分野別）



・国際商学部 ※()内は昨年度値

所属学部	科目数	GP 平均値	秀	優	良	可	不合格	成績登録者数
国際商学部	120 (125)	2.65 (2.61)	24.24%	28.08%	25.21%	16.09%	6.38%	4638 (4492)
ACC:会計学	24 (26)	2.54 (2.28)	21.53%	27.96%	23.79%	20.41%	6.31%	831 (712)
BUS:経営学	23 (33)	2.55 (2.76)	15.76%	34.92%	30.94%	13.77%	4.61%	1344 (1775)
EBA:商学部関連科目	2 (2)	3.59 (3.58)	61.76%	35.29%	2.94%	0.00%	0.00%	34 (36)
ECO:経済学	56 (50)	2.74 (2.47)	30.69%	23.13%	22.91%	15.83%	7.43%	2105 (1678)
LAW:法学	15 (14)	2.58 (2.28)	19.71%	32.29%	22.86%	17.71%	7.43%	324 (291)

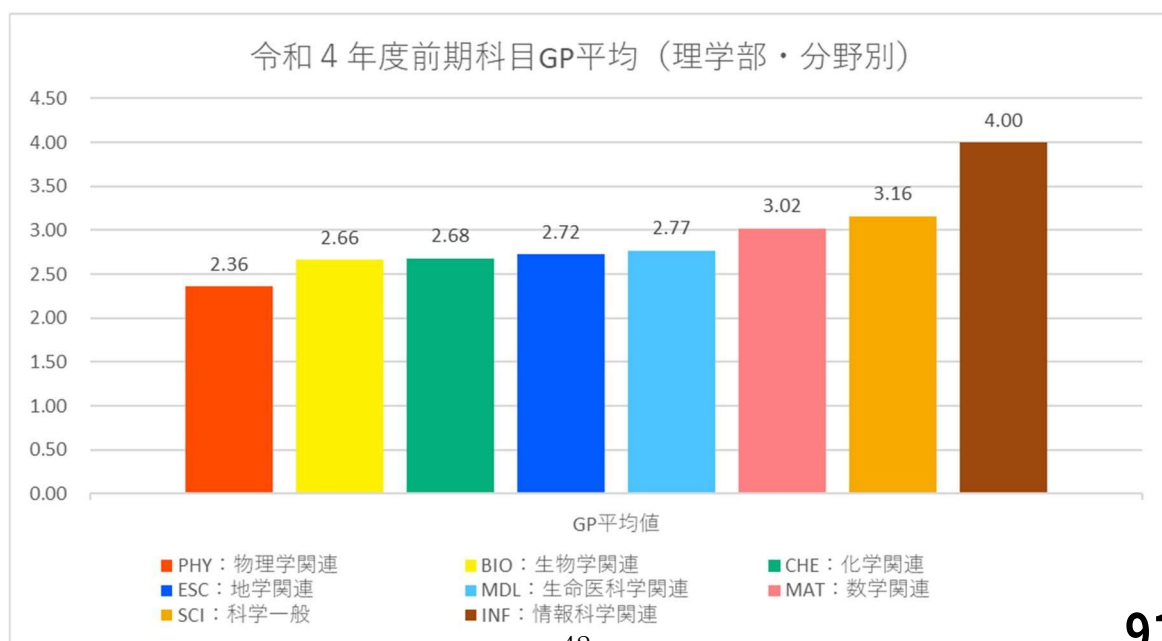
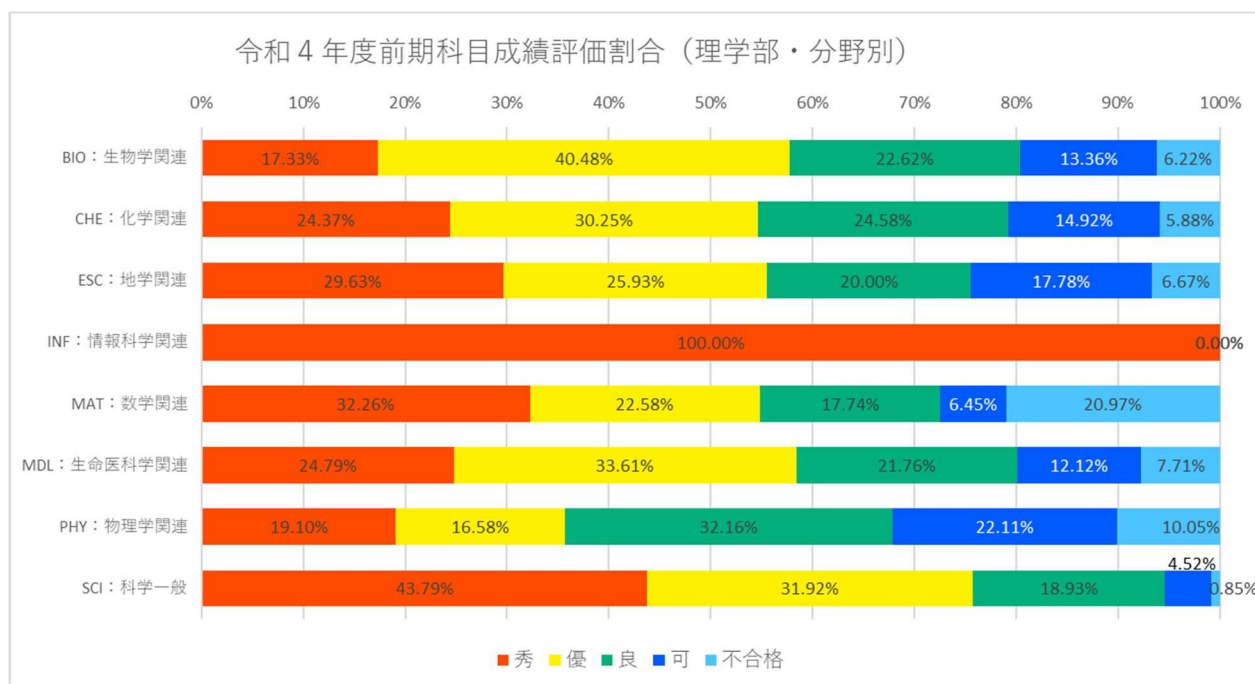
・「ACC：会計学」において、GP 平均値が上昇している。



・理学部 ※()内は昨年度値

所属学部	科目数	GP 平均値	秀	優	良	可	不合格	成績登録者数
理学部	60 (118)	2.75 (2.71)	25.19%	32.69%	22.85%	12.96%	6.31%	2198 (2493)
BIO : 生物学関連	18 (45)	2.66 (2.74)	17.33%	40.48%	22.62%	13.36%	6.22%	709 (832)
CHE : 化学関連	9 (14)	2.68 (2.40)	24.37%	30.25%	24.58%	14.92%	5.88%	448 (545)
ESC : 地学関連	3 (4)	2.72 (2.96)	29.63%	25.93%	20.00%	17.78%	6.67%	126 (113)
INF : 情報科学関連	1 (5)	4.00 (3.88)	100.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	1 (6)
MAT : 数学関連	4 (6)	3.02 (2.65)	32.26%	22.58%	17.74%	6.45%	20.97%	49 (79)
MDL : 生命医科学関連	10 (28)	2.77 (2.62)	24.79%	33.61%	21.76%	12.12%	7.71%	335 (397)
PHY : 物理学関連	8 (10)	2.36 (2.41)	19.10%	16.58%	32.16%	22.11%	10.05%	179 (217)
SCI : 科学一般	7 (6)	3.16 (3.49)	43.79%	31.92%	18.93%	4.52%	0.85%	351 (304)

・昨年度の GP 平均値と大幅な増減は見られなかった。



⑤

データサイエンス学部

科目コードが「DAT（データサイエンス）」のみであるため、個別のグラフを割愛
(全学分析結果のグラフを参照)

- ・昨年度の GP 平均値と大幅な増減は見られなかった。

令和 3 年度成績評価について

1 令和 3 年度成績評価結果の分布

(1) 令和 3 年度成績評価結果をもとに、共通教養・PE・各学部の成績分布を確認しました。

(2) 分析対象データ

令和 3 年度科目のうち、下記条件をすべて満たす科目を対象としました。

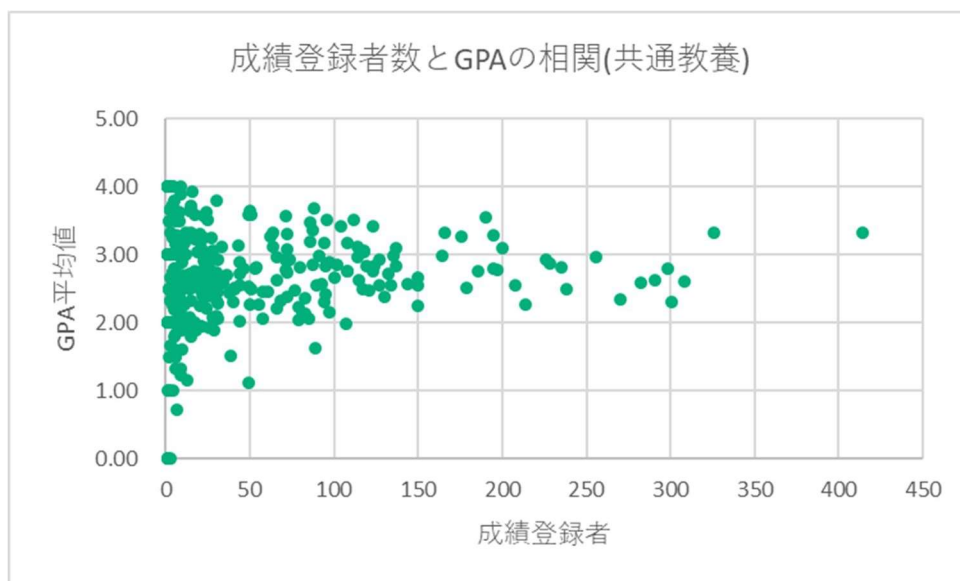
- ・ 学部で開講された科目
- ・ 成績登録のあった科目
- ・ 講義科目（演習、実験、実習、インターンシップ、留学等ではない科目）
- ・ 「留学生対象の日本語に関する科目」ではない科目
- ・ 教職科目ではない科目
- ・ 成績が「秀」、「優」、「良」、「可」、「不合格」で判定される科目

(3) 算出方法

成績を下表の通り GP に変換し、GP の平均値を算出しました。

成績	GP (数値)
秀	4.0
優	3.0
良	2.0
可	1.0
不可	0.0

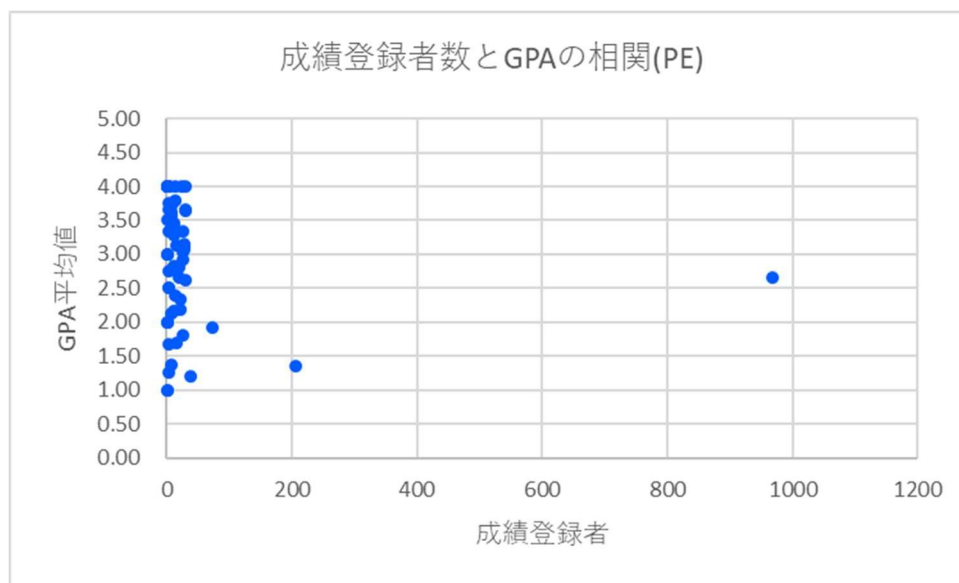
共通教養



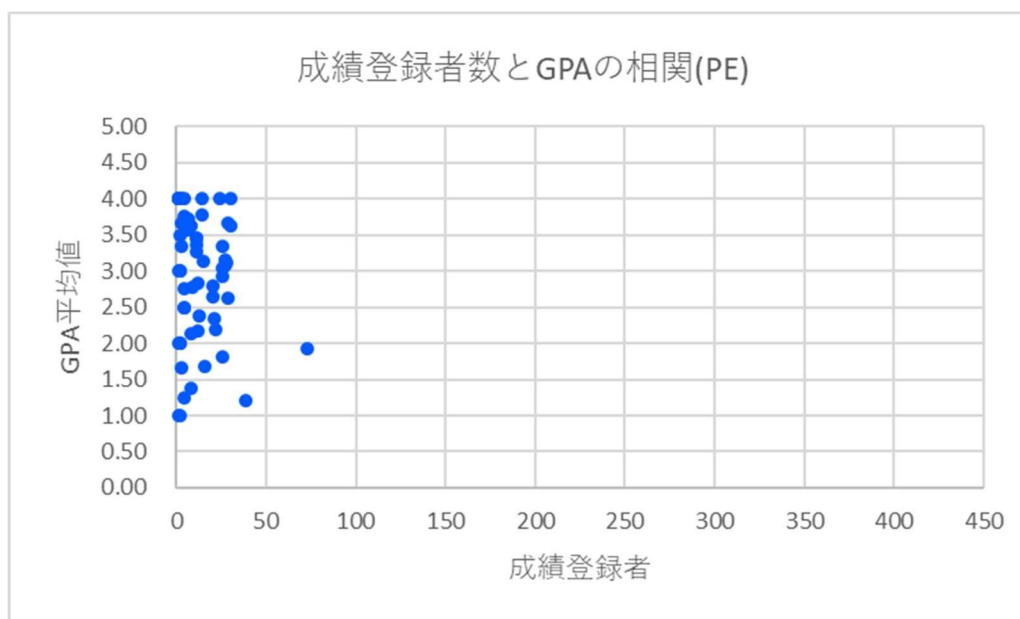
1

成績登録者数が少ない科目ではばらつきがあるが、50 人以上の科目は GPA 平均値「2.0～3.5」に推移している。

Practical English

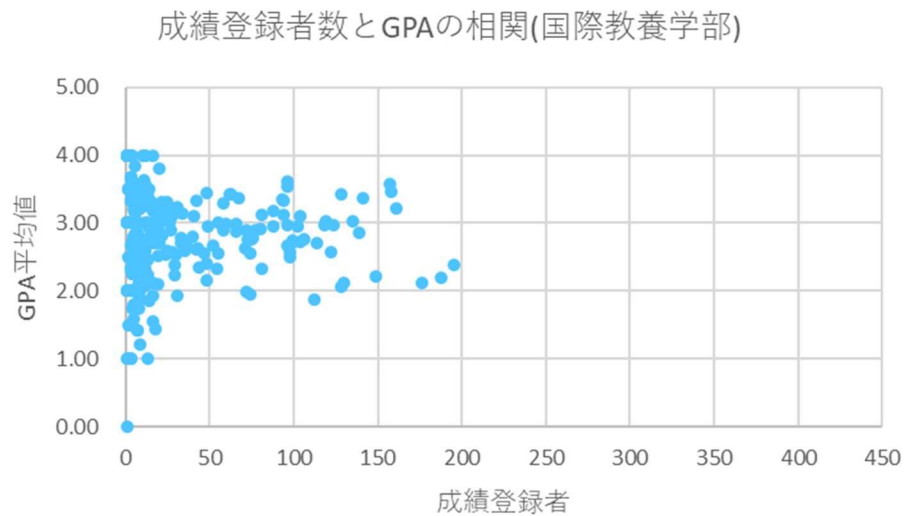


1 科目、PE 成績登録用の科目が混じっているため、該当科目を除外し、改めて確認を行った。



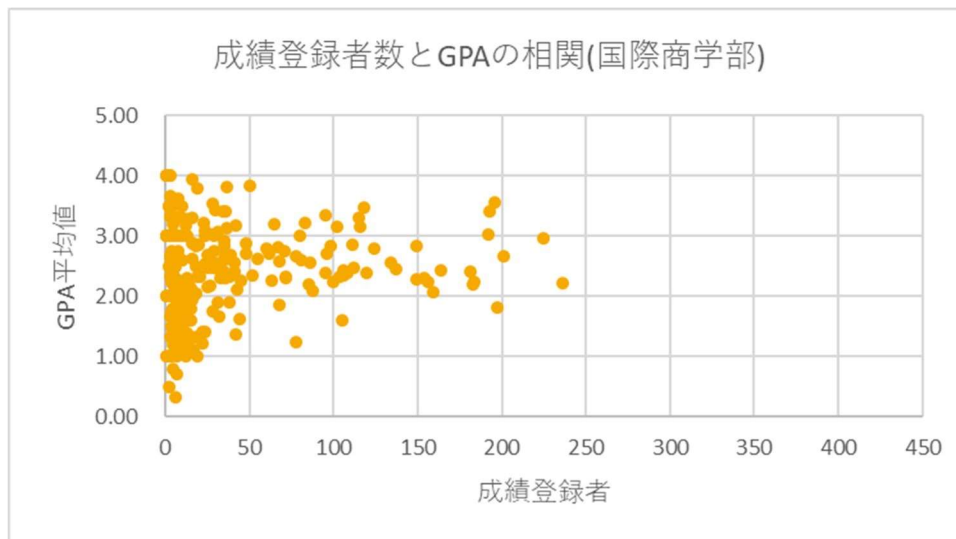
成績登録者数が少ない科目ではばらつきがあるが、10 人以上の科目の GPA 平均値は「1.5～4.0」となっている。

国際教養学部



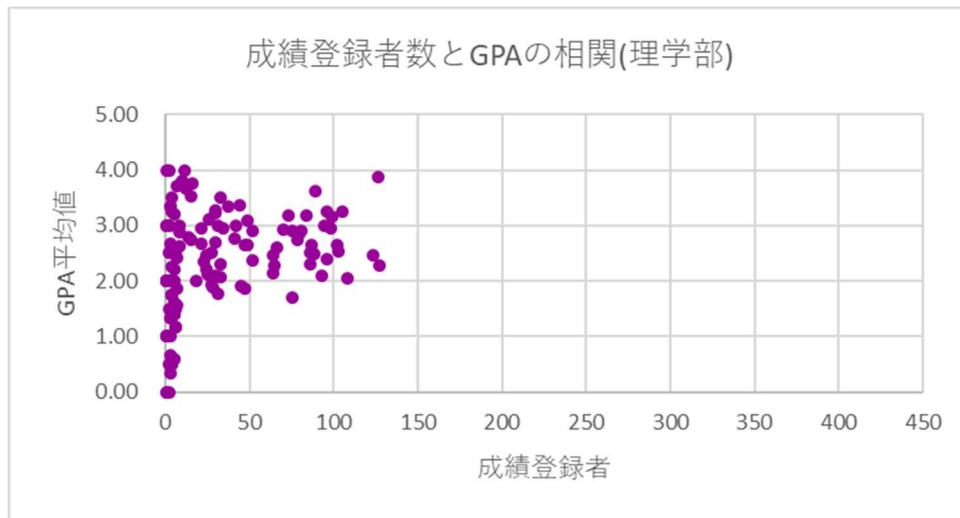
成績登録者数が少ない科目ではばらつきがあるが、50人以上の科目のGPA平均値は「2.0～3.5」となっている。

国際商学部



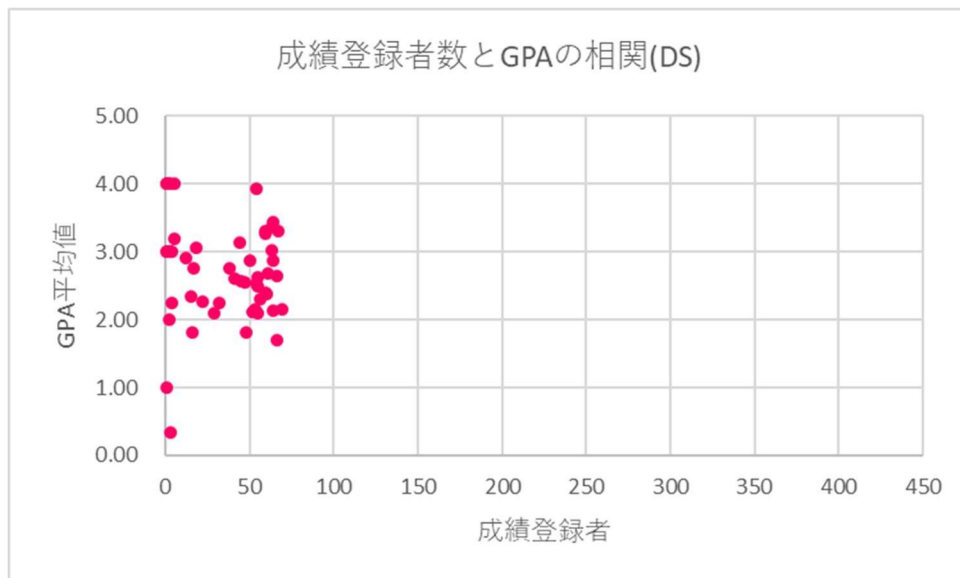
成績登録者数が少ない科目ではばらつきがあるが、50人以上の科目のGPA平均値は「1.0～3.5」となっている。

理学部



成績登録者数が少ない科目ではばらつきがあるが、25人以上の科目のGPA平均値は「2.0～3.5」となっている。

データサイエンス学部



成績登録者数が少ない科目ではばらつきがあるが、10人以上の科目のGPA平均値は「1.5～3.5」となっている。

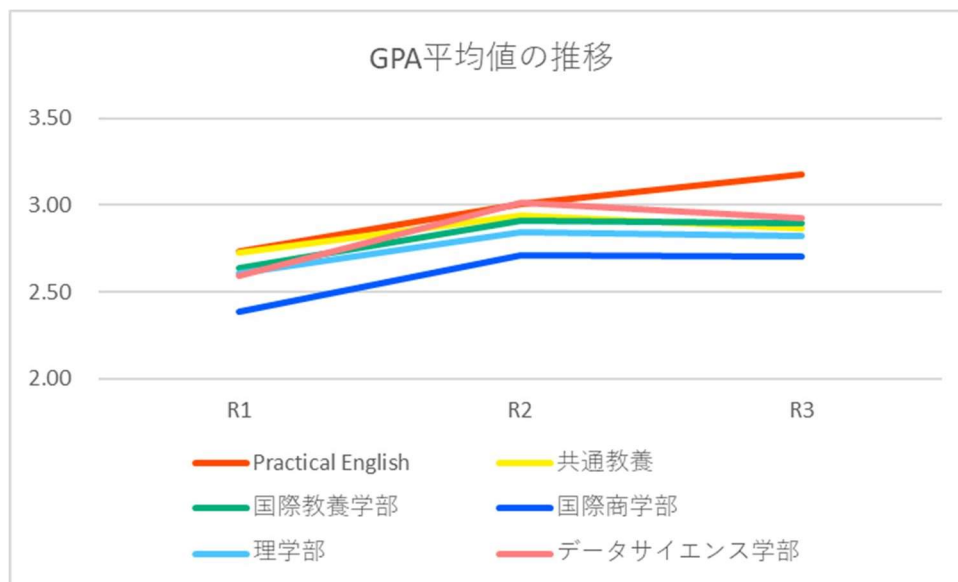
2 過去3年間のGPA平均値の推移

各学部全体のGPA平均値の推移を確認した。

なお、本集計は各科目の所属別に対象件数を計算し、GPA平均値を算出している。

過去3年間のGPA平均値

所属	令和元年度	令和2年度	令和3年度
Practical English	2.74	3.01	3.17
共通教養	2.73	2.94	2.87
国際教養学部	2.64	2.91	2.90
国際商学部	2.38	2.71	2.71
理学部	2.61	2.85	2.82
データサイエンス学部	2.59	3.01	2.93



- ・対面授業中心であった令和元年度と比較して、遠隔授業中心の令和2年度は、全体的にGPA平均値が上昇傾向となっている。
- ・令和3年度は原則対面授業、一部科目を遠隔授業で実施したが、学部によってGPA平均値の増減に違いが見られた。
- ・令和4年度は後期成績登録が完了次第、集計を実施する。

YCU 指標等の学修成果の AI 分析について

1 趣旨

令和 2 年度に採択された文部科学省「デジタル活用教育高度化事業」の中で、LMS を導入し、学期初めの学修目標の登録、学修管理、キャリア形成上の活動履歴に関するデータを蓄積することで、将来的には学生の履修計画やキャリア形成に関する助言等を AI によりサポートする制度またはシステムの構築を目指しています。

今年度は、YCU 指標を活用した試行分析テーマを決定し、分析・報告作業を進めましたので、結果を報告します。

2 今年度のテーマ

- (1) 学生の入試区分(学部・学系別)と学修成果項目の相関分析
- (2) 学生の海外留学思考と学修成果項目の相関分析

3 分析対象データ

(1) 対象者

令和 4 年度に在籍している国際教養学部、国際商学部、理学部、データサイエンス学部の学生

(2) 対象項目

- ・ YCU 指標得点
- ・ 入試区分
- ・ 留学経験
- ・ 総取得単位数
- ・ GPA 平均値

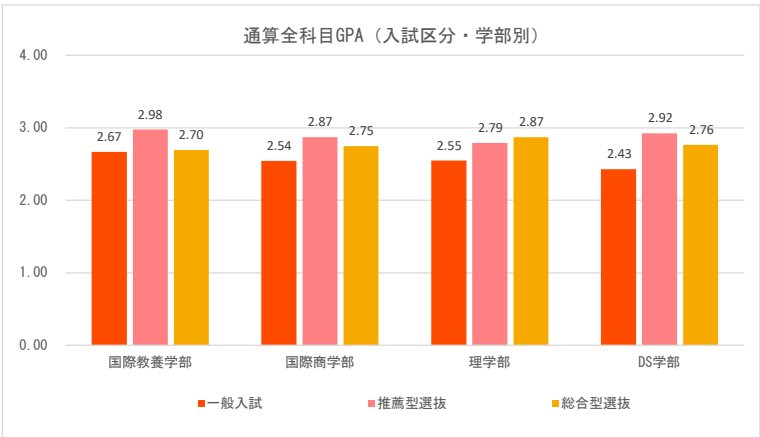
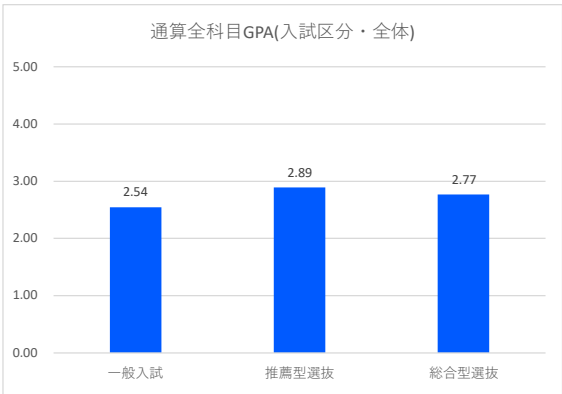
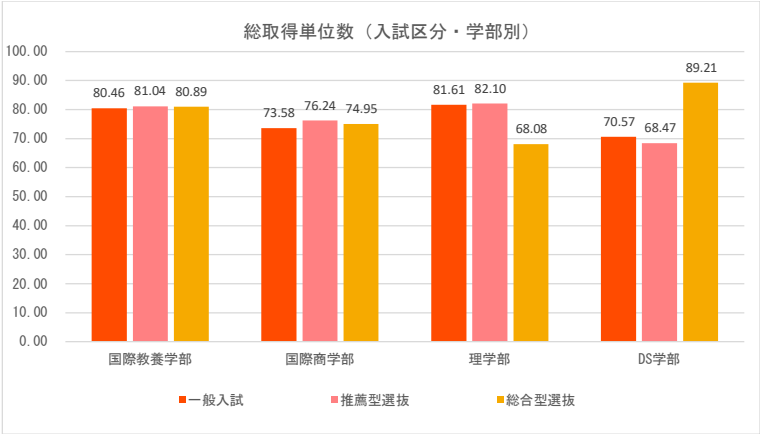
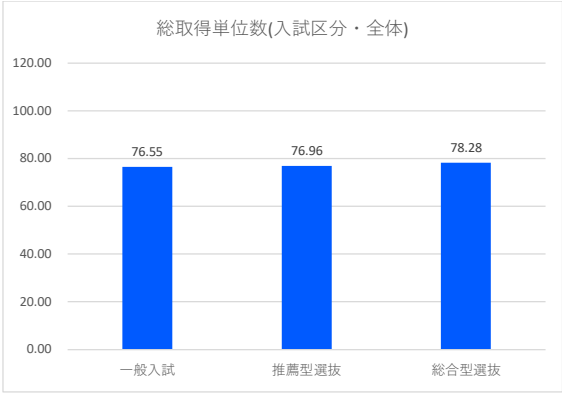
4 分析結果

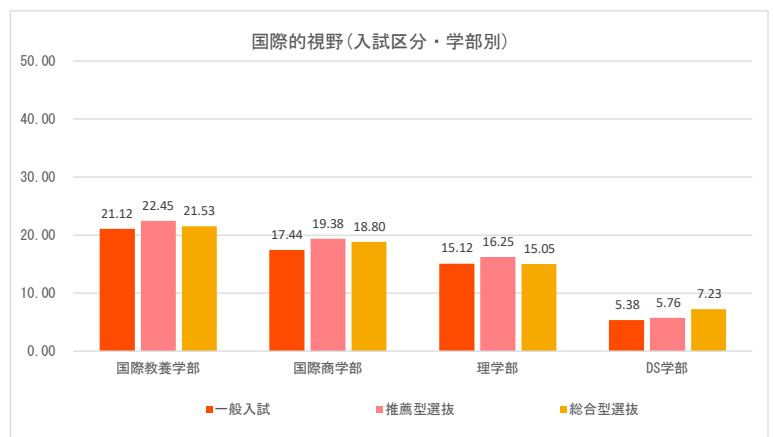
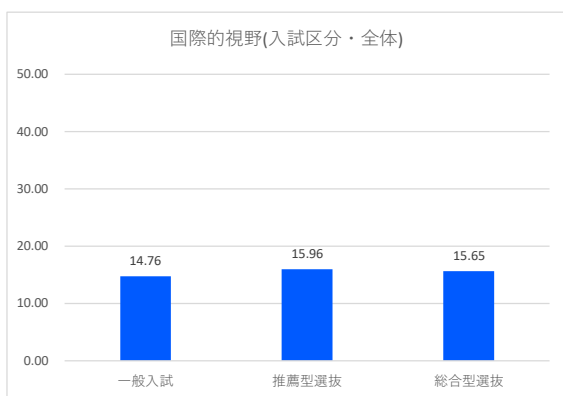
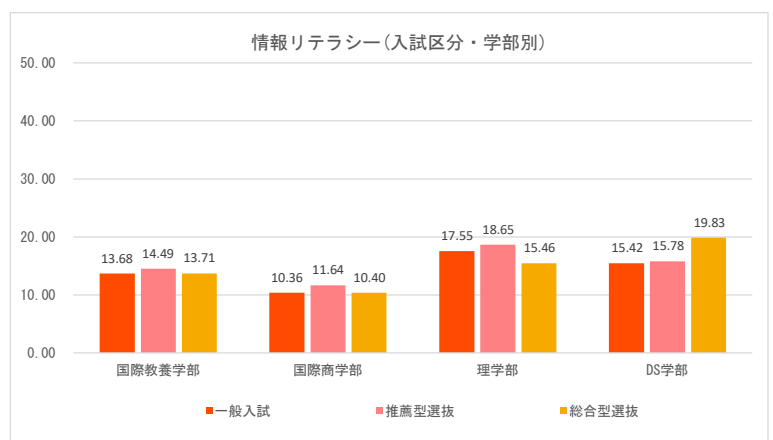
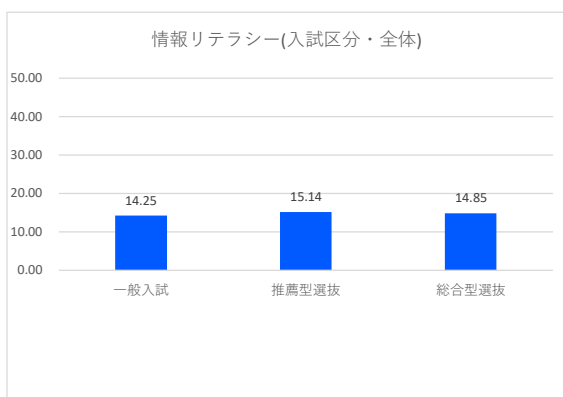
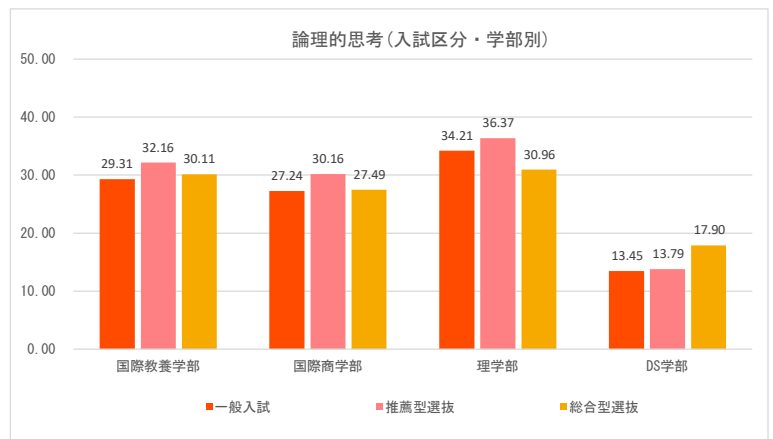
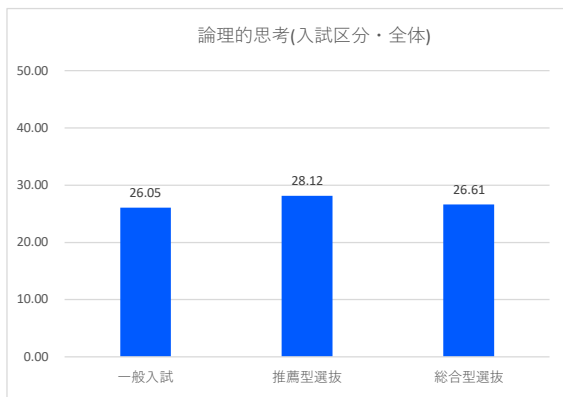
次ページ「AI 試行分析」結果のとおり

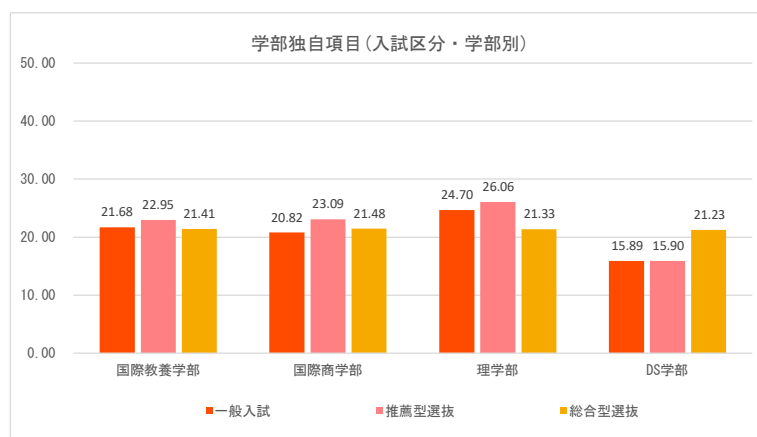
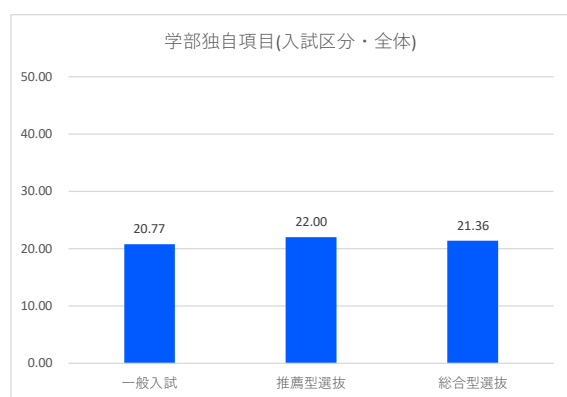
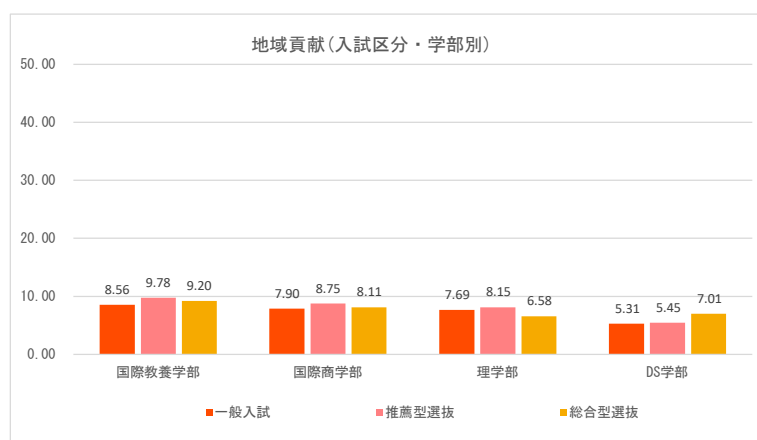
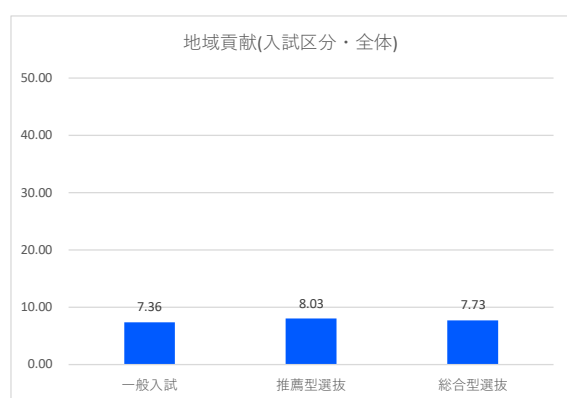
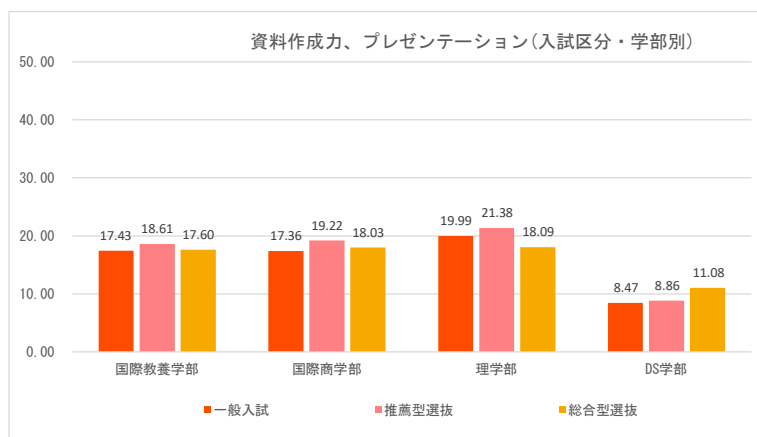
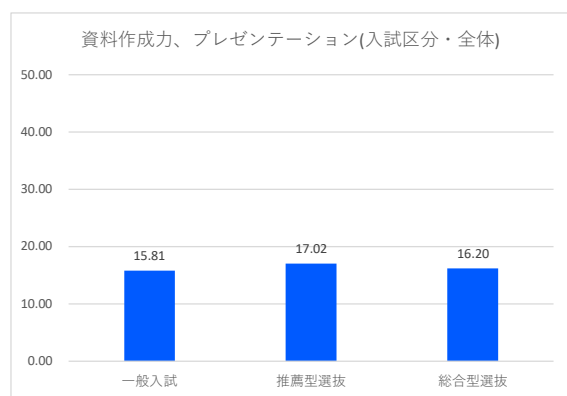
5 その他

令和 4 年度文部科学省補助金により、YCU-Board のシステムから YCU 指標と各項目のデータをダウンロードできる使用を構築した。併せて BI ツールを用いた AI 分析グラフ(散布図)の作成を試行的に委託実施した。こちらについては年度をまたいで教学 IR 検討ワーキングに報告を予定している。

(1) 学生の入試区分(学部別・3区分・全体)と学修成果項目の相関分析



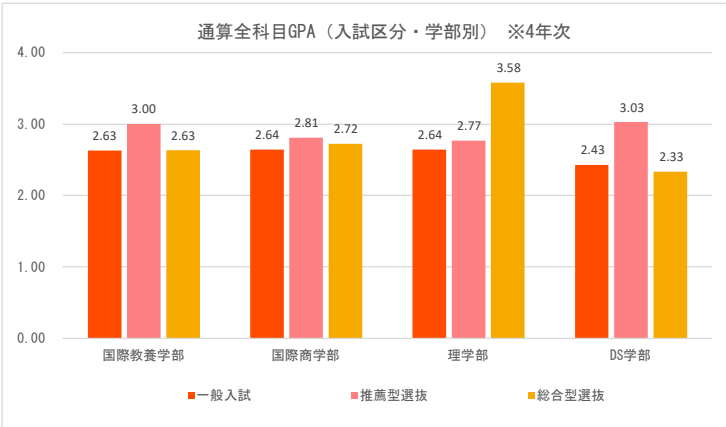
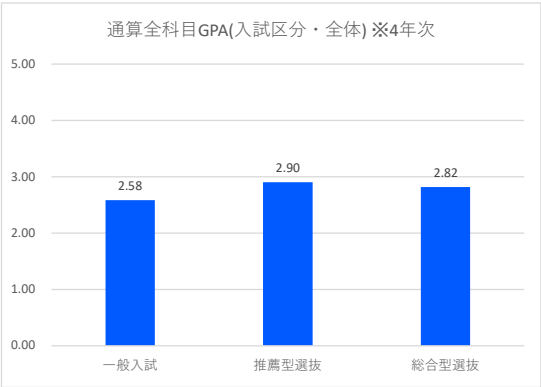
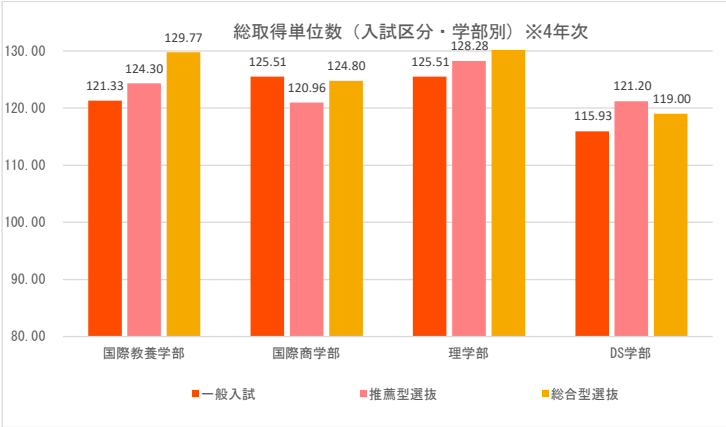
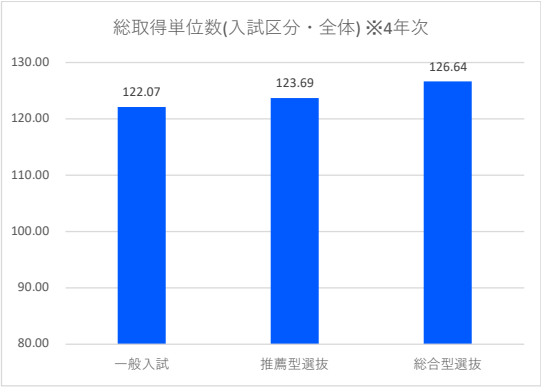


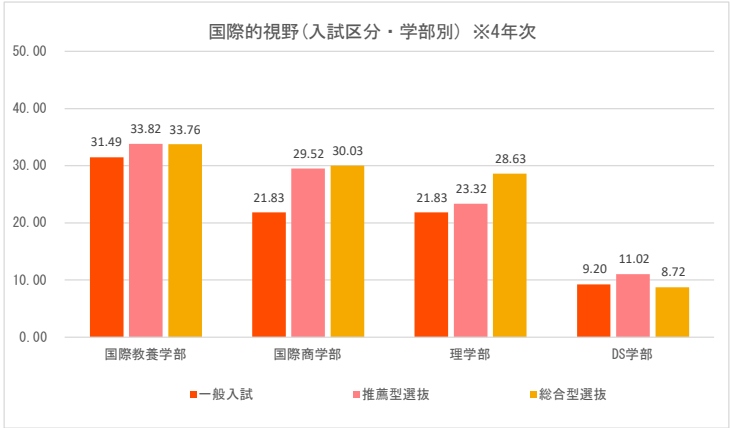
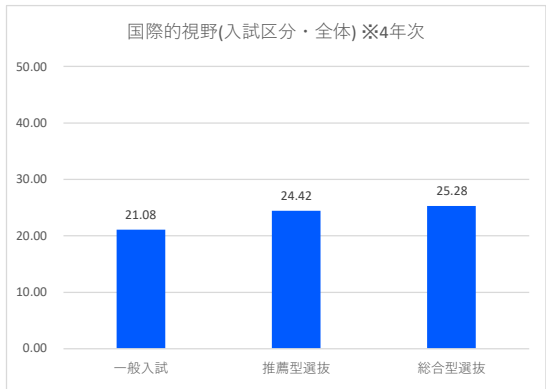
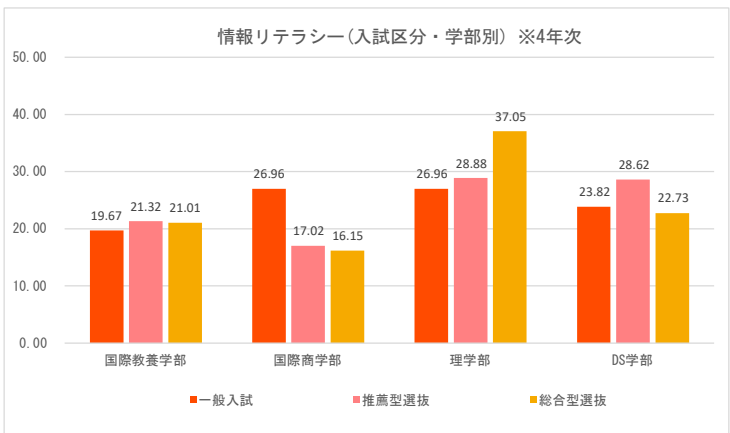
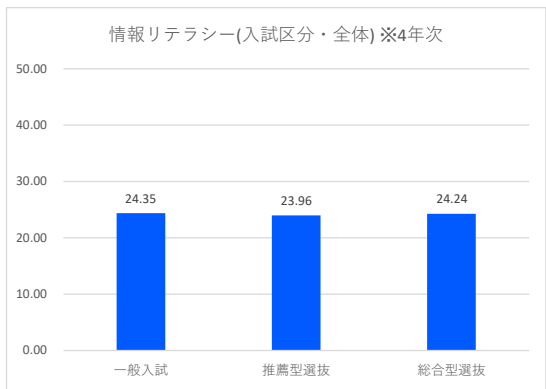
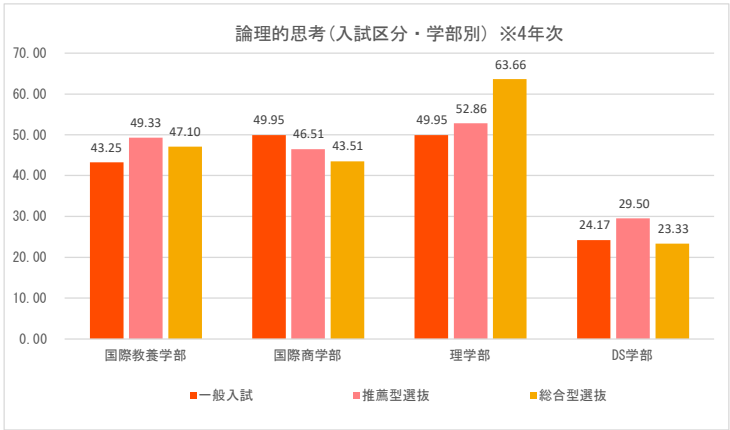
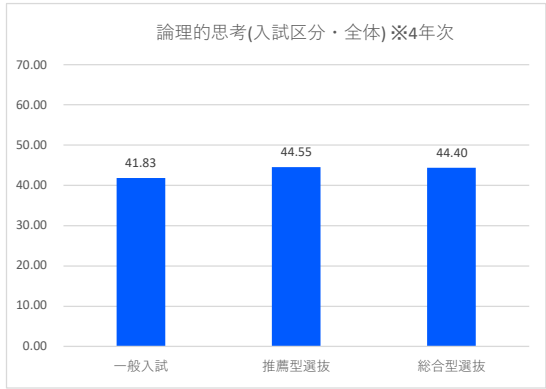


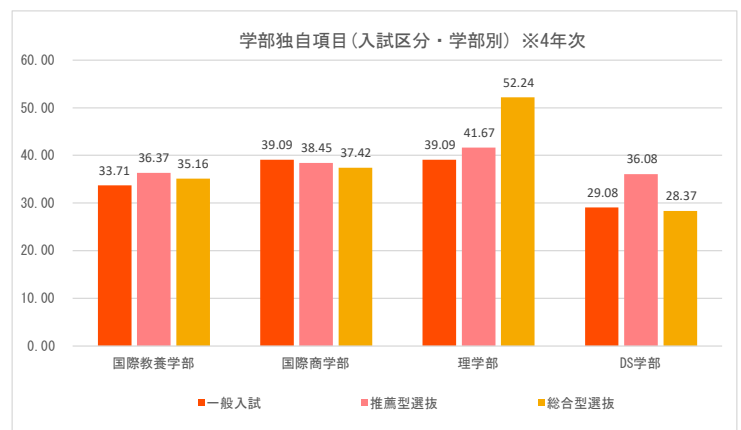
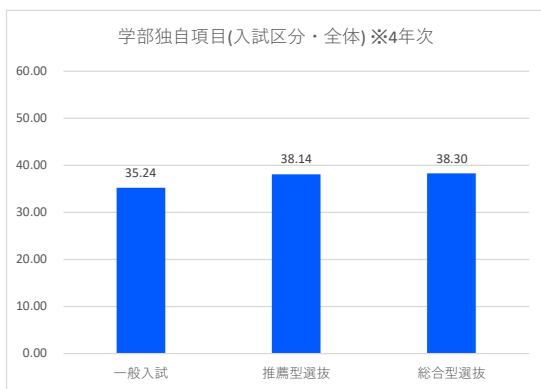
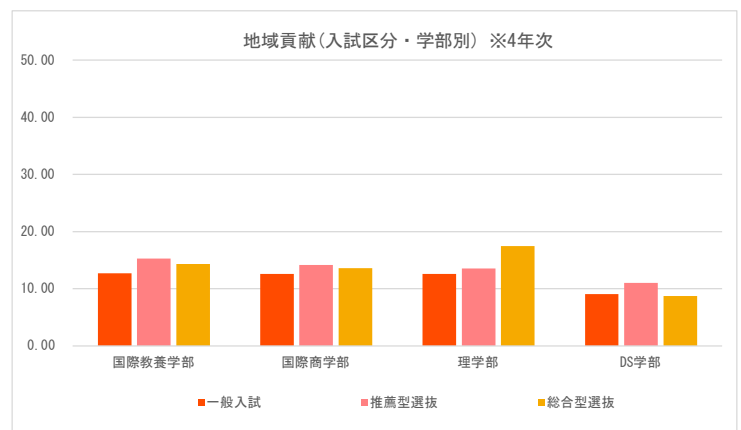
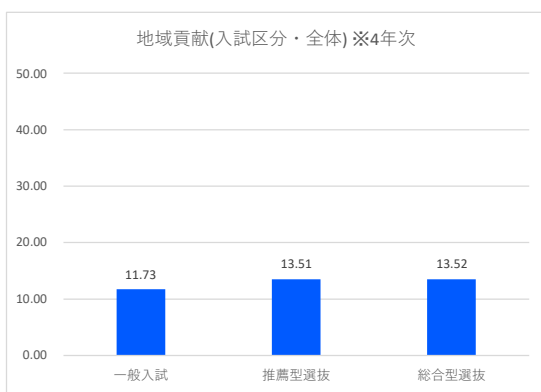
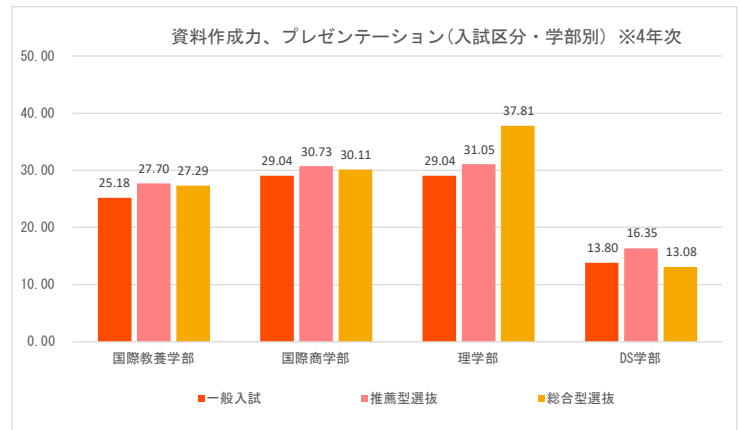
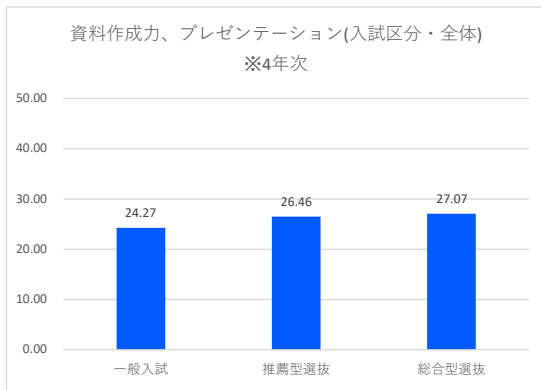
(1) 学生の入試区分(学部別・3区分・全体)と学修成果項目の相関分析

当該入試区分の学生が100名以上の区分（一般入試、推薦型選抜、総合型選抜）に絞って集計を行った。若干推薦型選抜の数値が高くみられるが、大きな差は見られなかった。

(1) 学生の入試区分(学部別・3区分・4年次生)と学修成果項目の相関分析





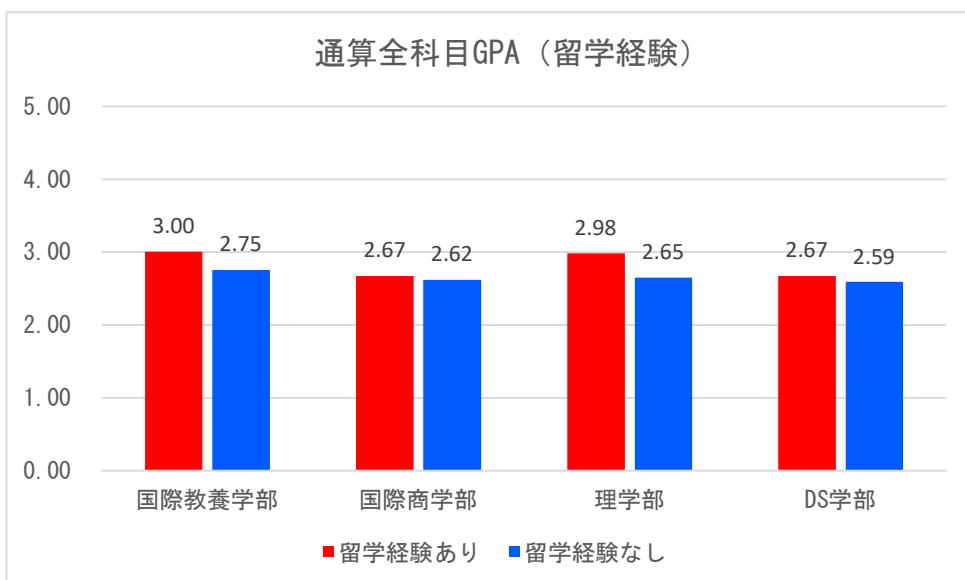
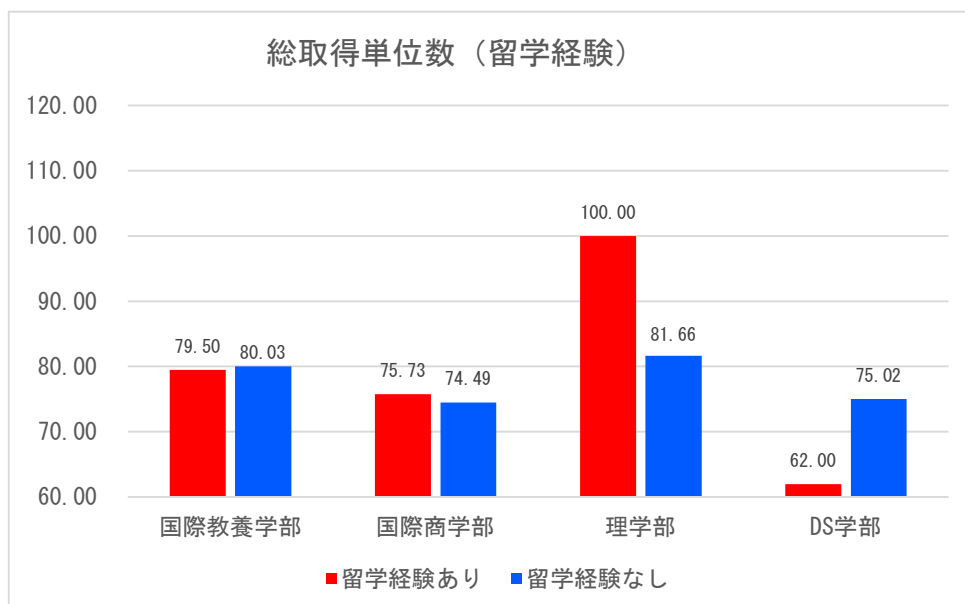


(1) 学生の入試区分(学部別・3区分・4年次生)と学修成果項目の相関分析

学修成果配分は学年が上がるごとに数値が上がるため、4年生に絞って集計を行った。

若干推薦型選抜の数値が高くみられるが、大きな差は見られなかった。

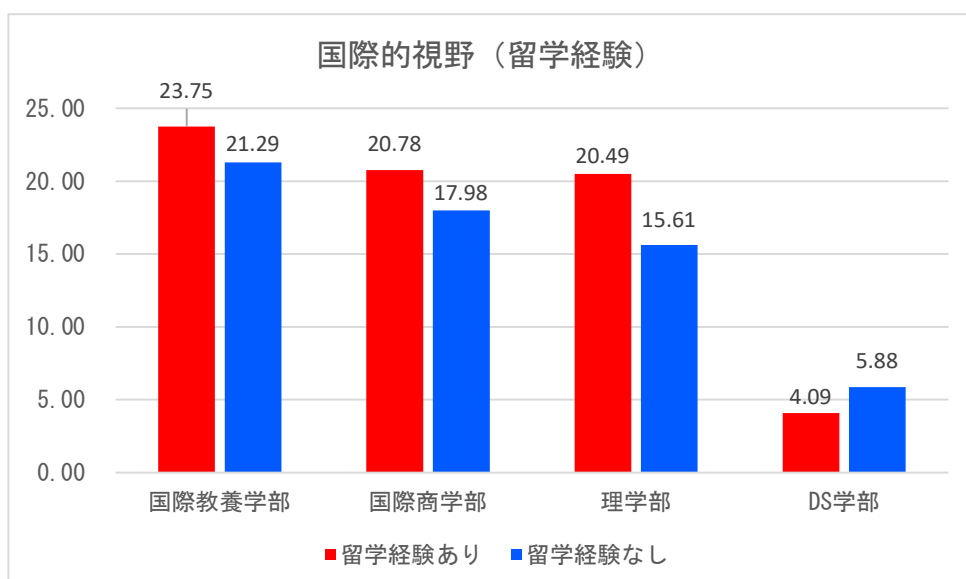
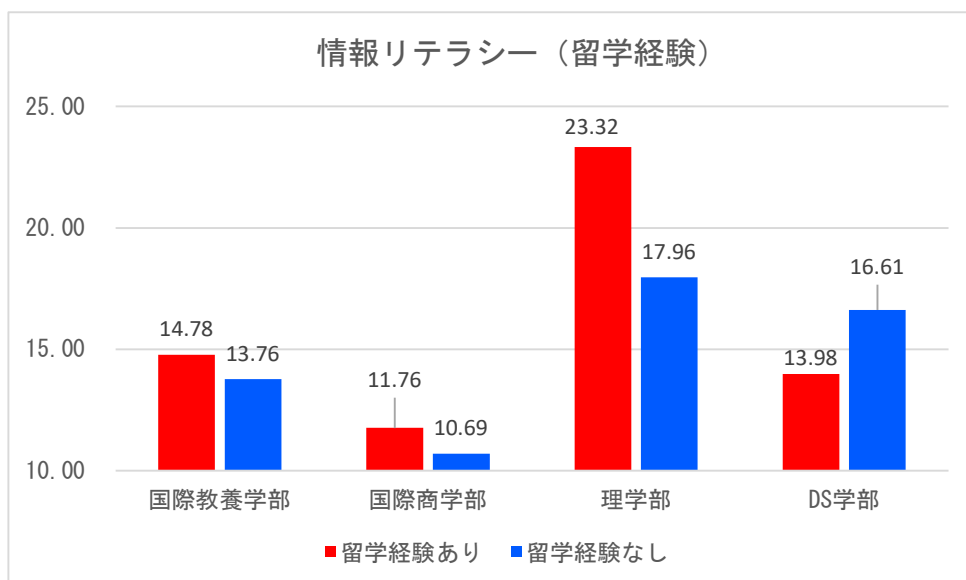
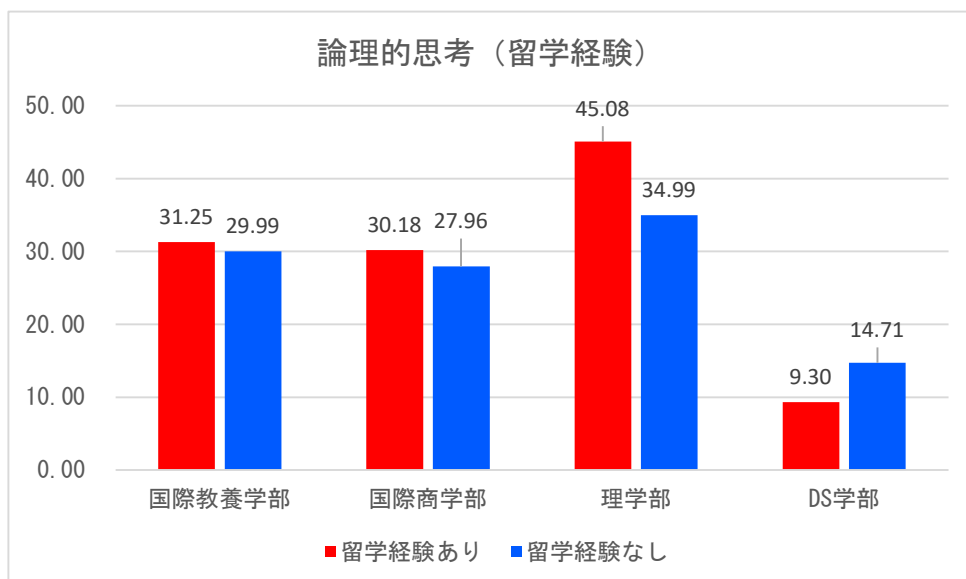
(2) 学生の海外留学思考と学修成果項目の相関分析（学部別・全体）

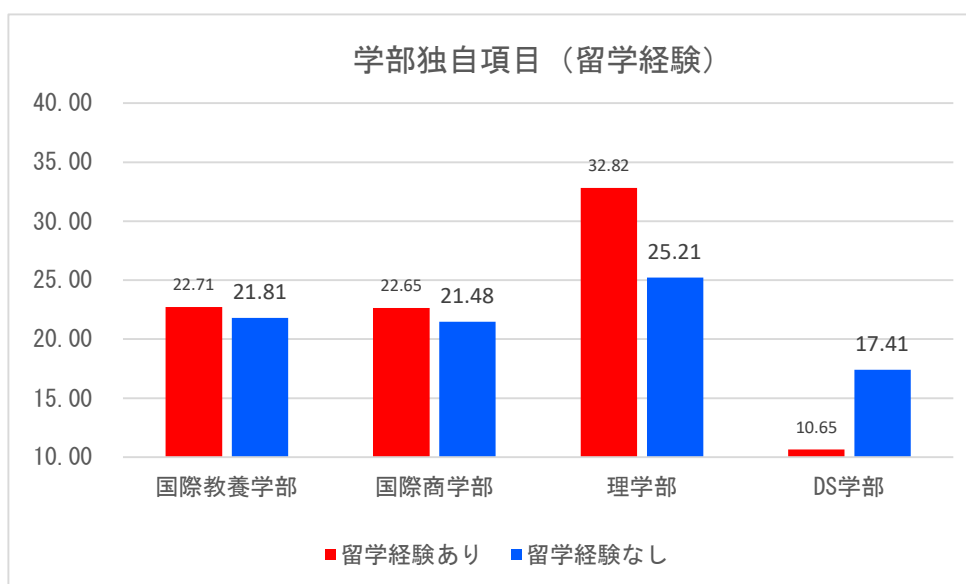
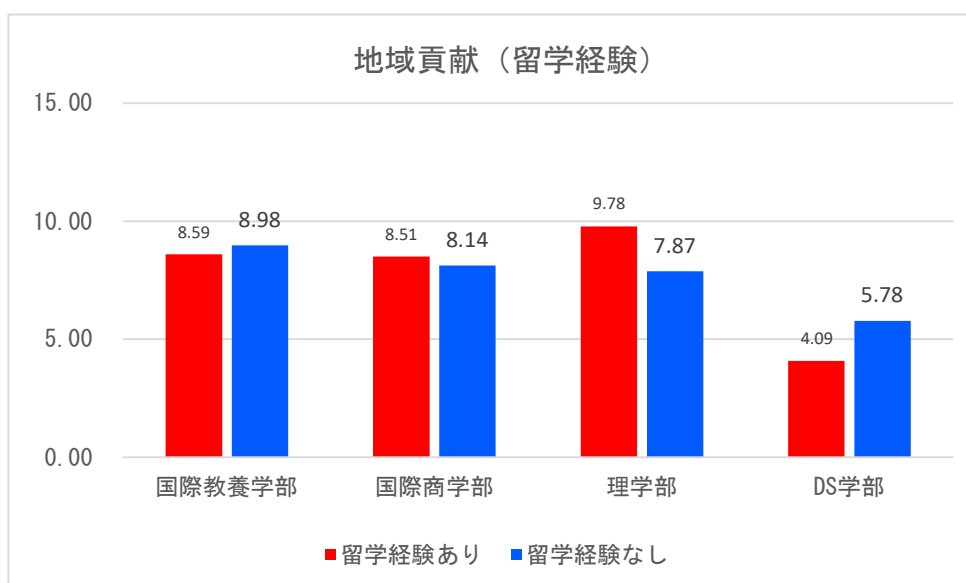
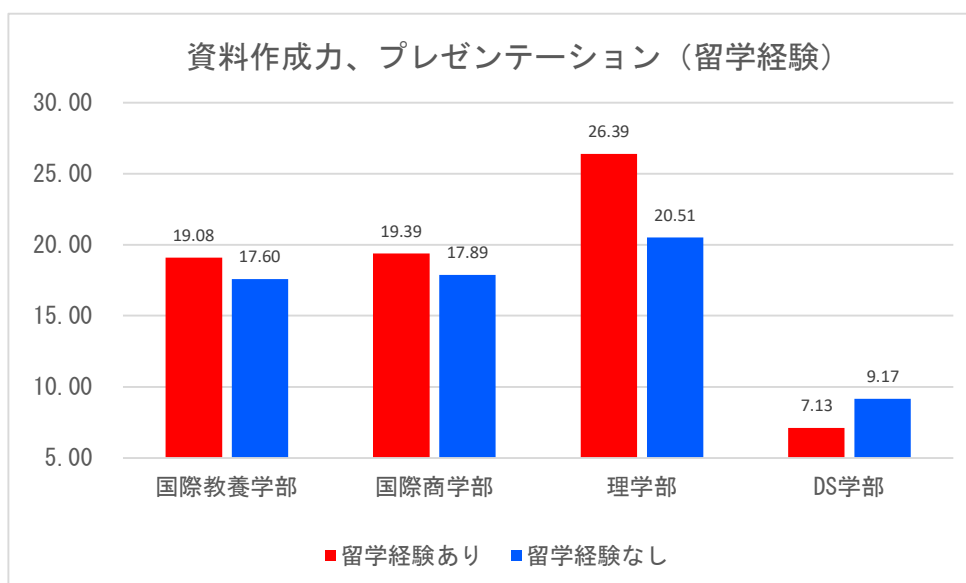


(2) 学生の海外留学思考と学修成果項目の相関分析（学部別・全体）

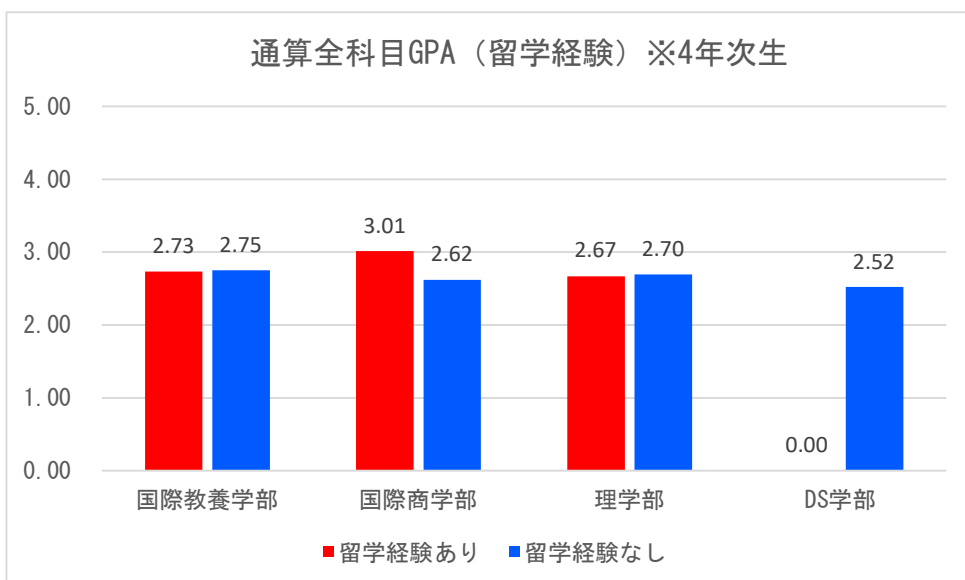
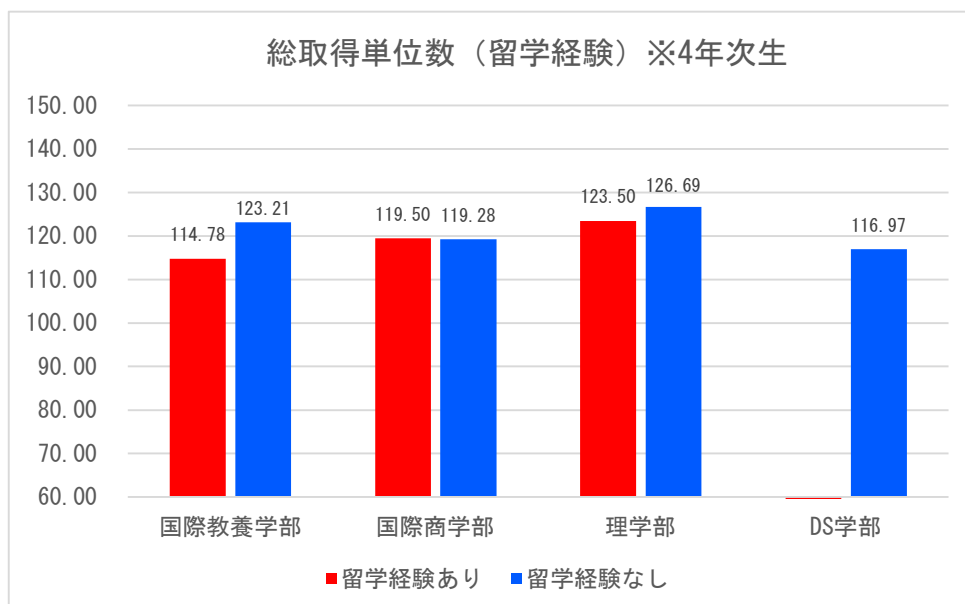
理学部、DS学部は留学経験者数が少なく、また理学部は3，4年生、DS学部は1，2年生の留学経験者が多いため、総取得単位数や学修成果配分の数値に影響が見られることから、学年別の比較を行う必要がある。

（検討結果はP59以降参照）





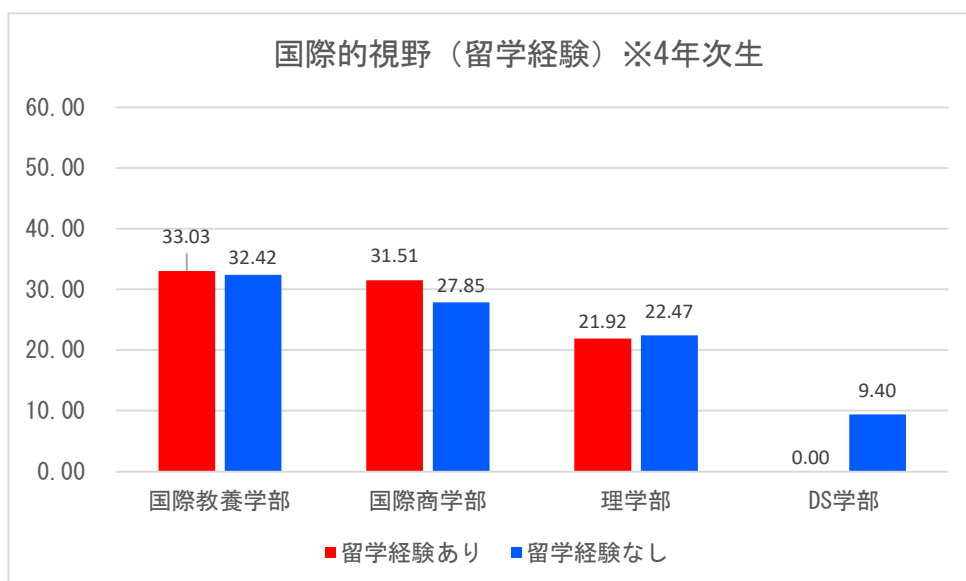
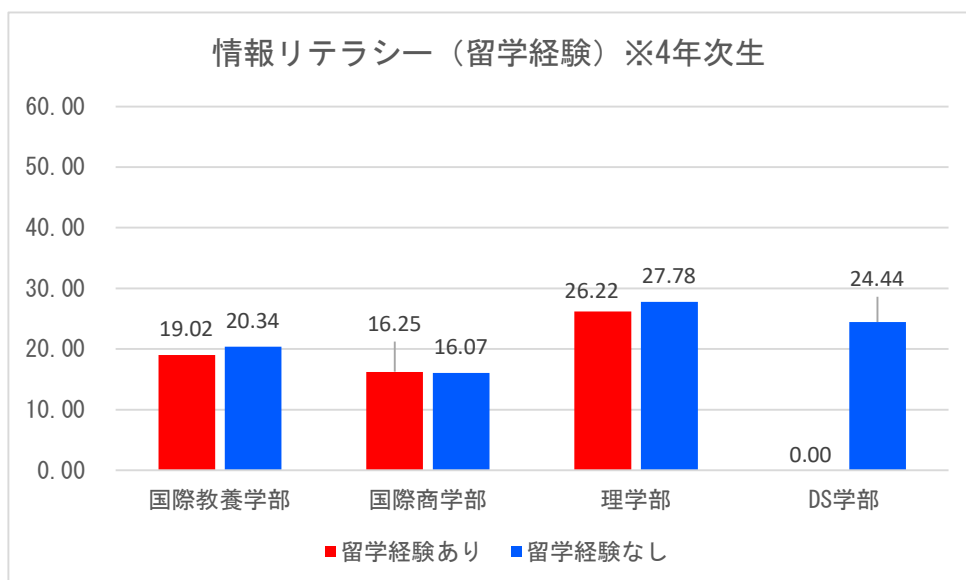
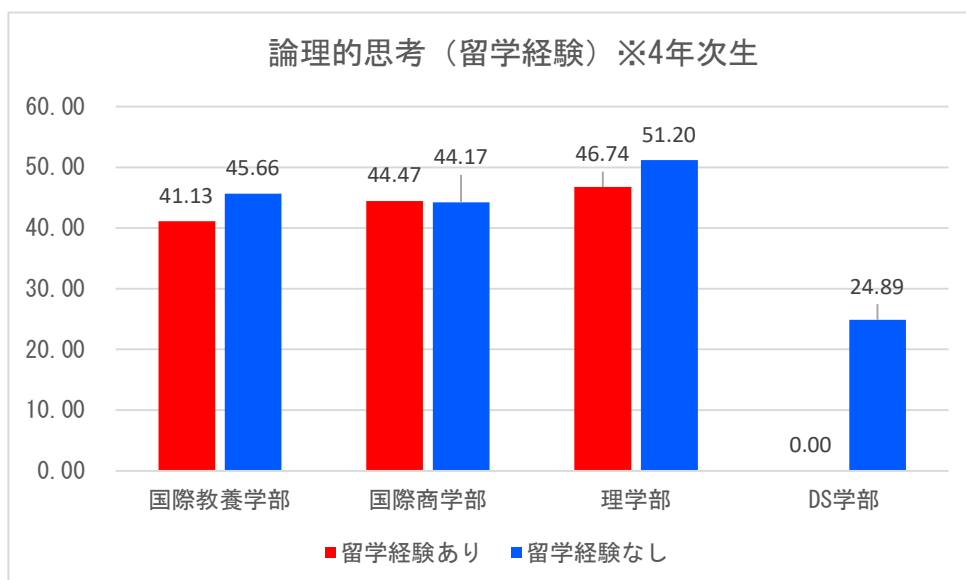
(2) 学生の海外留学思考と学修成果項目の相関分析(学部別・4年次生)

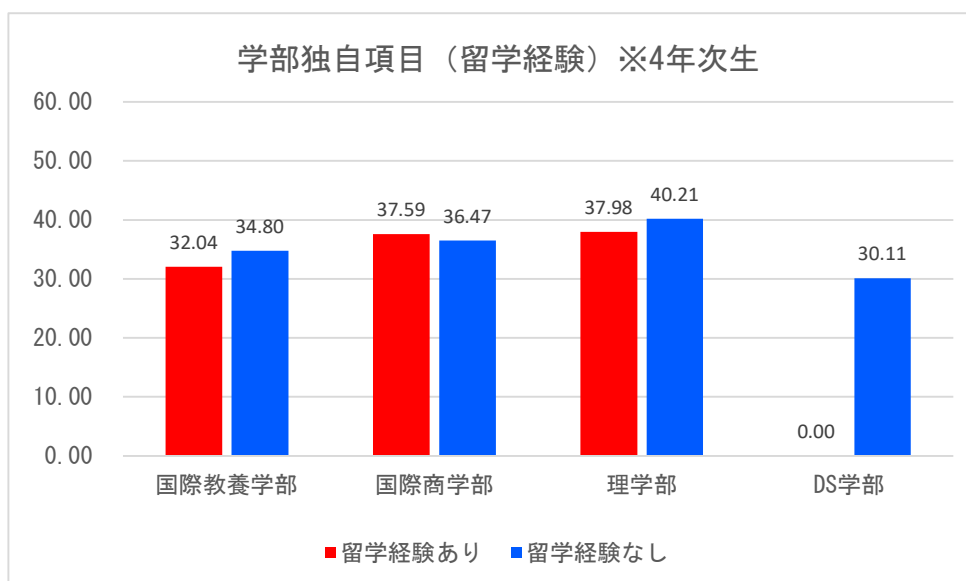
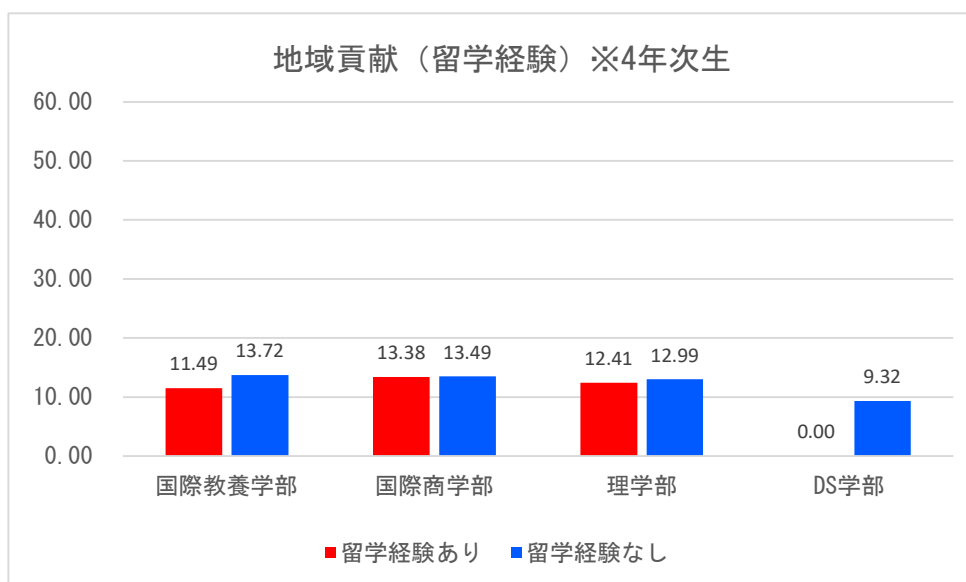
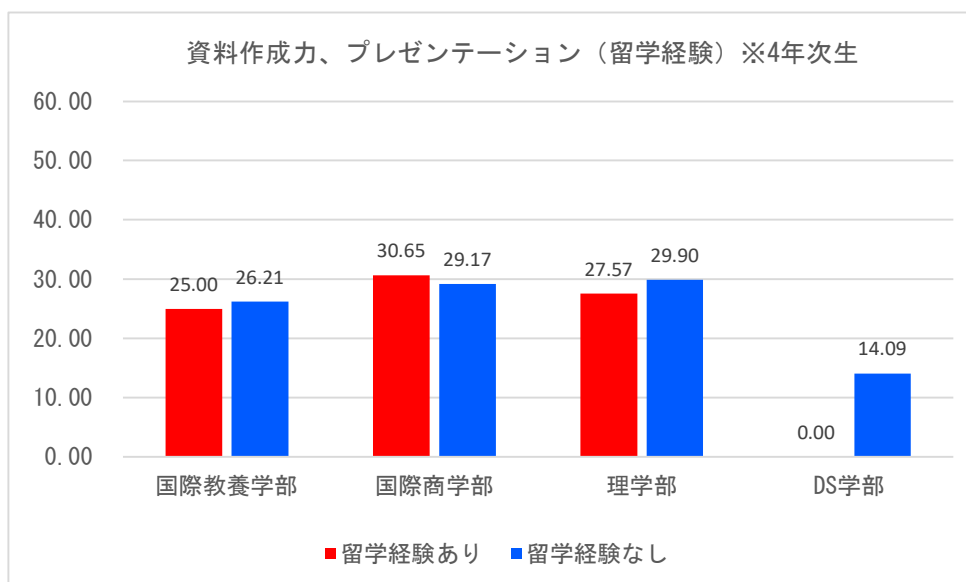


(2) 学生の海外留学思考と学修成果項目の相関分析（学部別・4年次生）

4年次生のみで集計を行ったところ、一部学修成果項目（国際的視野）で留学経験者の数値が高くなっていただ、それ以外には大きな差は見られなかった。

なお、DS学部は4年次生の留学経験者がいなかったため、算出ができなかった。





1 ALCS 学修行動比較調査 2021 年度調査について

◆ ALCS 学修行動比較調査について

教学比較 IR コモンズ※1)に加入する各大学の1及び3学年に対し、共通の設問(87 問)について実施します。学生はインターネット上から調査期間中いつでも回答することができるため、授業時間に実施する必要がなく、教員が関与することなく調査の実施及び集計が可能となります。また、調査結果についてコモンズに加入する他大学と比較することが可能です。

※1 教学比較 IR コモンズ:

入り会いの各大学における学生の学修行動の比較調査とその分析、そして教学関連の情報を比較閲覧するためのデータベース構築とその提供を行う組織

◆ 本学における調査実施体制

・ 対象者

2019 年および 2021 年入学の学部生で在籍している 1933 名

※ 実際に3年生に進級しているかに関わらず、入学年によって調査対象学年を定義しました。

※ ALCS 学修行動比較調査の集計単位は学部が基本ですが、本学の医学部(医学科・看護学科)はその特殊性に鑑み学科単位で集計することとします。また国際総合科学部については、学系単位で改組後の新学部にあわせて集計します。

・ 調査実施期間

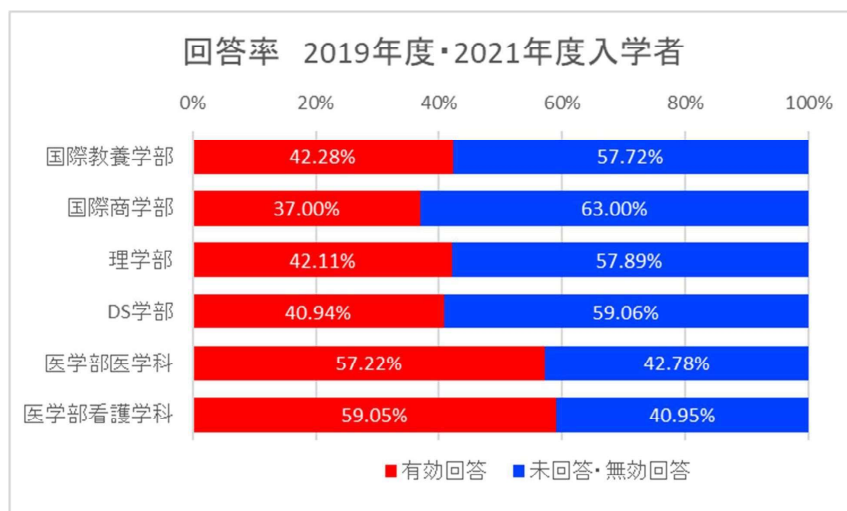
2021/11/30(火)～12/20(月)

・ 回答率

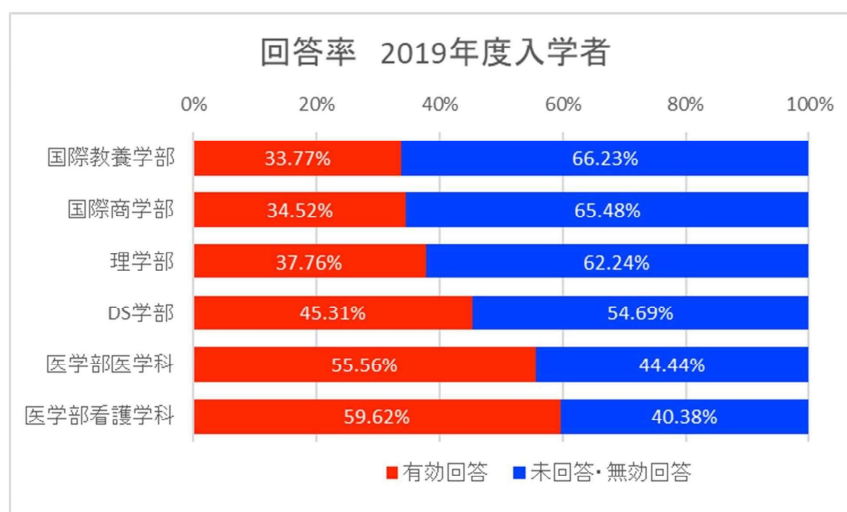
入学年度		国際教養 学部 (教養学系・ 都市学系)	国際商学部 (経営科学 系)	理学部 (理学系)	DS 学部	医学部		全学部合計
						医学科	看護 学科	
2019 年度 ・ 2021 年度 入学者	対象者	596 名	554 名	266 名	127 名	180 名	210 名	1933 名
	有効回答	252 名	205 名	112 名	52 名	103 名	124 名	848 名
		42.28%	37.00%	42.11%	40.94%	57.22%	59.05%	43.87%
	未回答・ 無効回答	344 名	349 名	154 名	75 名	77 名	86 名	1085 名
2019 年度 入学者 (3 年次相 当)	対象者	308 名	281 名	143 名	64 名	90 名	104 名	990 名
	有効回答	104 名	97 名	54 名	29 名	50 名	62 名	396 名
		33.77%	34.52%	37.76%	45.31%	55.56%	59.62%	40.00%
	未回答・ 無効回答	204 名	184 名	89 名	35 名	40 名	42 名	594 名
2021 年度 入学者 (1 年次生)	対象者	288 名	273 名	123 名	63 名	90 名	106 名	943 名
	有効回答	148 名	108 名	58 名	23 名	53 名	62 名	452 名
		51.39%	39.56%	47.15%	36.51%	58.89%	58.49%	47.93%
	未回答・ 無効回答	140 名	165 名	65 名	40 名	37 名	44 名	491 名
	無効回答	48.61%	60.44%	52.85%	63.49%	41.11%	41.51%	52.07%

・ 本アンケートは 87 設問への回答率が 60%以上等、教学比較 IR コモンズ側の有効回収基準を満たしたものを「有効回答」とします。

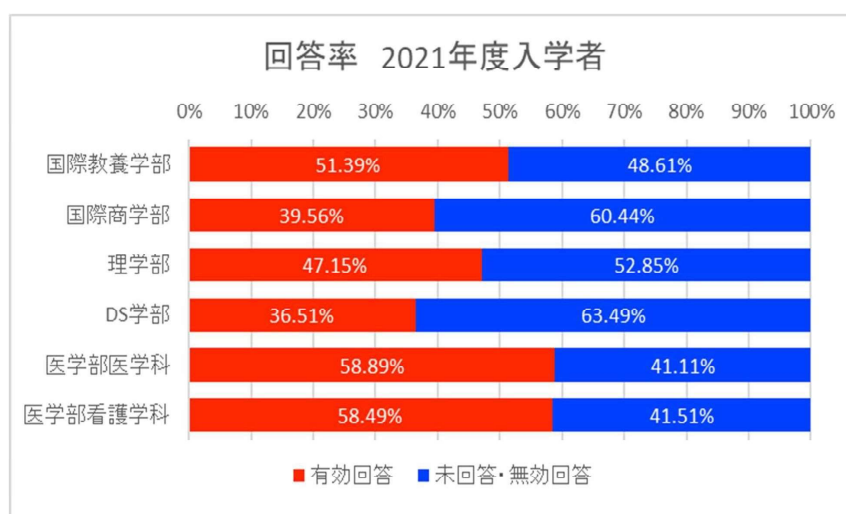
・ 2019 年度・2021 年度



・ 2019 年度



・ 2021 年度



2 学部間回答平均値比較

(1)「大学の授業や学びに関する経験」に関連する設問

<設問の内容が肯定的な設問群>

回答選択肢: 3:かなりよくあった、2:よくあった、1:たまにあった、-1:あまりなかった、
-2:ほとんどなかった、-3:まったくなかった

※赤塗りつぶし: 最も「経験した」と回答した学部(学科)、

青塗りつぶし: 最も「経験しなかった」と回答した学部(学科)

設問 No	設問内容	全学部	国際教養学部	国際商学部	理学部	D S 学部	医学科	看護学科
1	授業内での学生間のディスカッション	1	1.27	0.92	0.23	0.08	0.24	2.27
3	授業中に質問をして、よかったと思えた経験	0.29	0.44	0.31	0.27	0.35	-0.32	0.47
4	よく学ぶ学生に刺激されて学修が促されたこと	0.71	0.7	0.53	0.4	0.56	0.78	1.32
5	大学からの学修に関する情報提供や案内が役立っている実感	0.26	0.4	0.23	0.17	0.38	-0.26	0.5
6	自発的に文献や資料を調べること	0.67	0.8	0.39	1.07	0.81	0.63	0.48
7	小テストの実施やレポートなどの課題提出	2.35	2.31	2.26	2.53	2.29	2.32	2.47
8	提出物に対する教員からの添削やコメント	0.16	0.38	-0.43	0.33	0.33	0.35	0.3
9	課題発表の機会	1.02	1.16	1.16	0.95	0.41	0.33	1.39
12	図書館の活用	0.17	0.55	0.16	0.73	0.13	-0.48	-0.53
13	インターネットや学内 LAN を使った授業資料・課題の受けとりや提出	2.25	2.37	1.98	2.4	2.5	2.06	2.4
17	授業内容に刺激されて自主的にあらたな勉強や探究をしたこと	0.18	0.42	-0.06	0.11	0.52	0.07	0.14
18	教職員やアドバイザーに学修に関連したことを尋ねたり相談したこと	-1.13	-0.91	-1.22	-1.09	-0.69	-1.7	-1.16
19	大学内外で勉強会、研究会、講演会に参加したこと	-1.5	-1.33	-1.54	-1.81	-0.83	-1.11	-2.1
20	授業時間外に友だちと授業に関する学修をしたこと	0.42	0.27	0.44	0.4	0.58	0.63	0.44
21	学内に設けられている自由に学べる場の活用	0.57	0.86	0.61	0.88	0.81	-0.37	0.33
22	思いどおりに学業ができている実感	0.53	0.65	0.38	0.37	0.69	0.44	0.65

<設問の内容が否定的な設問群>

回答選択肢: 3:かなりよくあった、2:よくあった、1:たまにあった、-1:あまりなかった、
-2:ほとんどなかった、-3:まったくなかった

※赤塗りつぶし: 最も「経験しなかった」と回答した学部(学科)

青塗りつぶし: 最も「経験した」と回答した学部(学科)

設問 No	設問内容	全学部	国際教養学部	国際商学部	理学部	D S 学部	医学科	看護学科
2	大学での学修に関する不公平・不公正感	-1	-0.99	-0.78	-0.76	-1.67	-1.16	-1.2
10	履修したい授業を登録できなかったこと	-1.35	-0.69	-1.07	-1.32	-1.65	-2.23	-2.29
11	大半の内容が理解できなかった授業	-0.17	-0.38	-0.2	0.5	-0.12	0.37	-0.72
14	提出期限までに授業の課題を完成できなかったこと	-1.45	-1.23	-1.23	-1.59	-1.29	-1.75	-1.98
15	授業に遅刻したこと	-1.37	-1.27	-1.19	-1.69	-1.19	-1.26	-1.73
16	授業内容がつまらなく感じたこと	0.91	0.97	1.08	1.05	0.6	0.83	0.59

(2)「入学時からの成長感」に関連する設問

回答選択肢: 3:とても増えた、2:増えた、1:やや増えた、0:変化なし、-1:やや減った、-2:減った、
-3:とても減った

※赤塗りつぶし: 最も「成長した」と回答した学部(学科)、

青塗りつぶし: 最も「成長しなかった」と回答した学部(学科)

設 問 No	設問内容	全 学 部	国 際 教 養 学 部	国 際 商 学 部	理 学 部	D S 学 部	医 学 科	看 護 学 科
23	教養	1.49	1.76	1.45	1.35	1.48	1.14	1.44
24	ものごとを分析する力	1.3	1.42	1.36	1.17	1.62	0.84	1.35
25	問題を論理的に考える力	1.26	1.45	1.28	1.13	1.35	0.78	1.34
26	特定の専門分野に関する理解力	1.56	1.5	1.55	1.54	1.57	1.36	1.91
27	肯定的な意味で批判的に考える力	1.23	1.46	1.24	1.05	1.04	0.98	1.19
28	自分と異なる意見や考え方を柔軟に理解する力	1.6	1.83	1.49	1.36	1.4	1.17	1.93
29	リーダーシップ	0.53	0.56	0.71	0.35	0.58	0.34	0.5
30	人間関係を築いたり調整する力	1.04	1.06	0.97	0.88	0.96	0.94	1.38
31	地域社会が抱える問題への関心や理解力	1.14	1.65	0.93	0.68	0.63	0.79	1.35
32	明快かつ簡潔に話す力	0.96	1.03	1.07	0.78	0.83	0.56	1.15
33	表現すべき内容の文章を書く力	1.15	1.32	1.24	1.05	0.94	0.67	1.25
34	英語以外の外国語の運用力	0.48	1.14	0.4	0.22	-0.06	0.1	0.02
35	プレゼンテーションを準備し発表する力	1.49	1.67	1.63	1.3	1.42	1.07	1.4
36	学術的な文献の読解力	1.21	1.38	1.21	1.31	0.96	1	1.05
37	情報技術(ICT)の運用力	1.32	1.27	1.36	1.3	1.92	1.08	1.32
38	国際的な諸問題に対する関心や理解力	1.1	1.64	1.13	0.73	0.83	0.59	0.8
39	英語の運用力	0.19	0.27	0.18	0.34	0.17	0.13	-0.01
40	ものごとの本質をみて判断しようとする力	1.38	1.54	1.48	1.2	1.37	0.88	1.46
41	自分を律して行動する力	0.88	1.04	0.87	0.77	0.75	0.34	1.16
42	得た知識やスキルを活かして問題を解決する力	1.23	1.29	1.26	1.06	1.35	0.85	1.49

(3)「教学に関わる満足度」に関連する設問

回答選択肢:3:十分に満足、2:満足、1:すこし満足、-1:やや不満、-2:不満、-3:かなり不満

※赤塗りつぶし:最も「満足度が高い」学部(学科)、

青塗りつぶし:最も「満足度が低い」学部(学科)

設 問 No	設問内容	全 学 部	国 際 教 養 学 部	国 際 商 学 部	理 学 部	D S 学 部	医 学 科	看 護 学 科
43	大半の授業の質	1.24	1.32	0.96	1.2	1.4	1.07	1.67
44	授業の多様性	1.21	1.39	0.88	0.97	1.15	1.18	1.67
45	教育内容と将来の進路との関連性	1.17	0.94	0.95	0.86	1.33	1.32	2.1
46	カリキュラムの表現やシラバス記述のわかりやすさ	0.77	0.78	0.74	0.36	0.92	0.74	1.12
47	大半の授業に関して、その履修人数	1.68	1.67	1.45	1.66	1.85	1.66	2.01
48	図書館の蔵書内容、サービス、使いやすさ	1.3	1.35	0.97	1.5	1.42	1.18	1.59
49	総合的にみた大学での学び	1.34	1.35	1.06	1.33	1.67	1.31	1.7
50	奨学金など経済援助の制度と内容	1.11	1.09	0.84	1.09	1.47	0.82	1.74
51	授業や学習を支援する電子ネットワークシステム	0.9	0.73	0.76	0.91	1.13	0.93	1.35
52	実験・実習室や能動的な学修を進めるための設備や機器	1.14	1.06	0.8	1.57	1.08	1.16	1.52
53	一般的な教室の設備や使用感	0.78	0.81	0.45	0.86	0.92	0.46	1.41
54	学内の雰囲気や居心地、環境	1.45	1.53	1.24	1.53	1.58	1.19	1.75
55	学費に比した教育内容	1.03	0.97	0.75	1.29	1.12	1.13	1.25
56	学内に設けられている自主的に学べる場の雰囲気や使いやすさ	1.02	0.96	0.75	1.13	1.29	0.91	1.48
57	キャリアを考えるために役立つ授業や情報、機会の提供	1.14	1.19	0.97	1.1	1.32	1.03	1.36
58	学んだ成果に対する評価のされ方	1.19	1.34	1.06	1	1.56	0.9	1.4
59	教員の応対	1.39	1.51	1.15	1.23	1.81	1.17	1.7
60	事務スタッフの応対	0.98	0.96	0.66	0.73	1.22	1.06	1.6

(4)「在学中に希望すること」に関連する設問

回答選択肢: 3:強く望んでいる、2:望んでいる、1:いくぶん望んでいる、-1:あまり望んでいない、
-2:望んでいない、-3:まったく望んでいない

※赤塗りつぶし: 最も「希望度が高い」学部(学科)、

青塗りつぶし: 最も「希望度が低い」学部(学科)

設問 No	設問内容	全 学 部	国 際 教 養 学 部	国 際 商 学 部	理 学 部	D S 学 部	医 学 科	看 護 学 科
65	専門分野の内容を十分に学ぶ	2.16	2.15	1.96	2.09	2.27	2.3	2.42
66	幅広い知識、教養を身につけ視野を広げる	2.05	2.28	2.08	1.77	1.73	2.02	1.94
67	起業やその意識形成にかかわる学びをする	-0.12	-0.13	0.4	-0.5	-0.33	-0.03	-0.58
68	企業、機関など大学外で体験実習、インターンなどをおこなう	1.44	1.81	1.93	1.05	1.75	0.59	0.81
69	チームなどで取り組むプロジェクト遂行型の学びをする	1.12	1.42	1.27	0.62	1.46	0.88	0.75
70	授業以外で学問的な関心事について学びを深める	1.48	1.69	1.58	1.4	1.65	1.46	0.89
71	討論やプレゼンの訓練になり課題解決をしていくような授業を受ける	1.16	1.5	1.33	0.79	1.35	0.92	0.62
72	資格を取得するための勉強をする	1.8	1.88	1.78	1.19	1.27	1.92	2.35
73	文章の作成能力が高まるような授業を受ける	1.35	1.73	1.46	1.06	0.94	1	1.07
74	外国語の運用能力を高めることを目的にした授業を受ける	1.24	1.87	1.35	0.76	0.65	1.08	0.57
75	卒業後の進路のために、教職員やキャリア関連の部署を活用する	1.13	1.57	1.26	0.97	1.23	0.27	0.86
76	よりよい学修計画を立てる	1.61	1.8	1.6	1.4	1.85	1.43	1.47
77	本学以外の教育機関・施設で学ぶ	0.45	0.48	0.53	0.35	0.31	0.75	0.17
78	なんらかのボランティア活動に従事する	0.85	1.42	0.67	0.32	0.21	0.82	0.74
79	短期の留学や海外語学研修に参加する	0.69	1.31	0.92	-0.16	-0.18	0.92	-0.06
80	1年間程度、あるいはそれ以上の長期留学をする	-0.13	0.38	0.16	-0.84	-0.54	-0.1	-0.82

大学間の中間活動体である学修比較IRコモンズでは、2015年からコモンズ参加大学において共通のウェブ・サーベを用いた学修行動比較調査を実施しています。その結果は参加各大学において個別にそれぞれの目的に適った分析がおこなわれると共に、参加大学内で適宜有用性を判断しつつ比較分析・検討が施されています。ここでは調査実施母体である学修比較IRコモンズとして、個別大学に拠らず、参加大学全学生を総計した結果の一端について公開します。今回は7年目の調査です。参加大学は24大学、当調査では最多の約2万7千名余りの大学生たちが寄せた有効回収の結果から、またいくつもの発見と確認ができました。

なお、他の結果や情報、方法の詳細についてはコモンズのwebページ（Google検索などで「学修比較IR」と）をご覧ください。

実査期間（全体）2021年7月～22年2月

調査実施方法 ALCS独自のスマート・ウェブ・サーベ

調査大学数 24

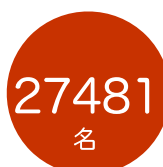
有効回収数 27481

有効回収とは80設問への回答率が60%以上等、ALCSの有効回収3基準を満たした回収

回答者学年構成 1年生57% 3年生43% 1、3年生間での比率

性別構成 男性20% 女性80%

この調査は、1、3年生を調査対象にすることを基本にしていますが、大学によっては別の学年でも実施しています。



有効回収数



回収率



全回収数中の有効回収率

24大学間平均

参加大学（名称の50音順） 跡見学園女子大学 大阪女学院大学 大妻女子大学 お茶の水女子大学 嘉悦大学 川崎医科大学 京都看護大学 京都光華女子大学 京都女子大学 共立女子大学 金城学院大学 就実大学 相山女子大学 津田塾大学 帝京大学 田園調布学園大学 東京女子大学 長崎県立大学 奈良女子大学 日本女子大学 フェリス学院大学 宮城大学 明星大学 横浜国立大学

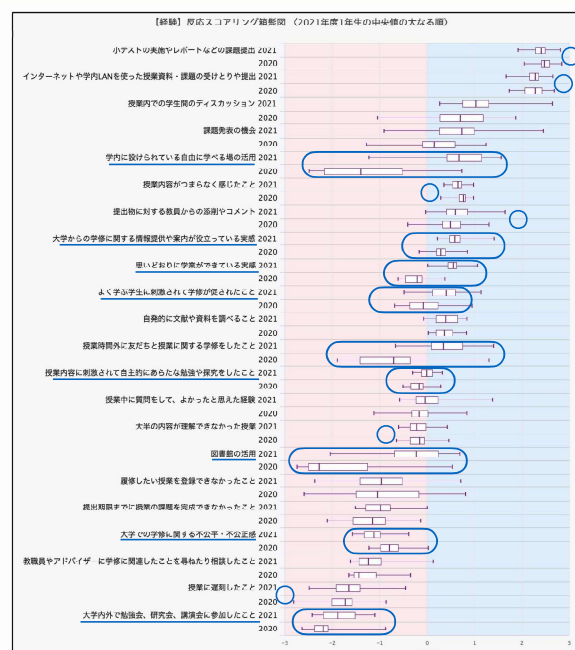
経験 大学の授業や学びに関する経験

以下4つの設問群の箱ひげ図は、調査対象各大学の昨年度と今年度の1年生の各設問についてのスコアリング・データ*の平均値を用い、それらを今年度の中央値の大なる順に表示した結果です。本年度も大学の学修状況は昨年度と同様の制約が付きましました。ただし昨年度に比して大学によりその対応には相違があり、その違いが学修行動に反映された可能性がかなりありそうです。そこでここでは前年度との1年生間の比較をとりあげました。

昨年度とのデータ構成は2大学があらたに加わった24大学でした。箱ひげ図の特性を利用して、比較対の箱の部分で完全、またはほぼ重なりがなかった（一方の箱前半部の後半と他方の箱後半部の前半が重なる）ケースを差異として認めるという基準で、今年度の回答結果が教学のうえで一般的にみて良き方向に変化したところを青、その反対方向に変化した設問を赤で囲って表現しました（実際は存在しなかった）。また昨年度あきらかに改善を示した項目で今年度もその改善水準が維持されたところは青の円を記しました。

「経験」群では22設問中9設問で、肯定的な方向に明白な差異をみました。また、6設問では昨年度、その前の年より明白に改善をみたその水準を維持しました。つまり、昨年度生じた感染対策による遠隔授業の実施やネットワーク・コミュニケーションの活用による教学上の質的な変容が学生の学修経験上は、改善を促すことにつながり（典型的には小テストの実施やレポートなどの課題提出、それらに対する教員からの添削やコメント、あるいは授業がつまらなく感じるものの少なさと大半の内容が理解できない授業の存在など）、また昨年度、経験において損失を被ったことがらについては、本年度、全体的には従前の水準に、ほぼ改善復帰したことが認められました（典型的には学内に設けられている自由に学ぶ場や図書館の活用、あるいは思いどおりの学修ができている実感【全体的には否定域に陥った昨年度から肯定域への移行】など）。

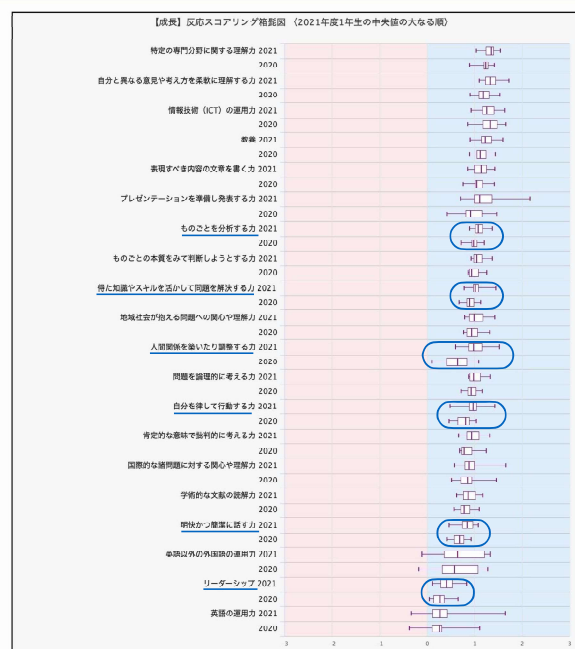
ただし、復調をみた項目でも、とくに施設利用関連については、大学により対応がかなり異なったことが箱ひげの長さの大きさに、そのまま反映されたようすもうかがえます。学生のことを慮った利用制限も過度であれば、学生自身の学修環境を損ない、それが実際に大学間格差につながる、そうした読みが教学マネジメントの現実感覚として求められるといえそうです。



成長 入学時からの成長感

この設問群は入学時に比した成長感を問うています。ですから、例年1年生の回答は、全体に肯定域にありながら大学間差異は小さくなく、前年度との差異もほとんど認められない傾向にあります。ところが、本年度は同様の傾向を維持しつつも、20項目中7項目、およそ1/3の項目で前年度よりも肯定方向に差異のある結果をみました。

昨年度の特異な学修状況の影響は、一昨年度との比較で成長感にはさほど影響をみませんでした。しかし、今年度は大学によっては昨年度の学修状況から離脱し、キャンパスに活気が戻ったことで反動的に元気を取り戻したところが多かったようすがうかがえました。箱ひげの箱部分が明白にずれて差異を示した項は「人間関係を築いたり調整する力」でした。在宅学修が強い昨年度から、今年度は直に同輩と触れあう機会が増え、人間関係の価値をあらためて実感できたことが多かったのかもしれない。この設問への回答ぶりが成長感で昨年度よりも一層肯定的な反応を得た他の設問にも反映された観があります。すなわち「自分と異なる意見や考え方を柔軟に理解する力」「自分を律して行動する力」「明快かつ簡潔に話す力」「リーダーシップ」、いずれも対人関係の行動特性にかかわる項で、普段は年度間で差異が生じるような設問ではありません。また、「ものごとを分析する力」「得た知識やスキルを活かして問題を解決する力」にも前年度より一層の肯定感が増しました。しかし、もしこれらが反動的に形成されたとすれば、来年度以降の回答にはいささか不安があるかもしれません。



*スコアリング・データの生成法および箱ひげ図についての詳細はコモンズのウェブ・サイト <https://cmpr.jp>の説明をご覧ください。

時間 日あたり、または週あたり平均値

昨年度の教学状況の異常事態で在宅学習が全般化した結果、それがそのまま授業に関する授業時間外の学修時間を伸張させるという結果を生み、その前年度の一日あたり1時間半という大学間平均値は、当調査、というよりおそらく史上初めて、2時間を超えるという、すなわち多くの大学の二コマの授業時間を超えるという画期的な結果をもたらしました。むしろそれが異常事態そのままでの反映にすぎず、数値自体が異常以外のなにものでもないという受け止めは容易にできます。授業に関連しない学習時間については年度がかわり、回答する対象学生が全員入れ替わっても両学年ともに、驚くほど恒常的だからです。

ただ、それでもそこに一抹の可能性を探るとすれば、人間の習慣形成にその抛りどころを求めることができそうです。昨年度に比較すれば、教学環境の異常性は正常に戻りつつあった今年度の結果が授業時間外にも授業に関する学修時間を相応にとったという事実があったことで、それがそう簡単には後戻りしないだろう、という希望は、今年度の回答結果に読めるかもしれません。両学年ともに前年度より減少傾向にあったものの、ほぼ2時間というところは維持されました。

アルバイトの雇用環境は昨年度来、芳しくないとは聞くものの、実勢的にはその就労時間報告にそれと相関した動きは少なくとも1年生については明白には認められませんでした。週5日就労が平均的な姿ではないとしても仮にそうであったとして、いわゆる学修や学習と認識される時間よりもアルバイトに費やしている時間の方が長いという現状をみると、先の項でみた「人間関係を中心とした成長感」をもたらしているのは、大学における学びに由来するというよりも、アルバイト先で培われている学びに依拠しているところが大きいのかもしれません。

授業に関する授業外学修時間



授業に関連しない学習時間



アルバイトなどの就労時間



満足 教学に関わる満足度

昨年度「満足」群の設問は18設問中8設問で、その前年度よりも明白な下落にみまわれました。突然にして大幅な教学環境の制約を受けての当然の結果で、大学にとっては大きな損失となりました。「総合的にみた大学での学び」あるいは「大半の授業の質」においてあきらかな満足度の低下をみたことは、その集約としての結果でした。

これに対して今年度は一転して右図で確認できるように、前年度の評定を下回った設問は皆無。「総合的にみた大学での学び」「大半の授業の質」を含めたこの群の8割弱の設問であきらかな改善評価を得ました。大学によっては今年度の教学環境が昨年度とさして変化せず、在宅学修主体でキャンパス施設利用もままならない状態がつつきましたが、多くの大学で昨年度の制約が一部ないし大幅に解かれたことによる解放感が、この全面的な満足感の高揚につながったと考えられます。ただし、高揚・改善とはいっても、たとえば昨年度大学平均で不満足域に落ちた「学費に比した教育内容」が今年度は平均も箱も肯定域に改善をみた例がそれにあたりますが、その多くの改善とは一昨年度までの従前の水準を取り戻したという改善です。

したがって、これをたとえば授業実施におけるオン・オフライン・ハイブリッド型への評価であるとか、CMS等による授業支援システム活用の効果などとして捉えることは拙速でしょう。一種の解き放たれによる改善効果であるとするれば、来年度はある程度の揺り戻しがあるかもしれません。今年度の満足度評価はこの後の年度の評価経過をみることで正当な解釈ができるといえそうです。



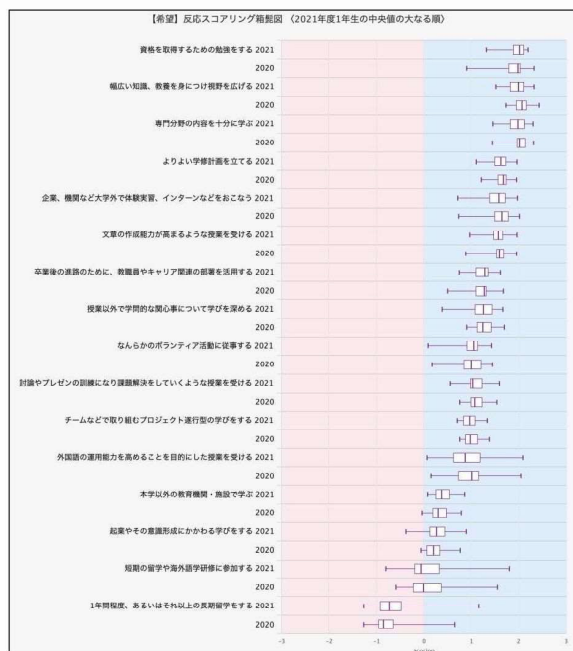
希望 在学中に望むこと

学生たちが在学中の学修において「最も」望んでいることは例年、大方の大学間の差異がそれほどなく、最も安定した評価ポジションを得ています。昨年度の下況下でも、さすがに在宅に制約されたことで「チーム学習」への求めが従前よりも高まるという結果を認めましたが、その他の設問への回答には明白な差異が認められませんでした。本年度も同様で、全設問において前年度に比した変化は認められませんでした。

ただ、これは偶然による差異の範囲といえそうなところですが、大学間平均値の順位づけで、これまで一貫して、学生が最も強く希望していることが、第一に「幅広い知識や教養を身につけ視野を広げること」、第二に「専門分野の内容を十分に学ぶ」ことといえたことが、これまで第三にあった「資格を取得するための勉強をすること」が本年度、順位上は第一に came という変化はありました。

もともとこの上位3項はほとんど差異なく常に高い希望が示されてきたことがらでしたから、換言すればこれも偶然、第一に教養、第二に専門、第三に資格といえてきただけのこともいえます。ですから、今年度のこの変化をあたかも社会情勢の不安定性を感じ取った学生の志向変化を反映したかのように受け止めることはいきすぎ、でしょう。

なお、本年度の対象学生を確認しておけば、前年度大学のすべてに加えてあらたに2大学が加わりましたが、その有効回収総数に占めた新参加大学の有効回収数が占めた割合は7%でした。



全国学生調査について

1 趣旨

「学修者本位の教育への転換」を目指す取組の一環として、全国共通の質問項目により、学生目線から大学教育や学びの実態を把握し、大学の教育改善や国の政策立案など、大学・国の双方において様々な用途に活用することを目的として、全国学生調査を実施しており、本学も参加しています。

今年度は、令和3年度全国学生調査の集計及び令和4年度全国学生調査の周知を実施しました。

2 調査対象

全学部 of 2 年次及び最終年次生

国際総合科学部（2 年、4 年）、国際教養学部（2 年）、国際商学部（2 年）、理学部（2 年）、データサイエンス学部（2 年、4 年）、医学部医学科（2 年、6 年）、医学部看護学科（2 年、4 年）

回答状況：

学部（分野）	学年	回答数	在籍者数	回答率
国際総合科学部 （その他）	2 年	1	17	5.9%
	4 年	170	894	19.0%
国際教養学部（人文）	2 年	53	299	17.7%
国際商学部（社会）	2 年	48	275	17.5%
理学部（理学・工学）	2 年	35	134	26.1%
データサイエンス学部 （理学・工学）	2 年	13	63	20.6%
	4 年	12	55	21.8%
医学部医学科 （医学（6 年制））	2 年	35	97	36.1%
	6 年	31	74	41.9%
医学部看護学科 （保健）	2 年	9	98	9.2%
	4 年	38	103	36.9%
本学合計		445	2,109	21.1%

3 質問項目

大学で受けた授業の状況、大学での経験とその有用さ、大学を通じて知識や能力が身に付いたか、平均的な 1 週間の生活時間、授業形態等、全 60 問（その他、自由記述（任意）2 問）

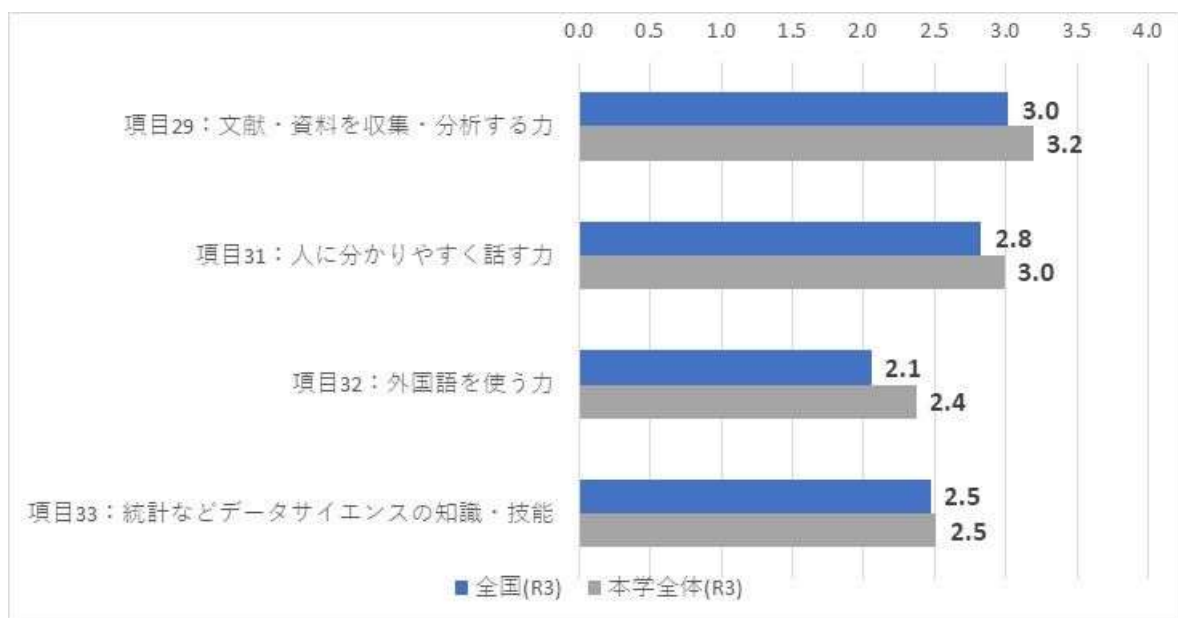
4 分析結果

次ページ「令和3年度全国学生調査」結果のとおり

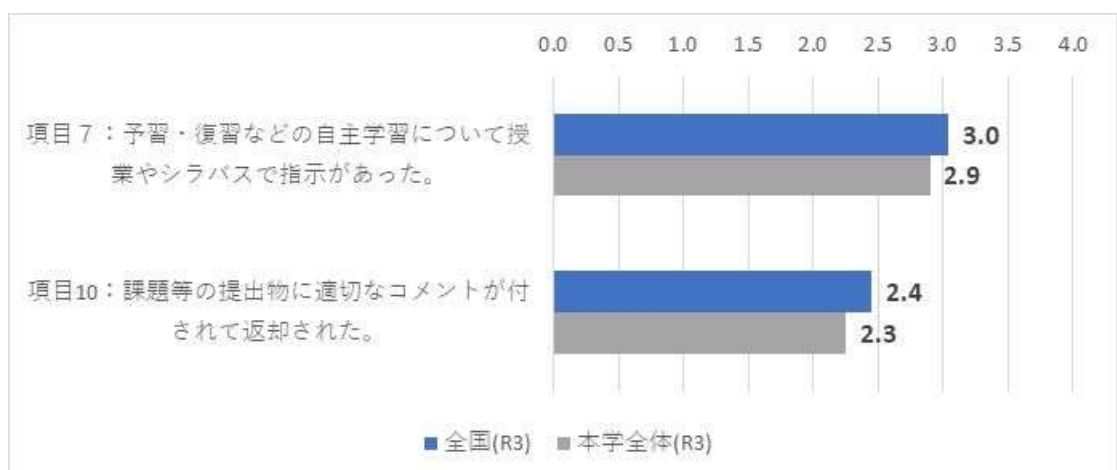
5 結果概要

【考察結果の概要】

- ・ 本学では論理的な思考や、研究を進める上で必要とされるスキルを問う項目で全国平均を上回る傾向があった。（「項目 29 文献・資料を収集・分析する力」、「項目 30：論理的に文章を書く力」、「項目 31：人に分かりやすく話す力」）本学の研究力向上に資する本学の強みに繋がる回答である。
- ・ 本学の注力項目である、グローバル人材及びデータサイエンス人材の育成に関する項目でも、全国平均と同等または上回る水準であった。特に「項目 32：外国語を使う力」では、全国平均 2.1 に対し、本学平均は 2.4 と良好な結果であった。データサイエンスに関わる「項目 33：統計などデータサイエンスの知識・技能」も、令和 3 年度は全国平均と全学平均は同水準であったが、令和 4 年度より ADEPT プログラムの積極的な周知により今後調査結果上でも習得度の向上が見られることが期待される。



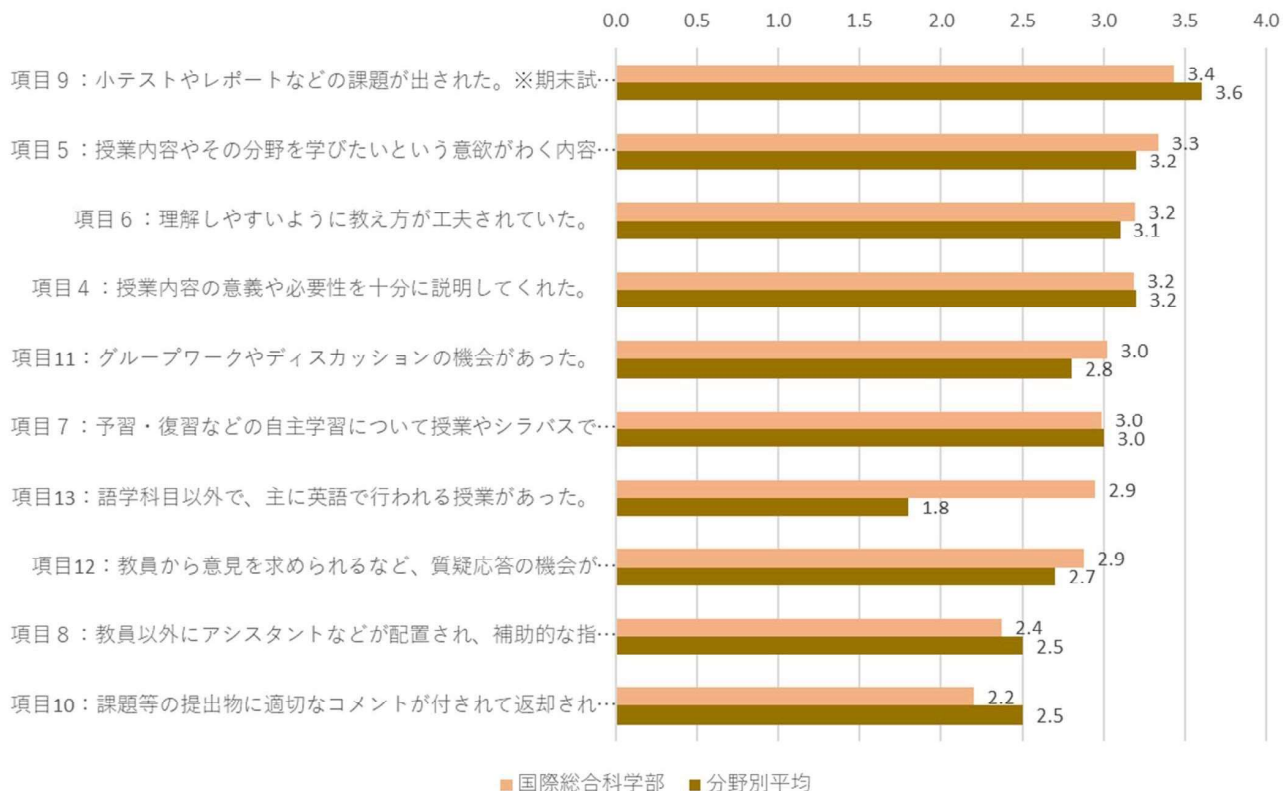
- ・ 一方で、全国平均を下回った項目は「項目 7：予習・復習などの自主学習について授業やシラバスで指示があった」、「項目 10：課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却された」であった。今後の授業運営に対しての課題と捉え、関係会議体等で検討していきたい。



令和3年度 全国学生調査（第2回試行実施）回答集計～国際総合科学部～

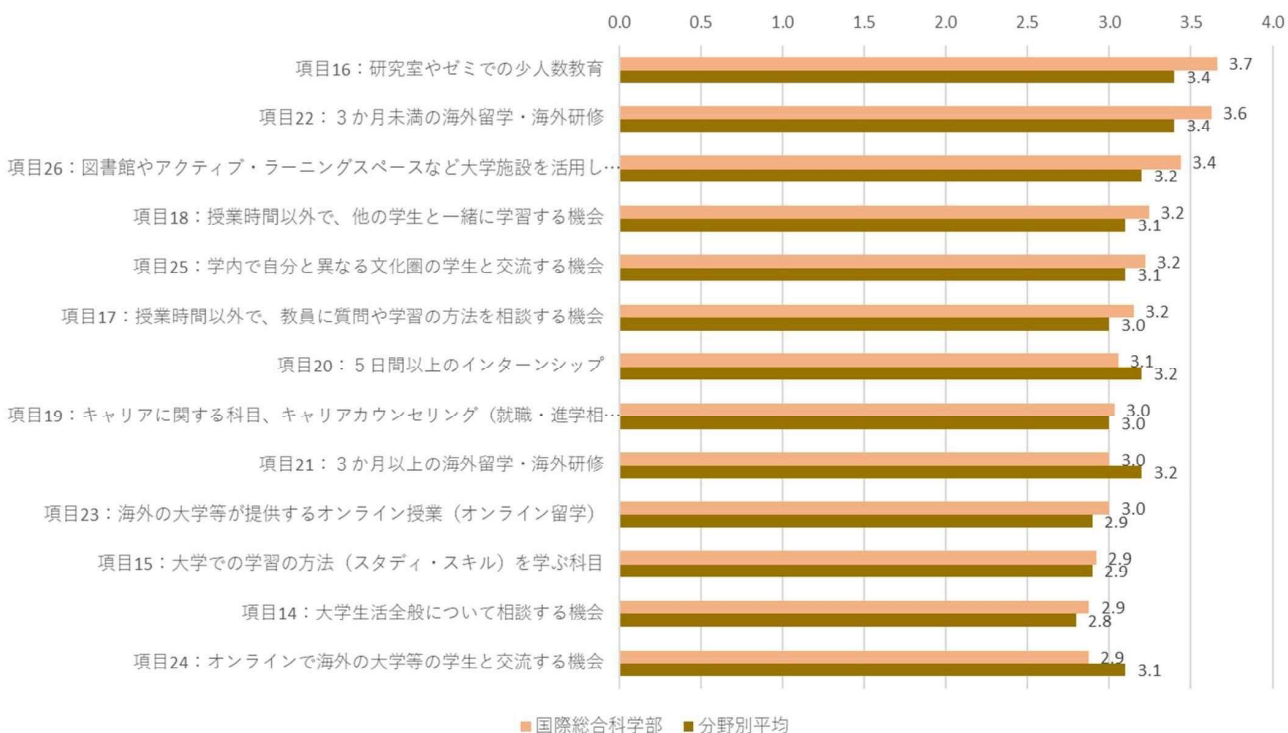
【国際総合科学部】

問1 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか



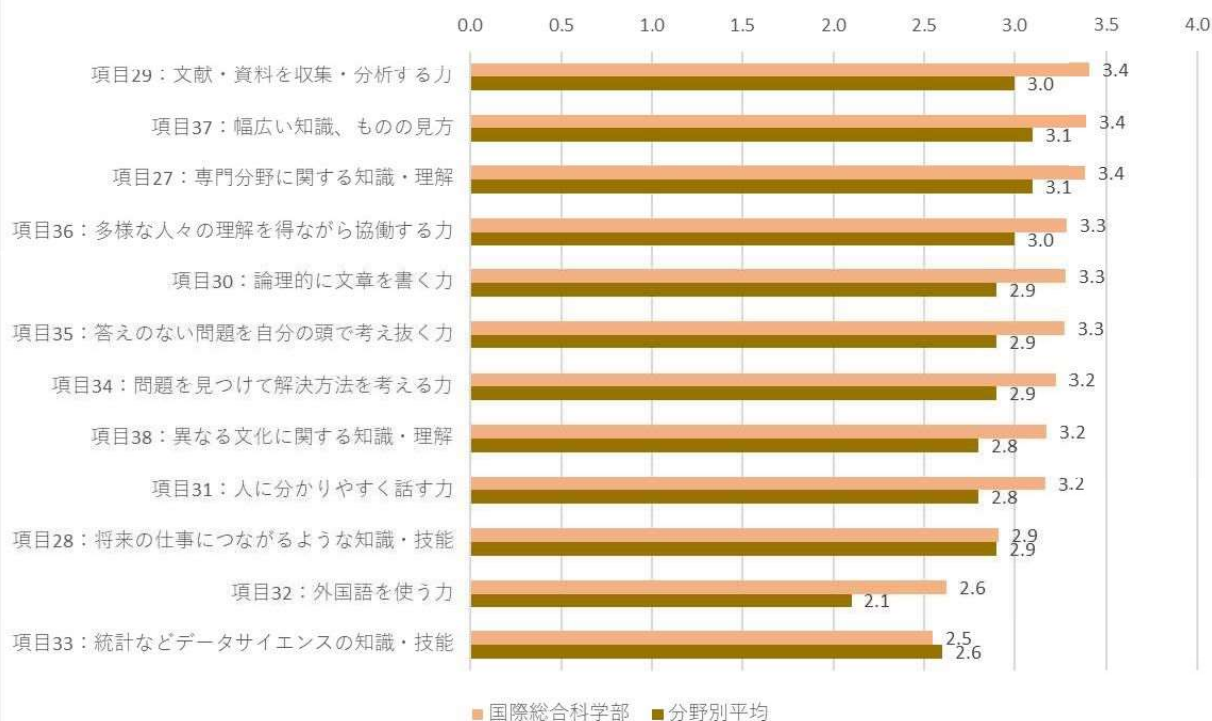
【国際総合科学部】

問2 大学に入ってから次のような経験はありましたか。また、その経験は有用でしたか



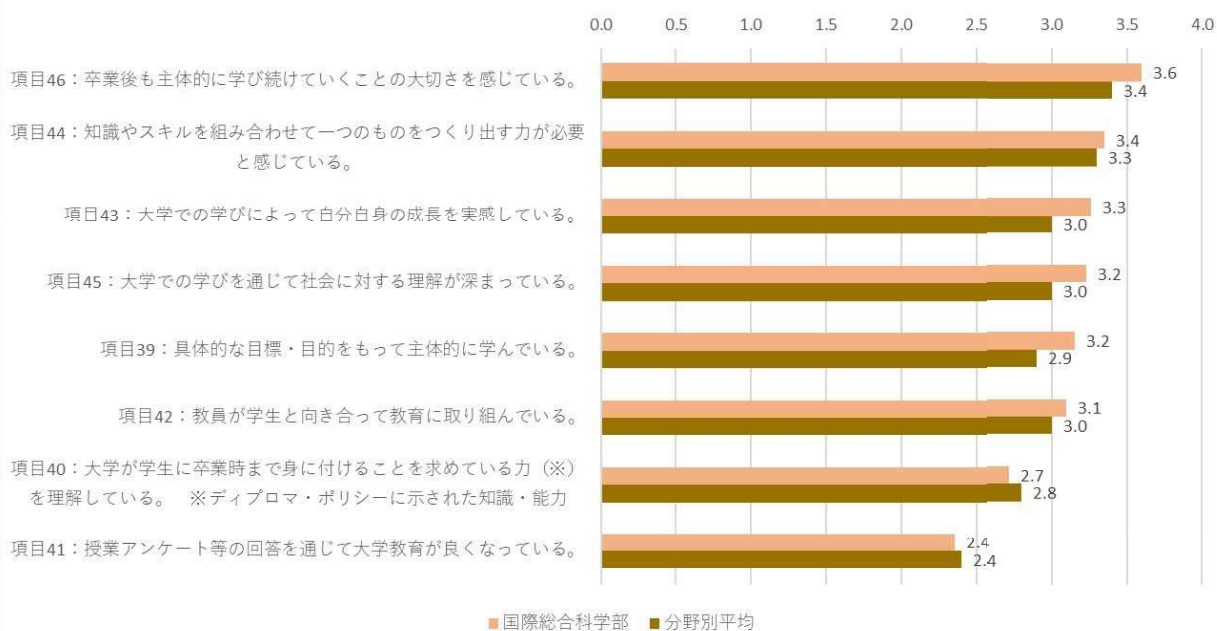
【国際総合科学部】

問3 大学教育を通じて、次のような知識や能力が身に付いたと思いますか



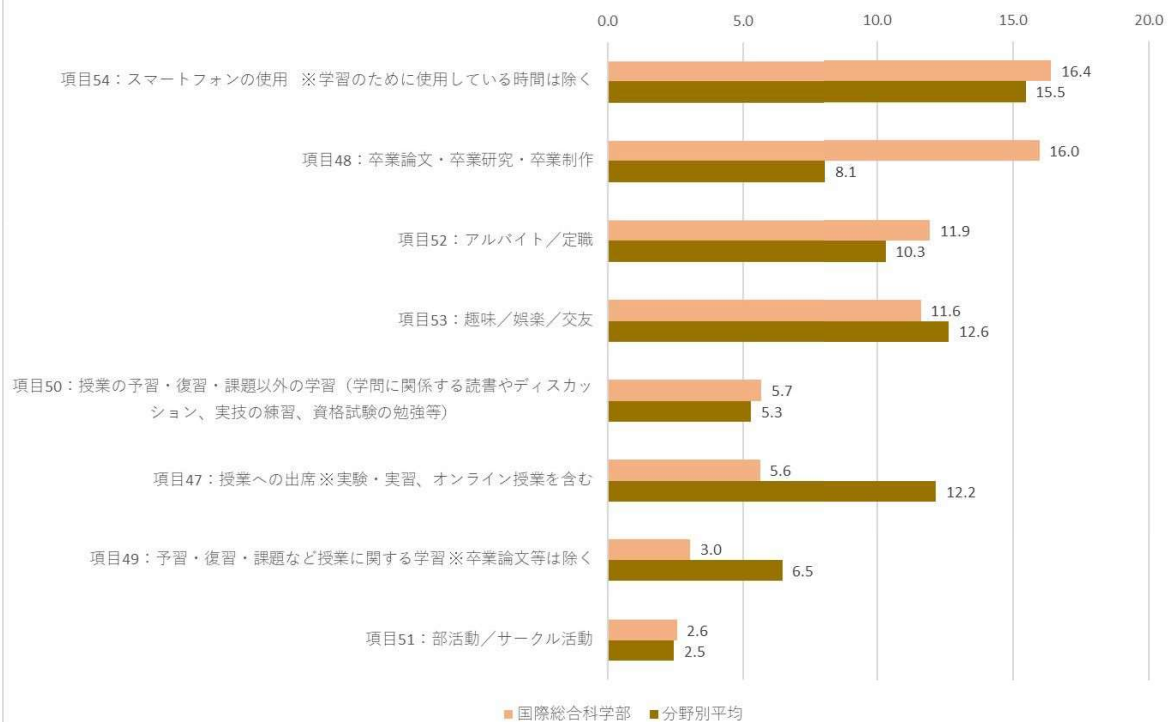
【国際総合科学部】

問4 これまでの大学での学び全体を振り返って、次の項目についてどのように思いますか



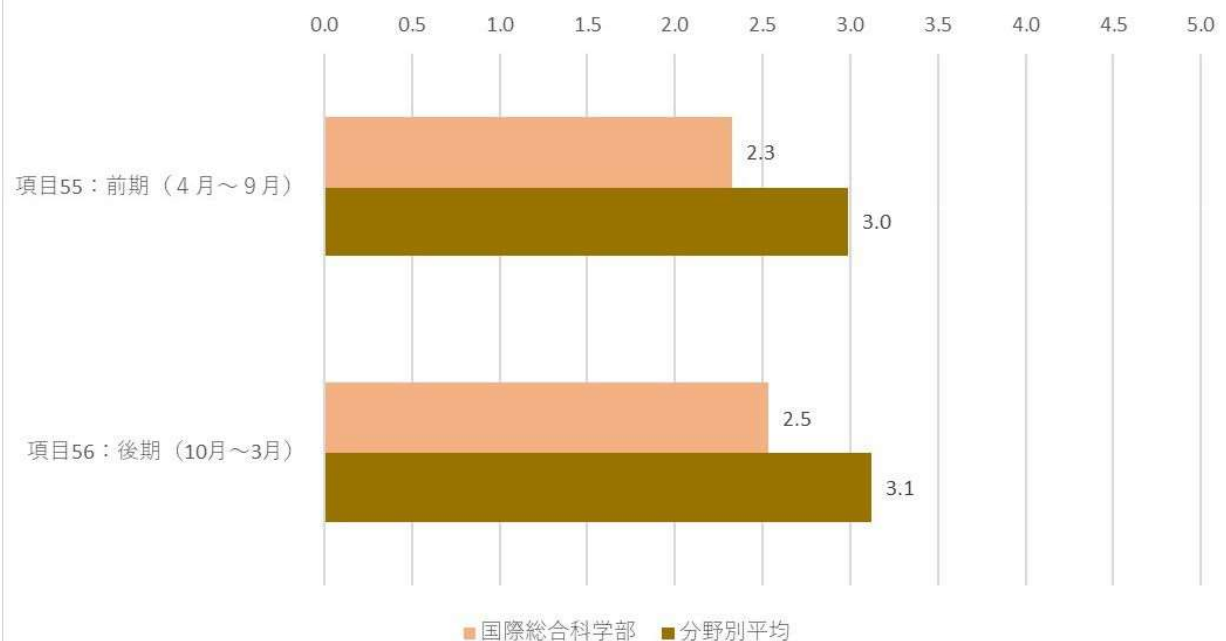
【国際総合科学部】

問5 今年度後期の授業期間中の平均的な1週間（7日間）の生活時間は、それぞれどのくらいですか



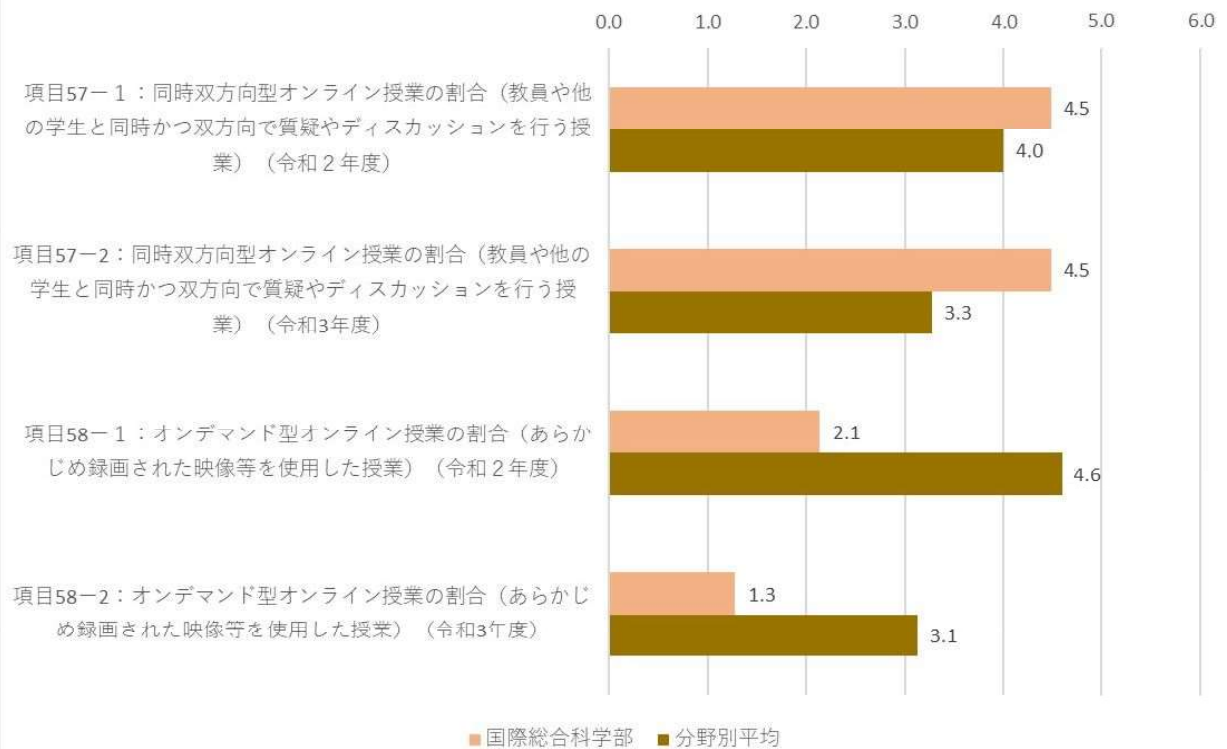
【国際総合科学部】

問6 今年度の授業期間中にキャンパスへ通った日数は、1週間でそれぞれ何日くらいですか



【国際総合科学部】

問7 昨年度と今年度に受けた授業のうち、次の授業形態の割合はそれぞれ
のくらいですか

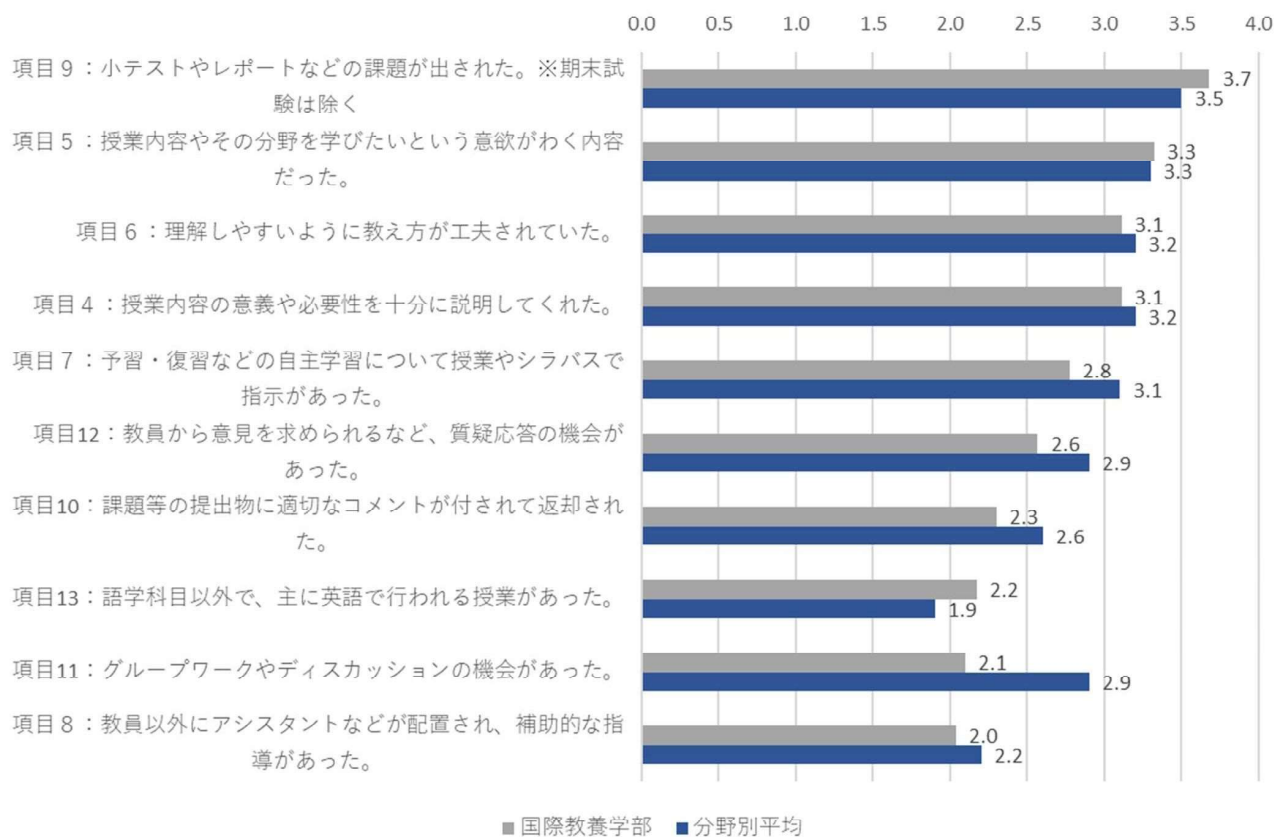


問	設問	全国	国際総合科学部	本学全体	分野別平均 (その他)
1	項目4：授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれた。	3.2	3.2	3.2	3.2
1	項目5：授業内容やその分野を学びたいという意欲がわく内容だった。	3.2	3.3	3.3	3.2
1	項目6：理解しやすいように教え方が工夫されていた。	3.1	3.2	3.1	3.1
1	項目7：予習・復習などの自主学習について授業やシラバスで指示があった。	3.0	3.0	2.9	3.0
1	項目8：教員以外にアシスタントなどが配置され、補助的な指導があった。	2.5	2.4	2.4	2.5
1	項目9：小テストやレポートなどの課題が出された。※期末試験は除く	3.5	3.4	3.5	3.6
1	項目10：課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却された。	2.4	2.2	2.3	2.5
1	項目11：グループワークやディスカッションの機会があった。	2.8	3.0	2.8	2.8
1	項目12：教員から意見を求められるなど、質疑応答の機会があった。	2.8	2.9	2.9	2.7
1	項目13：語学科目以外で、主に英語で行われる授業があった。	1.8	2.9	2.4	1.8
2	項目14：大学生活全般について相談する機会	2.8	2.9	2.8	2.8
2	項目15：大学での学習の方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目	2.9	2.9	2.8	2.9
2	項目16：研究室やゼミでの少人数教育	3.3	3.7	3.3	3.4
2	項目17：授業時間以外で、教員に質問や学習の方法を相談する機会	3.0	3.2	3.1	3.0
2	項目18：授業時間以外で、他の学生と一緒に学習する機会	3.2	3.2	3.3	3.1
2	項目19：キャリアに関する科目、キャリアアカウンセリング（就職・進学相談）	3.0	3.0	2.9	3.0
2	項目20：5日間以上のインターンシップ	3.2	3.1	2.9	3.2
2	項目21：3か月以上の海外留学・海外研修	3.2	3.0	2.8	3.2
2	項目22：3か月未満の海外留学・海外研修	3.4	3.6	3.5	3.4
2	項目23：海外の大学等が提供するオンライン授業（オンライン留学）	3.0	3.0	3.0	2.9
2	項目24：オンラインで海外の大学等の学生と交流する機会	3.0	2.9	3.1	3.1
2	項目25：学内で自分と異なる文化圏の学生と交流する機会	3.1	3.2	3.2	3.1
2	項目26：図書館やアクティブ・ラーニングスペースなど大学施設を活用した学習	3.3	3.4	3.3	3.2
3	項目27：専門分野に関する知識・理解	3.1	3.4	3.3	3.1
3	項目28：将来の仕事につながるような知識・技能	3.0	2.9	3.0	2.9
3	項目29：文献・資料を収集・分析する力	3.0	3.4	3.2	3.0
3	項目30：論理的に文章を書く力	2.9	3.3	3.1	2.9
3	項目31：人に分かりやすく話す力	2.8	3.2	3.0	2.8
3	項目32：外国語を使う力	2.1	2.6	2.4	2.1
3	項目33：統計などデータサイエンスの知識・技能	2.5	2.5	2.5	2.6
3	項目34：問題を見つけて解決方法を考える力	2.9	3.2	3.1	2.9
3	項目35：答えのない問題を自分の頭で考え抜く力	2.9	3.3	3.0	2.9
3	項目36：多様な人々の理解を得ながら協働する力	3.0	3.3	3.1	3.0
3	項目37：幅広い知識、ものの見方	3.1	3.4	3.3	3.1
3	項目38：異なる文化に関する知識・理解	2.8	3.2	2.9	2.8
4	項目39：具体的な目標・目的をもって主体的に学んでいる。	3.0	3.2	3.1	2.9
4	項目40：大学が学生に卒業時まで身に付けることを求めている力（※）を理解している。	2.8	2.7	2.7	2.8
4	項目41：授業アンケート等の回答を通じて大学教育が良くなっている。	2.3	2.4	2.3	2.4
4	項目42：教員が学生と向き合って教育に取り組んでいる。	2.9	3.1	3.1	3.0
4	項目43：大学での学びによって自分自身の成長を実感している。	3.0	3.3	3.1	3.0
4	項目44：知識やスキルを組み合わせ一つのものをつくり出す力が必要と感じている。	3.3	3.4	3.4	3.3
4	項目45：大学での学びを通じて社会に対する理解が深まっている。	3.0	3.2	3.1	3.0
4	項目46：卒業後も主体的に学び続けていくことの大切さを感じている。	3.5	3.6	3.6	3.4
5	項目47：授業への出席 ※実験・実習、オンライン授業を含む	13.7	5.6	13.1	12.2
5	項目48：卒業論文・卒業研究・卒業制作	7.3	16.0	7.9	8.1
5	項目49：予習・復習・課題など授業に関する学習 ※卒業論文等は除く	7.2	3.0	6.5	6.5
5	項目50：授業の予習・復習・課題以外の学習（学問に係る読書やディスカッション、実	6.3	5.7	6.7	5.3
5	項目51：部活動／サークル活動	2.5	2.6	3.2	2.5
5	項目52：アルバイト／定職	9.7	11.9	10.0	10.3
5	項目53：趣味／娯楽／交友	12.0	11.6	11.2	12.6
5	項目54：スマートフォンの使用 ※学習のために使用している時間は除く	14.7	16.4	15.5	15.5
6	項目55：前期（4月～9月）	3.2	2.3	2.5	3.0
6	項目56：後期（10月～3月）	3.4	2.5	2.5	3.1
7	項目57－1：同時双方向型オンライン授業の割合（令和2年度）	4.0	4.5	4.6	4.0
7	項目57－2：同時双方向型オンライン授業の割合（令和3年度）	3.2	4.5	4.4	3.3
7	項目58－1：オンデマンド型オンライン授業の割合（令和2年度）	4.2	2.1	2.3	4.6
7	項目58－2：オンデマンド型オンライン授業の割合（令和3年度）	2.7	1.3	1.5	3.1

令和3年度 全国学生調査（第2回試行実施）回答集計～国際教養学部～

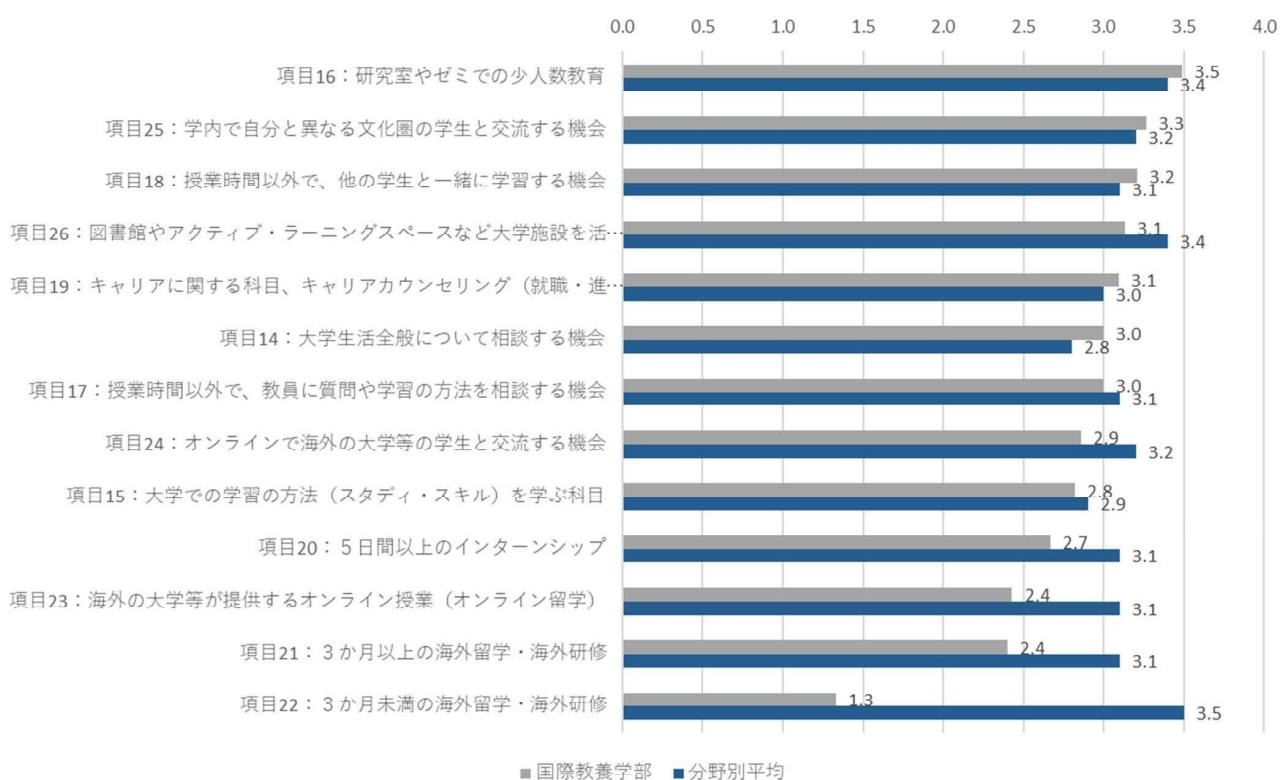
【国際教養学部】

問1 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか



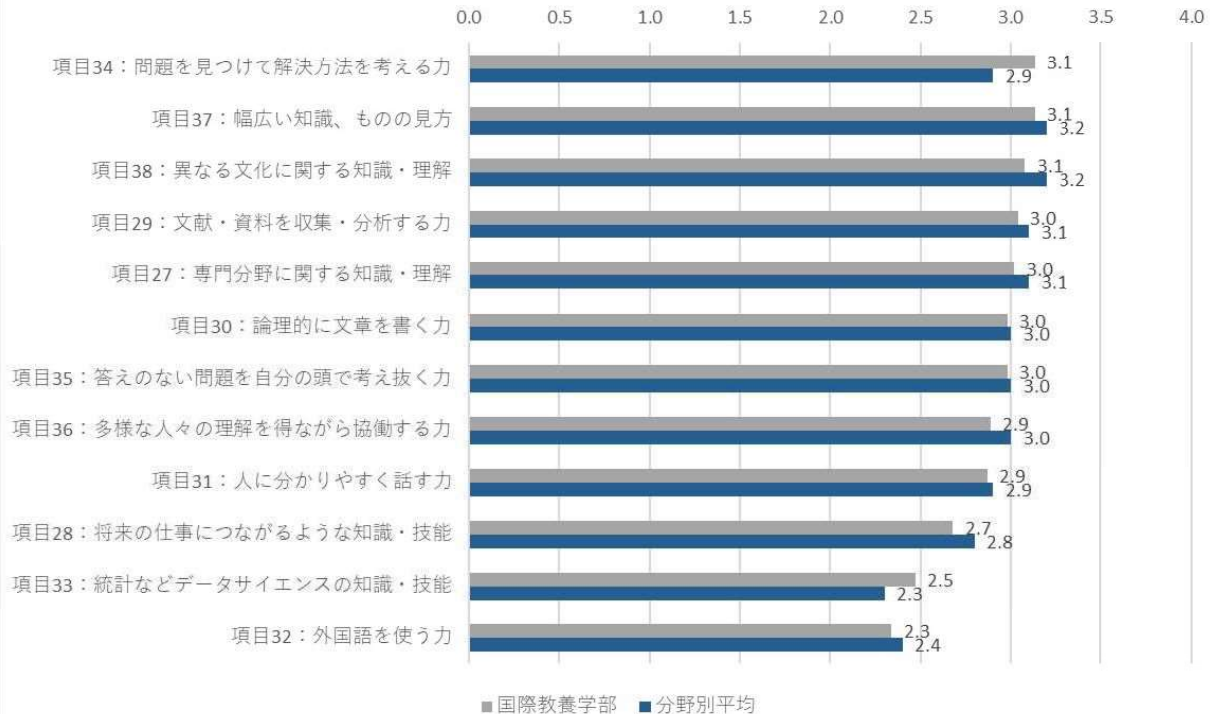
【国際教養学部】

問2 大学に入ってから次のような経験はありましたか。また、その経験は有用でしたか



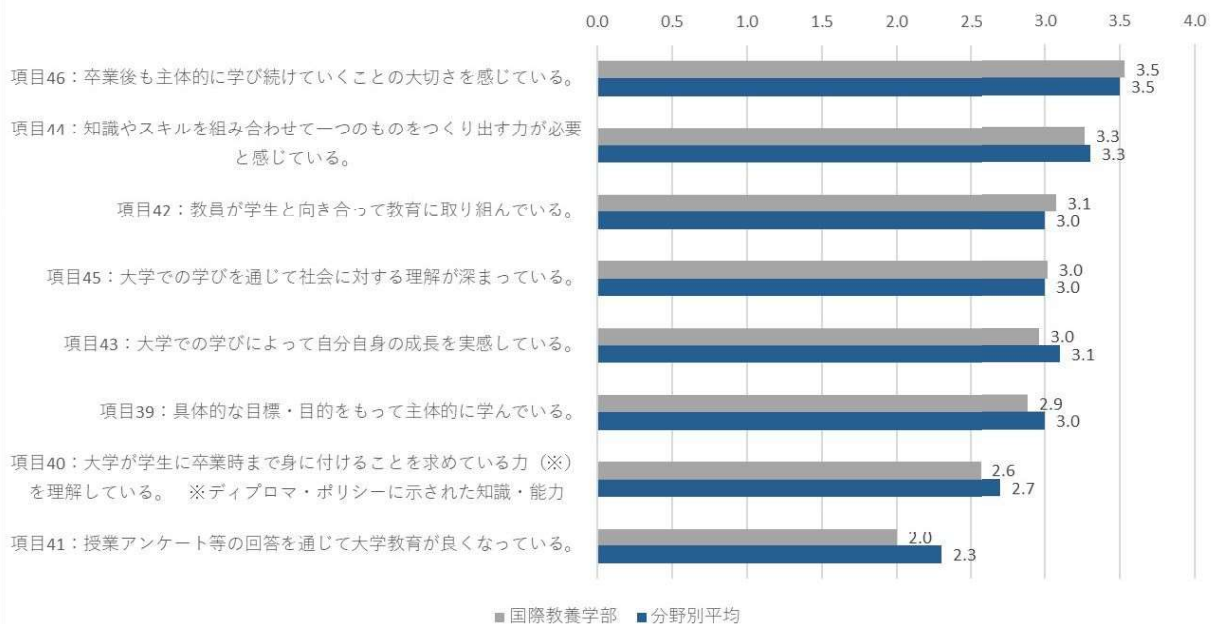
【国際教養学部】

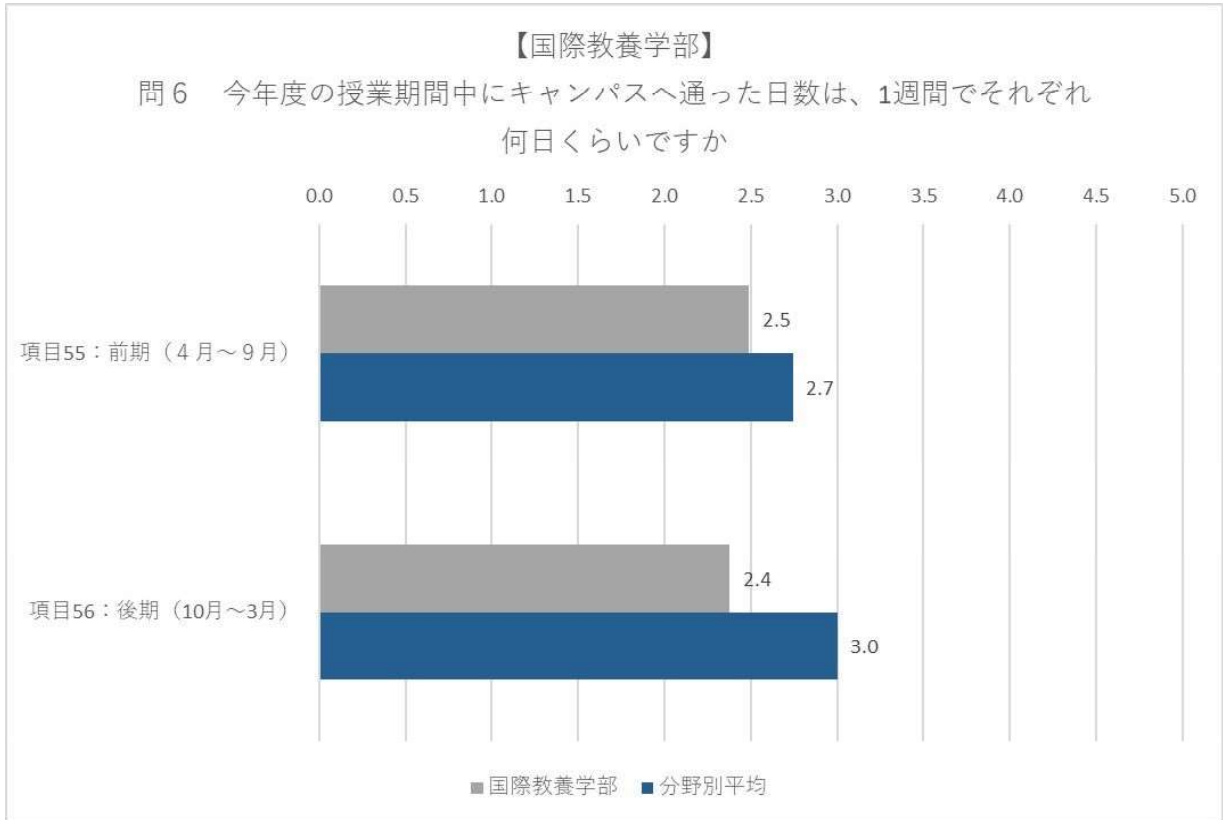
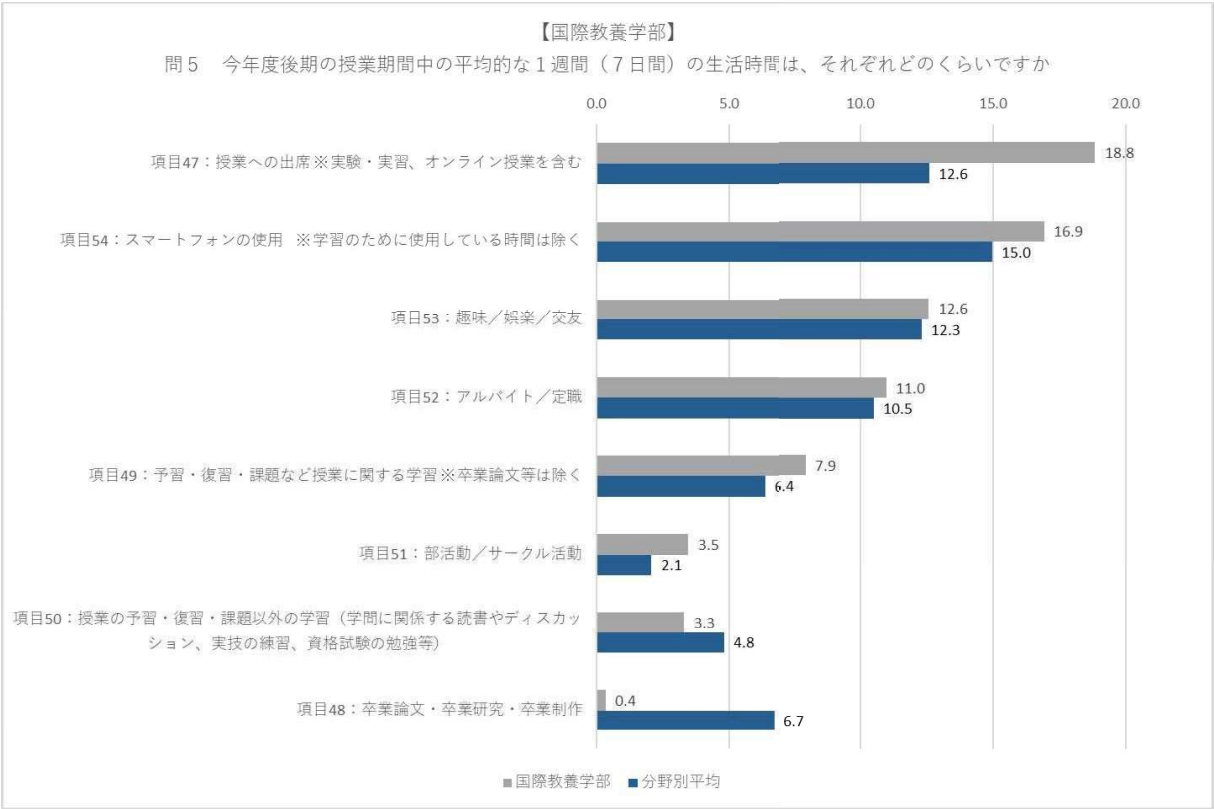
問3 大学教育を通じて、次のような知識や能力が身に付いたと思いますか



【国際教養学部】

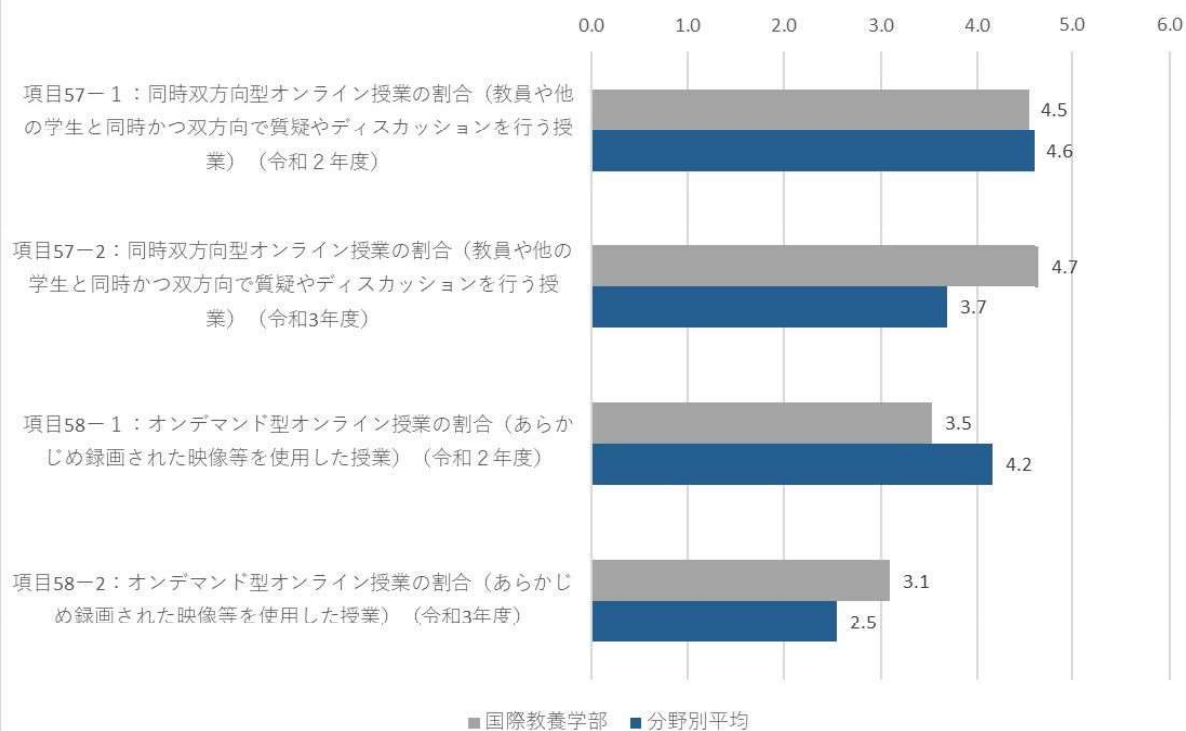
問4 これまでの大学での学び全体を振り返って、次の項目についてどのように思いますか





【国際教養学部】

問7 昨年度と今年度に受けた授業のうち、次の授業形態の割合はそれぞれどのくらいですか

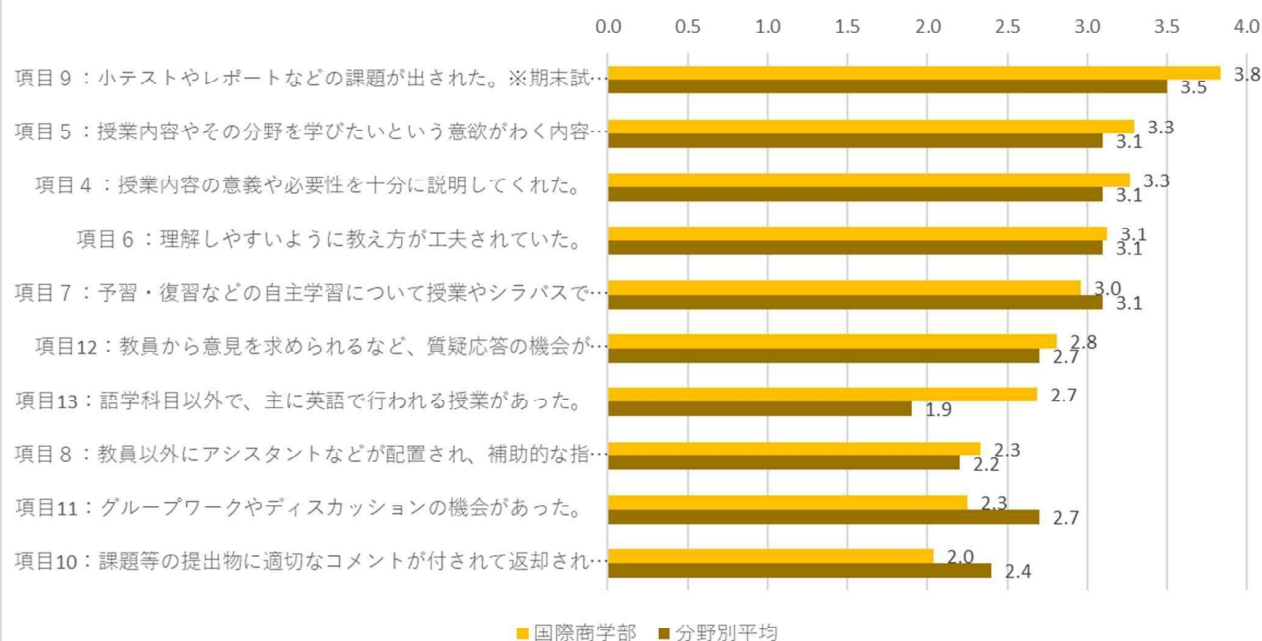


問	設問	全国	国際 教養学部	本学合計	分野別平均 (人文)
1	項目4：授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれた。	3.2	3.1	3.2	3.2
1	項目5：授業内容やその分野を学びたいという意欲がわく内容だった。	3.2	3.3	3.3	3.3
1	項目6：理解しやすいように教え方が工夫されていた。	3.1	3.1	3.1	3.2
1	項目7：予習・復習などの自主学習について授業やシラバスで指示があった。	3.0	2.8	2.9	3.1
1	項目8：教員以外にアシスタントなどが配置され、補助的な指導があった。	2.5	2.0	2.4	2.2
1	項目9：小テストやレポートなどの課題が出された。※期末試験は除く	3.5	3.7	3.5	3.5
1	項目10：課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却された。	2.4	2.3	2.3	2.6
1	項目11：グループワークやディスカッションの機会があった。	2.8	2.1	2.8	2.9
1	項目12：教員から意見を求められるなど、質疑応答の機会があった。	2.8	2.6	2.9	2.9
1	項目13：語学科目以外で、主に英語で行われる授業があった。	1.8	2.2	2.4	1.9
2	項目14：大学生活全般について相談する機会	2.8	3.0	2.8	2.8
2	項目15：大学での学習の方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目	2.9	2.8	2.8	2.9
2	項目16：研究室やゼミでの少人数教育	3.3	3.5	3.3	3.4
2	項目17：授業時間以外で、教員に質問や学習の方法を相談する機会	3.0	3.0	3.1	3.1
2	項目18：授業時間以外で、他の学生と一緒に学習する機会	3.2	3.2	3.3	3.1
2	項目19：キャリアに関する科目、キャリアアカウンセリング（就職・進学相談）	3.0	3.1	2.9	3.0
2	項目20：5日間以上のインターンシップ	3.2	2.7	2.9	3.1
2	項目21：3か月以上の海外留学・海外研修	3.2	2.4	2.8	3.1
2	項目22：3か月未満の海外留学・海外研修	3.4	1.3	3.5	3.5
2	項目23：海外の大学等が提供するオンライン授業（オンライン留学）	3.0	2.4	3.0	3.1
2	項目24：オンラインで海外の大学等の学生と交流する機会	3.0	2.9	3.1	3.2
2	項目25：学内で自分と異なる文化圏の学生と交流する機会	3.1	3.3	3.2	3.2
2	項目26：図書館やアクティブ・ラーニングスペースなど大学施設を活用した学習	3.3	3.1	3.3	3.4
3	項目27：専門分野に関する知識・理解	3.1	3.0	3.3	3.1
3	項目28：将来の仕事につながるような知識・技能	3.0	2.7	3.0	2.8
3	項目29：文献・資料を収集・分析する力	3.0	3.0	3.2	3.1
3	項目30：論理的に文章を書く力	2.9	3.0	3.1	3.0
3	項目31：人に分かりやすく話す力	2.8	2.9	3.0	2.9
3	項目32：外国語を使う力	2.1	2.3	2.4	2.4
3	項目33：統計などデータサイエンスの知識・技能	2.5	2.5	2.5	2.3
3	項目34：問題を見つけて解決方法を考える力	2.9	3.1	3.1	2.9
3	項目35：答えのない問題を自分の頭で考え抜く力	2.9	3.0	3.0	3.0
3	項目36：多様な人々の理解を得ながら協働する力	3.0	2.9	3.1	3.0
3	項目37：幅広い知識、ものの見方	3.1	3.1	3.3	3.2
3	項目38：異なる文化に関する知識・理解	2.8	3.1	2.9	3.2
4	項目39：具体的な目標・目的をもって主体的に学んでいる。	3.0	2.9	3.1	3.0
4	項目40：大学が学生に卒業時まで身に付けることを求めている力（※）を理解している。 ※ディプロマ・ポリシーに示された知識・能力	2.8	2.6	2.7	2.7
4	項目41：授業アンケート等の回答を通じて大学教育が良くなっている。	2.3	2.0	2.3	2.3
4	項目42：教員が学生と向き合って教育に取り組んでいる。	2.9	3.1	3.1	3.0
4	項目43：大学での学びによって自分自身の成長を実感している。	3.0	3.0	3.1	3.1
4	項目44：知識やスキルを組み合わせる一つのものをつくり出す力が必要と感じている。	3.3	3.3	3.4	3.3
4	項目45：大学での学びを通じて社会に対する理解が深まっている。	3.0	3.0	3.1	3.0
4	項目46：卒業後も主体的に学び続けていくことの大切さを感じている。	3.5	3.5	3.6	3.5
5	項目47：授業への出席 ※実験・実習、オンライン授業を含む	13.7	18.8	13.1	12.6
5	項目48：卒業論文・卒業研究・卒業制作	7.3	0.4	7.9	6.7
5	項目49：予習・復習・課題など授業に関する学習 ※卒業論文等は除く	7.2	7.9	6.5	6.4
5	項目50：授業の予習・復習・課題以外の学習（学問に関係する読書やディスカッション、実技の練習、資格試験の勉強等）	6.3	3.3	6.7	4.8
5	項目51：部活動／サークル活動	2.5	3.5	3.2	2.1
5	項目52：アルバイト／定職	9.7	11.0	10.0	10.5
5	項目53：趣味／娯楽／交友	12.0	12.6	11.2	12.3
5	項目54：スマートフォンの使用 ※学習のために使用している時間は除く	14.7	16.9	15.5	15.0
6	項目55：前期（4月～9月）	3.2	2.5	2.5	2.7
6	項目56：後期（10月～3月）	3.4	2.4	2.5	3.0
7	項目57－1：同時双方向型オンライン授業の割合（令和2年度）	4.0	4.5	4.6	4.6
7	項目57－2：同時双方向型オンライン授業の割合（令和3年度）	3.2	4.7	4.4	3.7
7	項目58－1：オンデマンド型オンライン授業の割合（令和2年度）	4.2	3.5	2.3	4.2
7	項目58－2：オンデマンド型オンライン授業の割合（令和3年度）	2.7	3.1	1.5	2.5

令和3年度 全国学生調査（第2回試行実施）回答集計～国際商学部～

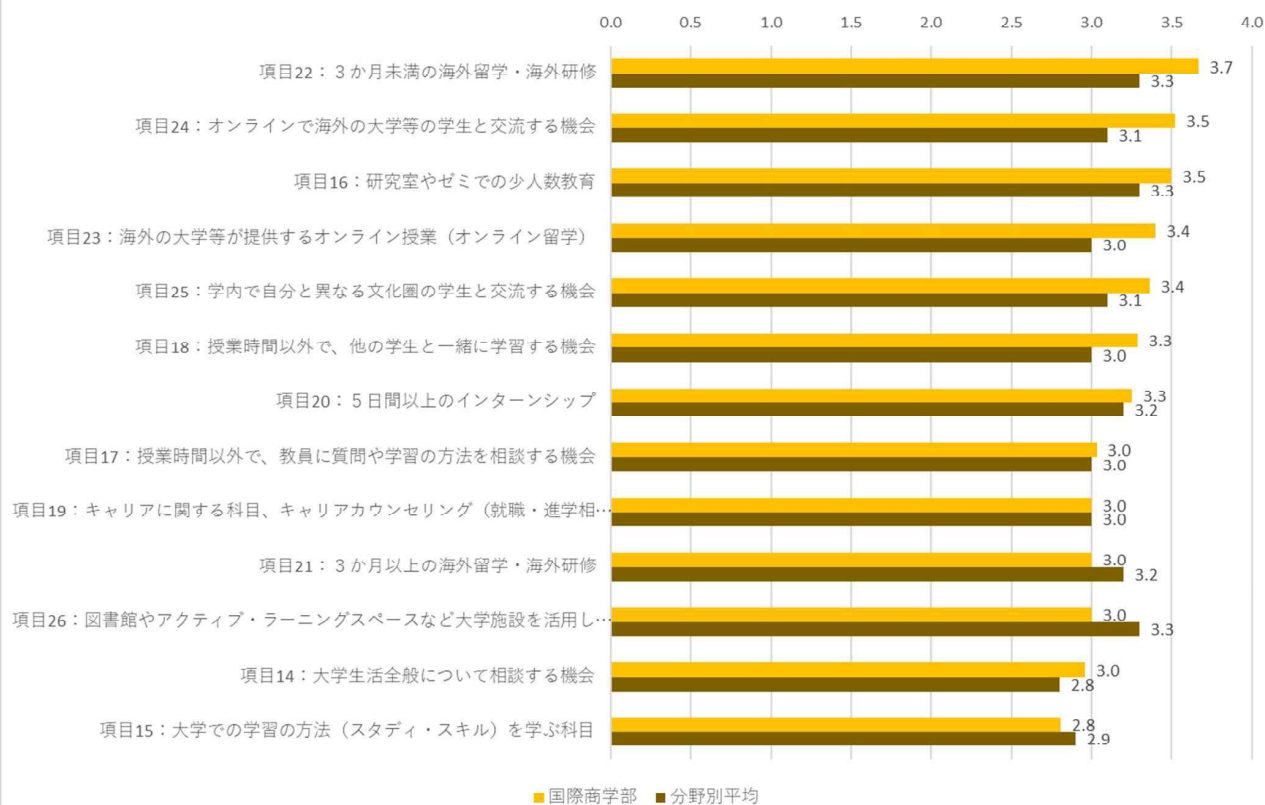
【国際商学部】

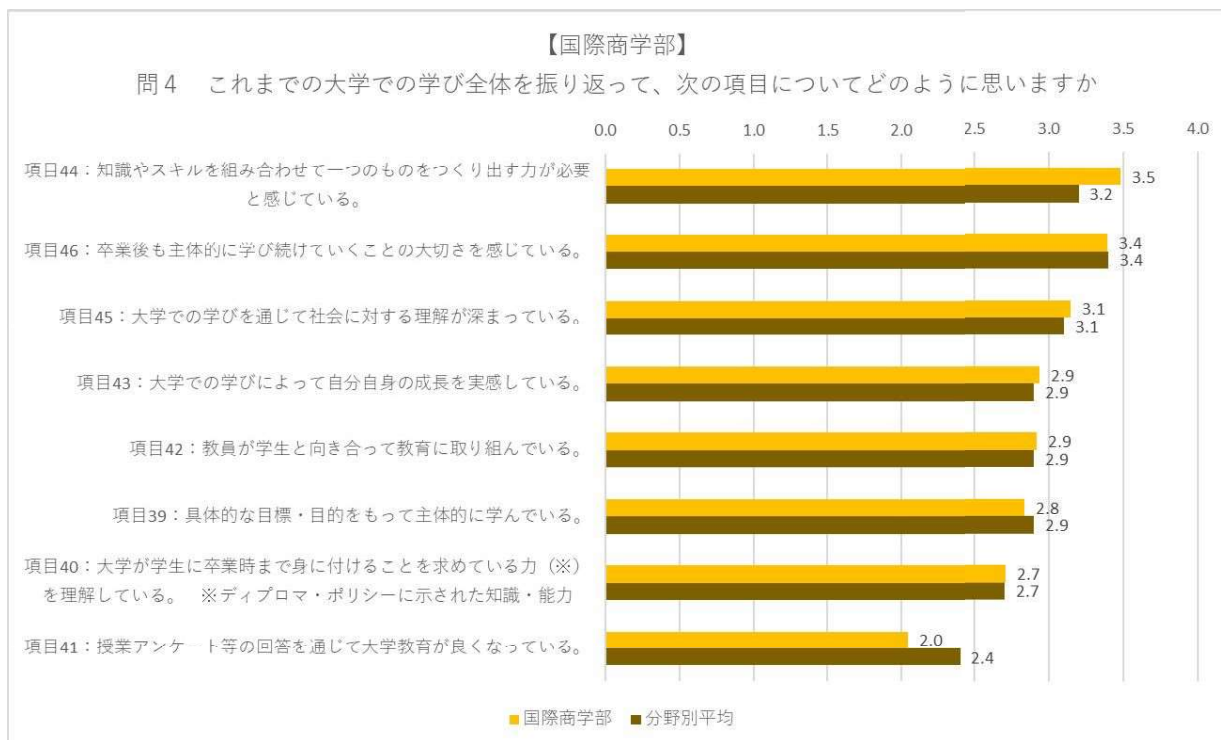
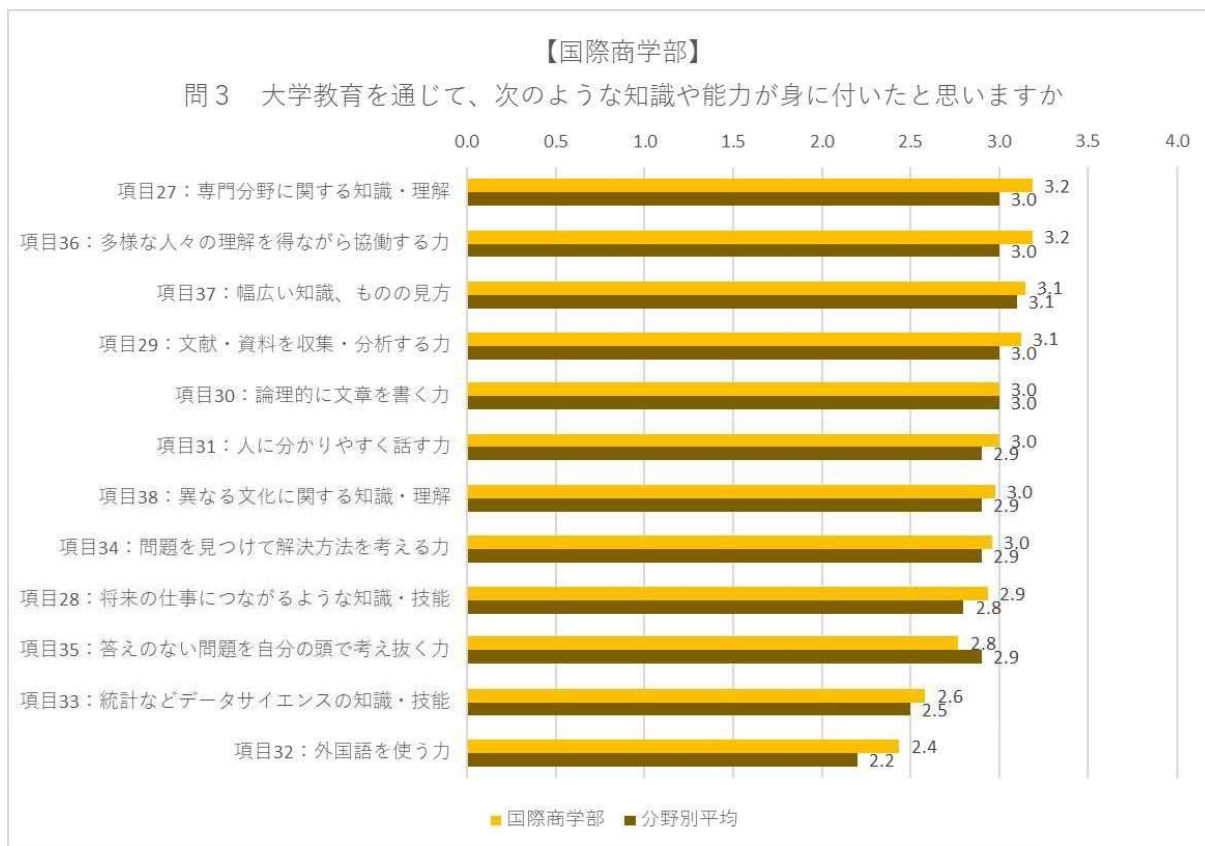
問1 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか

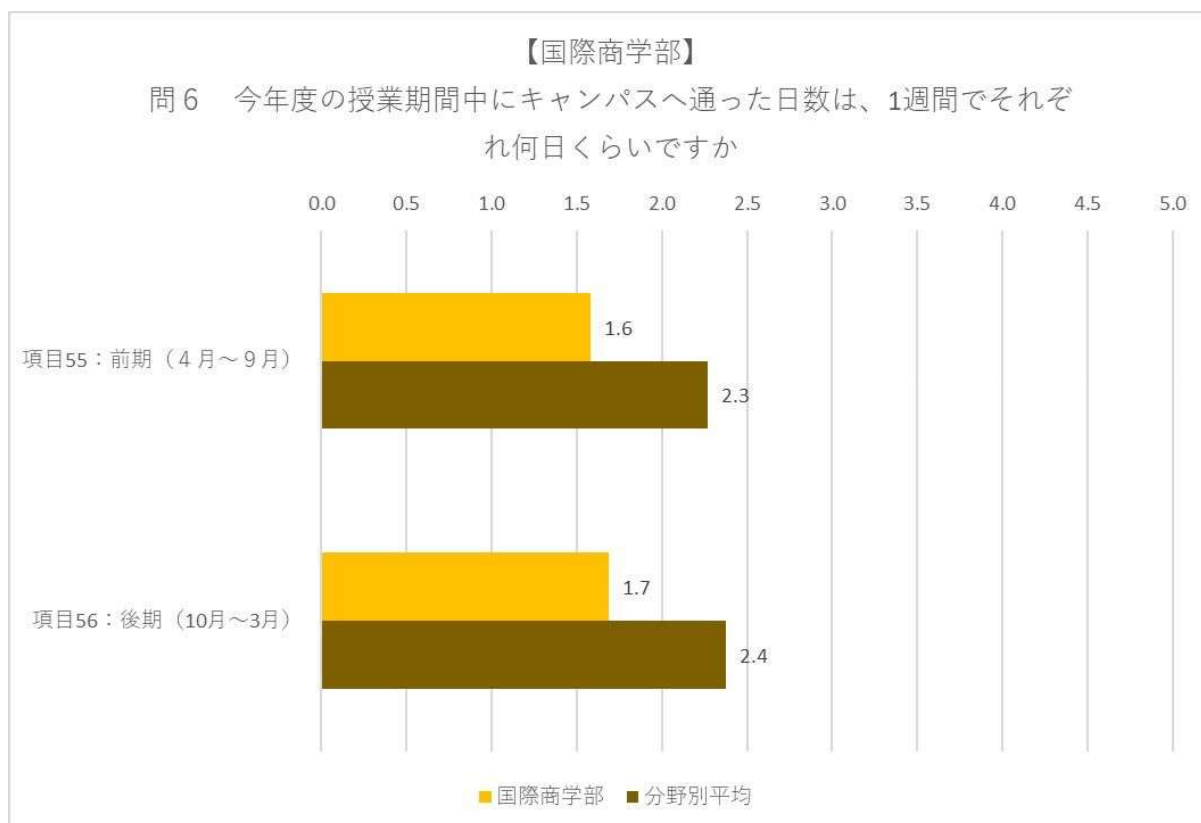
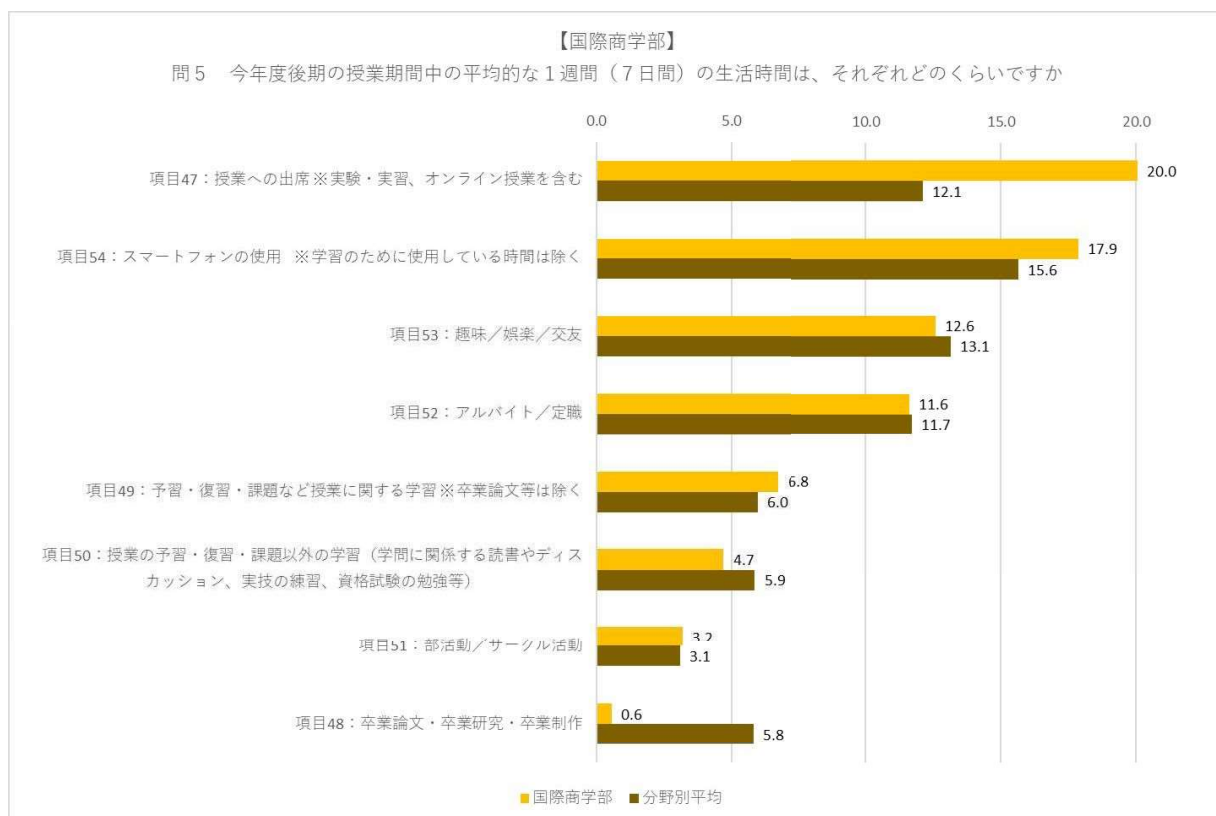


【国際商学部】

問2 大学に入ってから次のような経験はありましたか。また、その経験は有用でしたか

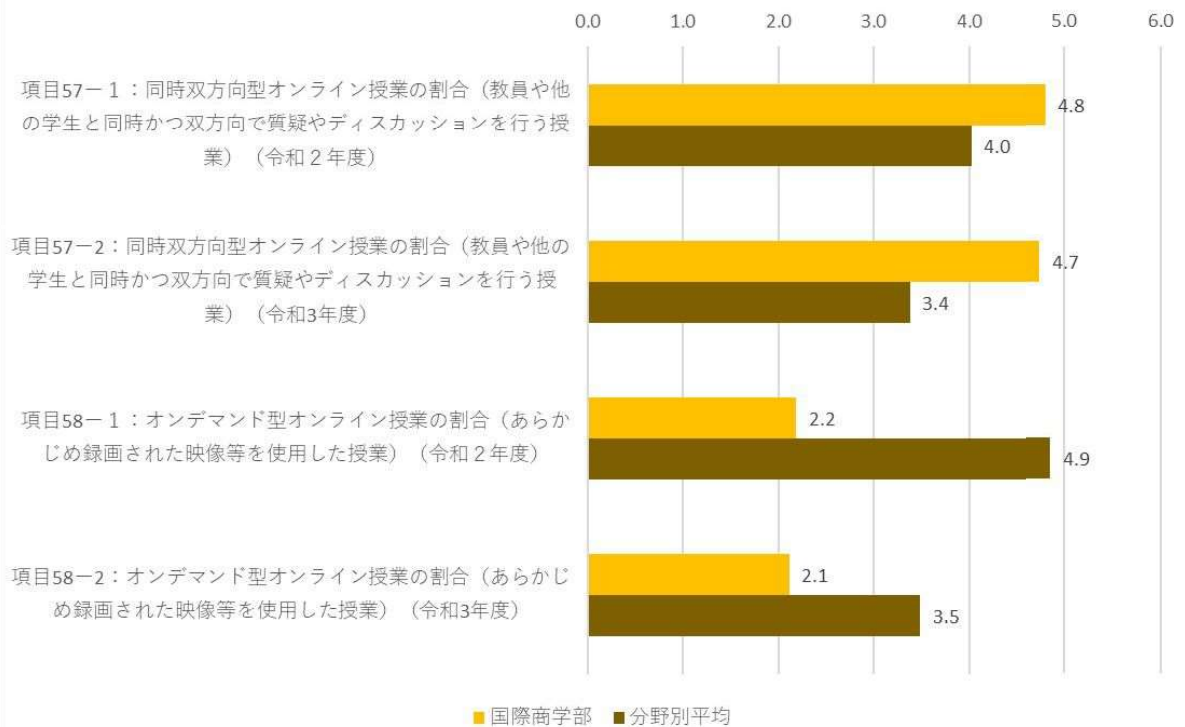






【国際商学部】

問7 昨年度と今年度に受けた授業のうち、次の授業形態の割合はそれぞれ
のくらいですか

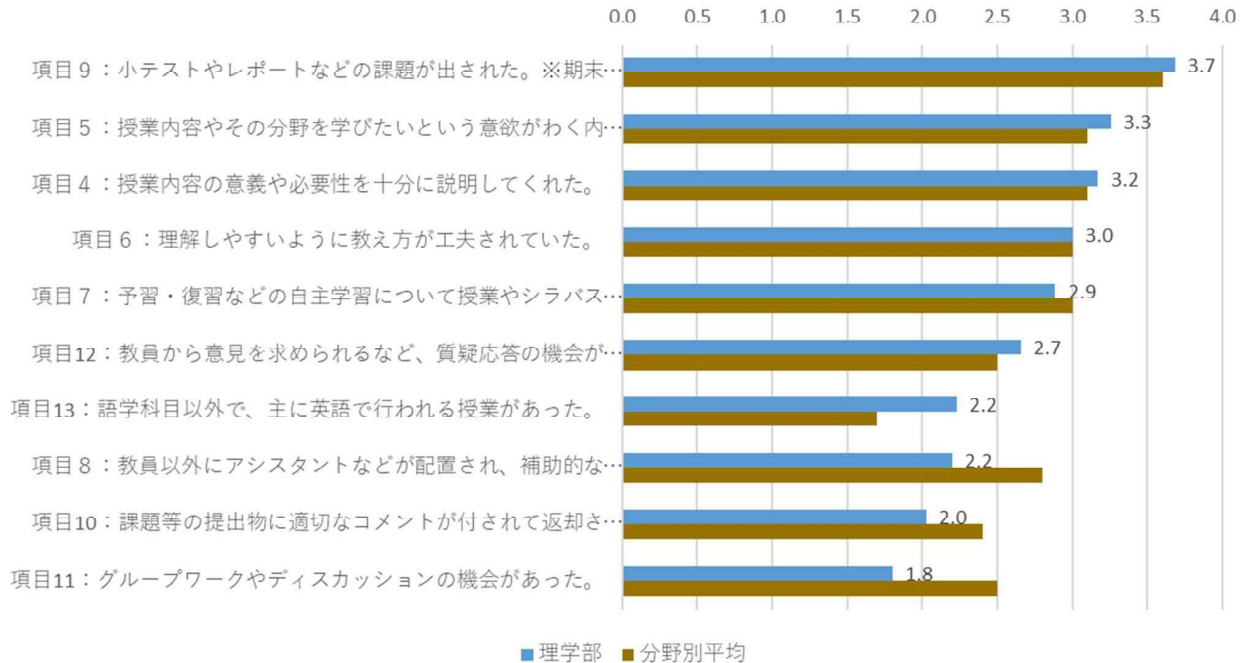


問	設問	全国	国際 商学部	本学合計	分野別平均 (社会)
1	項目4：授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれた。	3.2	3.3	3.2	3.1
1	項目5：授業内容やその分野を学びたいという意欲がわく内容だった。	3.2	3.3	3.3	3.1
1	項目6：理解しやすいように教え方が工夫されていた。	3.1	3.1	3.1	3.1
1	項目7：予習・復習などの自主学習について授業やシラバスで指示があった。	3.0	3.0	2.9	3.1
1	項目8：教員以外にアシスタントなどが配置され、補助的な指導があった。	2.5	2.3	2.4	2.2
1	項目9：小テストやレポートなどの課題が出された。※期末試験は除く	3.5	3.8	3.5	3.5
1	項目10：課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却された。	2.4	2.0	2.3	2.4
1	項目11：グループワークやディスカッションの機会があった。	2.8	2.3	2.8	2.7
1	項目12：教員から意見を求められるなど、質疑応答の機会があった。	2.8	2.8	2.9	2.7
1	項目13：語学科目以外で、主に英語で行われる授業があった。	1.8	2.7	2.4	1.9
2	項目14：大学生活全般について相談する機会	2.8	3.0	2.8	2.8
2	項目15：大学での学習の方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目	2.9	2.8	2.8	2.9
2	項目16：研究室やゼミでの少人数教育	3.3	3.5	3.3	3.3
2	項目17：授業時間以外で、教員に質問や学習の方法を相談する機会	3.0	3.0	3.1	3.0
2	項目18：授業時間以外で、他の学生と一緒に学習する機会	3.2	3.3	3.3	3.0
2	項目19：キャリアに関する科目、キャリアアカウンセリング（就職・進学相談）	3.0	3.0	2.9	3.0
2	項目20：5日間以上のインターンシップ	3.2	3.3	2.9	3.2
2	項目21：3か月以上の海外留学・海外研修	3.2	3.0	2.8	3.2
2	項目22：3か月未満の海外留学・海外研修	3.4	3.7	3.5	3.3
2	項目23：海外の大学等が提供するオンライン授業（オンライン留学）	3.0	3.4	3.0	3.0
2	項目24：オンラインで海外の大学等の学生と交流する機会	3.0	3.5	3.1	3.1
2	項目25：学内で自分と異なる文化圏の学生と交流する機会	3.1	3.4	3.2	3.1
2	項目26：図書館やアクティブ・ラーニングスペースなど大学施設を活用した学習	3.3	3.0	3.3	3.3
3	項目27：専門分野に関する知識・理解	3.1	3.2	3.3	3.0
3	項目28：将来の仕事につながるような知識・技能	3.0	2.9	3.0	2.8
3	項目29：文献・資料を収集・分析する力	3.0	3.1	3.2	3.0
3	項目30：論理的に文章を書く力	2.9	3.0	3.1	3.0
3	項目31：人に分かりやすく話す力	2.8	3.0	3.0	2.9
3	項目32：外国語を使う力	2.1	2.4	2.4	2.2
3	項目33：統計などデータサイエンスの知識・技能	2.5	2.6	2.5	2.5
3	項目34：問題を見つけて解決方法を考える力	2.9	3.0	3.1	2.9
3	項目35：答えのない問題を自分の頭で考え抜く力	2.9	2.8	3.0	2.9
3	項目36：多様な人々の理解を得ながら協働する力	3.0	3.2	3.1	3.0
3	項目37：幅広い知識、ものの見方	3.1	3.1	3.3	3.1
3	項目38：異なる文化に関する知識・理解	2.8	3.0	2.9	2.9
4	項目39：具体的な目標・目的をもって主体的に学んでいる。	3.0	2.8	3.1	2.9
4	項目40：大学が学生に卒業時まで身に付けることを求めている力（※）を理解している。 ※ディプロマ・ポリシーに示された知識・能力	2.8	2.7	2.7	2.7
4	項目41：授業アンケート等の回答を通じて大学教育が良くなっている。	2.3	2.0	2.3	2.4
4	項目42：教員が学生と向き合って教育に取り組んでいる。	2.9	2.9	3.1	2.9
4	項目43：大学での学びによって自分自身の成長を実感している。	3.0	2.9	3.1	2.9
4	項目44：知識やスキルを組み合わせ一つのものをつくり出す力が必要と感じている。	3.3	3.5	3.4	3.2
4	項目45：大学での学びを通じて社会に対する理解が深まっている。	3.0	3.1	3.1	3.1
4	項目46：卒業後も主体的に学び続けていくことの大切さを感じている。	3.5	3.4	3.6	3.4
5	項目47：授業への出席 ※実験・実習、オンライン授業を含む	13.7	20.0	13.1	12.1
5	項目48：卒業論文・卒業研究・卒業制作	7.3	0.6	7.9	5.8
5	項目49：予習・復習・課題など授業に関する学習 ※卒業論文等は除く	7.2	6.8	6.5	6.0
5	項目50：授業の予習・復習・課題以外の学習（学問に関係する読書やディスカッション、実技の練習、資格試験の勉強等）	6.3	4.7	6.7	5.9
5	項目51：部活動／サークル活動	2.5	3.2	3.2	3.1
5	項目52：アルバイト／定職	9.7	11.6	10.0	11.7
5	項目53：趣味／娯楽／交友	12.0	12.6	11.2	13.1
5	項目54：スマートフォンの使用 ※学習のために使用している時間は除く	14.7	17.9	15.5	15.6
6	項目55：前期（4月～9月）	3.2	1.6	2.5	2.3
6	項目56：後期（10月～3月）	3.4	1.7	2.5	2.4
7	項目57-1：同時双方向型オンライン授業の割合（令和2年度）	4.0	4.8	4.6	4.0
7	項目57-2：同時双方向型オンライン授業の割合（令和3年度）	3.2	4.7	4.4	3.4
7	項目58-1：オンデマンド型オンライン授業の割合（令和2年度）	4.2	2.2	2.3	4.9
7	項目58-2：オンデマンド型オンライン授業の割合（令和3年度）	2.7	2.1	1.5	3.5

令和3年度 全国学生調査（第2回試行実施）回答集計～理学部～

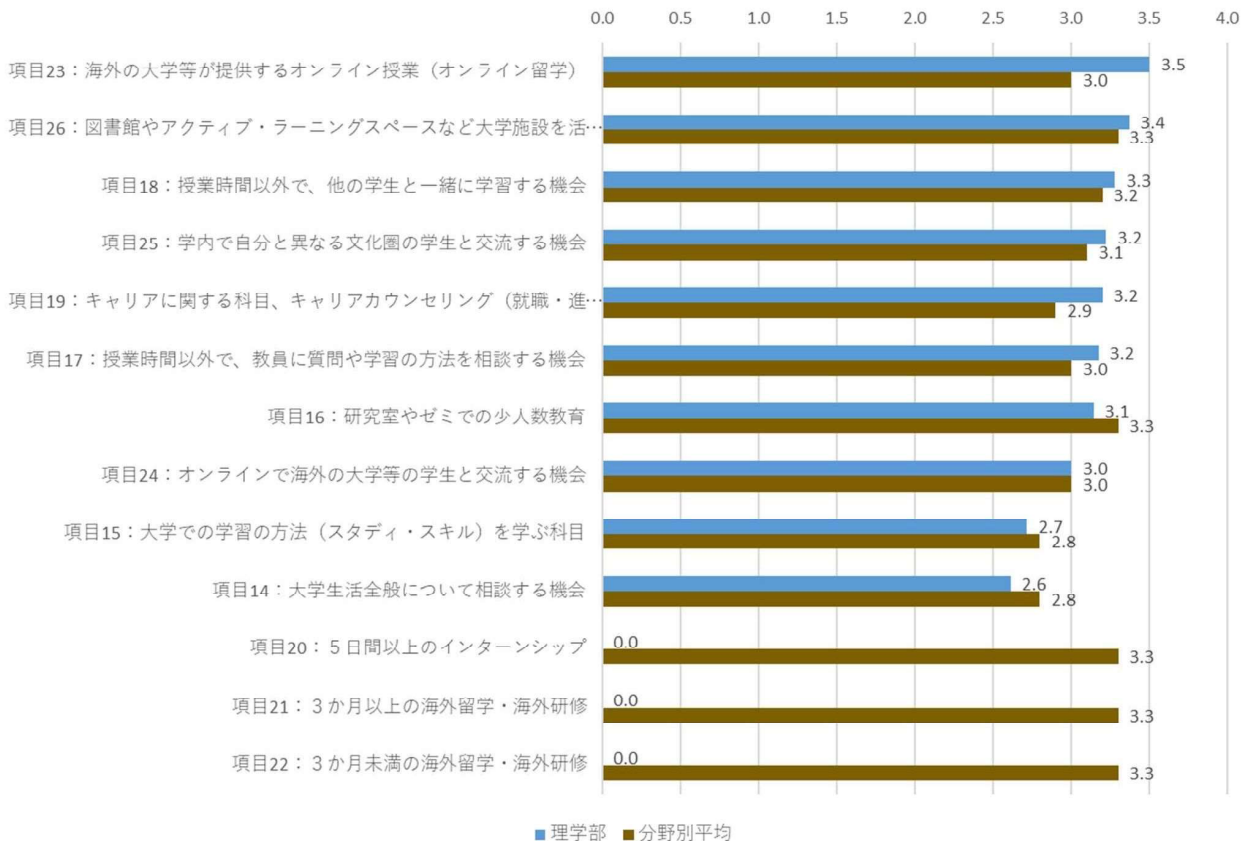
【理学部】

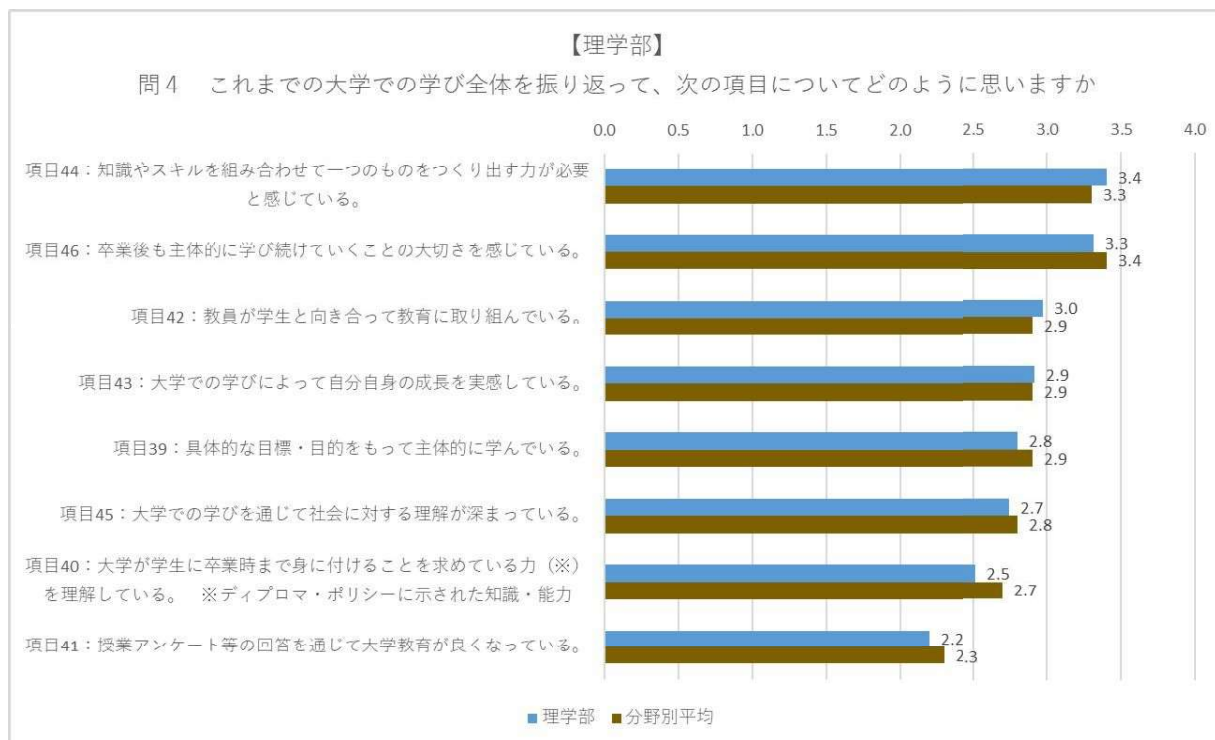
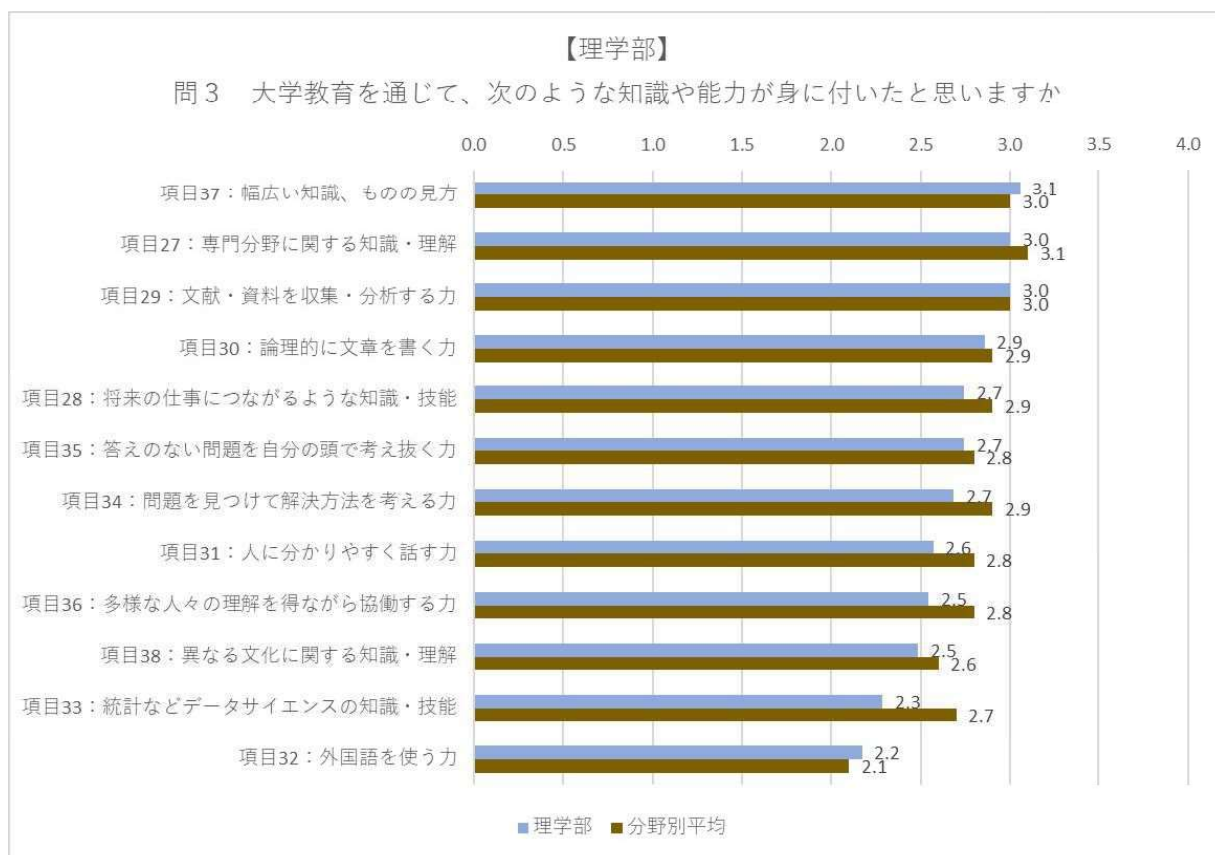
問1 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか

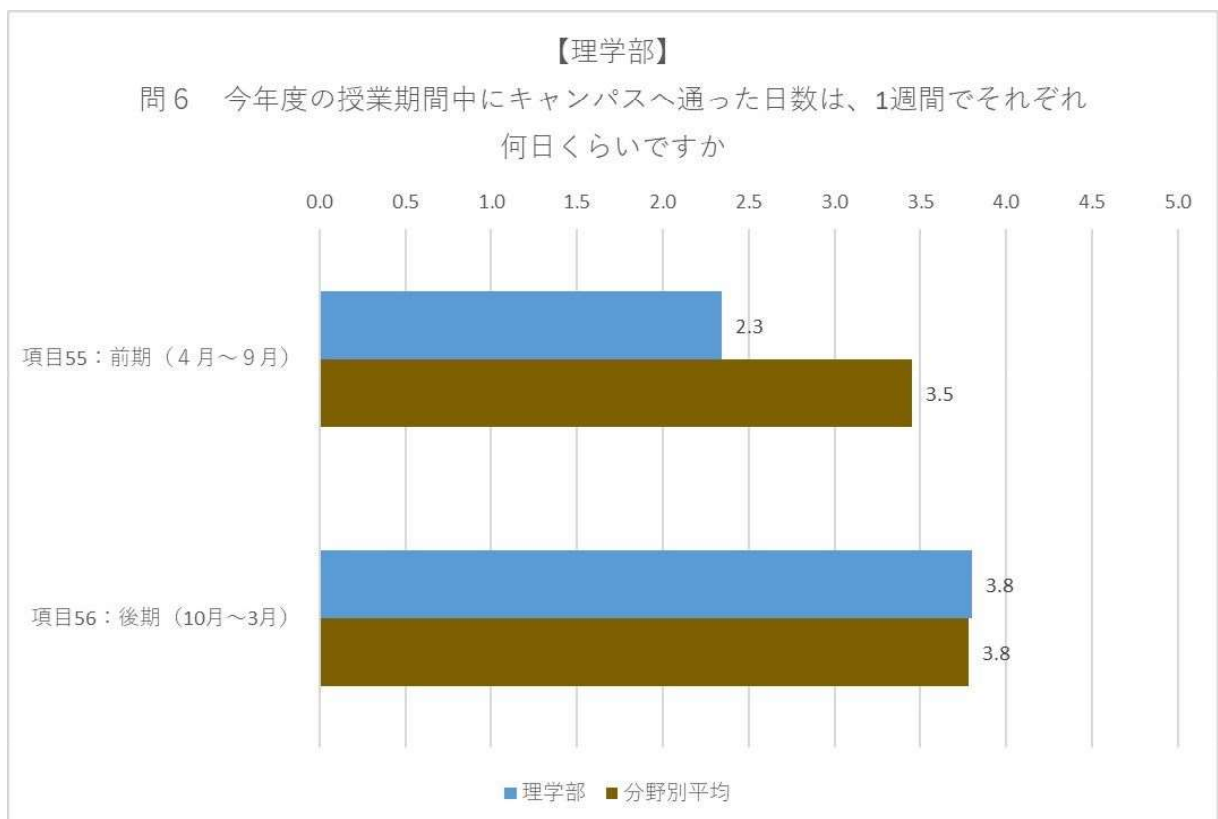
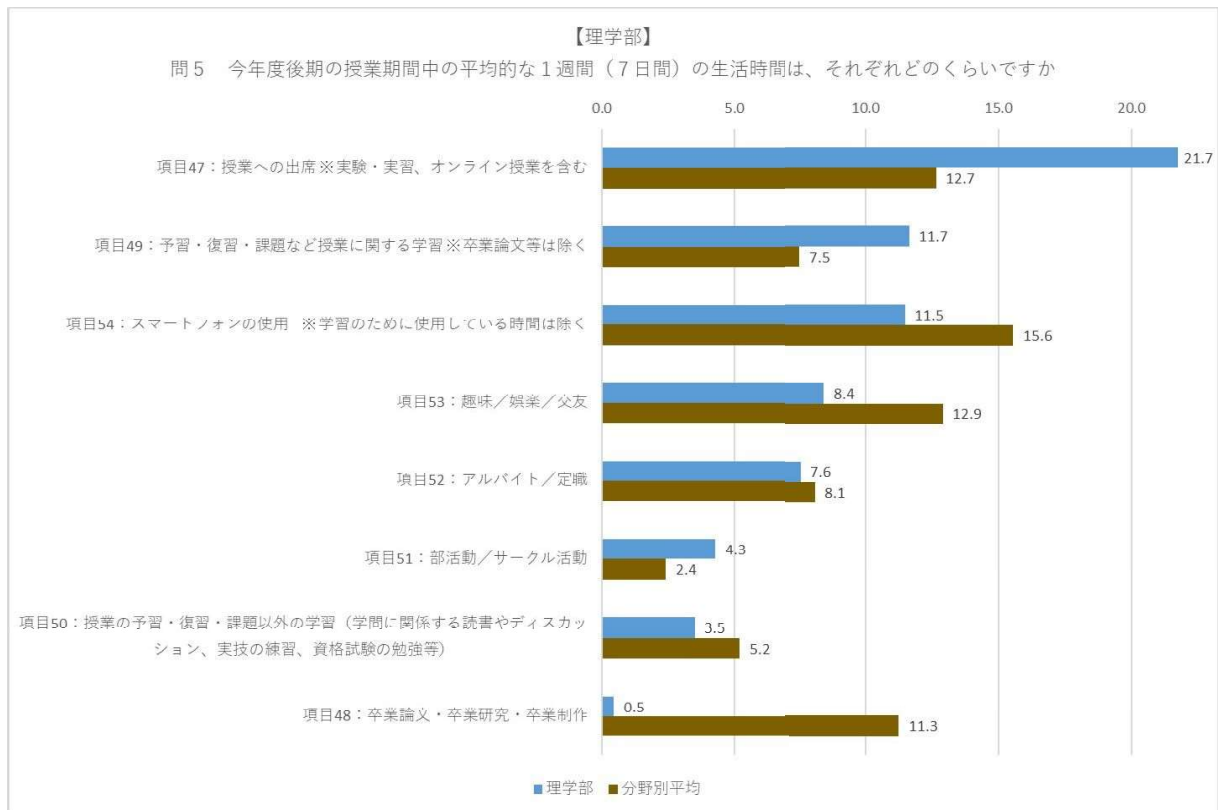


【理学部】

問2 大学に入ってから次のような経験はありましたか。また、その経験は有用でしたか

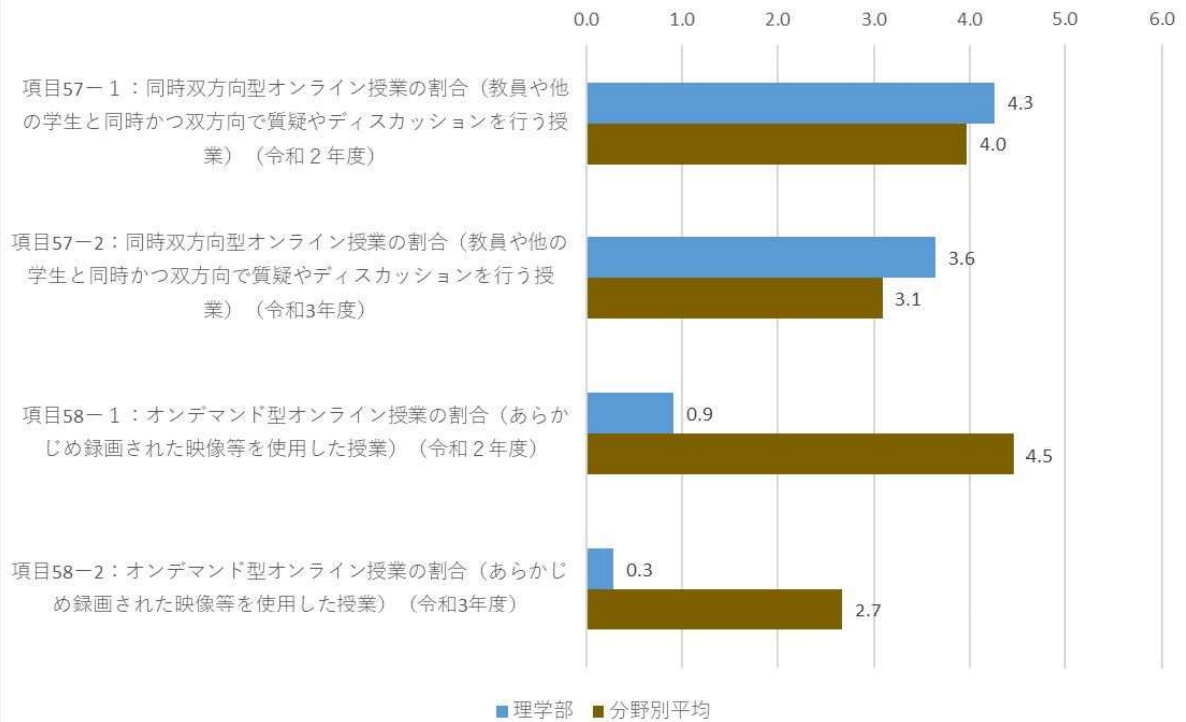






【理学部】

問7 昨年度と今年度に受けた授業のうち、次の授業形態の割合はそれぞれ
のくらいですか

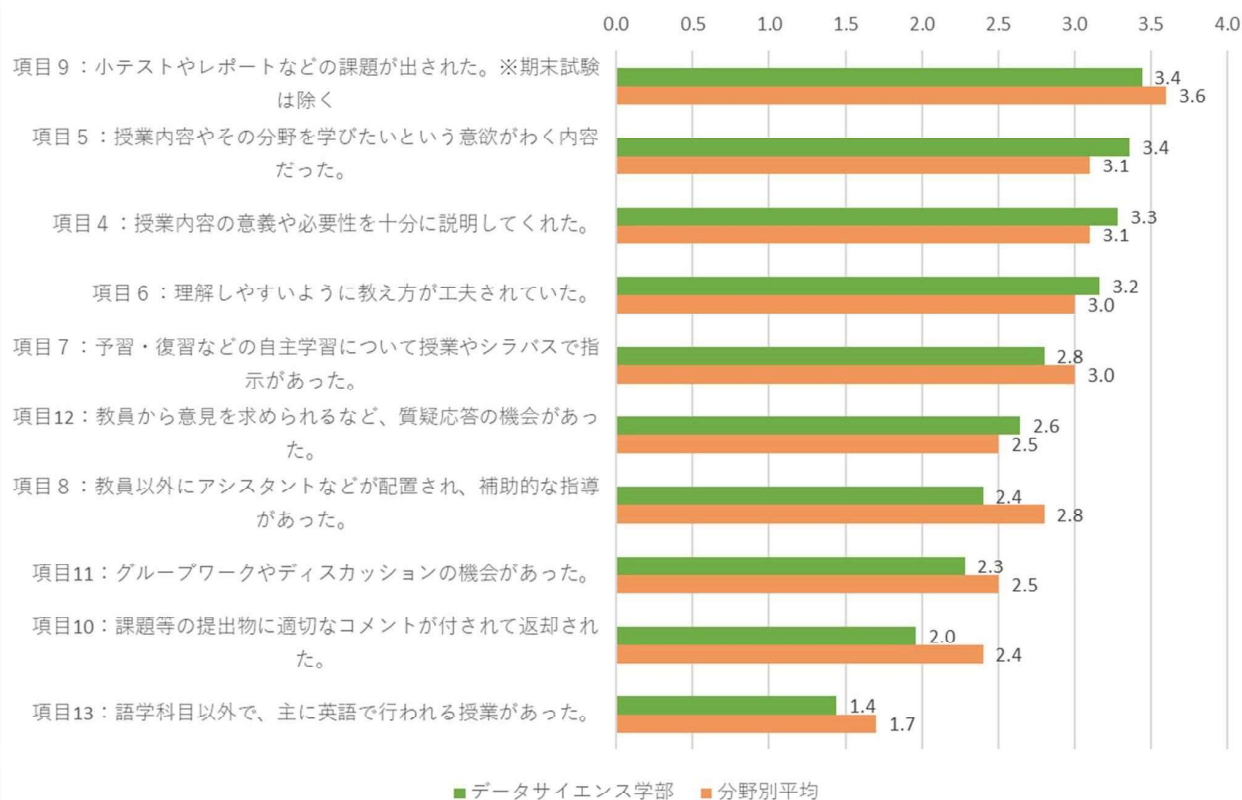


問	設問	全国	理学部	本学合計	分野別平均 (理・工)
1	項目4：授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれた。	3.2	3.2	3.2	3.1
1	項目5：授業内容やその分野を学びたいという意欲がわく内容だった。	3.2	3.3	3.3	3.1
1	項目6：理解しやすいように教え方が工夫されていた。	3.1	3.0	3.1	3.0
1	項目7：予習・復習などの自主学習について授業やシラバスで指示があった。	3.0	2.9	2.9	3.0
1	項目8：教員以外にアシスタントなどが配置され、補助的な指導があった。	2.5	2.2	2.4	2.8
1	項目9：小テストやレポートなどの課題が出された。※期末試験は除く	3.5	3.7	3.5	3.6
1	項目10：課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却された。	2.4	2.0	2.3	2.4
1	項目11：グループワークやディスカッションの機会があった。	2.8	1.8	2.8	2.5
1	項目12：教員から意見を求められるなど、質疑応答の機会があった。	2.8	2.7	2.9	2.5
1	項目13：語学科目以外で、主に英語で行われる授業があった。	1.8	2.2	2.4	1.7
2	項目14：大学生活全般について相談する機会	2.8	2.6	2.8	2.8
2	項目15：大学での学習の方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目	2.9	2.7	2.8	2.8
2	項目16：研究室やゼミでの少人数教育	3.3	3.1	3.3	3.3
2	項目17：授業時間以外で、教員に質問や学習の方法を相談する機会	3.0	3.2	3.1	3.0
2	項目18：授業時間以外で、他の学生と一緒に学習する機会	3.2	3.3	3.3	3.2
2	項目19：キャリアに関する科目、キャリアアカウンセリング（就職・進学相談）	3.0	3.2	2.9	2.9
2	項目20：5日間以上のインターンシップ	3.2	-	2.9	3.3
2	項目21：3か月以上の海外留学・海外研修	3.2	-	2.8	3.3
2	項目22：3か月未満の海外留学・海外研修	3.4	-	3.5	3.3
2	項目23：海外の大学等が提供するオンライン授業（オンライン留学）	3.0	3.5	3.0	3.0
2	項目24：オンラインで海外の大学等の学生と交流する機会	3.0	3.0	3.1	3.0
2	項目25：学内で自分と異なる文化圏の学生と交流する機会	3.1	3.2	3.2	3.1
2	項目26：図書館やアクティブ・ラーニングスペースなど大学施設を活用した学習	3.3	3.4	3.3	3.3
3	項目27：専門分野に関する知識・理解	3.1	3.0	3.3	3.1
3	項目28：将来の仕事につながるような知識・技能	3.0	2.7	3.0	2.9
3	項目29：文献・資料を収集・分析する力	3.0	3.0	3.2	3.0
3	項目30：論理的に文章を書く力	2.9	2.9	3.1	2.9
3	項目31：人に分かりやすく話す力	2.8	2.6	3.0	2.8
3	項目32：外国語を使う力	2.1	2.2	2.4	2.1
3	項目33：統計などデータサイエンスの知識・技能	2.5	2.3	2.5	2.7
3	項目34：問題を見つけて解決方法を考える力	2.9	2.7	3.1	2.9
3	項目35：答えのない問題を自分の頭で考え抜く力	2.9	2.7	3.0	2.8
3	項目36：多様な人々の理解を得ながら協働する力	3.0	2.5	3.1	2.8
3	項目37：幅広い知識、ものの見方	3.1	3.1	3.3	3.0
3	項目38：異なる文化に関する知識・理解	2.8	2.5	2.9	2.6
4	項目39：具体的な目標・目的をもって主体的に学んでいる。	3.0	2.8	3.1	2.9
4	項目40：大学が学生に卒業時まで身に付けることを求めている力（※）を理解している。 ※ディプロマ・ポリシーに示された知識・能力	2.8	2.5	2.7	2.7
4	項目41：授業アンケート等の回答を通じて大学教育が良くなっている。	2.3	2.2	2.3	2.3
4	項目42：教員が学生と向き合って教育に取り組んでいる。	2.9	3.0	3.1	2.9
4	項目43：大学での学びによって自分自身の成長を実感している。	3.0	2.9	3.1	2.9
4	項目44：知識やスキルを組み合わせる一つのものをつくり出す力が必要と感じている。	3.3	3.4	3.4	3.3
4	項目45：大学での学びを通じて社会に対する理解が深まっている。	3.0	2.7	3.1	2.8
4	項目46：卒業後も主体的に学び続けていくことの大切さを感じている。	3.5	3.3	3.6	3.4
5	項目47：授業への出席 ※実験・実習、オンライン授業を含む	13.7	21.7	13.1	12.7
5	項目48：卒業論文・卒業研究・卒業制作	7.3	0.5	7.9	11.3
5	項目49：予習・復習・課題など授業に関する学習 ※卒業論文等は除く	7.2	11.7	6.5	7.5
5	項目50：授業の予習・復習・課題以外の学習（学問に関係する読書やディスカッション、実技の練習、資格試験の勉強等）	6.3	3.5	6.7	5.2
5	項目51：部活動／サークル活動	2.5	4.3	3.2	2.4
5	項目52：アルバイト／定職	9.7	7.6	10.0	8.1
5	項目53：趣味／娯楽／交友	12.0	8.4	11.2	12.9
5	項目54：スマートフォンの使用 ※学習のために使用している時間は除く	14.7	11.5	15.5	15.6
6	項目55：前期（4月～9月）	3.2	2.3	2.5	3.5
6	項目56：後期（10月～3月）	3.4	3.8	2.5	3.8
7	項目57-1：同時双方向型オンライン授業の割合（令和2年度）	4.0	4.3	4.6	4.0
7	項目57-2：同時双方向型オンライン授業の割合（令和3年度）	3.2	3.6	4.4	3.1
7	項目58-1：オンデマンド型オンライン授業の割合（令和2年度）	4.2	0.9	2.3	4.5
7	項目58-2：オンデマンド型オンライン授業の割合（令和3年度）	2.7	0.3	1.5	2.7

令和3年度 全国学生調査（第2回試行実施）回答集計～データサイエンス学部～

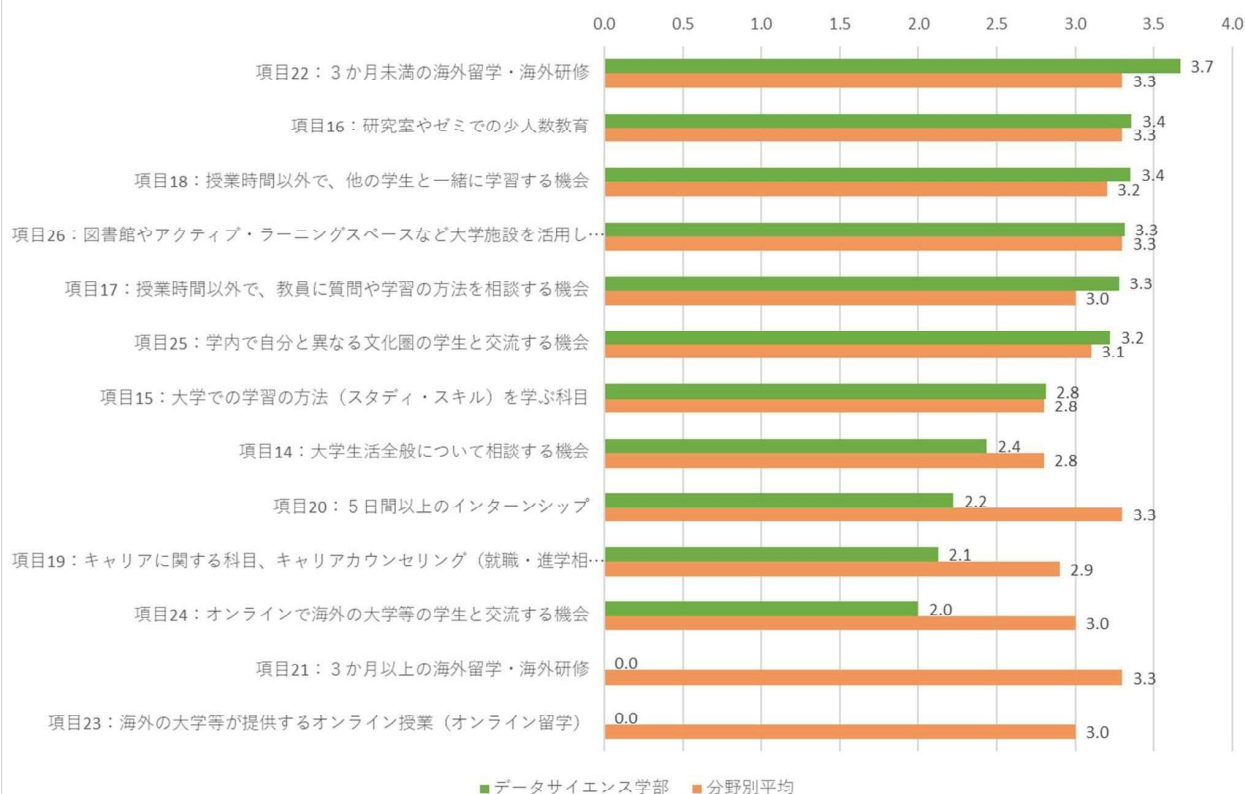
【データサイエンス学部】

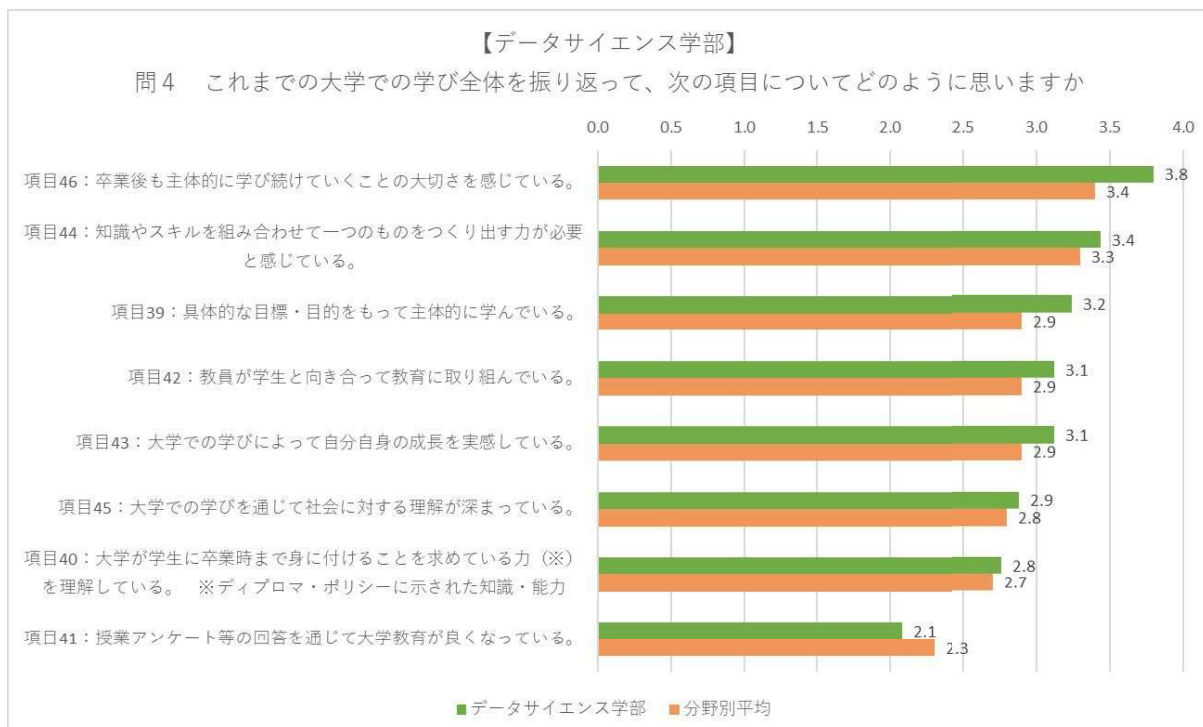
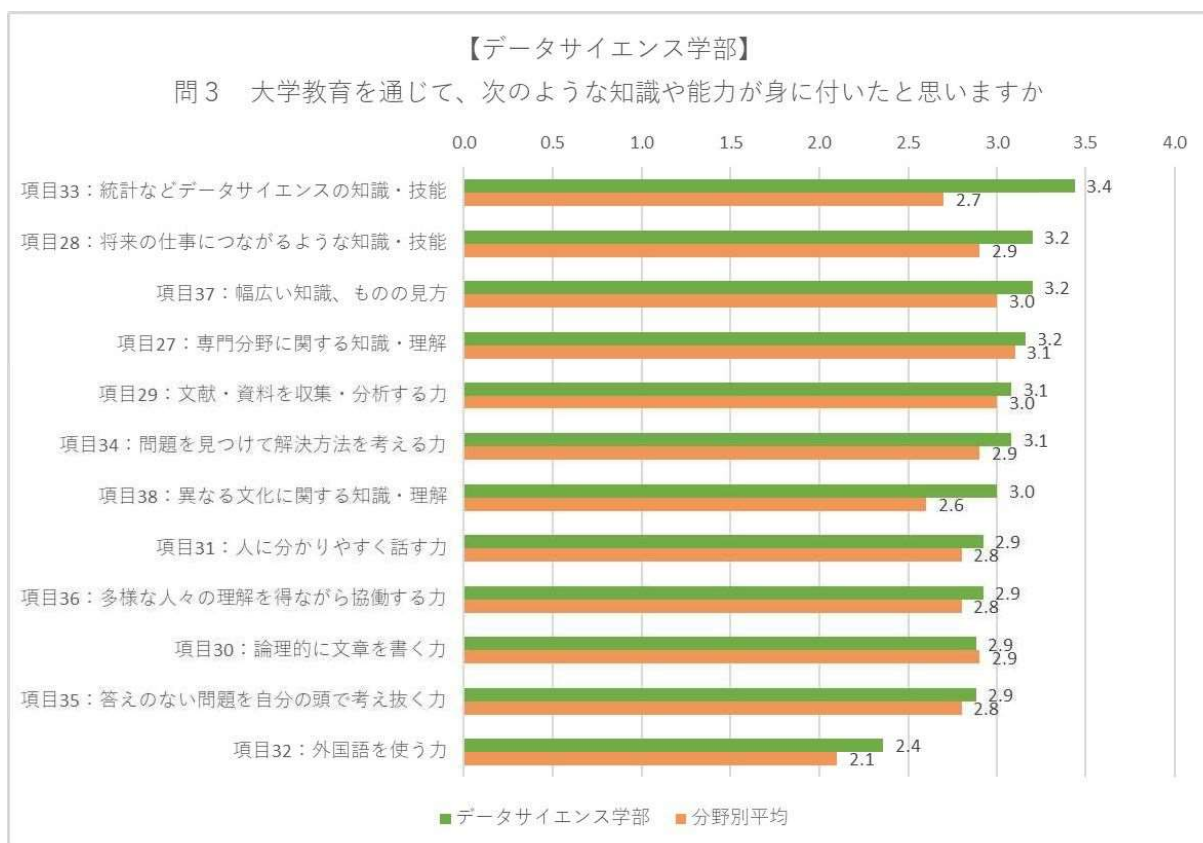
問1 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか

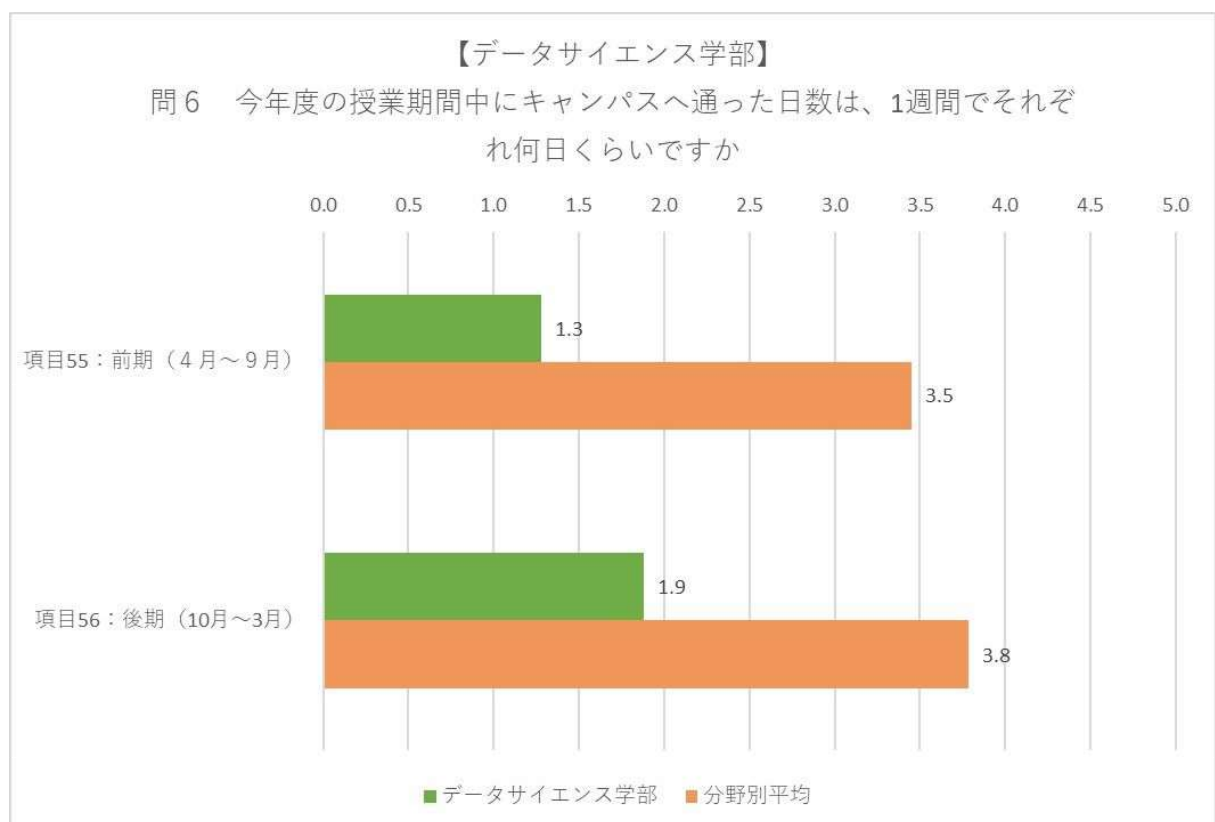
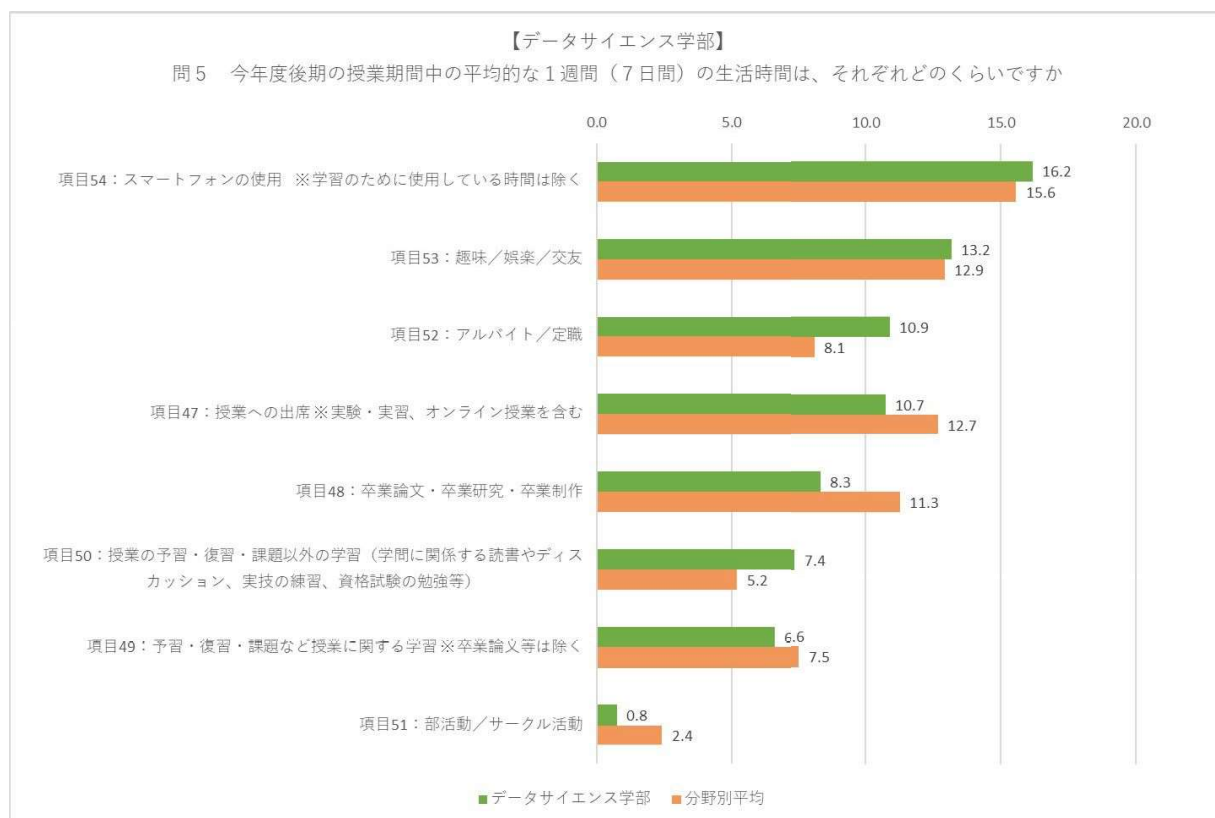


【データサイエンス学部】

問2 大学に入ってから次のような経験はありましたか。また、その経験は有用でしたか

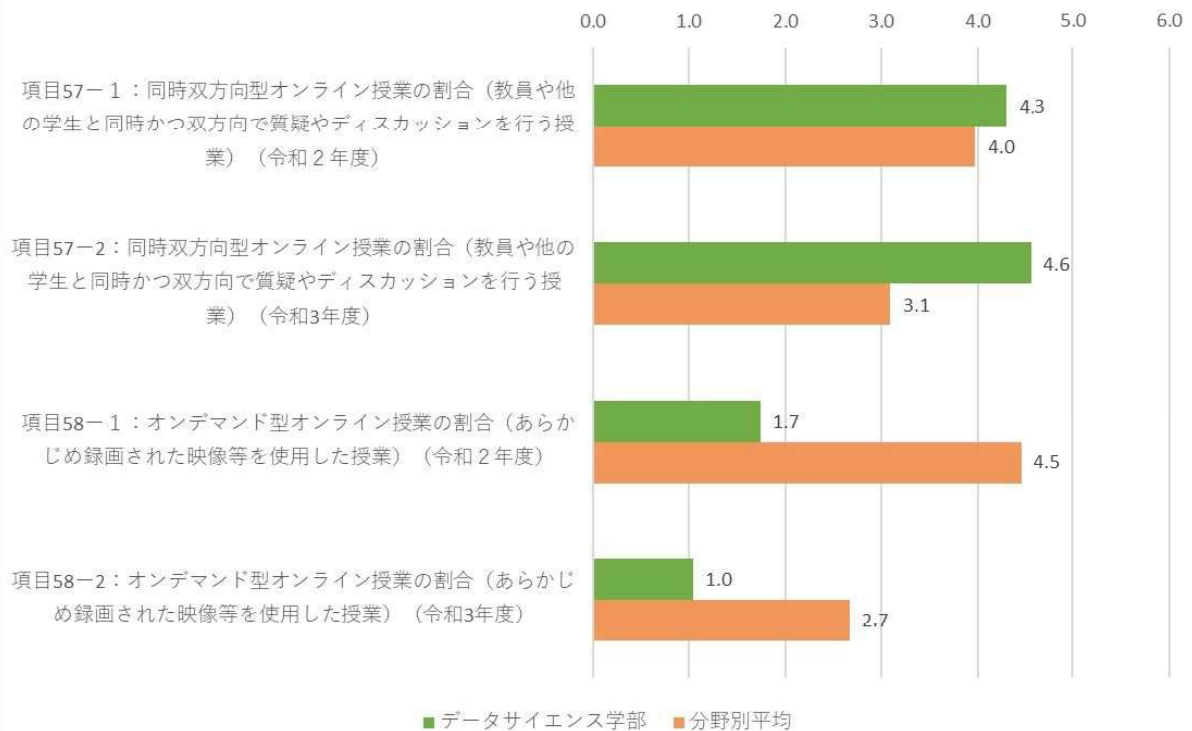






【データサイエンス学部】

問7 昨年度と今年度に受けた授業のうち、次の授業形態の割合はそれぞれどのくらいですか

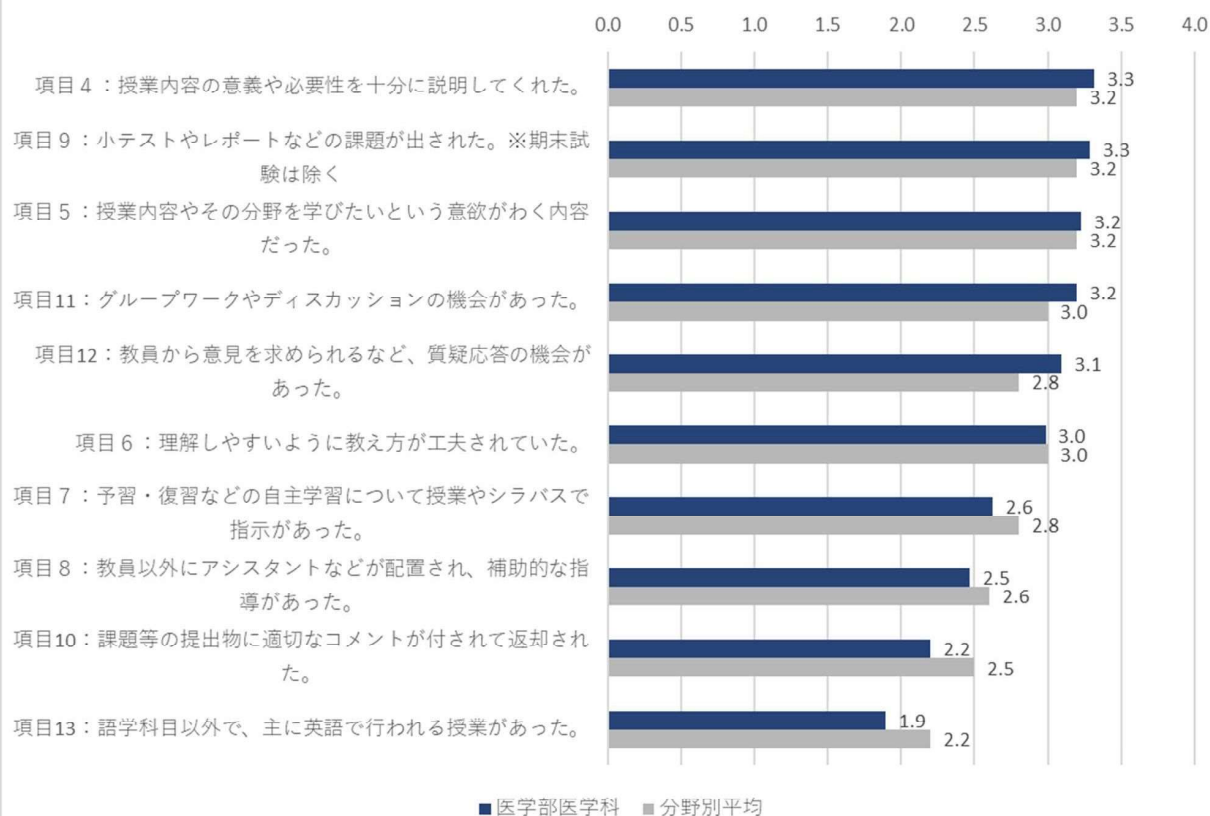


問	設問	全国	DS 学部	本学合計	分野別平均 (理・工)
1	項目4：授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれた。	3.2	3.3	3.2	3.1
1	項目5：授業内容やその分野を学びたいという意欲がわく内容だった。	3.2	3.4	3.3	3.1
1	項目6：理解しやすいように教え方が工夫されていた。	3.1	3.2	3.1	3.0
1	項目7：予習・復習などの自主学習について授業やシラバスで指示があった。	3.0	2.8	2.9	3.0
1	項目8：教員以外にアシスタントなどが配置され、補助的な指導があった。	2.5	2.4	2.4	2.8
1	項目9：小テストやレポートなどの課題が出された。※期末試験は除く	3.5	3.4	3.5	3.6
1	項目10：課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却された。	2.4	2.0	2.3	2.4
1	項目11：グループワークやディスカッションの機会があった。	2.8	2.3	2.8	2.5
1	項目12：教員から意見を求められるなど、質疑応答の機会があった。	2.8	2.6	2.9	2.5
1	項目13：語学科目以外で、主に英語で行われる授業があった。	1.8	1.4	2.4	1.7
2	項目14：大学生活全般について相談する機会	2.8	2.4	2.8	2.8
2	項目15：大学での学習の方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目	2.9	2.8	2.8	2.8
2	項目16：研究室やゼミでの少人数教育	3.3	3.4	3.3	3.3
2	項目17：授業時間以外で、教員に質問や学習の方法を相談する機会	3.0	3.3	3.1	3.0
2	項目18：授業時間以外で、他の学生と一緒に学習する機会	3.2	3.4	3.3	3.2
2	項目19：キャリアに関する科目、キャリアアカウンセリング（就職・進学相談）	3.0	2.1	2.9	2.9
2	項目20：5日間以上のインターンシップ	3.2	2.2	2.9	3.3
2	項目21：3か月以上の海外留学・海外研修	3.2	-	2.8	3.3
2	項目22：3か月未満の海外留学・海外研修	3.4	3.7	3.5	3.3
2	項目23：海外の大学等が提供するオンライン授業（オンライン留学）	3.0	-	3.0	3.0
2	項目24：オンラインで海外の大学等の学生と交流する機会	3.0	2.0	3.1	3.0
2	項目25：学内で自分と異なる文化圏の学生と交流する機会	3.1	3.2	3.2	3.1
2	項目26：図書館やアクティブ・ラーニングスペースなど大学施設を活用した学習	3.3	3.3	3.3	3.3
3	項目27：専門分野に関する知識・理解	3.1	3.2	3.3	3.1
3	項目28：将来の仕事につながるような知識・技能	3.0	3.2	3.0	2.9
3	項目29：文献・資料を収集・分析する力	3.0	3.1	3.2	3.0
3	項目30：論理的に文章を書く力	2.9	2.9	3.1	2.9
3	項目31：人に分かりやすく話す力	2.8	2.9	3.0	2.8
3	項目32：外国語を使う力	2.1	2.4	2.4	2.1
3	項目33：統計などデータサイエンスの知識・技能	2.5	3.4	2.5	2.7
3	項目34：問題を見つけて解決方法を考える力	2.9	3.1	3.1	2.9
3	項目35：答えのない問題を自分の頭で考え抜く力	2.9	2.9	3.0	2.8
3	項目36：多様な人々の理解を得ながら協働する力	3.0	2.9	3.1	2.8
3	項目37：幅広い知識、ものの見方	3.1	3.2	3.3	3.0
3	項目38：異なる文化に関する知識・理解	2.8	3.0	2.9	2.6
4	項目39：具体的な目標・目的をもって主体的に学んでいる。	3.0	3.2	3.1	2.9
4	項目40：大学が学生に卒業時まで身に付けることを求めている力（※）を理解している。 ※ディプロマ・ポリシーに示された知識・能力	2.8	2.8	2.7	2.7
4	項目41：授業アンケート等の回答を通じて大学教育が良くなっている。	2.3	2.1	2.3	2.3
4	項目42：教員が学生と向き合って教育に取り組んでいる。	2.9	3.1	3.1	2.9
4	項目43：大学での学びによって自分自身の成長を実感している。	3.0	3.1	3.1	2.9
4	項目44：知識やスキルを組み合わせる一つのものをつくり出す力が必要と感じている。	3.3	3.4	3.4	3.3
4	項目45：大学での学びを通じて社会に対する理解が深まっている。	3.0	2.9	3.1	2.8
4	項目46：卒業後も主体的に学び続けていくことの大切さを感じている。	3.5	3.8	3.6	3.4
5	項目47：授業への出席 ※実験・実習、オンライン授業を含む	13.7	10.7	13.1	12.7
5	項目48：卒業論文・卒業研究・卒業制作	7.3	8.3	7.9	11.3
5	項目49：予習・復習・課題など授業に関する学習 ※卒業論文等は除く	7.2	6.6	6.5	7.5
5	項目50：授業の予習・復習・課題以外の学習（学問に関係する読書やディスカッション、実技の練習、資格試験の勉強等）	6.3	7.4	6.7	5.2
5	項目51：部活動／サークル活動	2.5	0.8	3.2	2.4
5	項目52：アルバイト／定職	9.7	10.9	10.0	8.1
5	項目53：趣味／娯楽／交友	12.0	13.2	11.2	12.9
5	項目54：スマートフォンの使用 ※学習のために使用している時間は除く	14.7	16.2	15.5	15.6
6	項目55：前期（4月～9月）	3.2	1.3	2.5	3.5
6	項目56：後期（10月～3月）	3.4	1.9	2.5	3.8
7	項目57－1：同時双方向型オンライン授業の割合（令和2年度）	4.0	4.3	4.6	4.0
7	項目57－2：同時双方向型オンライン授業の割合（令和3年度）	3.2	4.6	4.4	3.1
7	項目58－1：オンデマンド型オンライン授業の割合（令和2年度）	4.2	1.7	2.3	4.5
7	項目58－2：オンデマンド型オンライン授業の割合（令和3年度）	2.7	1.0	1.5	2.7

令和3年度 全国学生調査（第2回試行実施）回答集計～医学部医学科～

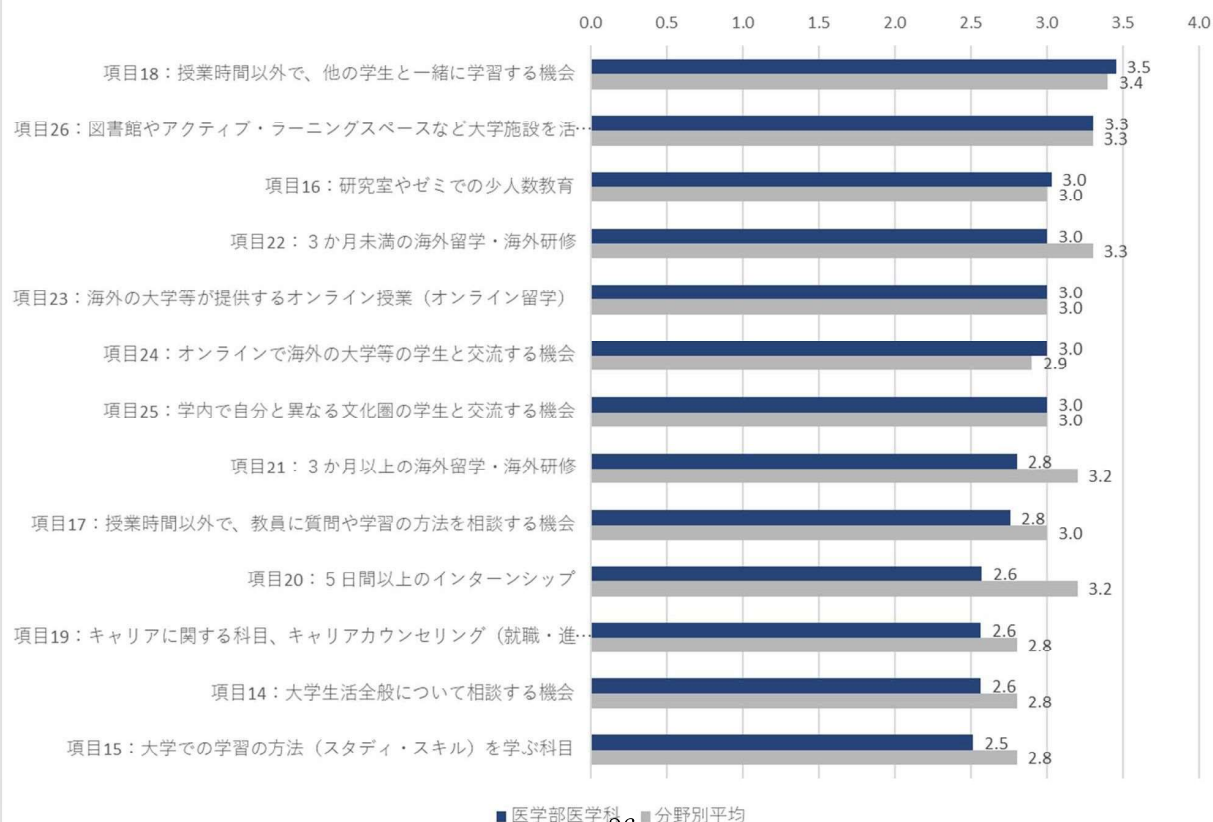
【医学部医学科】

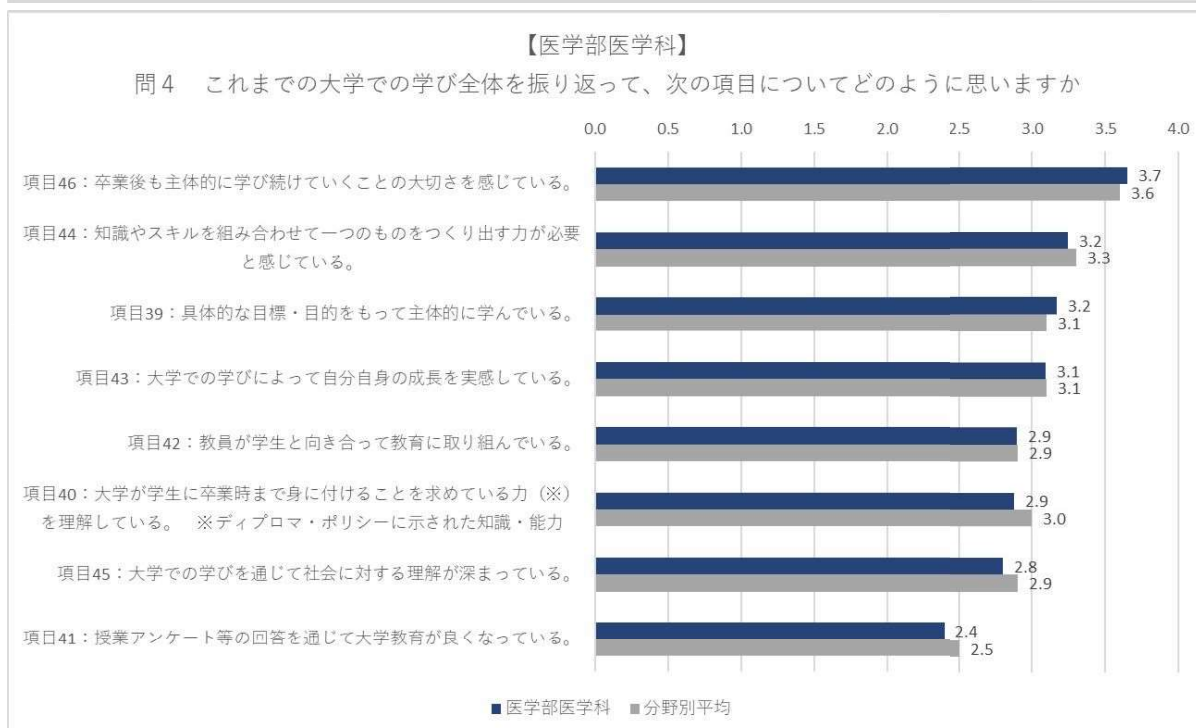
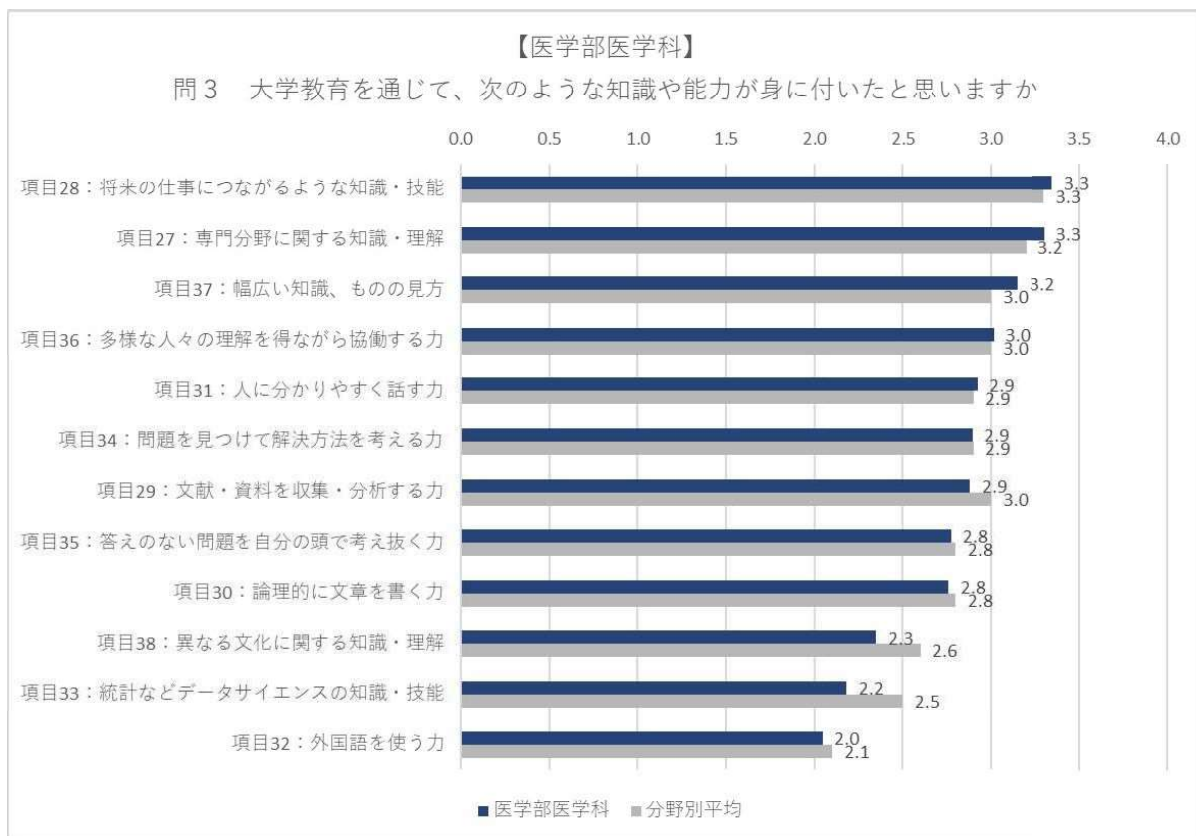
問1 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか

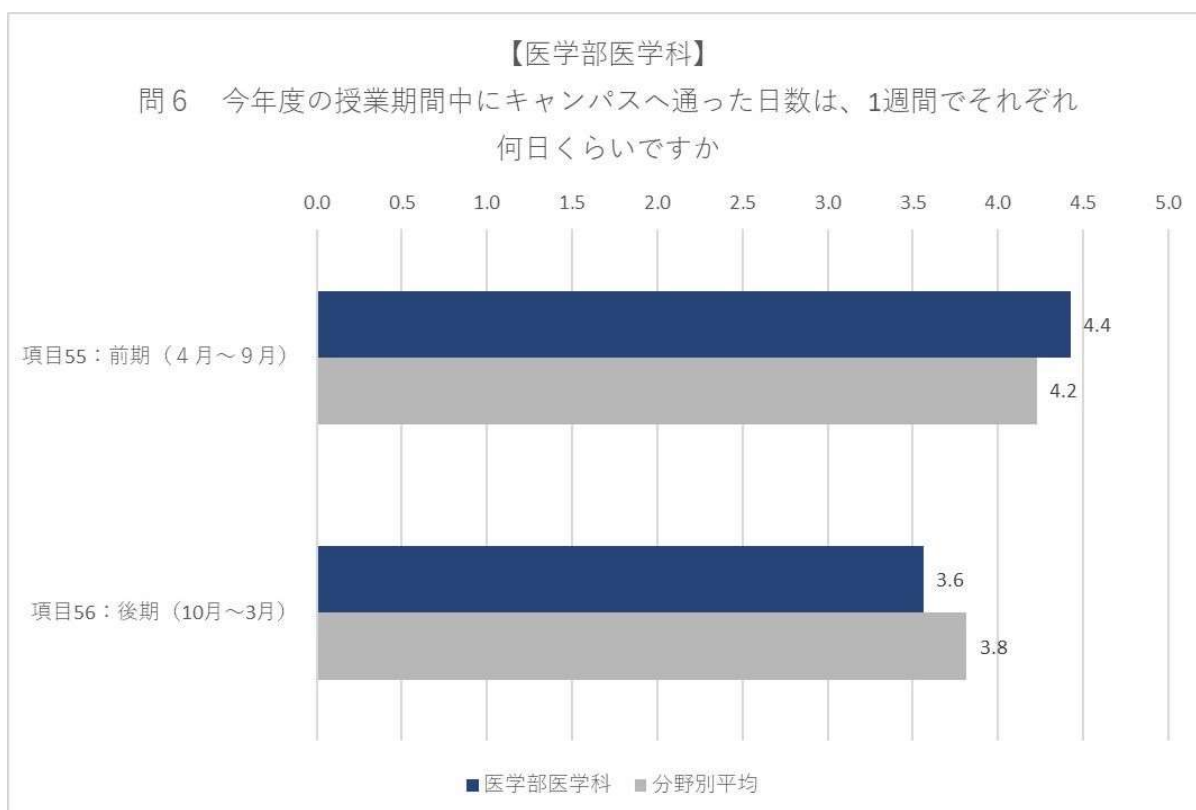
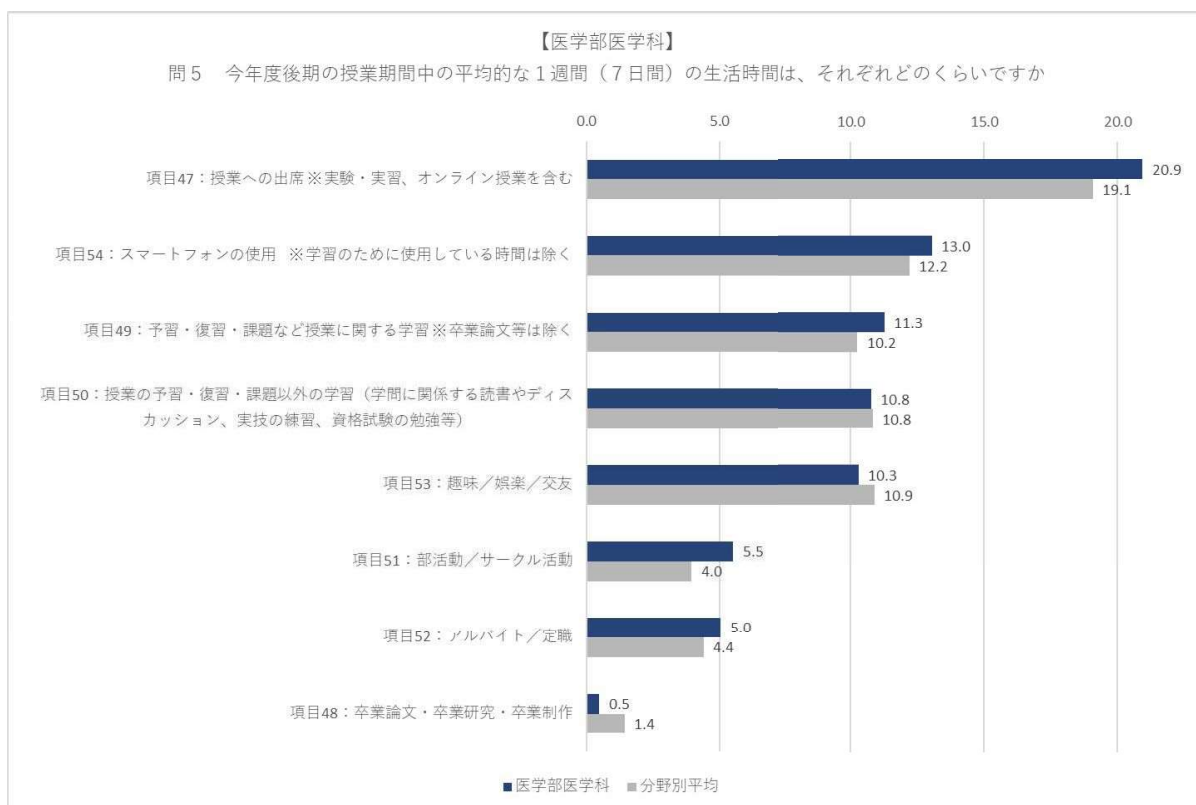


【医学部医学科】

問2 大学に入ってから次のような経験はありましたか。また、その経験は有用でしたか

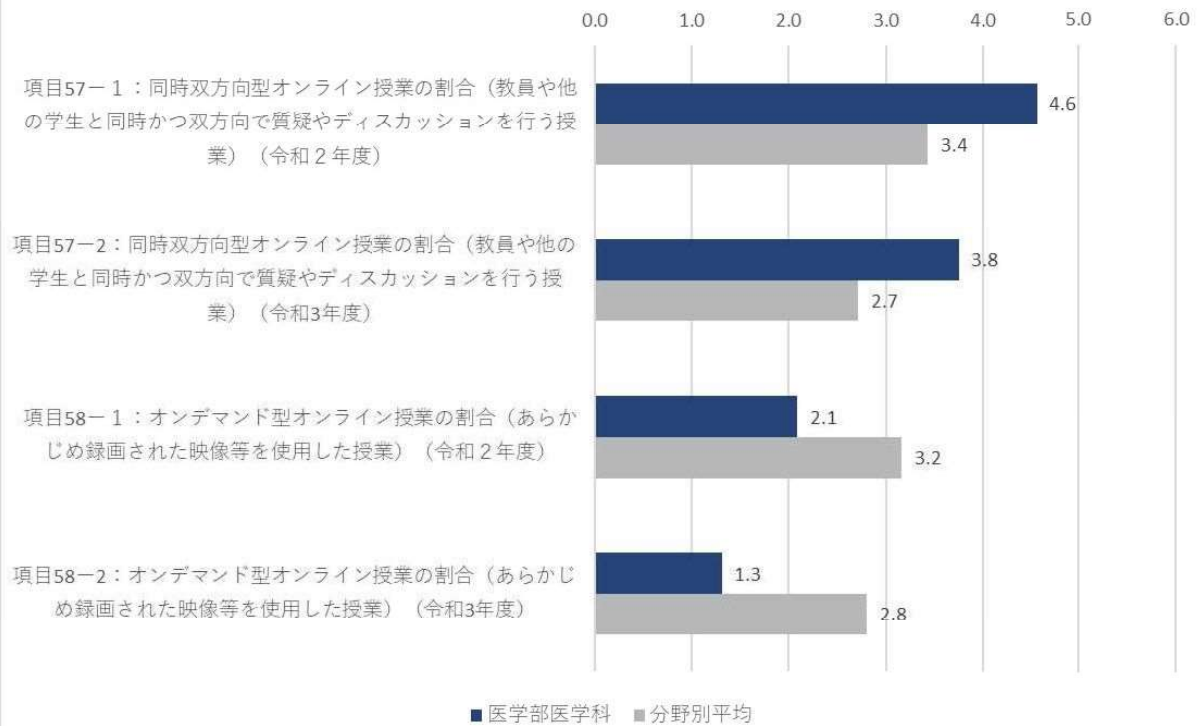






【医学部医学科】

問7 昨年度と今年度に受けた授業のうち、次の授業形態の割合はそれぞれ
のくらいですか

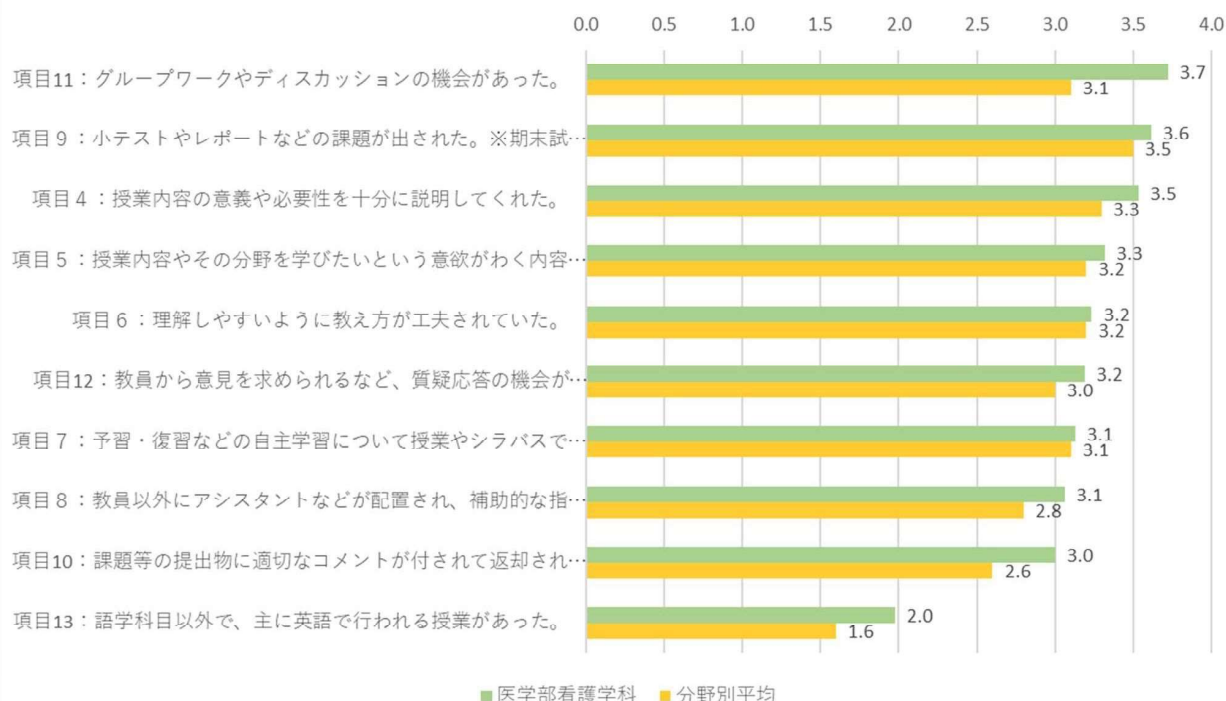


問	設問	全国	医学部 医学科	本学合計	分野別平均 (医6年制)
1	項目4：授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれた。	3.2	3.3	3.2	3.2
1	項目5：授業内容やその分野を学びたいという意欲がわく内容だった。	3.2	3.2	3.3	3.2
1	項目6：理解しやすいように教え方が工夫されていた。	3.1	3.0	3.1	3.0
1	項目7：予習・復習などの自主学習について授業やシラバスで指示があった。	3.0	2.6	2.9	2.8
1	項目8：教員以外にアシスタントなどが配置され、補助的な指導があった。	2.5	2.5	2.4	2.6
1	項目9：小テストやレポートなどの課題が出された。※期末試験は除く	3.5	3.3	3.5	3.2
1	項目10：課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却された。	2.4	2.2	2.3	2.5
1	項目11：グループワークやディスカッションの機会があった。	2.8	3.2	2.8	3.0
1	項目12：教員から意見を求められるなど、質疑応答の機会があった。	2.8	3.1	2.9	2.8
1	項目13：語学科目以外で、主に英語で行われる授業があった。	1.8	1.9	2.4	2.2
2	項目14：大学生活全般について相談する機会	2.8	2.6	2.8	2.8
2	項目15：大学での学習の方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目	2.9	2.5	2.8	2.8
2	項目16：研究室やゼミでの少人数教育	3.3	3.0	3.3	3.0
2	項目17：授業時間以外で、教員に質問や学習の方法を相談する機会	3.0	2.8	3.1	3.0
2	項目18：授業時間以外で、他の学生と一緒に学習する機会	3.2	3.5	3.3	3.4
2	項目19：キャリアに関する科目、キャリアアカウンセリング（就職・進学相談）	3.0	2.6	2.9	2.8
2	項目20：5日間以上のインターンシップ	3.2	2.6	2.9	3.2
2	項目21：3か月以上の海外留学・海外研修	3.2	2.8	2.8	3.2
2	項目22：3か月未満の海外留学・海外研修	3.4	3.0	3.5	3.3
2	項目23：海外の大学等が提供するオンライン授業（オンライン留学）	3.0	3.0	3.0	3.0
2	項目24：オンラインで海外の大学等の学生と交流する機会	3.0	3.0	3.1	2.9
2	項目25：学内で自分と異なる文化圏の学生と交流する機会	3.1	3.0	3.2	3.0
2	項目26：図書館やアクティブ・ラーニングスペースなど大学施設を活用した学習	3.3	3.3	3.3	3.3
3	項目27：専門分野に関する知識・理解	3.1	3.3	3.3	3.2
3	項目28：将来の仕事につながるような知識・技能	3.0	3.3	3.0	3.3
3	項目29：文献・資料を収集・分析する力	3.0	2.9	3.2	3.0
3	項目30：論理的に文章を書く力	2.9	2.8	3.1	2.8
3	項目31：人に分かりやすく話す力	2.8	2.9	3.0	2.9
3	項目32：外国語を使う力	2.1	2.0	2.4	2.1
3	項目33：統計などデータサイエンスの知識・技能	2.5	2.2	2.5	2.5
3	項目34：問題を見つけて解決方法を考える力	2.9	2.9	3.1	2.9
3	項目35：答えのない問題を自分の頭で考え抜く力	2.9	2.8	3.0	2.8
3	項目36：多様な人々の理解を得ながら協働する力	3.0	3.0	3.1	3.0
3	項目37：幅広い知識、ものの見方	3.1	3.2	3.3	3.0
3	項目38：異なる文化に関する知識・理解	2.8	2.3	2.9	2.6
4	項目39：具体的な目標・目的をもって主体的に学んでいる。	3.0	3.2	3.1	3.1
4	項目40：大学が学生に卒業時まで身に付けることを求めている力（※）を理解している。 ※ディプロマ・ポリシーに示された知識・能力	2.8	2.9	2.7	3.0
4	項目41：授業アンケート等の回答を通じて大学教育が良くなっている。	2.3	2.4	2.3	2.5
4	項目42：教員が学生と向き合って教育に取り組んでいる。	2.9	2.9	3.1	2.9
4	項目43：大学での学びによって自分自身の成長を実感している。	3.0	3.1	3.1	3.1
4	項目44：知識やスキルを組み合わせる一つのものをつくり出す力が必要と感じている。	3.3	3.2	3.4	3.3
4	項目45：大学での学びを通じて社会に対する理解が深まっている。	3.0	2.8	3.1	2.9
4	項目46：卒業後も主体的に学び続けていくことの大切さを感じている。	3.5	3.7	3.6	3.6
5	項目47：授業への出席 ※実験・実習、オンライン授業を含む	13.7	20.9	13.1	19.1
5	項目48：卒業論文・卒業研究・卒業制作	7.3	0.5	7.9	1.4
5	項目49：予習・復習・課題など授業に関する学習 ※卒業論文等は除く	7.2	11.3	6.5	10.2
5	項目50：授業の予習・復習・課題以外の学習（学問に関係する読書やディスカッション、実技の練習、資格試験の勉強等）	6.3	10.8	6.7	10.8
5	項目51：部活動／サークル活動	2.5	5.5	3.2	4.0
5	項目52：アルバイト／定職	9.7	5.0	10.0	4.4
5	項目53：趣味／娯楽／交友	12.0	10.3	11.2	10.9
5	項目54：スマートフォンの使用 ※学習のために使用している時間は除く	14.7	13.0	15.5	12.2
6	項目55：前期（4月～9月）	3.2	4.4	2.5	4.2
6	項目56：後期（10月～3月）	3.4	3.6	2.5	3.8
7	項目57－1：同時双方向型オンライン授業の割合（令和2年度）	4.0	4.6	4.6	3.4
7	項目57－2：同時双方向型オンライン授業の割合（令和3年度）	3.2	3.8	4.4	2.7
7	項目58－1：オンデマンド型オンライン授業の割合（令和2年度）	4.2	2.1	2.3	3.2
7	項目58－2：オンデマンド型オンライン授業の割合（令和3年度）	2.7	1.3	1.5	2.8

令和3年度 全国学生調査（第2回試行実施）回答集計～医学部看護学科～

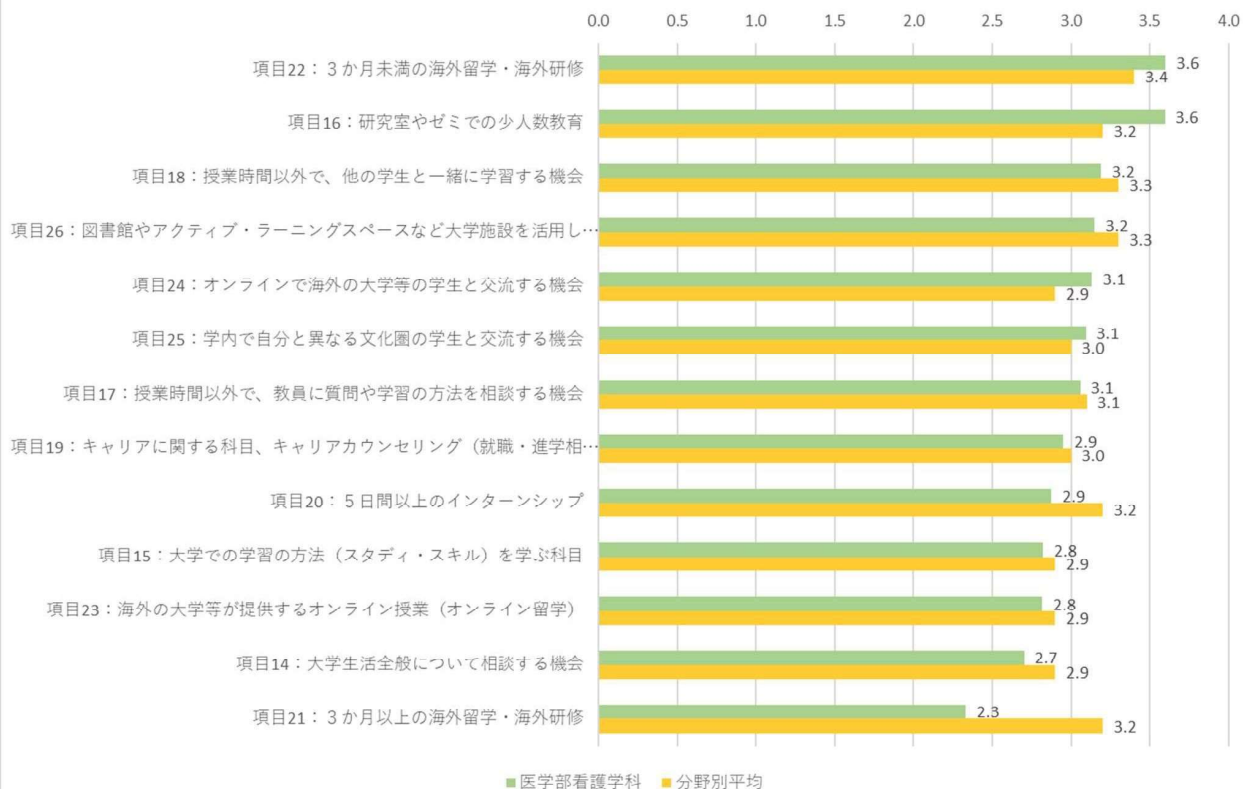
【医学部看護学科】

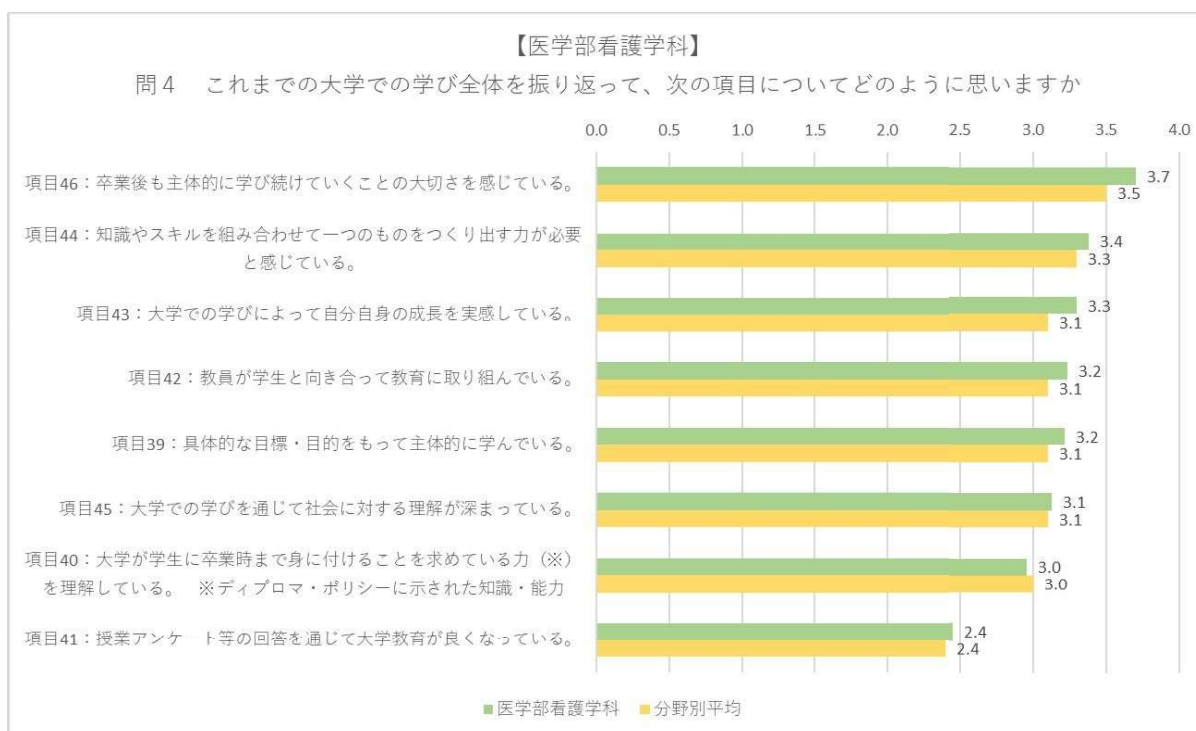
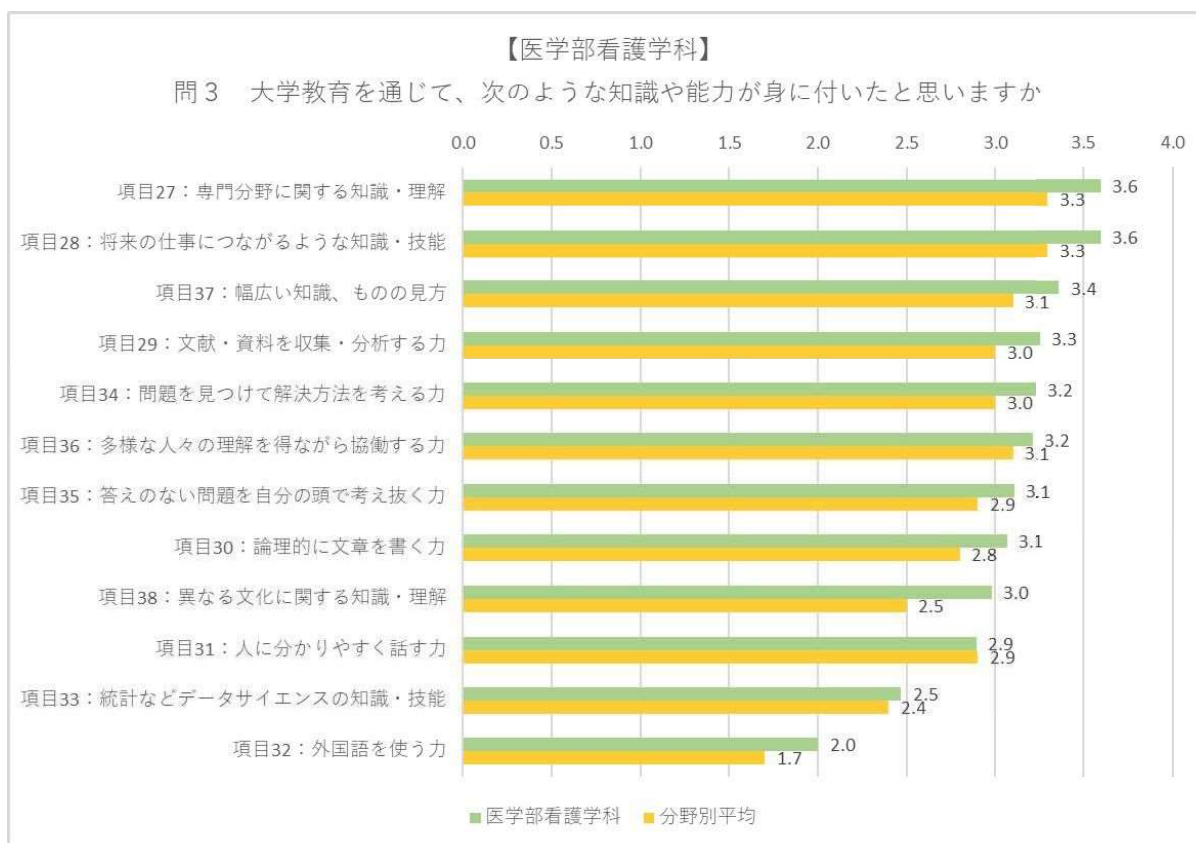
問1 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか

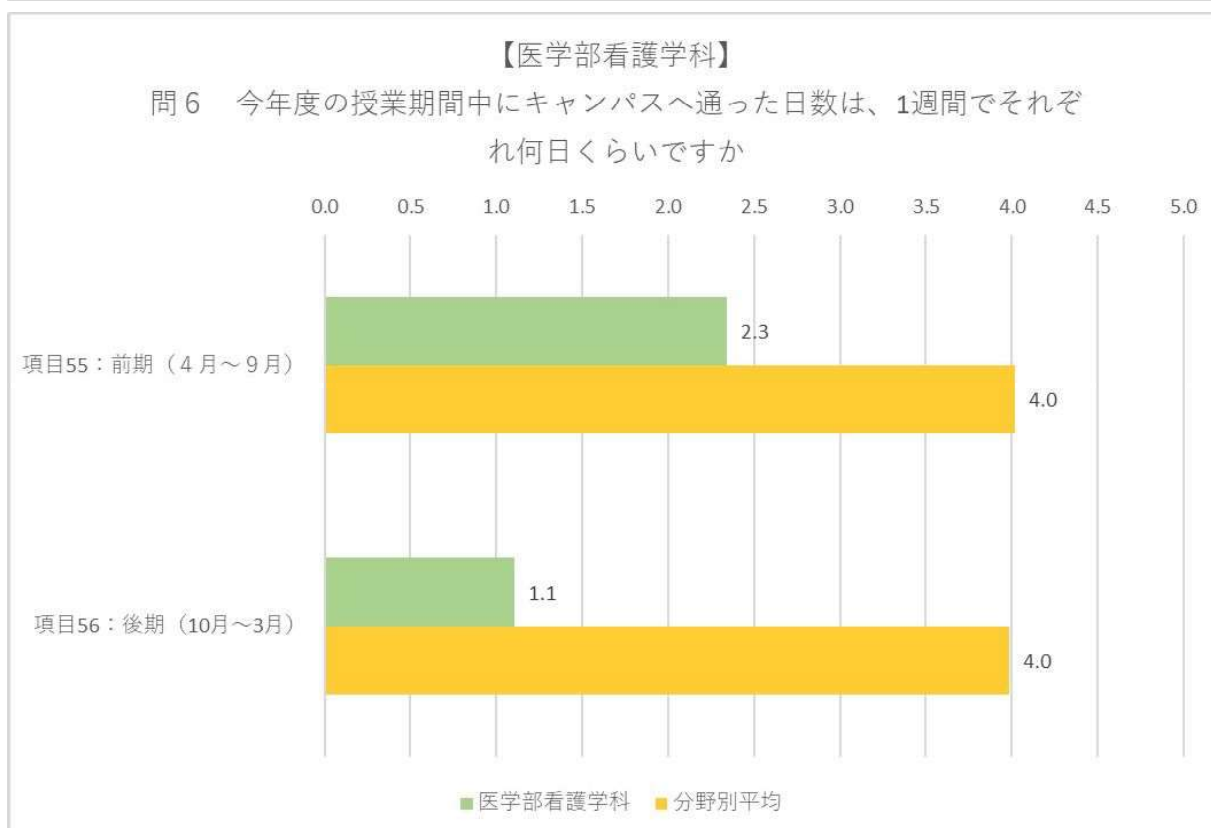
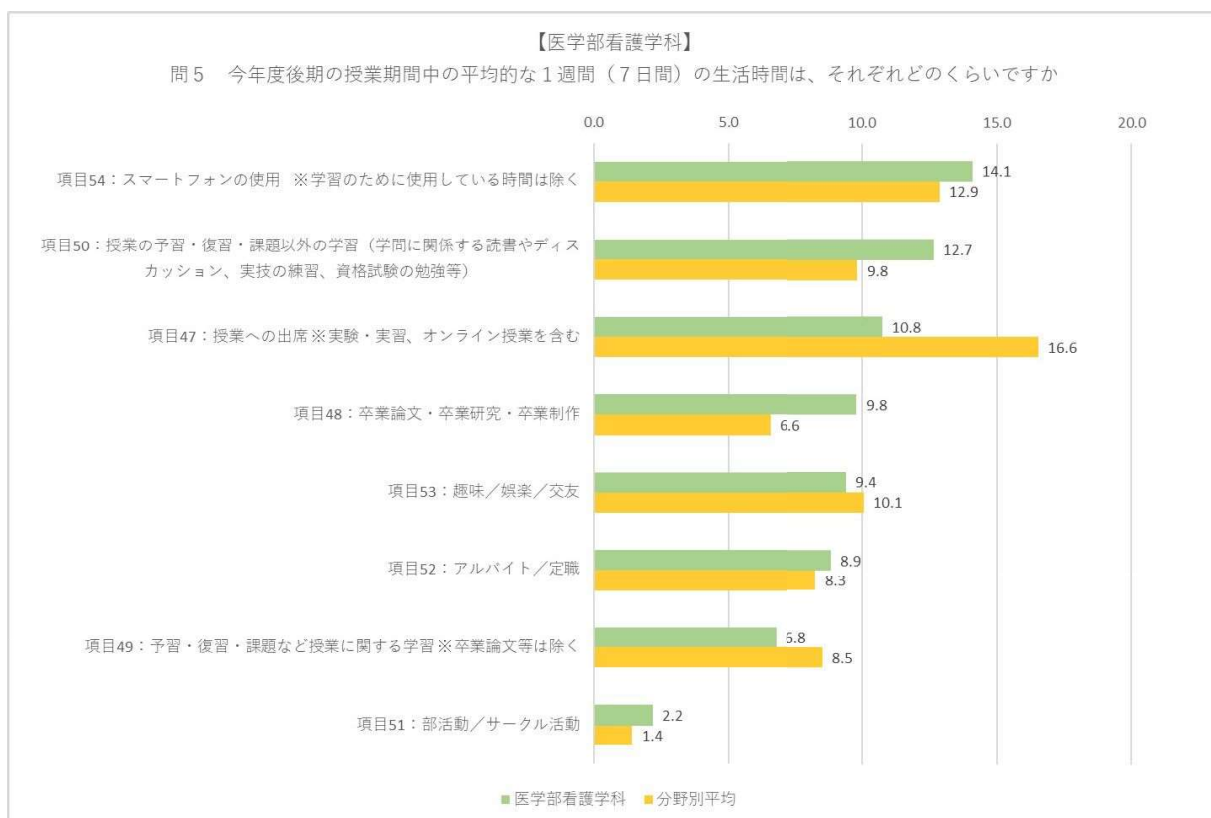


【医学部看護学科】

問2 大学に入ってから次のような経験はありましたか。また、その経験は有用でしたか

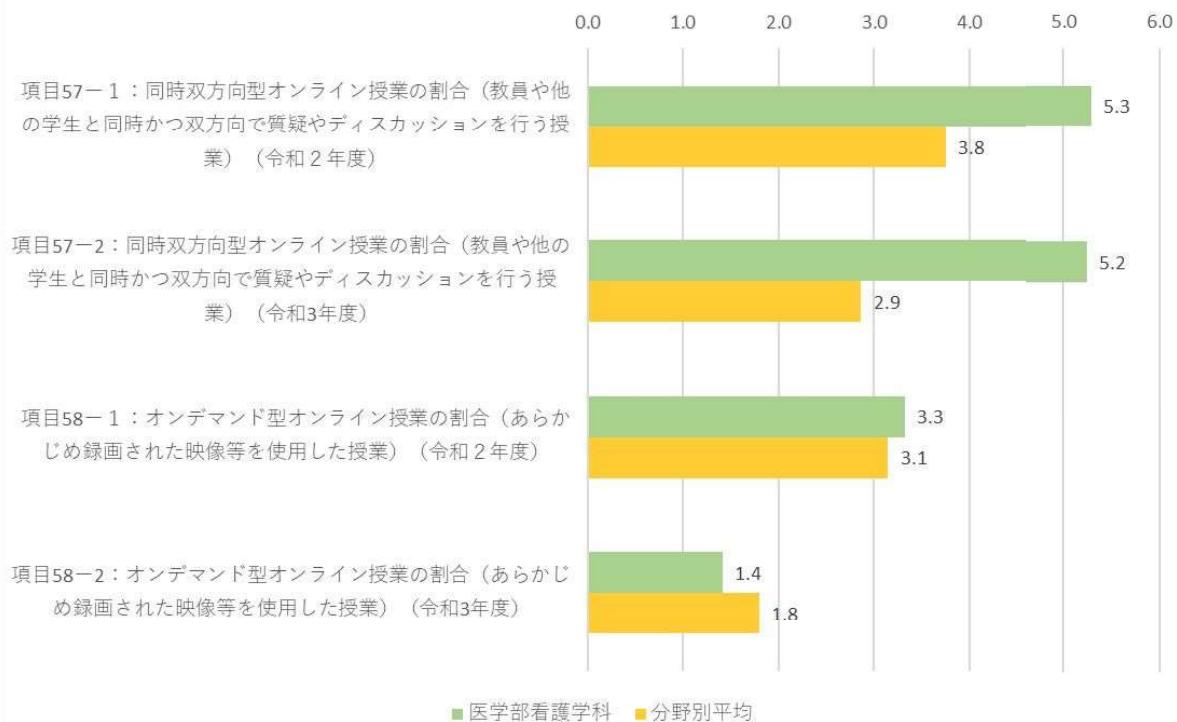






【医学部看護学科】

問7 昨年度と今年度に受けた授業のうち、次の授業形態の割合はそれぞれ
のくらいですか



問	設問	全国	医学部 看護学科	本学合計	分野別平均 (保健)
1	項目4：授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれた。	3.2	3.5	3.2	3.3
1	項目5：授業内容やその分野を学びたいという意欲がわく内容だった。	3.2	3.3	3.3	3.2
1	項目6：理解しやすいように教え方が工夫されていた。	3.1	3.2	3.1	3.2
1	項目7：予習・復習などの自主学習について授業やシラバスで指示があった。	3.0	3.1	2.9	3.1
1	項目8：教員以外にアシスタントなどが配置され、補助的な指導があった。	2.5	3.1	2.4	2.8
1	項目9：小テストやレポートなどの課題が出された。※期末試験は除く	3.5	3.6	3.5	3.5
1	項目10：課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却された。	2.4	3.0	2.3	2.6
1	項目11：グループワークやディスカッションの機会があった。	2.8	3.7	2.8	3.1
1	項目12：教員から意見を求められるなど、質疑応答の機会があった。	2.8	3.2	2.9	3.0
1	項目13：語学科目以外で、主に英語で行われる授業があった。	1.8	2.0	2.4	1.6
2	項目14：大学生生活全般について相談する機会	2.8	2.7	2.8	2.9
2	項目15：大学での学習の方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目	2.9	2.8	2.8	2.9
2	項目16：研究室やゼミでの少人数教育	3.3	3.6	3.3	3.2
2	項目17：授業時間以外で、教員に質問や学習の方法を相談する機会	3.0	3.1	3.1	3.1
2	項目18：授業時間以外で、他の学生と一緒に学習する機会	3.2	3.2	3.3	3.3
2	項目19：キャリアに関する科目、キャリアカウンセリング（就職・進学相談）	3.0	2.9	2.9	3.0
2	項目20：5日間以上のインターンシップ	3.2	2.9	2.9	3.2
2	項目21：3か月以上の海外留学・海外研修	3.2	2.3	2.8	3.2
2	項目22：3か月未満の海外留学・海外研修	3.4	3.6	3.5	3.4
2	項目23：海外の大学等が提供するオンライン授業（オンライン留学）	3.0	2.8	3.0	2.9
2	項目24：オンラインで海外の大学等の学生と交流する機会	3.0	3.1	3.1	2.9
2	項目25：学内で自分と異なる文化圏の学生と交流する機会	3.1	3.1	3.2	3.0
2	項目26：図書館やアクティブ・ラーニングスペースなど大学施設を活用した学習	3.3	3.2	3.3	3.3
3	項目27：専門分野に関する知識・理解	3.1	3.6	3.3	3.3
3	項目28：将来の仕事につながるような知識・技能	3.0	3.6	3.0	3.3
3	項目29：文献・資料を収集・分析する力	3.0	3.3	3.2	3.0
3	項目30：論理的に文章を書く力	2.9	3.1	3.1	2.8
3	項目31：人に分かりやすく話す力	2.8	2.9	3.0	2.9
3	項目32：外国語を使う力	2.1	2.0	2.4	1.7
3	項目33：統計などデータサイエンスの知識・技能	2.5	2.5	2.5	2.4
3	項目34：問題を見つけて解決方法を考える力	2.9	3.2	3.1	3.0
3	項目35：答えのない問題を自分の頭で考え抜く力	2.9	3.1	3.0	2.9
3	項目36：多様な人々の理解を得ながら協働する力	3.0	3.2	3.1	3.1
3	項目37：幅広い知識、ものの見方	3.1	3.4	3.3	3.1
3	項目38：異なる文化に関する知識・理解	2.8	3.0	2.9	2.5
4	項目39：具体的な目標・目的をもって主体的に学んでいる。	3.0	3.2	3.1	3.1
4	項目40：大学が学生に卒業時まで身に付けることを求めている力（※）を理解している。 ※ディプロマ・ポリシーに示された知識・能力	2.8	3.0	2.7	3.0
4	項目41：授業アンケート等の回答を通じて大学教育が良くなっている。	2.3	2.4	2.3	2.4
4	項目42：教員が学生と向き合って教育に取り組んでいる。	2.9	3.2	3.1	3.1
4	項目43：大学での学びによって自分自身の成長を実感している。	3.0	3.3	3.1	3.1
4	項目44：知識やスキルを組み合わせ一つのものをつくり出す力が必要と感じている。	3.3	3.4	3.4	3.3
4	項目45：大学での学びを通じて社会に対する理解が深まっている。	3.0	3.1	3.1	3.1
4	項目46：卒業後も主体的に学び続けていくことの大切さを感じている。	3.5	3.7	3.6	3.5
5	項目47：授業への出席 ※実験・実習、オンライン授業を含む	13.7	10.8	13.1	16.6
5	項目48：卒業論文・卒業研究・卒業制作	7.3	9.8	7.9	6.6
5	項目49：予習・復習・課題など授業に関する学習 ※卒業論文等は除く	7.2	6.8	6.5	8.5
5	項目50：授業の予習・復習・課題以外の学習（学問に関係する読書やディスカッション、実技の練習、資格試験の勉強等）	6.3	12.7	6.7	9.8
5	項目51：部活動／サークル活動	2.5	2.2	3.2	1.4
5	項目52：アルバイト／定職	9.7	8.9	10.0	8.3
5	項目53：趣味／娯楽／交友	12.0	9.4	11.2	10.1
5	項目54：スマートフォンの使用 ※学習のために使用している時間は除く	14.7	14.1	15.5	12.9
6	項目55：前期（4月～9月）	3.2	2.3	2.5	4.0
6	項目56：後期（10月～3月）	3.4	1.1	2.5	4.0
7	項目57－1：同時双方向型オンライン授業の割合（令和2年度）	4.0	5.3	4.6	3.8
7	項目57－2：同時双方向型オンライン授業の割合（令和3年度）	3.2	5.2	4.4	2.9
7	項目58－1：オンデマンド型オンライン授業の割合（令和2年度）	4.2	3.3	2.3	3.1
7	項目58－2：オンデマンド型オンライン授業の割合（令和3年度）	2.7	1.4	1.5	1.8

令和4年度教学IR検討の取組結果と課題、今後の取組について

1. 趣旨

令和4年度に実施した下記取組について、実施報告書を作成し、各種会議体で報告します。また、これまで実施してきたWGの取組みで挙げられた課題を整理し、高等教育推進センター教学IR部門の運営を通じて、関係所管と調整します。

2. 教学IR検討WGで実施した取組について

(1) 入学から卒業後までのアンケートをつないだ経時的な分析

<取組概要>

平成30年度から引き続き、「新入生アンケート（入学時実施）」、「カリキュラム評価アンケート（卒業時実施）」、「卒業生アンケート（卒後3年に実施）」の3つのアンケートを設定し、本学が特に重視する教育理念に関する共通設問の回答結果を分析した。入学時と卒業時の回答結果から、本学が掲げる教育理念について、入学時には期待値が高いものの、卒業時、卒後3年と徐々に下がっていく傾向が見られた。

また、3学部（国際教養学部・国際商学部・理学部）とも令和3年度カリキュラム評価アンケートでは令和3年度のみ、「グローバルな視野」の数値が上がっているが、令和4年度は令和2年度以前の数値に近い結果となっていた。これについて、渡航経験が該当年度に増えていないため、オンライン参加のイベントが増えたことが一因ではないかと考える。

分析結果については、各種会議にて報告を行うとともに、結果を各学部教授会で報告・共有し、各学部におけるカリキュラム改善検討を支援した。

また、各アンケートの回答率向上のために、回答者への結果の共有・周知を進めることが提案され、来年度以降対応を進める。

(2) 教学IR検討WGにおける認証評価に向けた対応

<取組概要>

令和3年度の認証評価受審を想定し設定した3つの観点について、認証評価受審後も普遍的な課題として検討を進めた。教学IR検討WGにて解析した結果について各学部会議体にて報告を行うとともに、結果を各学部教授会で報告・共有し、各学部において各学部独自の課題が確認された。

<教学IR検討WGで取り組む3つの観点>

- ① 「各授業の内容が授与する学位に相応しい水準となっていること」
- ② 「成績評価や単位認定が厳格かつ客観的に行われていることの組織的確認」
- ③ 学修成果の可視化

- ① 「各授業の内容が授与する学位に相応しい水準となっていること」

1単位の授業科目を45時間の学習を必要とする内容をもって構成する原則を踏まえ、正

規に加えて授業外学修時間がどの程度であるか確認を行った。

対面授業を実施した令和元年度までと比較し、令和2年度には講義科目及び演習科目について授業外学修時間が増加したが、令和3年度には微減、令和4年度に微増している。

講義全体では授業外学修時間は「1時間未満」が平均、演習全体は「1時間以上2時間未満」が平均という結果になっている。

② 「成績評価や単位認定が厳格かつ客観的に行われていることの組織的確認」

令和3年度後期、令和4年度前期の成績評価結果を分析し、成績評価が適切に行われているか確認を行った。

- ・分野別に GPA 平均値を集計し、昨年度と比較して 1.0 以上平均値が変化している分野の確認を依頼した。
- ・各科目の成績登録者数によって平均値に差が見られるため、今後は成績登録者数を考慮し分析を進める。また、各学期の集計結果だけでなく、経年変化を集計し、広い目で見た変化を確認できるようにする。

③ 学修成果の可視化

今年度より導入した YCU-Board に実装したポートフォリオ機能の活用推進を進めた。

- ・YCU 指標等の学修成果の AI 試行分析については、(1) 学生の入試区分(学部・学系別)と学修成果項目の相関分析、(2) 学生の海外留学思考と学修成果項目の相関分析を行った。両テーマを分析した結果、現時点で相関は見られなかったため、YCU-Board のデータを蓄積し、再集計を行う。
- ・YCU-Board 目標設定機能の活用については、学生、教員への内容や意義の説明、周知を進め、目標・振り返りの登録が浸透するよう努めた。
- ・YCU-Board ポートフォリオ機能の活用については、入力項目を確認し、所管課に入力を依頼した。

(3) ALCS 学修行動比較調査の実施及び分析

<取組概要>

学生データの効率的な収集及び他大学との比較のため、令和元年度より教学比較 IR コモンズに入り会いし、令和4年度も1年次、3年次の学生に対しアンケート調査を実施した。令和4年度は令和3年度の調査結果について分析を実施し、これまでに本学で実施している各種アンケートでは確認できなかった観点について、学生の主体的な回答が得られた。

- ・「よく学ぶ学生に刺激されて学修が促されたこと」に関する設問について「よくあった・かなりあった」とする回答、「短期・長期海外留学を希望する」という回答が他大学と比較して10%程度多いという結果が見られた。
- ・一方で、「図書館の蔵書内容」「設備の使用感」については、他大学よりも満足度が低い傾向が見られた。

なお、他調査との重複等も踏まえ、ALCS 学修行動比較調査は令和5年度は実施しない予定となっている。

(4) 全国学生調査の実施及び分析

<取組概要>

全国学生調査は、文部科学省によって、2019年から2022年度までの計3回、試行で実施されており、本学も参加している。令和4年度は令和3年度調査結果の分析及び令和4年度調査の周知を実施し、集計結果を各種会議体に報告・共有した。

- ・論理的な思考や、研究を進める上で必要とされるスキルを問う項目で全国平均を上回る傾向があった。（「項目29 文献・資料を収集・分析する力」、「項目30：論理的に文章を書く力」、「項目31：人に分かりやすく話す力」）
- ・グローバル人材及びデータサイエンス人材の育成に関する項目では、全国平均と同等または上回る水準であった。特に「項目32：外国語を使う力」では、全国平均2.1に対し、本学平均は2.4と良好な結果であった。データサイエンスに関わる「項目33：統計などデータサイエンスの知識・技能」も、令和3年度は全国平均と全学平均は同水準であった。
- ・全国平均を下回った項目は「項目7：予習・復習などの自主学習について授業やシラバスで指示があった」、「項目10：課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却された」であった。

3. 教学 IR 検討 WG で挙げられた課題について

（1）オンラインで実施するアンケートの回収率について

本学がオンラインで実施するアンケートの回答率が低い傾向にあり、データの信頼性の観点から、教学 IR の活動に影響を与えている。（一方で、カリキュラム評価アンケートや新入生アンケート等、回収率が80%以上となっているオンラインアンケートも存在する。

アンケートを周知する際に意義を適切に伝えるとともに、アンケート結果のフィードバックを十分に行う等、回答者の該当アンケートへの理解が深まるよう、取組みを進める。

例) 卒業生アンケート(卒後3年の卒業生が対象) :22.8%(前回 27.4%)

国際総合科学群令和4年度授業評価アンケート:約3割(紙媒体での実施時は約7~8割)

（2）アンケートの実施頻度と設問の類似（重複）について

本学で実施しているアンケートは業務の必要性に基づいて各所管で実施されており、アンケート回答期間や設問内容が十分に調整されておらず、学生の負担（アンケート疲れ）につながる可能性がある。高等教育推進センターと連携し、各アンケートの集約・精査に関する審議を依頼することを検討する。

<国際総合科学群の学生が回答するアンケート>

1 年次	2 年次	3 年次	4 年次
授業評価アンケート（毎学期末に履修登録した科目数分実施）			
新入生アンケート	全国学生調査 (文科省)		・全国学生調査 (文科省)
ALCS 学修行動比較調査 (他大と比較)		ALCS 学修行動比較調査 (他大と比較)	・カリキュラム評価アンケート

※その他、在学中に回答を依頼するものとして、「学生生活アンケート(3年に一度実施)」がある。

(3)各学部の自己点検評価と教学 IR の連動について

これまで WG は認証評価の受審を見据え、3 つの観点について全学的な取組を実施したが、来年度は各学部で実施する自己点検評価の取組と教学 IR の取組の連携も検討する。

(4)学生個人情報の活用に関する許諾について

令和 4 年度より LMS が導入され、学生個人に関わるデータを活用する機会も増えると考えられることから、各アンケートを実施する際に学生に対し目的を十分に説明するとともに、アンケート回答後は集計結果を適切に伝える必要がある。

4. 令和 5 年度の方針について

これまで取り組んできた観点については全体の課題として令和 5 年度以降も継続して実施し、新たにアンケート結果の詳細分析や分析結果を踏まえた対応を進めることを検討している。

また、令和 5 年度より実施される第 4 期中期計画では、「教学 IR と連動した FD・SD 研修会の実施」が明記されている。教学 IR 検討ワーキングにて企画を検討するとともに、FD・SD 部門とも連携し、実施に向けた取組を進める。

令和 4 年度 医学群
教学 I R 実施報告書

はじめに

令和4年度も前年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響により、医学群の教育は大きな影響を受けました。その中で、条件付きではありますが医療者の教育に欠かせない実習を中心に対面での教育が再開しました。また、Web会議システム等を使用した授業運用についても様々な工夫が凝らされるようになりました。教職員、学生のICTスキルが急激に上昇し、その利点を生かした学修が行われる一方で、学生間の格差も拡大しているようで、今後の授業のあり方についてさらに検討する必要があるように感じています。

横浜市立大学医学部医学科においては、JACMEによる分野別認証評価を2016年5月に受審し、2018年4月から2024年3月までの期間で認証を受けており、二巡目の受審を2023年秋に控え、教職員で準備に取りかかっています。前回の受審結果の中で、教学IR体制のさらなる整備とその体制を利用した継続的な医学教育プログラムの改良の仕組みの構築についての指摘がありました。その後の医学科の改善状況の詳細については、毎年JACMEへの報告を行い、その内容は本学ホームページ上で年次報告書として公開されています。そこでこの記載に加え、2019年から全学的な取り組みのもと、医学科と看護学科を合わせて、この報告書を作成する運びとなったことを幸甚に存じます。

なお医学群に所属する学生数は、医学科定員90名/学年、看護学科定員100名/学年と少なく、個人が特定されやすい状況を踏まえて、情報の一部について概要のみの公開となることをご容赦頂ければと考えております。

医学群教学IR検討ワーキング長
医学教育学 主任教授
稲森 正彦

1. 成績評価の分析（医学科・看護学科）

<取組概要>

- 1 成績評価を集計し、講義、実習、演習の授業形態別の成績評価の傾向から現状の成績評価は「厳格かつ客観的に実施されているか」を確認した
- 2 入試成績と入学後の成績の相関を確認した

2. 授業外学修時間の分析（医学科・看護学科）

<取組概要>

- 1 授業評価アンケート結果を用いて授業外学修時間が十分に確保できているかを確認した
- 2 学修時間を確保するための対策について意見交換した

1. 成績評価の分析（医学科・看護学科）

（1）実施内容

- 1 成績評価を授業形態別に整理し、厳格かつ客観的に実施されているかを確認
- 2 入試成績と入学後の成績の相関を確認

（2）解析及び検討状況

- 1 成績評価を授業形態別に整理し、厳格かつ客観的に実施されているかを確認

現状の成績評価は「厳格かつ客観的に実施されている」といえるかを確認するためにまず令和3年度科目の成績情報を定めた条件に基づいて集計した。成績情報は、「秀」、「優」、「良」、「可」、「不合格」という評価を点数化するGP（グレードポイント）を用いて科目群、授業形態の二つに分けてGP平均を算出した。GP平均の値を見ることで成績が厳密に評価されているかどうかを確認した。医学科、看護学科で分けてGP平均を確認した。科目群についてみると、医学科は2.4～2.7に推移しており「優（3）」と「良（2）」の間、看護学科は2.6～3.7で科目群間での評価の開きが見られた。一方授業形態別で確認したところ、「講義」「演習」「実習」のそれぞれで成績評価の傾向が異なる結果となった。講義と実習を比較すると、実習の方が「秀」「優」の割合が多くなる傾向が医学科、看護学科で同様に見られた。

これらの結果から医学部では科目群や授業形態によって特徴はあるものの概ね適切に成績評価が実施されていると判断した。

- 2 入試成績と入学後の成績の相関を確認

医学科、看護学科の入試成績と国家試験、入学後の成績（GPA）との相関はあるかを確認するため医学科、看護学科の入試成績と、国家試験可否、CBT成績、卒業試験成績、入学後成績（GPA）を用いて相関の有無を検証した。検証により優秀な学生の確保や入学後の成績推移から教育効果を確認した。結果、入試成績と入学後の成績では弱い相関関係が確認された。入試区分に分けて入学後の成績を比較すると推薦入学者が一般入学者よりも入学後の成績が良いことが確認できた。医学科では、入試成績と国家試験可否を比較したところ弱い相関関係を確認した。国家試験と強い相関を示す指標としては、CBT成績、卒業試験成績、6年生GPAがある。

これらの結果から入試成績と入学後の成績には一般的に相関が現れないことをワーキング内で確認した。医学科は入学後から臨床実習が開始されるまでの期間が長くモチベーションの維持が難しいとの声があることから1年次～3年次までの間に臨床を意識したカリキュラムの必要性について意見が出された。

（3）分析結果の報告

上記の分析結果について、以下の各種会議にて報告を行うとともに、結果を各学部教

授会で報告・共有し、各学部におけるカリキュラム改善を支援した。

○医学群 IR ワーキング

○医学科教授会・医学部合同運営会議

(4) 添付資料

- ・ なし（本概要のみ公開）

2. 授業外学修時間の分析（医学科・看護学科）

(1) 実施内容

- 1 授業外学修時間が十分に確保できているかを確認
- 2 学修時間を確保するための対策について意見交換

(2) 解析及び検討状況

- 1 授業外学修時間が十分に確保できているかを確認

令和2年度、令和3年度の授業評価アンケートの結果をもとに、学生の授業外における学修時間の状況を把握し、大学設置基準や学部の通則に沿った授業外学修時間の確保を目標に対策を検討した。1単位の授業科目の場合、45時間の学修時間が必要だが、授業時間で補えない学修時間は授業外で行うことが必要となることを前提として確認した。医学科は、1日の講義に対する予習・復習の時間は、最も多いのが30分で約46%、1時間30分以上の時間を確保している学生が約10%であった。看護学科は、授業時間以外の1週間に行う該当科目の学修時間は、1時間未満で約38%、2時間未満が約30%で、2時間以上確保している学生は約13%であった。この結果から医学科、看護学科ともに十分な学修時間が確保できていないことを確認した。なお、解析に用いた授業評価アンケートは回答率が低く、データの信憑性乏しいのではないかと意見があり、正確な検討のためのデータ収集が課題となった。

- 2 学修時間を確保するための対策について意見交換

学修時間の確保には予習や復習の機会を創出することが一つ意見として挙げられた。学修時間の確保が目的ではなく、授業における理解の促進やディスカッションを活発に行うという観点を持つ必要があると提示された。医学科、看護学科ともに学年が進行すると、模擬試験や国家試験を見据えて学修時間が徐々に増えていくが、そういった学修できる環境の整備が必要であると意見が出された。その他に学習意欲を向上させる取り組みの必要性が提示された。

(3) 分析結果の報告

上記の分析結果について、下記の各種会議にて報告を行うとともに、結果を医学部教授会で報告・共有し、医学部におけるカリキュラム改善を支援した。

○医学群 IR 検討ワーキング

○医学科教授会、医学部・医学研究科合同運営会議

(4) 添付資料

- ・ なし（本概要のみ公開）

令和4年度
横浜市立大学と横浜市立高校の
高大連携活動報告書

横浜市立大学と横浜市立高等学校との連携協議会

目 次

1	金沢高等学校	2
(1)	自己形成プログラム（市大リレー講座）	
(2)	英語力育成プログラム	
(3)	横浜市立大学への授業参加	
(4)	横浜市立大学卒業論文発表会への参加	
2	横浜商業高等学校	3
	（商業科）	
(1)	横浜市立大学授業見学会	
(2)	横浜市立大学への授業参加	
(3)	横浜市立大学卒業論文発表会への参加	
	（国際学科）	
(1)	Global Learning 発表会での基調講演及び指導助言	
(2)	横浜市立大学教員による特別講義	
(3)	横浜市立大学への授業参加	
(4)	横浜市立大学卒業論文発表会への参加	
3	横浜サイエンスフロンティア高等学校	6
(1)	サイエンスリテラシー	
ア	サイエンスリテラシーⅠ（SLⅠ）	
イ	サイエンスリテラシーⅡ（SLⅡ）	
ウ	サイエンスリテラシーⅢ（SLⅢ）	
(2)	横浜市立大学チャレンジプログラム	
(3)	サタデーサイエンス	
ア	横浜市立大学実習	
イ	横浜市立大学キャンパスツアー	
ウ	横浜市立大学医学部訪問	
(4)	理科教育を考える会	
(5)	横浜市立大学への授業参加	
(6)	横浜市立大学卒業論文発表会への参加	
(7)	附属中学校横浜市立大学訪問	
4	南高等学校	10
(1)	出張講義	
ア	分野別説明会	
イ	大学別進路説明会	
ウ	進路学習部主催特別講義（高大連携講座）	
(2)	横浜市立大学への授業参加	
5	情報科教員研修	12

資料 令和4年度横浜市立大学と横浜市立高等学校との高大連携協議会委員名簿

※ 文中の役職等は、令和4年度のものであります。

1 金沢高校

(1) 自己形成プログラム（市大リレー講座）

○対象 1年生

○日程 ①令和4年11月21日（月）15時30分～16時20分

②令和5年3月20日（月）10時00分～12時35分

○内容 ①自分の興味関心をもとに、横浜市立大学の先生方の講義を受講し、研究とは何かを学ぶ。

②各カテゴリーの代表者及び市立高校発表会での発表者の発表。先生方には講評をしていただく。

○成果 横浜市立大学の御協力のもと、今年度も、本校との高大連携事業「市大リレー講座」を実施することができた。

1学年生徒は4月より総合的な探究の時間の中で、各自が興味関心をもつことから課題を見つけ、調査、分析、まとめを行ってきた。そのなかで、探究のサイクルを理解し、身につけることを大切にし、活動してきた。同じ探究テーマを取り上げた生徒がグループとなり、意見交換を行いながら探究活動を行った。グループでの探究活動において中間発表を行い、探究力と総合的な知識を高めた。横浜市立大学の先生方に直接講義いただくことにより調査研究とはどういうことか、専門的な取組の面白さについて知り、学習意欲がさらに向上した。

代表者発表会（3月20日）において横浜市立大学の先生方から直接講評いただけることは、日ごろの学習の視点より広い視野及び知識の刺激を受けられる機会としてとても貴重であり、大学の先生の研究の道筋から、本質的な探究のサイクルを学ぶことができた。

日 程	テーマ	担当教員
11月21日 （月）	データサイエンス分野に携わっている私の研究源流について	データサイエンス学部 山崎 真見 教授
	生物物理学の目指すもの	理学部 立川 正志 准教授
	国際協力を研究する - アフリカの HIV エイズ対策を例に	国際教養学部 吉田 栄一 教授
	経済学で読み解く多数決の欠陥	国際商学部 中村 祐太 准教授

(2) 英語力育成プログラム

○対象 1・2・3年生

○日程 令和4年8月1日（月）～5日（金）の5日間

10時00分～12時00分 または 13:00～15:00 の2クラス展開

○内容 横浜市立大学プラクティカルイングリッシュセンターの先生方による全編英語での講義、演習や個人・ペアワーク、グループワークなどを通し、“Adulthood（成年）”について知識・理解を深め、ディスカッションを中心に自分の意見を英語で発表する。

○成果 全学年で計32名の生徒が参加した。横浜市立大学の先生方の英語によるハイレベルな講座を直接受けることで、学習意欲も高まり、英語を用いた探究的な学び方として、貴重かつ有益な学習の機会となった。昨年度まで行っていたプレゼンテーションより今年度のディスカッションの方が英語を使う活動はるかに多くなり、日を重ねる毎に生徒も進んで英語を話すようになっていた。15～20分間途切れなく英語でディスカッションを続けることが難しい場面もあったが、連日同じ段階を踏んだ

授業展開で、生徒もその都度何をやるべきか理解しており、ほぼ英語のみで活動ができていた。また、1～3年の学年をまたいだ参加になり、3年がリーダーシップを発揮でき、うまくまとまっていた。

(3) 横浜市立大学への授業参加

昨年度までは、新型コロナウイルス感染拡大防止の対応により、実施を中止していたが、今年度は、オンラインでの実施が可能となった。前期は2年生1名、後期は1年生2名が参加し、自身の学びを深めた。

時期	講座名	担当教員
前期	経営学入門 I－b (参加生徒1名)	岩佐 朋子 准教授
後期	生物学概説 C (参加生徒2名)	荒谷 康昭 教授 佐藤 友美 教授 塩田 肇 准教授

(4) 横浜市立大学卒業論文発表会見学

- 対象 全学年（横浜市立大に既に進学が決定している生徒中心）
- 日程 令和5年1月21日(土)～2月8日(水) ※学系、コース、演習により異なる
- 内容 各学系、コースの卒業論文発表会を見学する。

○成果 昨年度は、3学系でZoomでの卒業論文発表会の形であったが、今年度はオンラインだけでなく、対面の発表会も実施され、充実した発表会見学となった。市大に進学が決まっている生徒にとっては、4年後の自分の姿を想像しながら、視聴できる機会であり、とても貴重な体験であった。また、2年生の参加もあり、参加した生徒は、研究発表の多角的な視点、着眼点の特異性に多くの学びを得て、有意義な時間を過ごしたと感想を述べていた。

月日	学部	参加者数
令和5年 1月21日(土)	国際商学部（経営）	5名
令和5年 1月28日(土)	国際教養学部（都市）	3名
令和5年 2月3日(金)	理学部（生命医科学）	1名
令和5年 2月8日(水)	理学部（物質科学）	2名

2 横浜商業高等学校

(商業科)

(1) 横浜市立大学授業見学会

- 対象 1年6組(YBC)生徒 40名
- 期間 令和4年10月6日(木) 14時00分～16時00分
- 成果 原准教授による「経営学入門」の授業を体験させていただいた。生徒も最初は、経営学と聞いて難しそうという感想を抱いていた様子であったが、経営学という学問について、高校生でも分かりやすく解説していただいた。特に有名カフェを事例として挙げていただいたチェーン店の種類は、高校生でも馴染み深く、経営学に強い興味を持つ生徒もいた。カフェが用いている3つの戦略を紹介していただき、カフェ以外にも興味が向くように工夫された内容で、非常に理解しやすかったのではないだろうか。興味を持った生徒も、今回の体験をきっかけにして、より広い視野を持てるようになってほしい。

日 程	内 容	担当教員
令和4年 10月6日(木)	「経営学入門」体験授業	国際商学部 原 広司 准教授

(2) 横浜市立大学への授業参加

今年度は応募がありませんでした。

(3) 横浜市立大学卒業論文発表会見学

- 日程 令和5年1月28日(土)、2月2日(木)
- 内容 事前に横浜市立大学から送付された日程表を提示し、参加希望を募り、1名が2つの講座に参加した。
- 成果 今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の対応によりオンラインでの見学となったが、生徒自身のYBCの学習活動の中で行ってきた様々な発表と、横浜市立大学の学生の発表を比較することで、今後より質の高い論文作成につなげていけると考えている。横浜市立大学に進学を希望する生徒がこの見学に参加しており、大学での研究の様子を知る機会にもなった。

月 日	学部	参加者数
令和5年1月28日(土)	国際教養学部(都市)	1名
令和5年2月2日(木)	国際教養学部(教養)	1名

(国際学科)

(1) Global Learning発表会での基調講演及び指導助言

- 対象 国際学科1～3年生 (80名)
- 期間 令和5年3月23日(木) 10時30分～12時15分
- 成果 Global Learningの必須課題として、3年生は5月に全員が論文(8,000字以上)を提出し、10～12月に一人ずつクラス内で研究内容を発表した後、3月の論文発表会の発表者に選出された生徒は、指導教員とともにさらに発表内容に修正を加え、より質の高い発表を目指し努力を重ねていくことができた。また、当日は国際学科の1・2年生も全員出席しており、3年生の発表と、横浜市立大学の先生方からのクリティカルな評価を共有することができた。1・2年生は3年生の各発表を、自分たちがこれから取り組んでいくGlobal Learningの研究活動を進める上での具体的なモデルとすることができた。また、来年度からは論文の提出が5月となるため、2年生からも発表者を出し横浜市立大学の先生方からアドバイスをいただくことで、より質の高い論文を完成させることができた。

日 程	内 容	担当教員
令和5年 3月23日(木)	[3年生発表内容] 「葉山一色海岸のごみの現状と問題点一町民の私たちに できることとは一」 「脱プラスチックを日本で進めるには」 「ルワンダの小学校における修学率向上のために、 教材不足解決の観点を元にした持続的な仕組み づくりの提案」 [2年生発表内容] 「SNSとのつきあい方」	国際教養学部 鈴木 伸治 教授

(2) 横浜市立大学教員による特別講義

- 対象 国際学科1年生
- 期間 令和5年3月6日(月) 13時10分～15時00分
- 成果 横浜市立大学の先生とゼミ生に発表を聞いていただくことで、より深く考え伝わりやすい発表にすることができた。また発表を聞いていただくだけでなく、フィードバックを具体的にしていただけただけでなく、アクションの実施がより現実的なものになった。

日 程	内 容	担当教員
令和5年 3月6日(月)	・高校生の発表 ・横浜市立大学教授及び大学生による 発表へのコメント ・横浜市立大学教授よりSDGsに関する講義	国際教養学部 上村 雄彦 教授

(3) 横浜市立大学への授業参加

今年度は応募がありませんでした。

(4) 横浜市立大学卒業論文発表会見学

- 日程 令和5年1月28日(土)
- 内容 事前に横浜市立大学から送付された日程表を提示し、参加希望を募り、3年生2名、1年生1名の計3名が参加した。

○成果 今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の対応によりオンラインでの見学となったが、生徒が自身のGlobal Learningでの発表と比較することで、より質の高い論文作成につなげていけると考えている。横浜市立大学に進学を希望する生徒がこの見学に参加しており、大学での研究の様子を知る機会にもなった。
また1年生にとっては、これから取り組んでいく論文作成や発表に向けて取り入れられる要素が多くあったと考えている。

月 日	学部	参加者数
令和5年1月28日(土)	国際教養学部(都市)	3名

3 横浜サイエンスフロンティア高等学校

(1) サイエンスリテラシー

ア サイエンスリテラシーⅠ（SLⅠ）

○対象 1年次生

○期間 令和4年4月～令和5年3月

○成果 SLⅠにて横浜市立大学の先生方による講義を通じて実習に必要な知識や考え方を学び、実習やプレゼンテーション等を通じて研究の基本的な手法を身に付けることができた。また、多様な分野のほんものの体験を通じて、2年次での探究活動のテーマ設定や探究方法につながる考え方や知識をもつことができた。

日 程	テーマ	講 師
9/15(木)・ 9/16(金)	光のサイエンス ～身近な光の性質と技術～	篠崎 一英 教授
10/14(金)・ 10/17(月)	生物のサイエンスー動物偏ー ～顕微鏡の使い方と実験ノートの書き方～	内山 英穂 教授
10/24(月)・ 10/28(金)	統計のサイエンス	上田 雅夫 教授
11/4(金)・ 11/7(月)	ナノテクのサイエンス ～結晶の生成と比較対照実験Ⅰ～	橘 勝 教授
11/11(金)・ 11/14(月)	ナノテクのサイエンス ～結晶の生成と比較対照実験Ⅱ～	
11/18(金)・ 11/21(月)	計算科学のサイエンス ～計算科学と比較対照実験実習Ⅰ～	立川 仁典 教授
11/25(金)・ 11/28(月)	計算科学のサイエンス ～計算科学と比較対照実験実習Ⅱ～	
1/11(水)・ 1/13(金)	地震のサイエンス ～地震波のデータ解析とデータ考察実習Ⅰ～	吉本 和生 教授
1/16(月)・ 1/20(金)	地震のサイエンス ～地震波のデータ解析とデータ考察実習Ⅱ～	

イ サイエンスリテラシーⅡ（SLⅡ）

○対象 2年次生

○期間 令和4年4月～令和5年3月

4～8月 研究活動のテーマ設定と実験による研究活動の実施

9月3日（土） 中間発表会(プレゼンテーション)

9月23日（金・祝） Science Immersion ProgramⅡ（英語プレゼンテーション）

1月21日（土） 最終発表会

1～3月 研究報告書の作成

○成果 横浜市立大学の先生方に発表会等で専門的な指導や的確な助言を受けることで、質の高い課題研究を行うことができた。

○S L II 講師

分 野	担当教員
生命科学分野	内山 英穂 教授、大関 泰裕 教授、守 次朗 助教
ナノテク材料科学・化学分野	橘 勝 教授、篠崎 一英 教授、石川 裕一 准教授
情報通信・数理分野	立川 仁典 教授、藤田 慎也 准教授
地球科学分野	吉本 和生 教授
グローバルスタディーズ分野	滝田 祥子 教授、渡曾 知子 准教授 石川 永子 准教授

○発表会評価者

発表会	日 程	担当教員
中間 発表会	9 月 3 日 (土)	内山 英穂 教授 大関 泰裕 教授 篠崎 一英 教授 橘 勝 教授 立川 仁典 教授 吉本 和生 教授 滝田 祥子 教授 渡曾 知子 准教授 石川 永子 准教授 藤田 慎也 准教授 守 次朗 助教
最終 発表会	1 月 21 日 (土)	内山 英穂 教授 大関 泰裕 教授 篠崎 一英 教授 橘 勝 教授 立川 仁典 教授 吉本 和生 教授 滝田 祥子 教授 渡曾 知子 准教授 石川 永子 准教授 藤田 慎也 准教授 守 次朗 助教
Bio Forum	1 月 29 日 (日)	内山 英穂 教授
YSF-FIRST	3 月 18 日 (土)	内山 英穂 教授 橘 勝 教授 立川 仁典 教授 吉本 和生 教授

ウ サイエンスリテラシーⅢ (S L Ⅲ) …年間数回

○対象 3 年次生の選択者

○期間 令和 4 年 4 月～令和 4 年12月

○成果 横浜市立大学チャレンジプログラムとの連携した取組等により、研究活動の成果を大学進学につなげることができた。

横浜市立大学チャレンジプログラム 合格者 3 名 (内 S L Ⅲ受講者 2 名)

○担当教員

篠崎 一英 教授、内山 英穂 教授、大関 泰裕 教授、橘 勝 教授、
立川 仁典 教授、吉本 和生 教授

(2) 横浜市大チャレンジプログラム

- 対象 3年次生の選抜者（3名）
- 期間 令和4年4月～ 令和4年12月
- 内容 「先端科学技術の知識を活用して世界で幅広く活躍する人材」を横浜市立大学と連携して育成するプログラム。横浜市立大学理学部へ進学を希望する横浜サイエンスフロンティア高校の生徒を対象に、サイエンスリテラシーⅢ、学習成績などの取組を総合的に評価し、将来のサイエンティストとしての資質が十分に認められる生徒を3年次6月から12月にかけて横浜市立大学教員が継続的に指導を行い、特別入学枠進学者7名程度を選抜することになっており、令和4年度は3名が選抜された。

(3) サタデーサイエンス

ア 横浜市立大学実習

- 対象 1年次生
- 日程 8月4日（木） 14:30～18:00

イ 横浜市立大学キャンパスツアー

- 対象 1年次生
- 日程 8月4日（木）横浜市立大学実習のプログラムのひとつとして実施

ウ 横浜市立大学医学部訪問

- 対象 1年次生
- 日程 11月16日（水）17:00～18:30

(4) 理科教育を考える会

- 対象 横浜市立大学と横浜サイエンスフロンティア高校の教員
- 日程 令和4年6月13日（月） 17時30分～18時30分
- 成果 今年度も昨年度に引き続き「理科教育を考える会」をオンラインで開催することにより、高校と大学の教員同士が意見を交換する重要な場とすることができた。S L I・IIにおいて、多くの市大の先生方に指導助言者として関わっていただいている中、高大の教員が高校生の活動や大学側が高校に求める生徒像等について活発に意見を交換し、多くの情報を共有することで、課題研究のより良い形態の構築に向けた協力体制を深めることができた。また、コロナ禍で実施できなかった市大実習について、今年度は開催の方向で進めることを確認した。

日 程	内 容	会 場
6月13日（月）	・SSH 科学技術人材育成重点枠の概要と本年度の取り組みについて ・サイエンスリテラシーの今年度の方向性とスケジュールについての意見交換 ・市大チャレンジプログラムについての情報及び意見交換 ・今年度の市大実習について 他	オンライン開催 金沢八景キャンパス 横浜サイエンスフロンティア高校 他

(5) 横浜市立大学への授業参加

今年度は応募がありませんでした。

(6) 横浜市立大学卒業論文発表会見学

市大チャレンジプログラム選抜生徒が現地で参加

月日	学部	参加者数
令和5年 2月8日(水)	理学部 (物質科学)	2名
令和5年 2月13日(月)	理学部 (生命環境)	1名

(7) 附属中学校横浜市立大学訪問

○対象 附属中学校3年生(80名)

○期間 令和4年9月16日(金)

○成果 横浜市立大学に進学した本校卒業生から、「市大チャレンジ」や「理数マスタープログラム」の説明があり、その制度について詳しく知ることができた。また、キャンパスを案内してもらい、高校進学後にサイエンスリテラシーでお世話になる横浜市立大学について詳しく知ることができた。

4 南高等学校

(1) 出張講義

ア 分野別説明会

- 対象 1 年生
- 日程 令和 4 年 9 月 22 日 (木) 14 時 20 分～16 時 10 分
- 成果 大学における各学部での研究内容について、理解を深めることができた。2 年生での科目選択や、卒業後の進路選択にあたり、幅広くかつ深い知識を得ることができた。

日 程	内 容	担当教員
令和 4 年 9 月 22 日 (木)	大学の各学部の特徴や入試制度等を学び、進路に対する具体的な意識や学習意欲を高める講義を行っていただいた。	理学部 篠崎 一英 教授

イ 大学別進路説明会

- 対象 2 年生・3 年生
- 日程 令和 4 年 6 月 9 日 (木) 14 時 20 分～16 時 10 分
- 成果 大学の学部等、各分野での研究内容について理解を深めることができた。今後の進路選択にあたって、適切な判断ができる力を身につけ、進路選択のための素地を養うことができた。

日 程	内 容	担当職員
令和 4 年 6 月 9 日 (木)	学問や職業を自己の問題としてとらえ、学習に対する意識や、進路に対する意識を高めるキャリア教育を行っていただいた。	アドミッション課係長 奈良井 聡 様

ウ 進路学習部主催特別講義（高大連携講座）

- 対象 2 年生
- 日程 令和 4 年 11 月 17 日 (木) 15 時 20 分～16 時 10 分
- 成果 大学の教育内容に直接触れる機会を得ることで、探究活動への興味・関心が喚起され、学ぶことの意義を理解することができた。また、将来の進路に対する視野が広くなるとともに、意識も高まった。

日 程	内 容	担当教員
令和 4 年 11 月 17 日 (木)	大学における研究内容の具体を説明し、研究への興味・関心を高める講演を行っていただいた。	理学部 竹居光太郎 教授

(2) 横浜市立大学への授業参加

○対象 3年生 2名

○成果 大学の授業に参加することで、大学での学びについて具体的に描くことができるようになった。それにより、将来の進路希望が明確になるとともに、高校における日々の学習に対する意欲も喚起された。

授業		担当教員
前期	経営学入門 1b (参加生徒 1名)	国際商学部 岩佐朋子准教授
前期	病気を科学する (参加生徒 1名)	医学部 中澤正年准教授

(3) 横浜市立大学卒業論文発表会見学

○日程 令和5年1月21日(土)

○成果 論文の発表会を見学することで、大学での実際の研究内容や学生のプレゼンの方法などについてより具体的に知ることができた。またそれにより、高校での探究活動に活かすことができた。

○生徒参加状況

月日	学系(コース)	参加者数
令和5年1月21日(土)	国際商学部(経営)	14名

5 情報科教員研修

1 令和4年度実績

(1) 目的

新学習指導要領における情報教育の充実にむけて、情報に関する知識の広がり活用へつなげることを目的とする。

(2) 実施日時・会場

令和4年8月26日（金） 14:00 ～ 16:00 横浜市立大学 本校舎 107教室

(3) 参加者

横浜市立高校情報科教員 10名

(4) 実施概要

テーマ 「プログラミング教育の必修化に内在する課題について」

講師 山崎 眞見（データサイエンス学部長 教授）

内 容 高等学校では新学習指導要領の年次進行が始まり、情報科は科目の再編から「情報Ⅰ」が新設され、その中でプログラミングが必修となっている。また、大学では、今後「情報Ⅰ」でプログラミング教育を受けた生徒を迎えることになる。その中で、それぞれの授業において情報教育担当の教員の抱える課題等を共有し、協議しその解決方法を考える。

○「指導方法改善について」

- ・「情報Ⅰ」の教科書の内容を踏まえて、授業を実施して気付いたこと困りごとを協議

○「プログラミングの指導方法について」

- ・横浜市立大学での授業の様子から高校の授業へのつながりを協議

○「文部科学省の生徒用例題について意見交換」

- ・教科書会社が準備した教材についての好事例等の協議

令和4年度 高大連携協議会委員

<横浜市立大学>

委 員	相原 道子	学長
委 員	中條 祐介	副学長 兼 国際総合科学部長
委 員	遠 藤 格	副学長
委 員	鈴木 伸治	国際教養学部長
委 員	大澤 正俊	国際商学部長
委 員	横山 崇	理学部長
委 員	山崎 眞見	データサイエンス学部長
委 員	寺内 康夫	医学部長
委 員	吉泉 英紀	事務局長
事 務	小林 謙一	学務・教務部長 兼 ダイバーシティ推進室担当部長
事 務	田澤 紫乃	学長室室長代理 兼 学務・教務部教育推進課長
事 務	照井 和尋	アドミッション課長
事務局	佐藤 久美子	教育推進課 学術企画担当係長
事務局	田中 智恵	教育推進課 学術企画担当

<横浜市教育委員会>

委 員	鯉渕 信也	教育長
委 員	木村 奨	教育次長
委 員	山岸 秀之	総務部長
委 員	石川 隆一	学校教育企画部長
委 員	遠藤 広樹	高等学校校長会代表
事 務	宮村 浩文	高校教育課長
事務局	小島 孝道	高校教育課 主任指導主事
事務局	漆畑 優紀	高校教育課 担当係長
事務局	尾崎 真代	高校教育課 高大連携担当

オブザーバー	佐々木 健一	横浜市立金沢高等学校長
オブザーバー	小間物 晃弘	横浜市立横浜商業高等学校長
オブザーバー	永瀬 哲	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校長
オブザーバー	McGary Carl	プラクティカル・イングリッシュ・センター長
オブザーバー	和田 淳一郎	アドミッションズセンター長